藤井サンジョガリ遺跡
高畠テラダ遺跡
高畠カンジダ遺跡

1994

㈳石川県埋蔵文化財保存協会

藤井サンジョガリ遺跡
高畠テラダ遺跡
高畠カンジダ遺跡

1994

㈳石川県埋蔵文化財保存協会

序　　文

平成元年、県、市町村の出土品の整理を行ってきた石川県埋蔵文化財整理協会は、県教育委員会の要請で、９名の調査担当職員の出向を得て、主に建設省関係の遺跡調査を行うこととなり、名称も県埋蔵文化財保存協会と改めたのである。

本報告書は平成元年、２年に実施した鹿島町藤井、高畠の国道159号線鹿島バイパス路線内遺跡の発掘調査にかかわるものである。

バイパス路線は石動山脈山麓線に沿う国道159号線に約0.5kmの距離でほぼ併行して敷かれ、久江川、長谷川、松本川、地獄谷川等の小河川により形成された複合扇状地の扇央部を貫いている。粗い砂層を主とする傾斜の強い棚田となっている遺跡地である。調査日誌をみると何れの遺跡も軟弱で水がたまると中から崩れてくると嘆いている土質のようである。地溝帯中央部で人家など全くなかった所であるが、３遺跡ともそれぞれ遺物、遺構が存在しており往昔の人の営みを復元することが出来るのである。

藤井サンジョガリ遺跡は弥生時代後期後半の周溝をもつ平地式住居跡２棟の遺構が認められた。周溝内から多量の土器とともに、小さな粒状の種子のかたまりでできたパン状炭化物１点が出土した。ここから２km北西の鹿西町金丸谷内チヤノバタケ遺跡出土の炭化米、日本最古の「オムスビ」として喧伝されているものが昭和62年出土しているので、第二の「オムスビ」かと期待をもったが、松谷暁子氏の鑑定の結果、アブラナ属の種子の塊りであった。この利用方法を考えることで、弥生時代の食生活の一端を探れるものとなるであろう。

高畠テラダ遺跡は奈良、平安と室町時代の複合遺跡であるが、畠地関連の遺構が多い。高畠カンジダ遺跡は縄文前期、弥生後期後半、中世の複合遺跡である。弥生時代の周溝平地式住居跡１、中世掘立柱建物跡５棟が認められた。

鹿島バイパスは羽咋市四柳で国道159号線と結ばれるが、３km足らずの残存区間に調査を要する遺跡が間断なく続く状態である。本協会の発掘調査はこの後も続けねばならないだろう。

理事長

濱　岡　賢太郎

写真１　藤井サンジョガリ遺跡全景（北より）

写真２　藤井サンジョガリ遺跡西側調査区（西より）

写真３　高畠テラダ遺跡全景（南より）

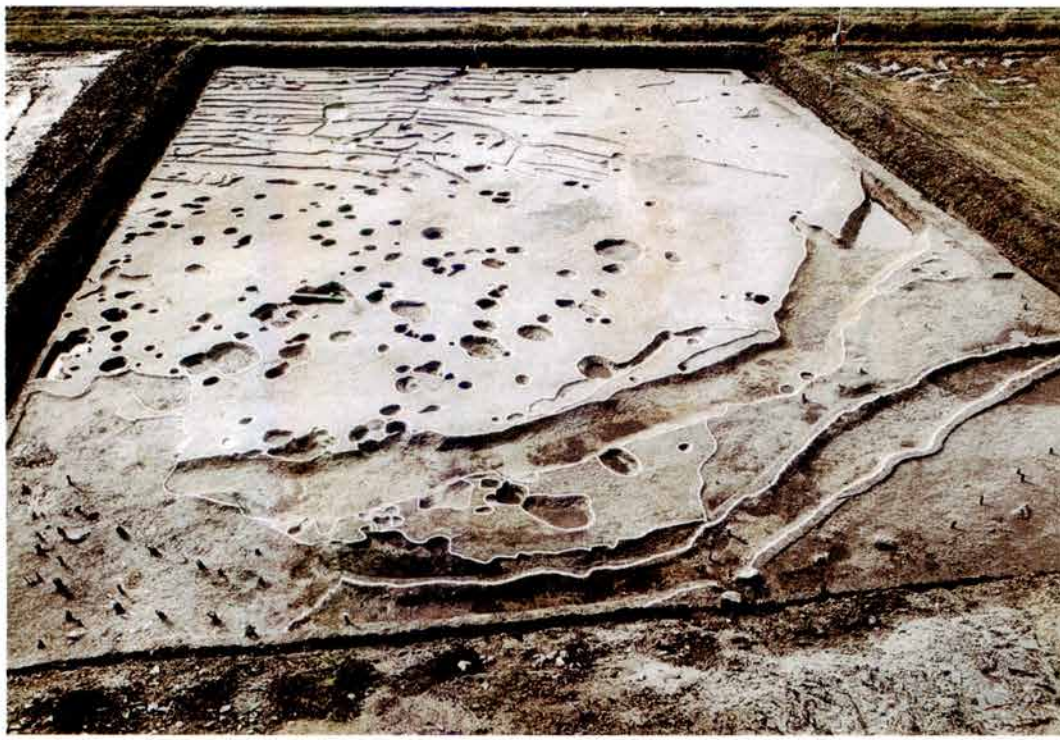


写真４　高畠テラダ遺跡東側調査区（東より）

写真５　高畠カンジダ遺跡全景（南より）

写真６　高畠カンジダ遺跡西側調査区（西より）

例　　言

1　本書は石川県鹿島郡鹿島町藤井・高畠地内に所在する藤井サンジョガリ遺跡・高畠テラダ遺跡・高畠カンジダ遺跡の発掘調査報告書である。

2　これら遺跡の発掘調査は一般国道159号線鹿島バイパスの改築工事に伴うものであり、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が石川県立埋蔵文化財センター（建設省）の委託を受けて調査を実施した。

3　各遺跡の調査期間、面積、担当者は次の通りである。

藤井サンジョガリ遺跡：平成元年５月15日～９月26日・約2,100m²・藤田邦雄・土屋宣雄

高畠テラダ遺跡　　：平成元年８月５日～12月６日・約2,000m²・藤田邦雄・土屋宣雄

高畠カンジダ遺跡　　：平成２年５月９日～９月１日・約2,100m²・藤田邦雄・沢辺利明

4　出土遺物の整理作業は、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会資料第２係が担当した。

5　本書の編集は、藤田が担当した。

6　本書の執筆は、Ⅰ～Ⅴ、Ⅵ－２を藤田が担当し、Ⅳの図化須恵器・土師器一覧表、Ⅴの縄文土器に関する記述、Ⅵ－３を沢辺が担当した。またⅥ－１では松谷暁子氏に玉稿をいただいた。

7　調査によって得られた資料は、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が保管している。

目　　次

Ⅰ　位置と環境……1
　1．位置……1
　2．周辺の遺跡……1
Ⅱ　経緯と経過……5
　1．経緯……5
　2．経過……6
Ⅲ　藤井サンジョガリ遺跡……9
　1．概要……10
　2．遺構と遺物……31
　　(1)　土坑……31
　　(2)　溝……32
　　(3)　ピット……56
　　(4)　掘立柱建物跡……57
　　(5)　包含層……60
　遺物観察表……63
　図版……68
Ⅳ　高畠テラダ遺跡……99
　1．概要……100
　2．遺構と遺物……115
　　(1)　土坑……115
　　(2)　溝……116
　　(3)　ピット……129
　　(4)　包含層……130
　図化須恵器・土師器一覧表……138
　図版……148
Ⅴ　高畠カンジダ遺跡……165
　1．概要……166
　2．遺構と遺物……182
　　(1)　土坑……182
　　(2)　溝……184
　　(3)　ピット……198
　　(4)　掘立柱建物跡……198
　　(5)　包含層……204
　遺物観察表……205
　図版……207
Ⅵ　まとめ……227
　1．藤井サンジョガリ遺跡出土炭化物について……228
　2．周溝建物跡出土土器について……235
　3．高畠テラダ遺跡の須恵器・土師器について……241

挿図目次

Ⅰ　位置と環境・Ⅱ　経緯と経過……1
第1図　遺跡位置図（石川県）……1
第2図　調査区周辺遺跡分布図……2
第3図　調査区位置図……5
Ⅲ　藤井サンジョガリ遺跡
第1図　藤井サンジョガリ遺跡（図郭割・グリッド配置図）……11～12
第2図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図5…14
第3図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図10…15
第4図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図14…16
第5図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図1…17
第6図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図6…18
第7図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図11…19
第8図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図15…20
第9図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図2…21
第10図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図7…22
第11図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図12…23
第12図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図16…24
第13図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図3…25
第14図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図8…26
第15図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図13…27
第16図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図4…28
第17図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図9…29
第18図　調査区土層断面実測図……30
第19図　1号土坑出土遺物実測図……31
第20図　3号溝平面・土層断面実測図……33
第21図　7・14号溝平面・土層断面実測図…34
第22図　1号溝、2号溝、3号溝、6号溝、7号溝出土遺物実測図……35
第23図　9号溝、10号溝、17号溝出土遺物実測図……36
第24図　1号周溝建物跡関連土層断面実測図……38
第25図　1号周溝建物跡平面実測図…39～40
第26図　19号溝、20号溝出土遺物実測図…41
第27図　21号溝出土遺物実測図……42
第28図　21号溝、22号溝出土遺物実測図…43
第29図　種子粒炭化物実測図……44
第30図　18号溝出土遺物実測図……45
第31図　21号溝、22号溝出土遺物実測図…47
第32図　21号溝、22号溝出土遺物実測図…48
第33図　23号溝、床面出土遺物実測図……49
第34図　溝間接合遺物実測図……50
第35図　21号溝、ピット34接合遺物実測図51
第36図　溝複合遺物実測図……52
第37図　土層断面実測図……53
第38図　28号溝、29号溝、31号溝、32号溝出土遺物実測図……54
第39図　溝状落ち込み遺構出土遺物実測図56
第40図　ピット6、ピット30、ピット25、ピット7出土遺物実測図……57
第41図　1号掘立柱建物跡実測図……58
第42図　1号掘立柱建物跡出土遺物実測図……59
第43図　18号溝、21号溝、7号溝、包含層出土遺物実測図……60
第44図　包含層出土遺物実測図……61
第45図　包含層出土遺物実測図……62
Ⅳ　高畠テラダ遺跡
第1図　高畠テラダ遺跡（図郭割・グリッド配置図）……101～102
第2図　高畠テラダ遺跡遺構図1……104
第3図　高畠テラダ遺跡遺構図6……105
第4図　高畠テラダ遺跡遺構図2……106
第5図　高畠テラダ遺跡遺構図7……107
第6図　高畠テラダ遺跡遺構図3……108
第7図　高畠テラダ遺跡遺構図8……109
第8図　高畠テラダ遺跡遺構図4……110
第9図　高畠テラダ遺跡遺構図9……111
第10図　高畠テラダ遺跡遺構図5……112
第11図　高畠テラダ遺跡遺構図10……113
第12図　調査区土層断面実測図……114
第13図　1号土坑平面・土層断面実測図……115
第14図　1号土坑出土遺物実測図……116
第15図　13号溝、14号溝、17号溝、20号溝、23号溝出土遺物実測図……118

第16図　23号溝、27号溝、28号溝、29号溝、30号溝、31号溝、32号溝出土遺物実測図 ……119
第17図　29号溝出土遺物実測図 ……121
第18図　38号溝、39号溝、42号溝、56号溝、58号溝、63号溝出土遺物実測図……123
第19図　2号溝、3号溝、42号溝、62・64号溝、63号溝、包含層出土遺物実測図…125
第20図　62号溝出土遺物実測図 ……126
第21図　65号溝、66号溝、80号溝、82号溝、83号溝出土遺物実測図 ……128
第22図　ピット、下層包含層出土遺物実測図……130
第23図　下層包含層出土遺物実測図 ……132
第24図　下層包含層出土遺物実測図 ……133
第25図　下層包含層出土遺物実測図 ……134
第26図　2号溝、包含層出土遺物実測図 135
第27図　包含層出土遺物実測図 ……136
第28図　包含層出土遺物実測図 ……137

V　高畠カンジダ遺跡

第1図　高畠カンジダ遺跡（図郭割・グリッド配置図）……167～168
第2図　高畠カンジダ遺跡遺構図1 ……170
第3図　高畠カンジダ遺跡遺構図6 ……171
第4図　高畠カンジダ遺跡遺構図2 ……172
第5図　高畠カンジダ遺跡遺構図7 ……173
第6図　高畠カンジダ遺跡遺構図3 ……174
第7図　高畠カンジダ遺跡遺構図8 ……175
第8図　高畠カンジダ遺跡遺構図4 ……176
第9図　高畠カンジダ遺跡遺構図9 ……177
第10図　高畠カンジダ遺跡遺構図5 ……178
第11図　高畠カンジダ遺跡遺構図10 ……179
第12図　調査区土層断面実測図 ……180
第13図　調査区土層断面実測図 ……181
第14図　2号土坑、3号土坑平面・土層断面実測図 ……182
第15図　2号土坑、ピット13、24号溝、20号溝、5号土坑、4号溝、大溝、包含層出土遺物実測図 ……183
第16図　4号土坑～11号土坑土層断面実測図 ……185
第17図　1号土坑、12号土坑～15号土坑土層断面実測図 ……186
第18図　3号溝平面・土層断面実測図 …187
第19図　3号溝出土遺物実測図 ……188
第20図　3号溝出土遺物実測図 ……189
第21図　4号東溝出土遺物実測図 ……190
第22図　4号東溝平面・土層断面実測図 191
第23図　8号溝、12号溝、18号溝、ピット6、包含層出土遺物実測図 ……193
第24図　溝遺構土層断面実測図 ……194
第25図　大溝、4号北溝、包含層出土遺物実測図 ……196
第26図　24号溝、大溝、包含層出土遺物実測図 ……197
第27図　掘立柱建物跡想定図 ……199
第28図　1号掘立柱建物跡実測図 ……200
第29図　2号掘立柱建物跡実測図 ……200
第30図　3号掘立柱建物跡実測図 ……201
第31図　4号掘立柱建物跡実測図 ……202
第32図　5号掘立柱建物跡実測図 ……203

VI　まとめ

第1図　藤井サンジョガリ遺跡19号溝出土遺物位置図 ……236
第2図　藤井サンジョガリ遺跡21号溝出土遺物位置図 ……237
第3図　藤井サンジョガリ遺跡18号溝、22号溝、23号溝出土遺物位置図 ……238
第4図　高畠カンジダ遺跡3号溝出土遺物位置図 ……239
第1図　図化土器器種構成 ……245
第2図　須恵器坏・蓋分類 ……248
第3図　土師器分類 ……249

写真・表目次

写真１　藤井サンジョガリ遺跡全景……巻頭
写真２　藤井サンジョガリ遺跡西側調査区 ……巻頭
写真３　高畠テラダ遺跡全景 ……巻頭
写真４　高畠テラダ遺跡東側調査区……巻頭
写真５　高畠カンジダ遺跡全景……巻頭
写真６　高畠カンジダ遺跡西側調査区…巻頭

Ⅰ　位置と環境・Ⅱ　経緯と経過

写真７　調査区周辺航空写真…… 3
写真８　藤井サンジョガリ遺跡、高畠テラダ遺跡調査作業員…… 8
写真９　高畠カンジダ遺跡調査作業員…… 8
第１表　調査区周辺遺跡一覧…… 4

Ⅲ　藤井サンジョガリ遺跡

写真１　１号周溝建物跡掘り下げ作業……10
写真２　藤井サンジョガリ遺跡全景……13
写真３　３号溝完掘状況……36
写真４　種子粒炭化物出土状況……44
写真５　21・22号溝遺物出土状況……46
写真６　溝状落ち込み遺構遺物出土状況…55
写真７　１号掘立柱建物跡検出状況……57
写真８　藤井サンジョガリ遺跡垂直写真(1) ……68
写真９　藤井サンジョガリ遺跡垂直写真(2) ……69
写真10　藤井サンジョガリ遺跡垂直写真(3) ……70
写真11　藤井サンジョガリ遺跡垂直写真(4) ……71
写真12　表土除去作業……72
写真13　東側調査区周辺整備作業……72
写真14　東側調査区遺構掘り下げ作業……73
写真15　東側調査区遺構完掘状況……73
写真16　１号土坑遺物出土状況……74
写真17　溝状落ち込み遺構遺物出土状況…74
写真18　６号溝周辺遺構掘り下げ作業……75
写真19　６号溝周辺遺構完掘状……75
写真20　３号溝完掘状況……76
写真21　３号溝土層断面検出状況……76
写真22　１号周溝建物跡遺構検出作業……77
写真23　１号周溝建物跡掘り下げ作業……77
写真24　調査区浸水状況……78
写真25　１号周溝建物跡完掘状況……78
写真26　17号溝、21号溝、19号溝遺物出土状況 ……79
写真27　21号溝土層断面検出状況……79
写真28　18号溝、21号溝、19号溝遺物出土状況 ……80
写真29　21号溝土層断面検出状況……80
写真30　31号溝完掘状況……81
写真31　31号溝土層断面検出状況……81
写真32　32号溝、33号溝完掘状況……82
写真33　33号溝土層断面検出状況……82
写真34　遺構出土遺物実測作業……83
写真35　西側調査区完掘状況……83
写真36～44　遺物写真……84～92
写真45　23号溝、17号溝土層断面検出状況92
写真46～50　遺物写真……93～97
遺物観察表(1)～(5)……63～67

Ⅳ　高畠テラダ遺跡

写真１　東側調査区遺構掘り下げ作業 …100
写真２　高畠テラダ遺跡全景 ……103
写真３　西側調査区完掘状況 ……122
写真４　東側調査区完掘状況 ……127
写真５　調査区南壁土層堆積状況 ……137
写真６　高畠テラダ遺跡垂直写真(1) ……148
写真７　高畠テラダ遺跡垂直写真(2) ……149
写真８　高畠テラダ遺跡垂直写真(3) ……150
写真９　高畠テラダ遺跡垂直写真(4) ……151
写真10　表土除去作業 ……152
写真11　調査区周辺整備作業 ……152

写真12　西側調査区遺構掘り下げ作業 …153
写真13　東側調査区畝溝状遺構掘り下げ作業 …153
写真14　1号土坑土層断面検出状況 ……154
写真15　東側調査区ピット群完掘状況 …154
写真16　航空測量準備作業 ……155
写真17　東側調査区完掘状況 ……155
写真18　排水作業 ……156
写真19　西側調査区完掘状況 ……156
写真20　藤井サンジョガリ遺跡、高畠テラダ遺跡遠景 ……157
写真21　藤井サンジョガリ遺跡、高畠テラダ遺跡遠景 ……157
写真22～26　遺物写真……158～162
写真27　62号溝、63号溝周辺遺構完掘状況……162
写真28　遺物写真 ……163
須恵器・土師器一覧表……138～147

V　高畠カンジダ遺跡

写真1　東側調査区遺構掘り下げ作業 …166
写真2　高畠カンジダ遺跡全景 ……169
写真3　第17図ＳＰ61～62間土層状況 …180
写真4　縄文土器 ……183
写真5　4号土坑土層断面検出状況 ……186
写真6　15号土坑土層断面検出状況 ……186
写真7　3号溝遺物検出状況 ……189
写真8　4号溝周辺遺構完掘状況 ……191
写真9　大溝完掘状況 ……195
写真10　5号掘立柱建物跡検出状況 ……204
写真11　高畠カンジダ遺跡垂直写真(1) …207
写真12　高畠カンジダ遺跡垂直写真(2) …208
写真13　高畠カンジダ遺跡垂直写真(3) …209
写真14　高畠カンジダ遺跡垂直写真(4) …210
写真15　表土除去作業 ……211
写真16　調査区周辺整備作業 ……211
写真17　西側調査区包含層掘り下げ作業 212
写真18　東側調査区遺構掘り下げ作業 …212
写真19　3号土坑遺物出土状況 ……213
写真20　2号土坑、3号土坑周辺遺構完掘状況 …213
写真21　東側調査区遺構掘り下げ状況 …214
写真22　11号土坑土層断面検出状況 ……214
写真23　3号溝掘り下げ作業 ……215
写真24　3号溝周辺遺構完掘状況 ……215
写真25　20号溝完掘状況 ……216
写真26　1号土坑、24号溝完掘状況 ……216
写真27　大溝完掘状況 ……217
写真28　大溝土層断面検出状況 ……217
写真29　1～3号掘立柱建物跡完掘状況……218
写真30　4号掘立柱建物跡完掘状況 ……218
写真31　調査区完掘状況 ……219
写真32　高畠カンジダ遺跡遠景 ……219
写真33～34　遺物写真……220～221
写真35　3号溝遺物出土状況 ……221
写真36～39　遺物写真……222～225
遺物観察表(1)～(2)……205～206

Ⅵ　まとめ

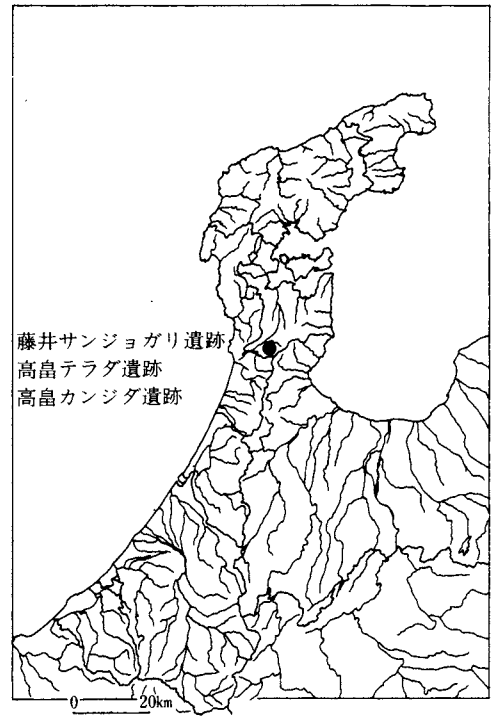
写真1　藤井サンジョガリ遺跡出土炭化物および現生アブラナ属種子の実体顕微鏡写真 ……232
写真2　藤井サンジョガリ遺跡出土炭化物の実体顕微鏡写真および走査型電子顕微鏡写真 ……233
写真3　現生アブラナ科種子の走査型電子顕微鏡写真 ……234

Ⅰ　位置と環境

1．位置

当遺跡の所在する石川県鹿島郡鹿島町は能登半島の中央部に位置し（第１図)、北東は七尾市、北西は鹿島郡鳥屋町・鹿西町、南西は羽咋市、そして南東は富山県に接する。町は地形的に旧扇状地を主とする邑知地溝帯の北西側低地域と石動山山系の南東側山地域とに二分される。今回の調査区は、北東側から藤井サンジョガリ遺跡(遺跡番号34017)、高畠テラダ遺跡(34016)、高畠カンジダ遺跡(34015)と名付けられ、周辺遺跡の中では最も邑知地溝帯中央部寄りに立地し、その北には低地域内を東西に貫く久江川が流れる（第２図)。

藤井、高畠は現在の大字名であるが、共に宝達山地碁石ケ峰北麓の旧道沿いに発達した路村形態を取る集落で、鎌倉期よりその名は見られる。

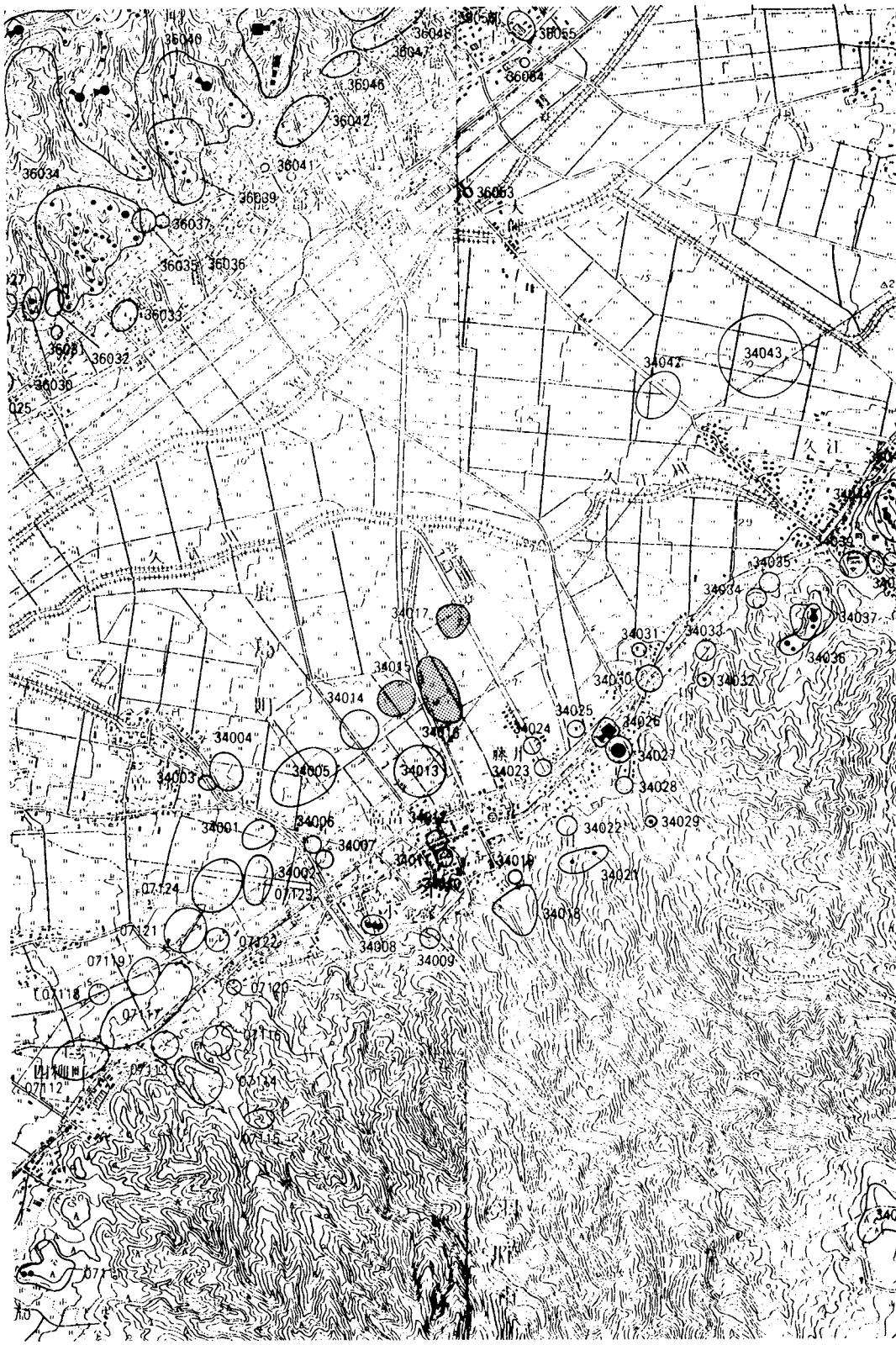


第１図　遺跡位置図（石川県）

2．周辺の遺跡

当遺跡の南西には、国道159号線鹿島バイパス改築工事に伴い緊急発掘調査された数カ所の遺跡が位置する(第２図)。高畠カタタ・スギモト遺跡（遺跡番号34014）は平成２年（1990）に調査され、古墳時代前期および奈良時代～室町時代の集落跡を検出している。平成３年（1991）に調査された高畠Ｂ遺跡（34014）は高畠スギモト遺跡の一部と重なり、河道による土石流の堆積によって形成された舌状微高地上には古墳時代前期～平安時代の集落跡が立地する。また平成４年（1992）調査の曽祢Ｃ遺跡（34005）では、縄文時代晩期、弥生時代中期～古墳時代中期、古墳時代後期～室町時代の遺構・遺物が確認されている。

《参考文献》
鹿島町史編纂専門委員会　1982　『鹿島町史　資料編（続）上巻』　鹿島町役場
角川日本地名大辞典編纂委員会　1988　『角川日本地名大辞典　17　石川県』　角川書店
石川県埋蔵文化財保存協会　1990～1993　『石川県埋蔵文化財保存協会年報１～４』　石川県埋蔵文化財保存協会



第２図　調査区周辺遺跡分布図（１/25,000）
（34017　藤井サンジョガリ遺跡　34016　高畠テラダ遺跡　34015　高畠カンジダ遺跡）

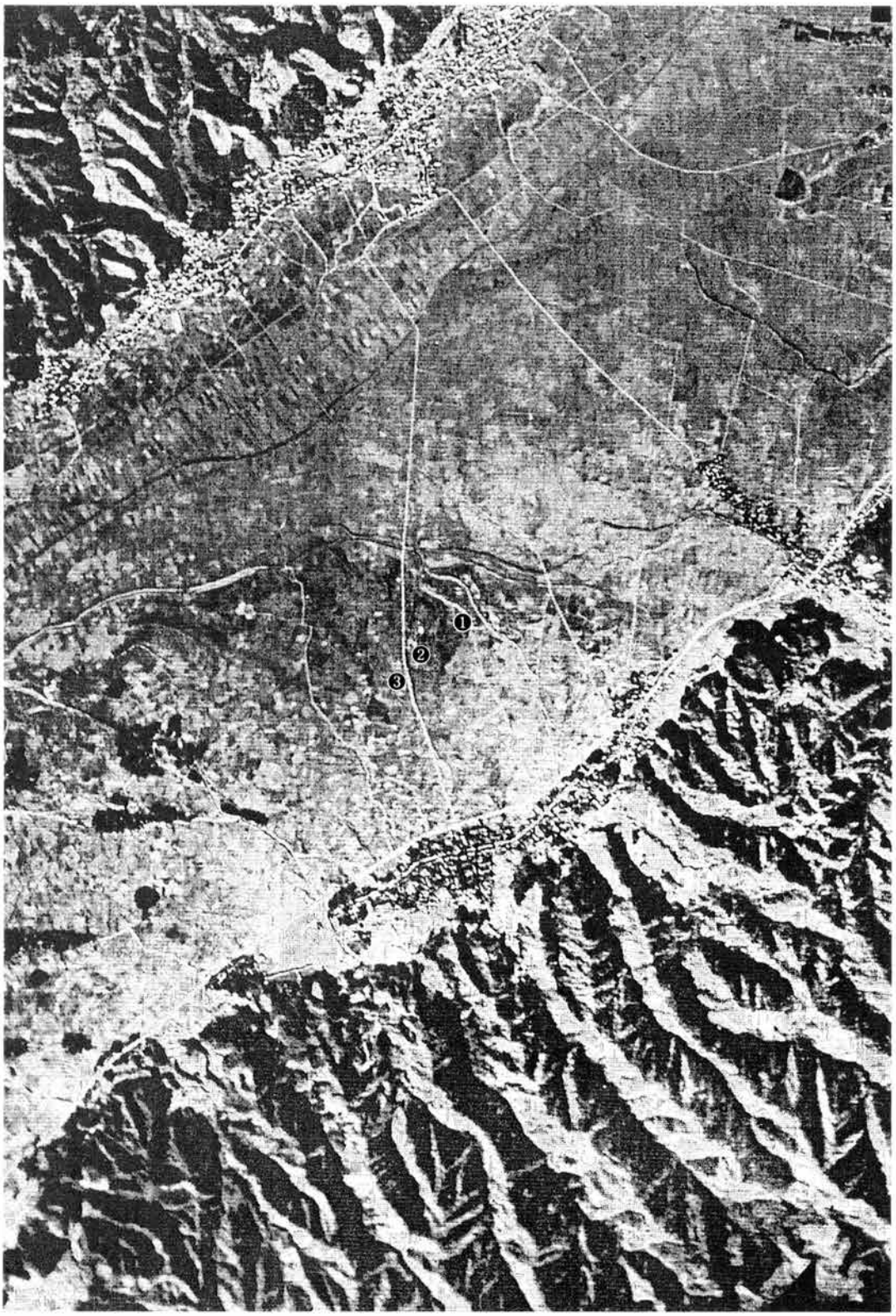


写真７　調査区周辺航空写真
（１　藤井サンジョガリ遺跡　２　高畠テラダ遺跡　３　高畠カンジダ遺跡）

遺跡番号	枝番号	名　称	所在地	所在地通称	種別	現状	立地	時代	出土品	備考
34001		小金森ヘイナイメ A遺跡	鹿島町小金森	川久保	散布地	田	平地	縄文		
34002		小金森ヘイナイメ B遺跡	鹿島町小金森・羽咋市大町	ヘイナイメ	散布地	田	平地	奈良・平安		
34003		曽禰大坪遺跡	鹿島町曽禰	大坪	散布地	田	平地	弥生	土器	1961年、耕地整理により発見。旧「曽禰遺跡（A）」を改称。
34004		曽願堂田遺跡	鹿島町曽禰	道田の池	散布地	田	平地	弥生	壺、高杯、土器	1959年、耕地整理により発見。旧「曽禰弥生遺跡」を改称。
34005		曽祢C遺跡	鹿島町曽祢		集落跡	田	平地	古墳	須恵器、土師器	
34006		小金森仏教遺跡	鹿島町小金森		散布地	田	台地末端	鎌倉	鏡	
34007		小金森宮田遺跡	鹿島町小金森	宮田	散布地	田	平地	古墳	平瓶、甕	
34008	1	曽禰1号墳	鹿島町曽禰		古墳	宅地	台地端	古墳	双龍文環頭大刀、耳環、鉄斧、須恵器（杯蓋、台付長頸壺、甕、壺）	円墳、横穴式石室。1908年、山下家新築により発見。墳丘削平。
	2	曽禰2号墳	鹿島町曽禰		古墳	宅地	台地端	古墳		円墳（径約7m高0.5m）横穴式石室。
	3	曽禰3号墳	鹿島町曽禰		古墳	宅地	台地端	古墳		円墳（径約5m高1.5m）周辺が削平され、原形より小形化
34009		高畠ケカッチョ遺跡	鹿島町高畠	ケカッチョ	散布地	畑	谷頭	縄文	磨製石斧	
34010		高畠経塚古墳	鹿島町高畠		古墳	宅地	扇頂部	古墳	圭頭大刀2、銅腕耳環、須恵器（杯高杯、甕）	円墳（径10m）、横穴式石室。水口家新築の際発見。墳丘削平。
34011		高畠稲荷社跡遺跡	鹿島町高畠		散布地	宅地・畑	扇頂部	古墳		
34012		高畠弥生遺跡	鹿島町高畠	キクヤ小跡	散布地	宅地	扇頂部	弥生	壺	
34013		高畠遺跡	鹿島町高畠		散布地	田	扇頂部	古墳	坩、小形丸底坩、壺、高杯	1960年、耕地整理により発見。
34014		高畠カタタ・スギモト遺跡	鹿島町高畠・曽祢		集落跡	田	平地	古墳～中世	須恵器、土師器、白磁、青磁、珠洲焼、勾玉	掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑。1990年県埋文保存協会発掘調査。
34015		高畠カンジダ遺跡	鹿島町高畠		集落跡	田	平地	縄文・弥生中世	縄文土器、弥生土器、珠洲焼	掘立柱建物、土坑、溝1990年県埋文保存協会発掘調査。
34016		高畠テラダ遺跡	鹿島町福井・高畠		集落跡	田	平地	奈良～中世	須恵器、土師器、珠洲焼	土坑、溝。1989年県埋文保存協会発掘調査。
34017		藤井サンジョガリ遺跡	鹿島町福田・藤井	サンジョガリ	集落跡	田	平地	弥生	弥生土器・パン状炭化物	平地式住居跡、掘立柱建物。1989年県埋文保存協会発掘調査。
34018		高畠常薬寺遺跡	鹿島町高畠		墳墓	畑・山林	丘陵斜面	鎌倉・室町	灯明皿、珠洲焼	
34019		福田忠魂碑台地遺跡	鹿島町福田		散布地	田	扇頂部	古墳	土器細	
34020		福田原山遺跡	鹿島町福田原山		散布地	山林	台地	縄文中期	土器、石器	福田原山堤西側。満水時浸水。町指定史跡。
34021		藤井横穴群	鹿島町藤井	カシラ・コウモリ穴	横穴墓	山林	丘陵中腹	古墳		2基確認。
34022		藤井A遺跡	鹿島町藤井		散布地	宅地	丘陵地	縄文	土器、磨製石斧、石匙	
34023		藤井B遺跡	鹿島町藤井		散布地	田	扇頂部	弥生	壺、甕、高杯	
34024		藤井C遺跡	鹿島町藤井		散布地	田	扇頂部	古墳	有蓋高杯	耕地整理により発見。
34025		小田中部田遺跡	鹿島町小田中		散布地	川堤・道路	平地	縄文	土器	国道建設により一部損壊。旧「小田中国道A遺跡」を改称。
34026		小田中亀塚古墳	鹿島町小田中		古墳	社地	台地	古墳		前方後方墳（全長61m、高8m）、葺石あり。
34027		小田中新王塚古墳	鹿島町小田中		古墳	社地	台地	古墳	三角縁波文帯三神三獣鏡1、三角縁獣文帯三神三獣鏡1、鍬形石、管玉	円墳（帆立貝形前方後円墳とする説あり）（径67m、高15m、）竪穴式石室、葺石、二段築成。
34028		小田中寺屋敷遺跡	鹿島町小田中	テラヤシキ	散布地	畑	扇頂部	縄文中期	土器、磨製石斧	
34029		藤井古墳	鹿島町藤井	カラト池	古墳	山林	段丘	古墳		円墳、横穴式石室。石室損壊。
34030		小田中国道B遺跡	鹿島町小田中		散布地	道路	扇頂部	弥生	壺、甕、高杯	耕地整理により発見。
34031		小田中領家遺跡	鹿島町小田中		散布地	宅地	台地端	古墳	甕	領家庄三郎宅地。
34032		小田中1号横穴	鹿島町小田中	コウモリアナ	横穴	雑木林	丘陵	不群		円形天井（ドーム形）
34033		小田中中世寺跡	鹿島町小田中	ガンニヤマ	寺院跡	山林	台地	鎌倉・室町		円形天井（ドーム形）
34034		小田中観音堂遺跡	鹿島町小田中		散布地	畑	台地	古墳	壺、小形丸底坩、甕、高杯	
34035		小田中おばたけ遺跡	鹿島町小田中		散布地	畑	丘陵麓	弥生	坩、壺、高杯、石包丁	
34036	1	久江オハヤシ山1号墳	鹿島町久江	オハヤシヤマ	古墳	山林	丘陵尾根	古墳		前方後円墳（全長30m、高2.5m）
	2	久江オハヤシ山2号墳	鹿島町久江	オハヤシヤマ	古墳	山林	丘陵尾根	古墳		円墳（径10m、高1.5m）
	3	久江オハヤシ山3号墳	鹿島町久江	オハヤシヤマ	古墳	山林	丘陵尾根	古墳		円墳（径18m、高2.5m）
	4	久江オハヤシ山4号墳	鹿島町久江	オハヤシヤマ	古墳	山林	丘陵尾根	古墳		円墳（径6m、高0.8m）
34037		久江の寺ケ谷内遺跡	鹿島町久江 馬場谷内	寺ケ谷内	寺院跡	山林	丘陵	不群		その昔、12の寺があったという。
34038		久江陣の穴横穴群	鹿島町久江 馬場谷内	ジンノアナ	横穴墓	山林	丘陵中腹	不群		2基、幅10～12尺、高5～6尺、奥行9～12尺。

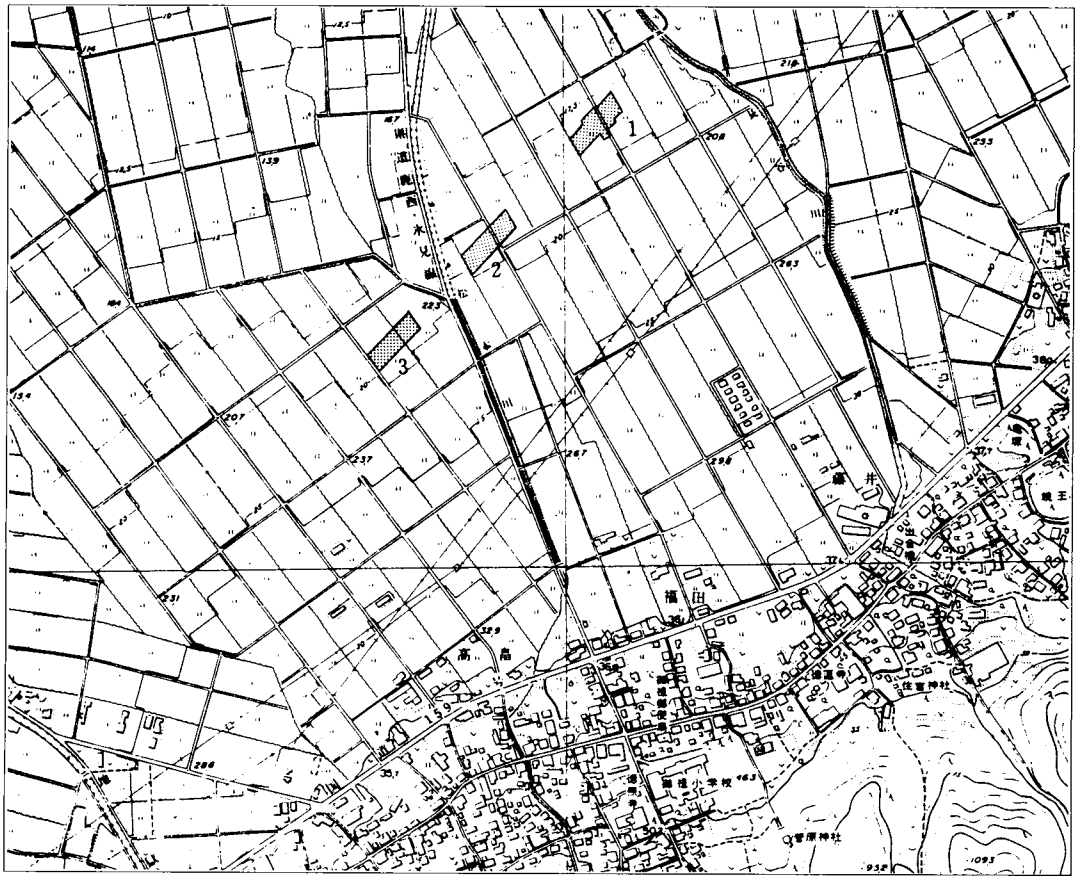
第1表　調査区周辺遺跡一覧（石川県遺跡地図・表III（1992））

II　経緯と経過

1．経緯

本調査は一般国道159号線鹿島バイパス改築工事に伴うものである。調査に先立つ同路線予定区の鹿島町久江地内以西の分布調査は昭和62・63年度に石川県立埋蔵文化財センターによって実施されており、鹿島町藤井地内～羽咋市大町地内においては、藤井A遺跡、藤井B遺跡、高畠A遺跡、高畠B遺跡、大町A遺跡、四柳宮の下遺跡、大町B遺跡、四柳宮の越・やちだ遺跡の合わせて8遺跡（いずれも仮称）が新たに確認されている。今回報告する遺跡はその内の東側寄り3遺跡であるが、遺跡の名称は現地における小字名の聞き取りによって、藤井A遺跡を藤井サンジョガリ遺跡、藤井B遺跡を高畠テラダ遺跡、高畠A遺跡を高畠カンジダ遺跡と変更している。

なお建設省事業に係る埋蔵文化財調査は、平成元年度より石川県教育委員会が社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託することとなり、石川県立埋蔵文化財センターから派遣された職員によって発掘調査は実施されている。



第3図　調査区位置図（1/10,000）
（1　藤井サンジョガリ遺跡　2　高畠テラダ遺跡　3　高畠カンジダ遺跡）

2．経過

藤井サンジョガリ遺跡（平成元年５月15日～９月26日）

５月15日　調査区中央の農道をはさみ東側を仮Ａ区、西側を仮Ｂ区と設定。調査区内の田面に相当量の水が溜まっているため、排水作業を行う。

５月16日～５月25日　バックホー、ブルドーザーによる表土除去およびグリッド杭打ち作業。仮Ｂ区の一部に幅1.5m程度の溝状遺構が巡っているのを確認。遺構の覆土は灰褐色粘質土である。南北Ａ～Ｄ軸、東西１～６軸の10mグリッドを設定。

５月29日　発掘器材搬入。作業員を入れての調査開始。周辺水田からの漏水が目立つ。

６月２日　Ｂ・Ｃ－２区の溝状落ち込み遺構から弥生時代後期の一括遺物出土。土中の水分が多いためか、遺物の残りは良好である。

６月７日　Ｅ－２区の南北方向に流れる３号溝から弥生時代後期の一括遺物出土。

６月13日　農道東側の１～２区調査終了。全景写真撮影。地表面に近く上部が削平されているためか、遺構は全体に浅い。

６月27日～６月30日　Ｂ～Ｄ－４・５区遺構検出作業。調査区の中央部に位置する径10mを越える周溝状遺構を確認する。

７月４日　周溝内掘り下げ作業開始。何本かの溝が複雑に切り合っている箇所もある。溝内の遺物量は多い。

７月６日　Ｃ－５区21号溝より多量の穀物粒を握り潰したような炭化物が出土する。大きさは大人の親指大である。

７月17日　Ｂ・Ｃ－６区の31号溝掘り下げ作業開始。調査区内を横断する幅４m余りの大溝である。

７月31日　各遺構内一括遺物平面実測作業進める。

８月４日　全区の掘り下げを完了する。全景写真撮影。

８月５日　藤井サンジョガリ遺跡と並行して高畠テラダ遺跡の発掘調査を開始する。

９月８日　航空測量に向けての清掃作業開始。

９月21日　航空測量実施。天候は曇り時々晴れ。

９月26日　調査区壁面の土層断面図および全体略図を完成させ調査を終了する。

高畠テラダ遺跡（平成元年８月５日～12月６日）

８月５日～８月12日　バックホーによる表土除去作業。湧水が激しいため、水中ポンプによる24時間の排水作業が必要。

８月21日～８月24日　南北Ａ～Ｅ軸、東西１～７軸の10mグリッド設定。Ａ・Ｂ－１～２区より包含層掘り下げおよび遺構検出作業を開始する。

９月１日～９月７日　雨天が続き、行き場を失った周辺の農業用水が流入する。調査区内はプールとなり、排水と側壁の復旧作業に手間取る。

9月25日　3～4区を中心に南北方向へ伸びる溝状遺構を多数検出する。23号溝より「諸」と読める墨書土器が出土する。

10月3日　遺構掘り下げ作業が続く。多くの溝が切り合っている。土質が柔らかいため遺構内に水が溜まると内部から崩れてくる。

10月23日　1～4区遺構掘り下げ完了。農道を挟んだ東側調査区の作業を開始する。

11月6日　B・C－5区遺構検出作業。やはり南北方向へ伸びる溝状遺構が多数見つかる。溝番号は60まで確認。

11月8日　C－7区62号溝より17～18世紀の陶磁器類が出土する。

11月16日　5～7区遺構掘り下げ完了。1区から航空測量に向けての清掃作業を開始する。

11月21日　航空測量実施。天候は曇り。

11月22日～12月1日　遺構および調査区側壁の土層断面図実測作業。併せて写真撮影、遺構番号確認作業等を実施する。

12月4日～12月6日　バックホーによる藤井サンジョガリ遺跡、高畠テラダ遺跡の埋め戻し作業完了をもって、調査を終了する。

高畠カンジダ遺跡（平成2年5月9日～9月1日）

5月9日　現地で調査範囲の最終確認をし、表土除去作業の手順を検討する。

5月14日～5月18日　バックホーによる表土除去作業。漆器、弥生式土器、土師器底部が東側調査区で確認される。西側は遺物量は少ない。

5月25日　南北A～C軸、東西1～9軸の10mグリッド設定。A～C－1区より遺構検出作業を開始する。

5月28日　溝状遺構が目立つ。C－1区4号溝より羽釜の鍔片が出土する。

6月7日　A～C－3区の調査開始。何棟かの掘立柱建物が建ちそうである。

6月12日　B－4区20号溝の暗橙色砂質土層より縄文時代中期の土器片が出土する。

6月15日　農道東側A～C－1～4区までの調査終了する。

7月6日　B－7区2～3号土坑上面より縄文時代前期後葉の土器片が出土する。付近に散在していた土器片と同一個体かもしれない。

7月10日　A～C－7～8区にかけて調査区を横断する幅5m前後の大溝を掘り下げる。土器の取り上げは、上・中・下層に分けて実施する。

7月24日　農道西側A～C－5～9区の遺構掘り下げをほぼ完了する。各遺構内の遺物実測図および土層断面図実測作業を開始する。

8月24日　航空測量に向けての清掃作業を開始する。

8月31日　航空測量実施。天候は曇り。

9月1日　遺構個別写真および全体写真を撮影し調査を終了する。

写真８　藤井サンジョガリ遺跡・高畠テラダ遺跡調査作業員

写真９　高畠カンジダ遺跡調査作業員

III　藤井サンジョガリ遺跡

III　藤井サンジョガリ遺跡

1．概要

幅約20～25m、長さ約80m、面積約2,100m²の調査域を持つ。調査区を横断する幅６ｍの農道が南北に通る。グリッドは農道の方向に沿って任意で基点を設け、10m単位で南からＡ～Ｅ区、東から１～６区と設定した（第１図）。遺構検出面は北側のＥ区で標高16.5～16.7m、南側のＡ区で17.5～17.7mと30～40mの距離で約１ｍの高低差があり、現集落側に高く邑知地溝帯側に低くなることが分かる。東西方向での極端な標高差は認められない。包含層以下の土質は全体に砂気が多く水気を含むため掘り下げ作業はやり易いが、掘り上げた後の遺構が崩れ易いという難点を持つ。基本的な土層は１・耕土および盛土、２・暗褐色粘質土層、３・濁黄色砂（礫）層、４・褐色粘質土層、５・黒褐色粘質砂層（包含層）、６・地山層の六層からなる（第18図）。

遺構は大きく土坑・溝・周溝建物・掘立柱建物・ピットで構成される。連続性のある溝の多くは東西方向に伸び、計４本の溝が調査区を横断する。西側調査区中央部とその東南には幅の広い周溝を持つ建物が位置し、全形をうかがえる１号周溝建物の南隣には掘立柱建物が１棟確認されている。遺物は弥生時代後期後半のものが大半を占め、特に１号周溝建物を構成すると考えられる周溝内からの遺物量は豊富である。なお、ここでいう周溝建物とは、いわゆる「周溝をもつ平地式建物」と呼称されている建物を指すものである。

写真１　１号周溝建物跡掘り下げ作業（西より）

第１図　藤井サンジョガリ遺跡（図郭割・グリッド配置図）

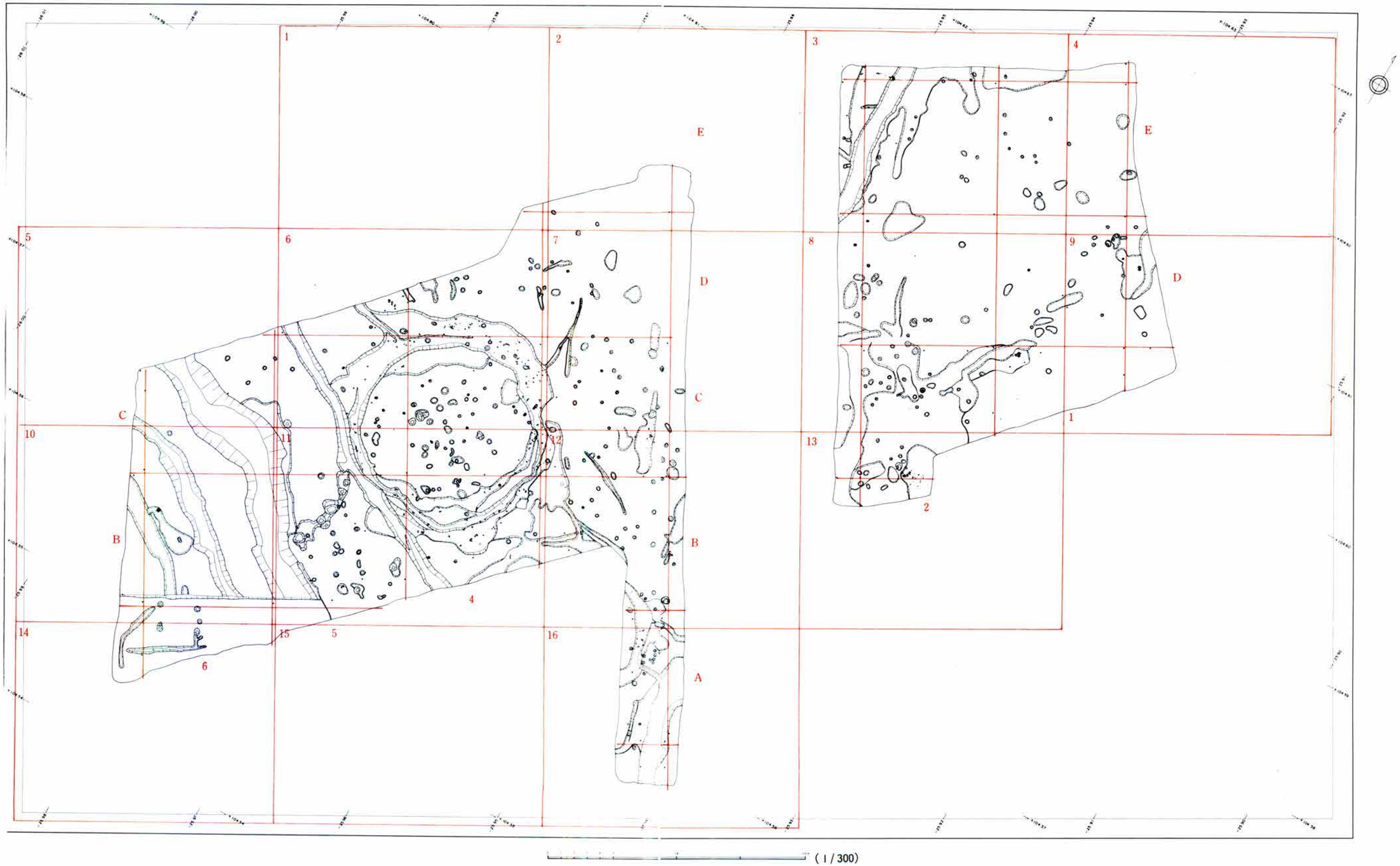
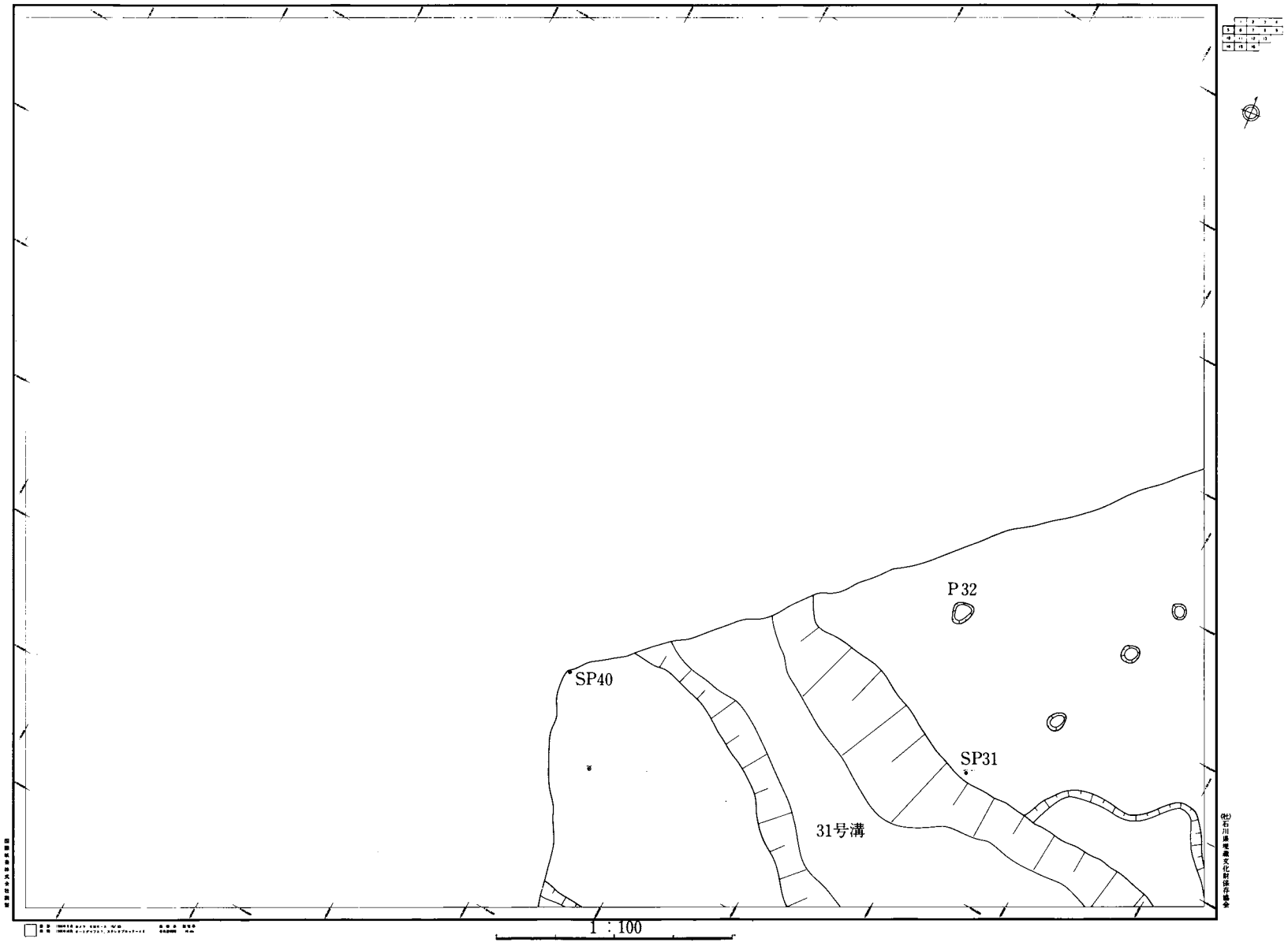
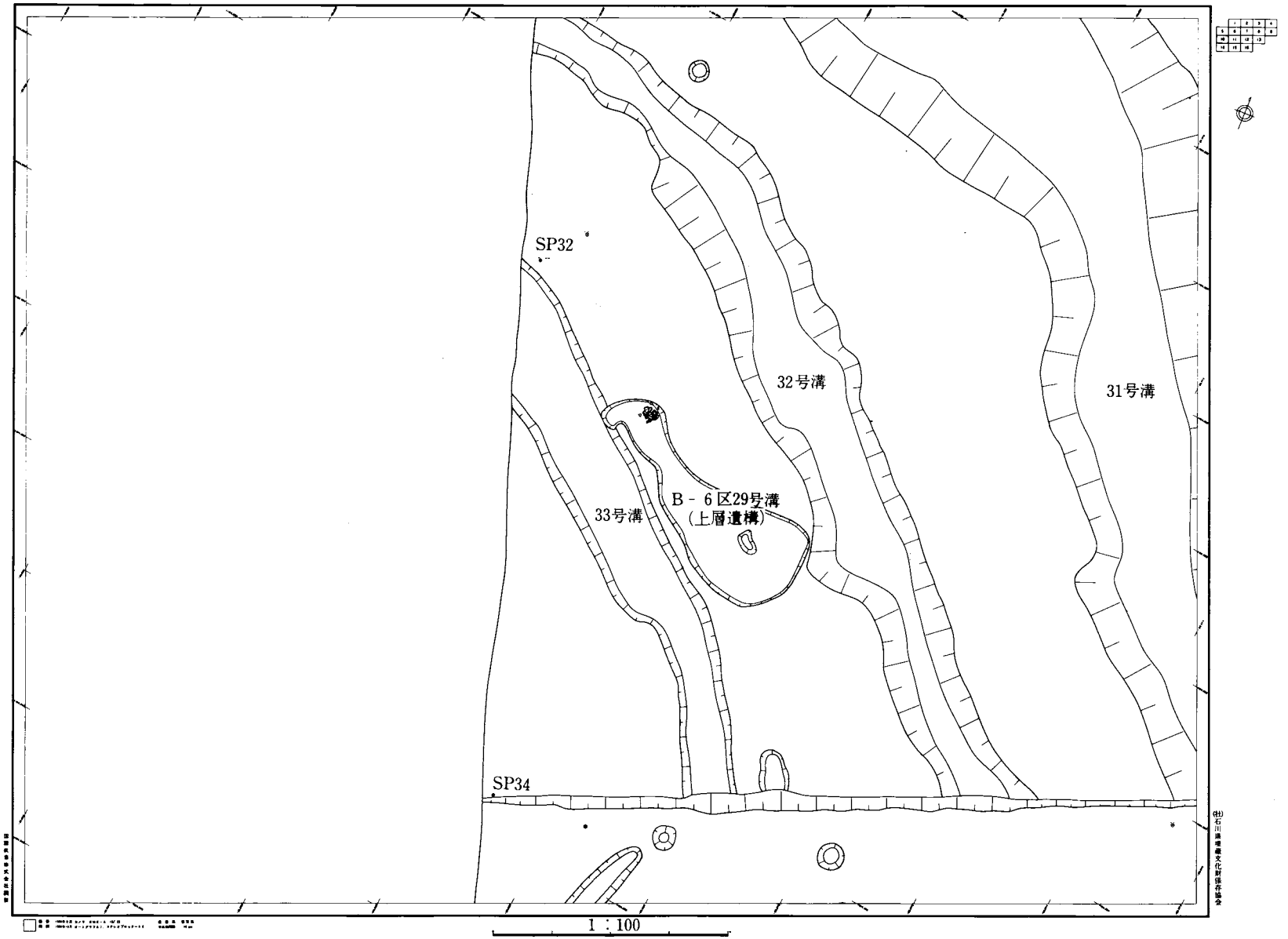


写真２　藤井サンジョガリ遺跡全景

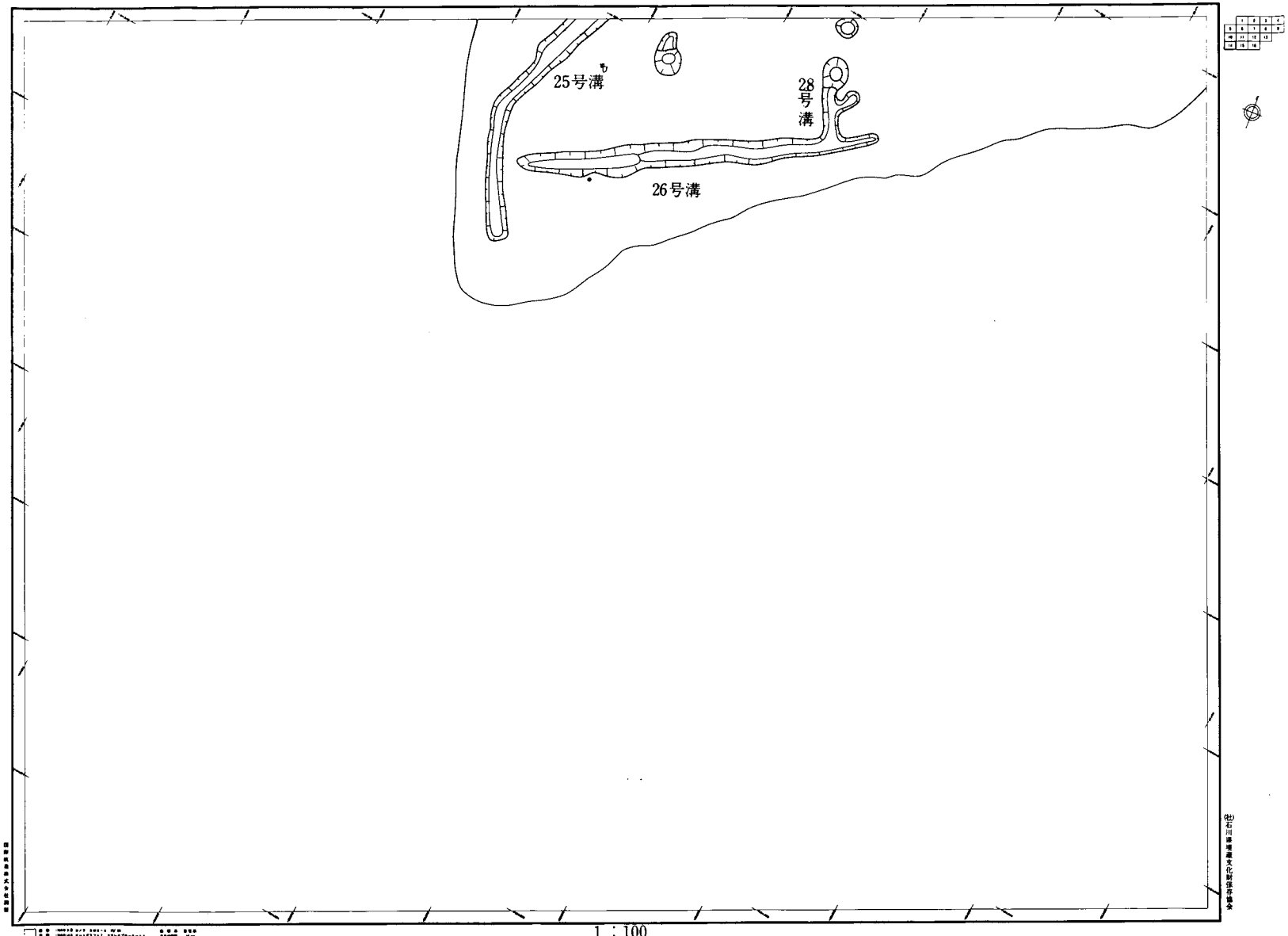
第２図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図５



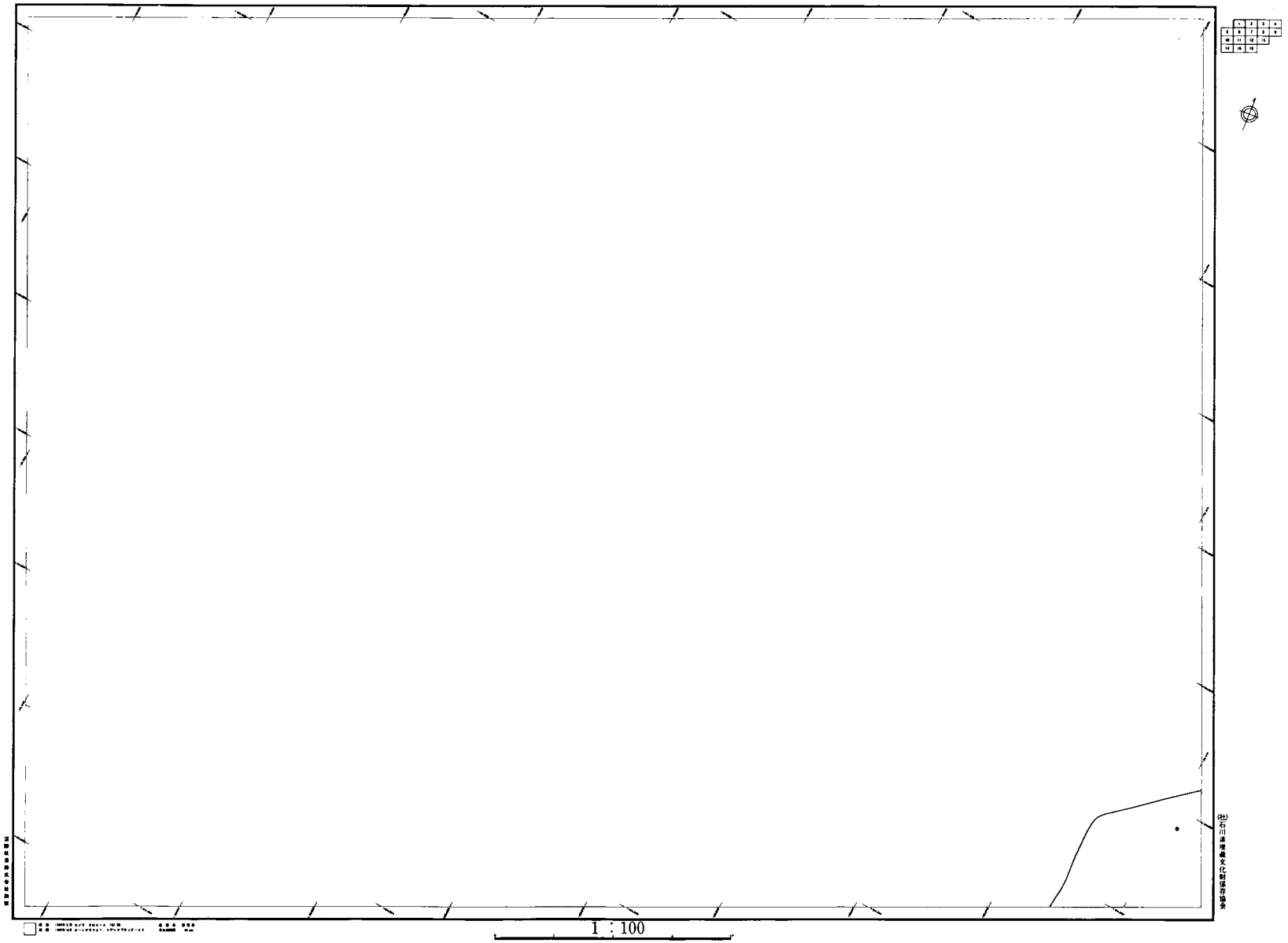
第３図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図10



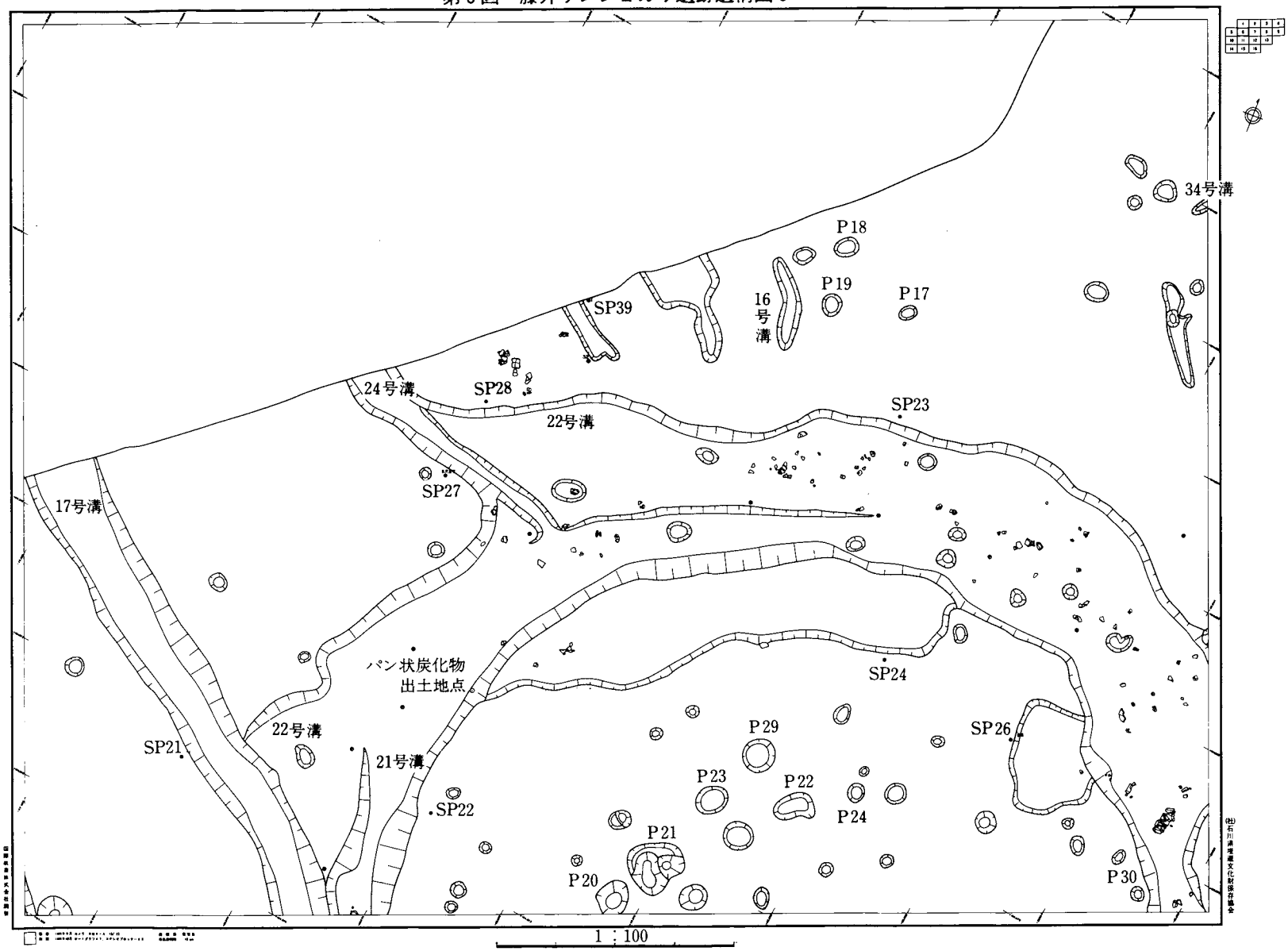
第４図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図14



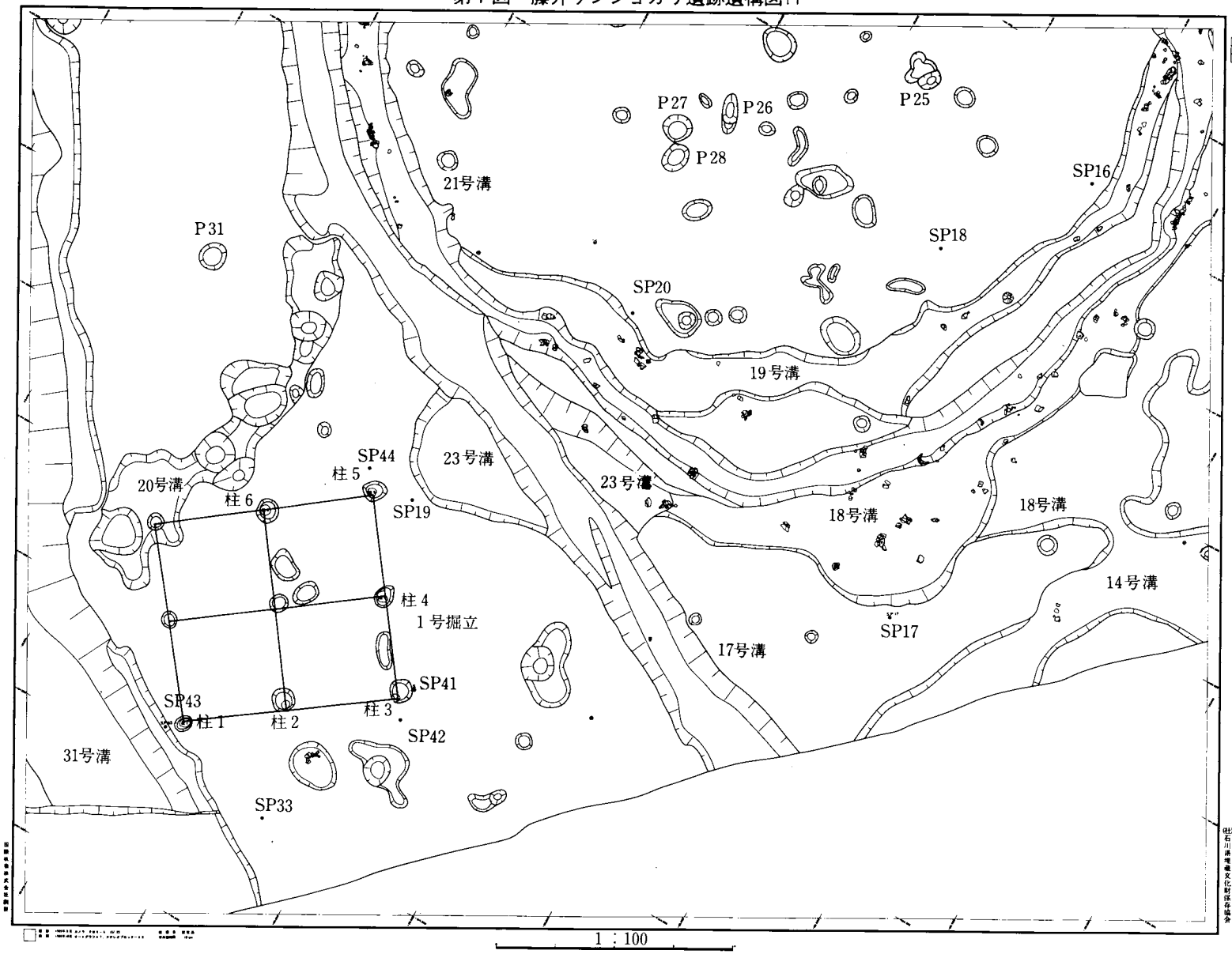
第５図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図Ⅰ



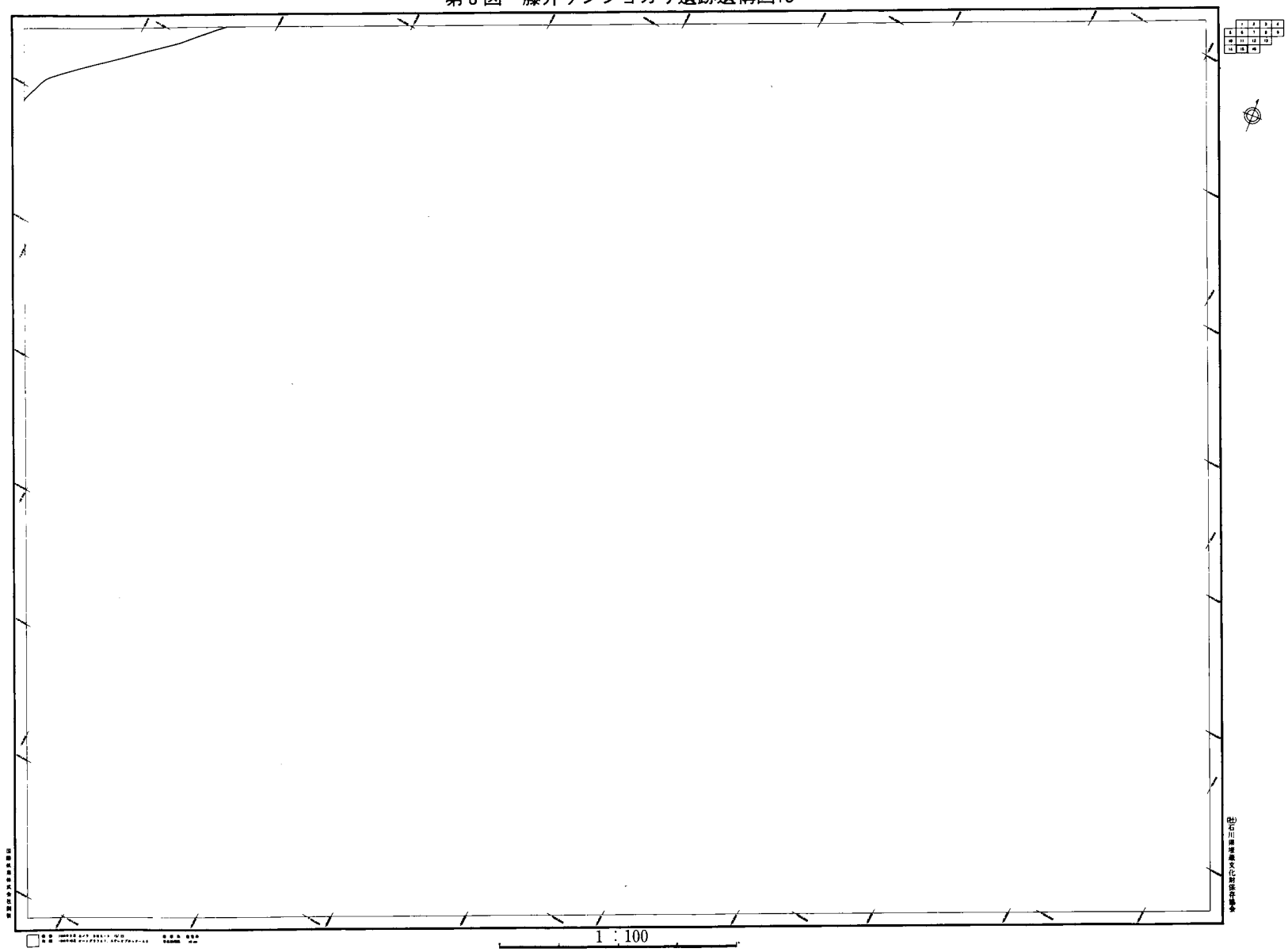
第６図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図６



第７図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図Ⅱ

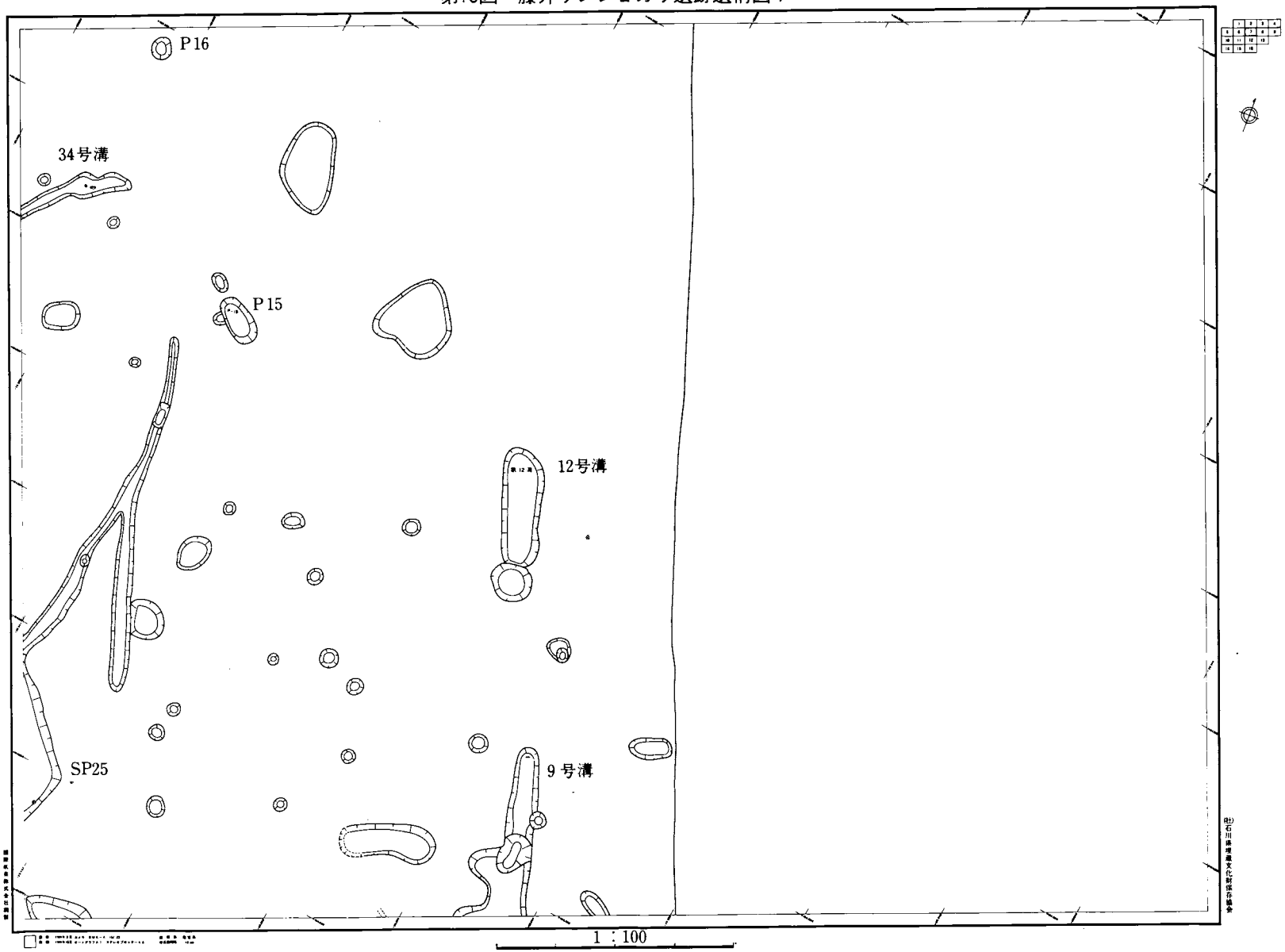


第８図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図15

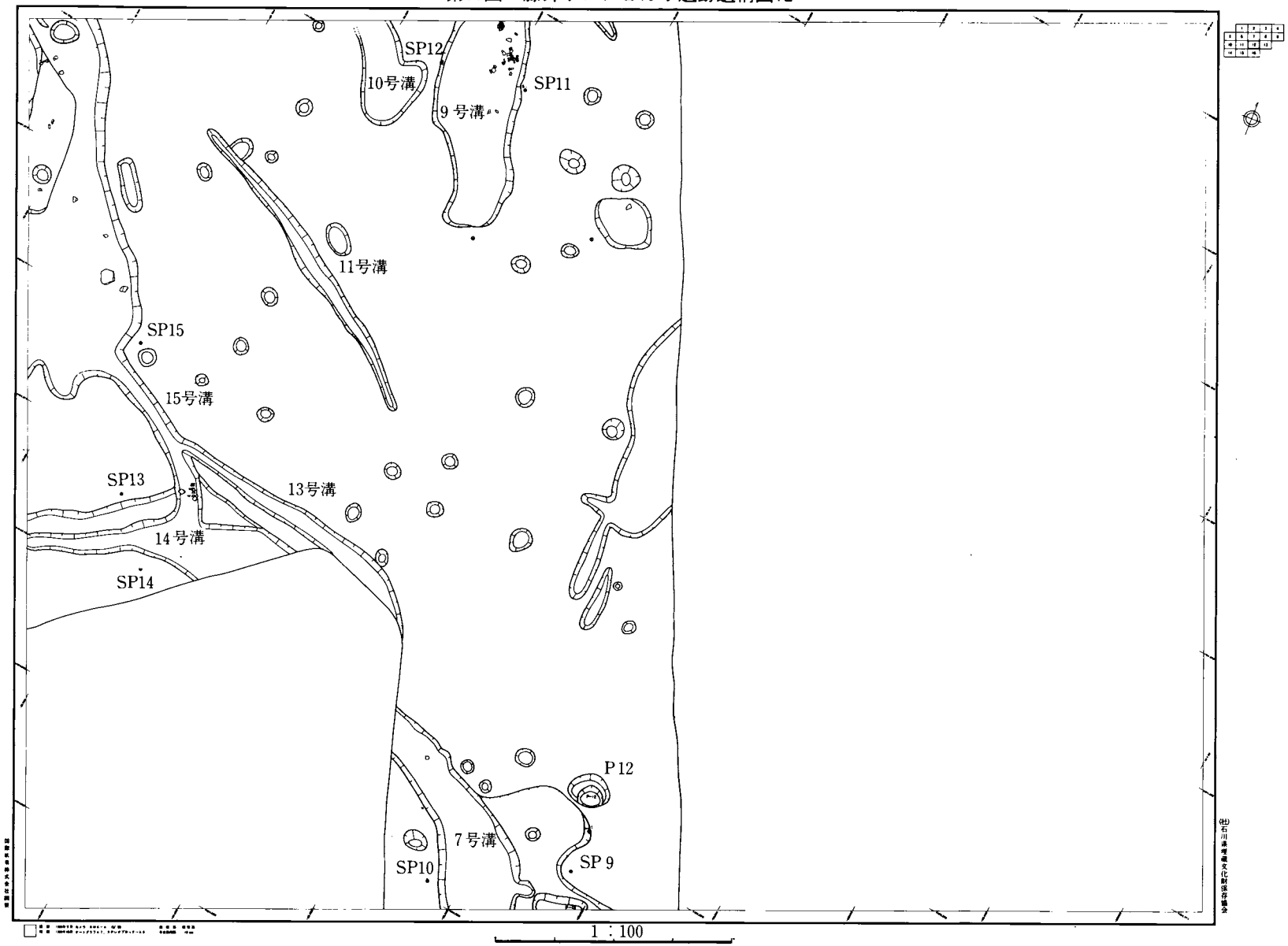


第９図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図２

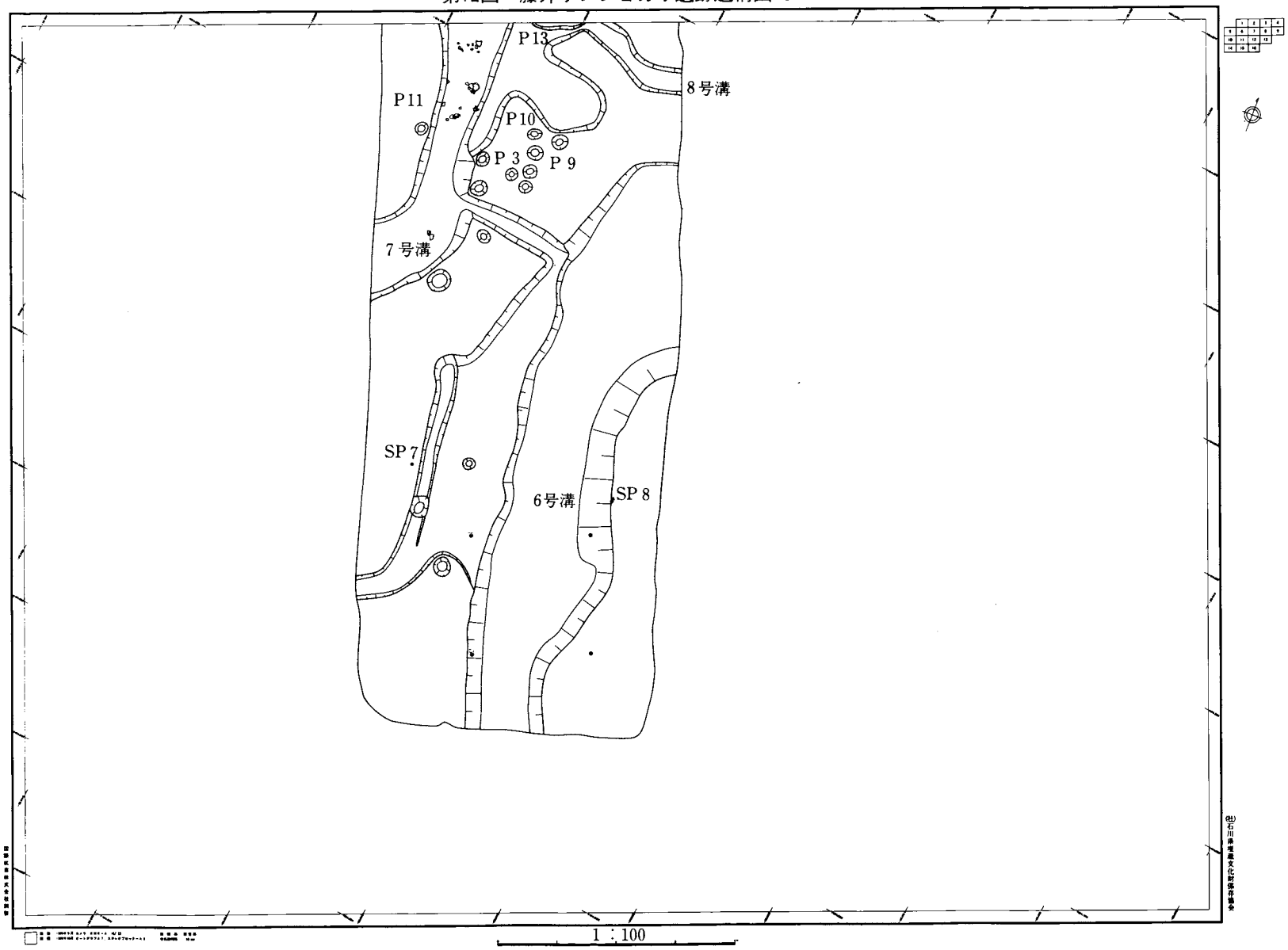
第10図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図７



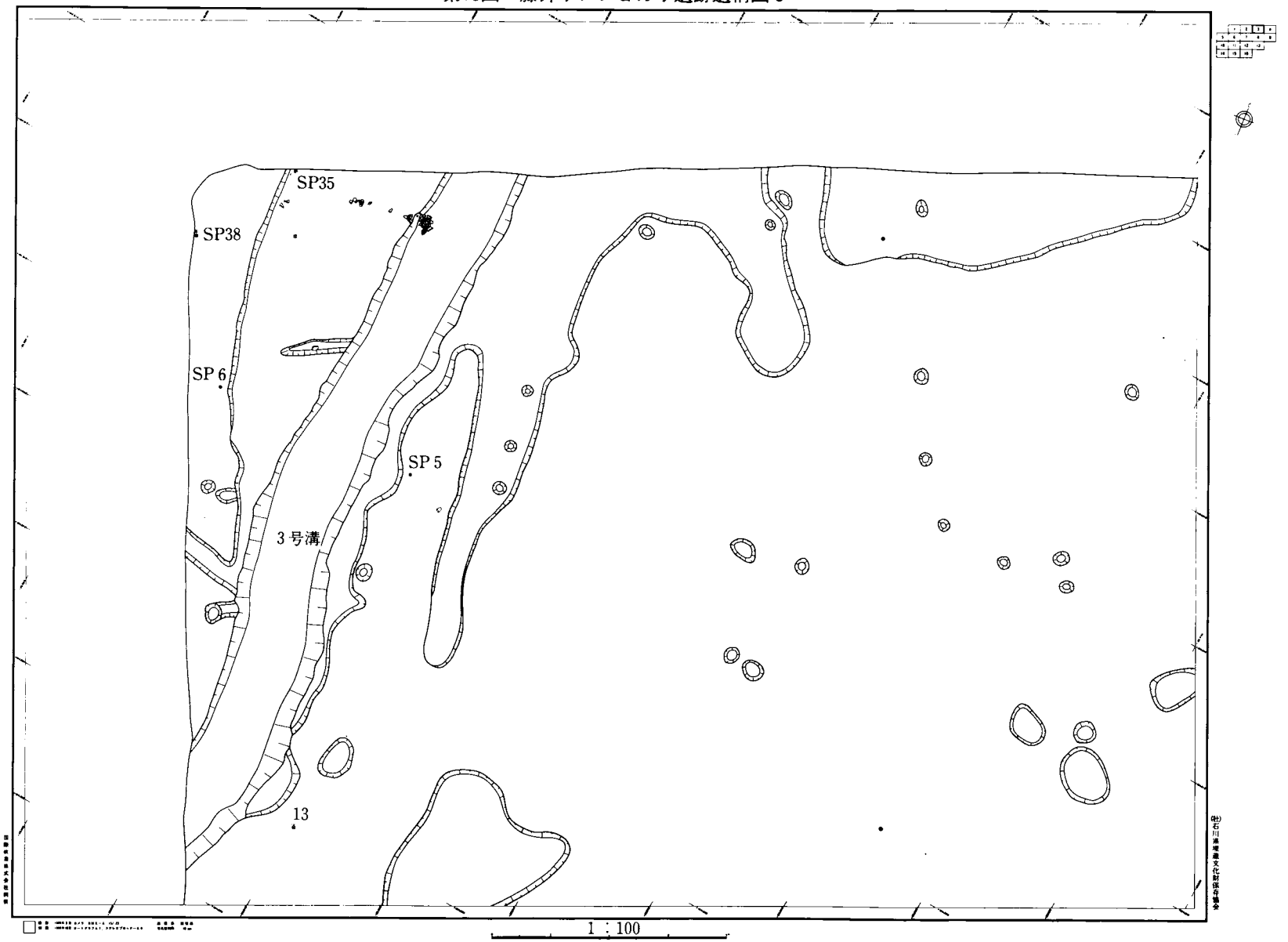
第11図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図12



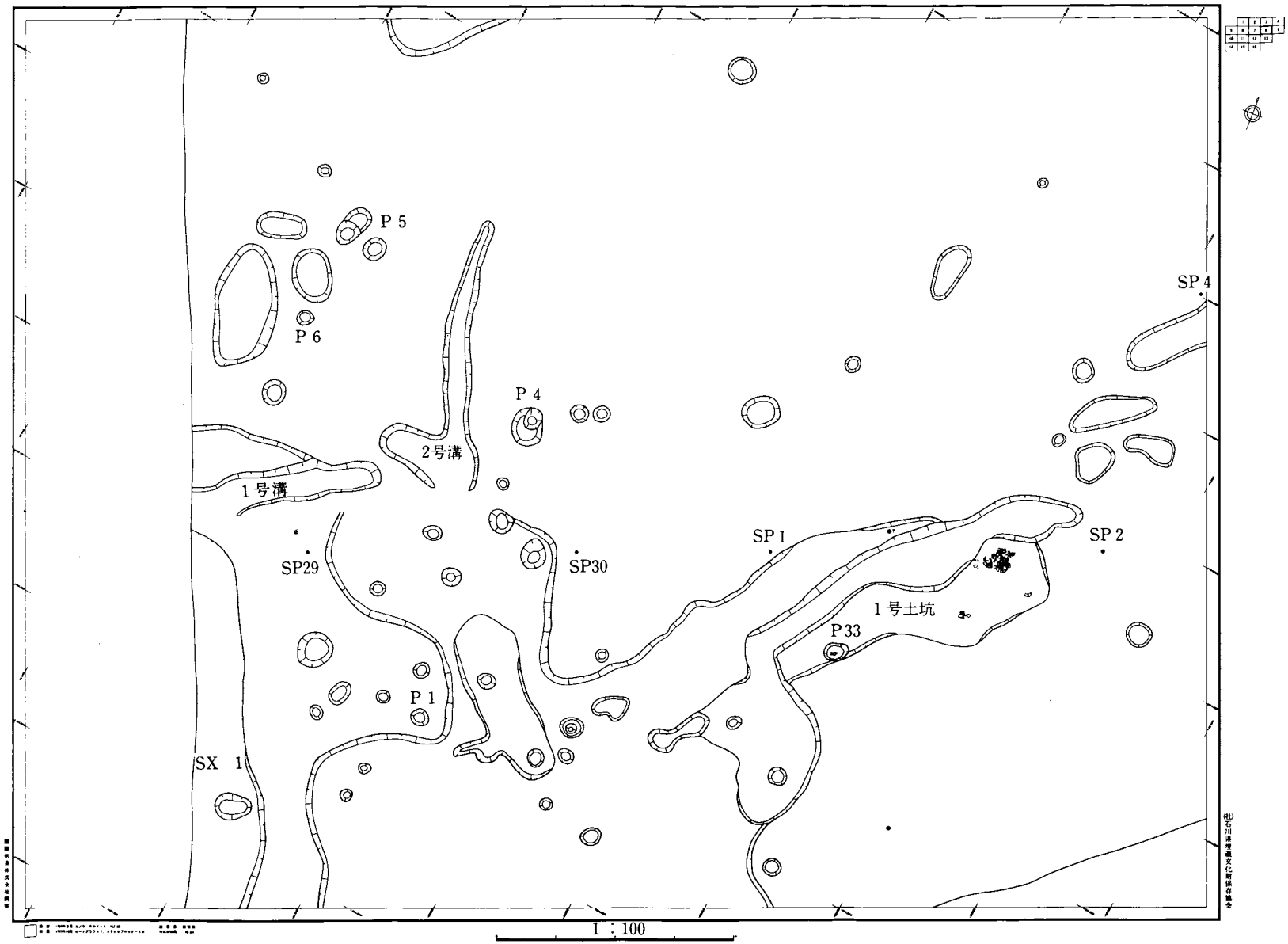
第12図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図16



第13図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図３

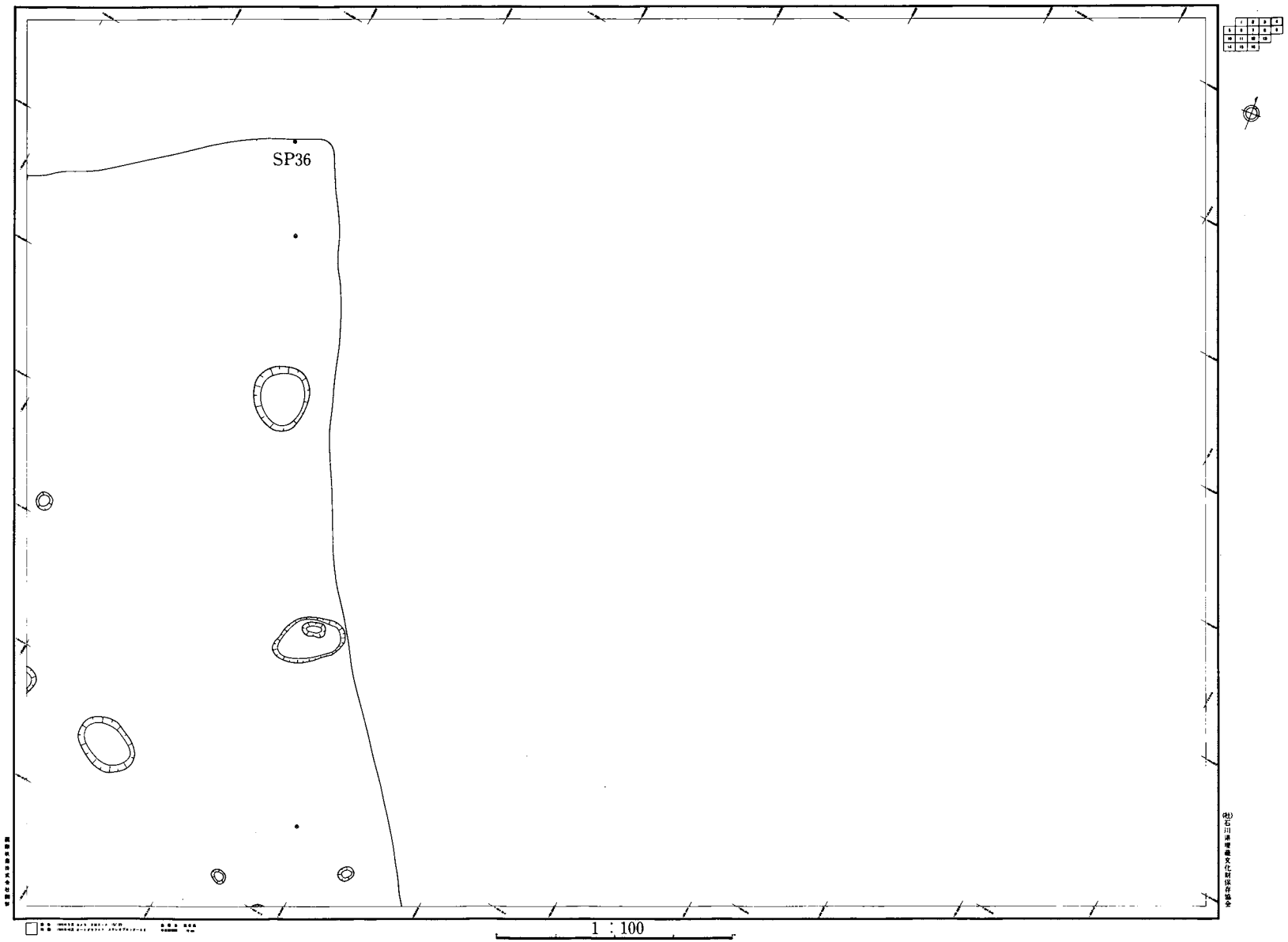


第14図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図8

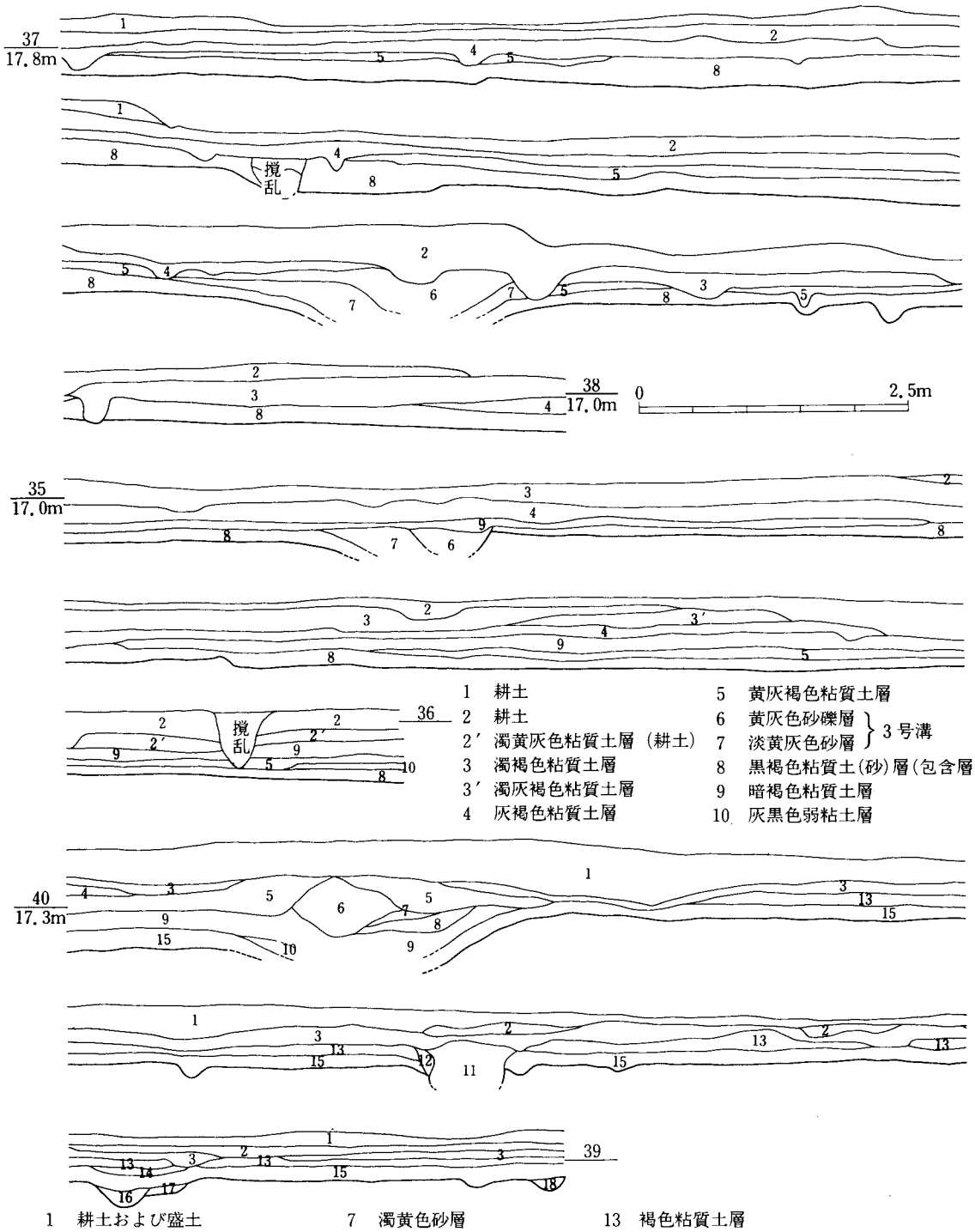


第15図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図13

第16図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図４



第17図　藤井サンジョガリ遺跡遺構図９



第18図　調査区土層断面実測図（1/60）

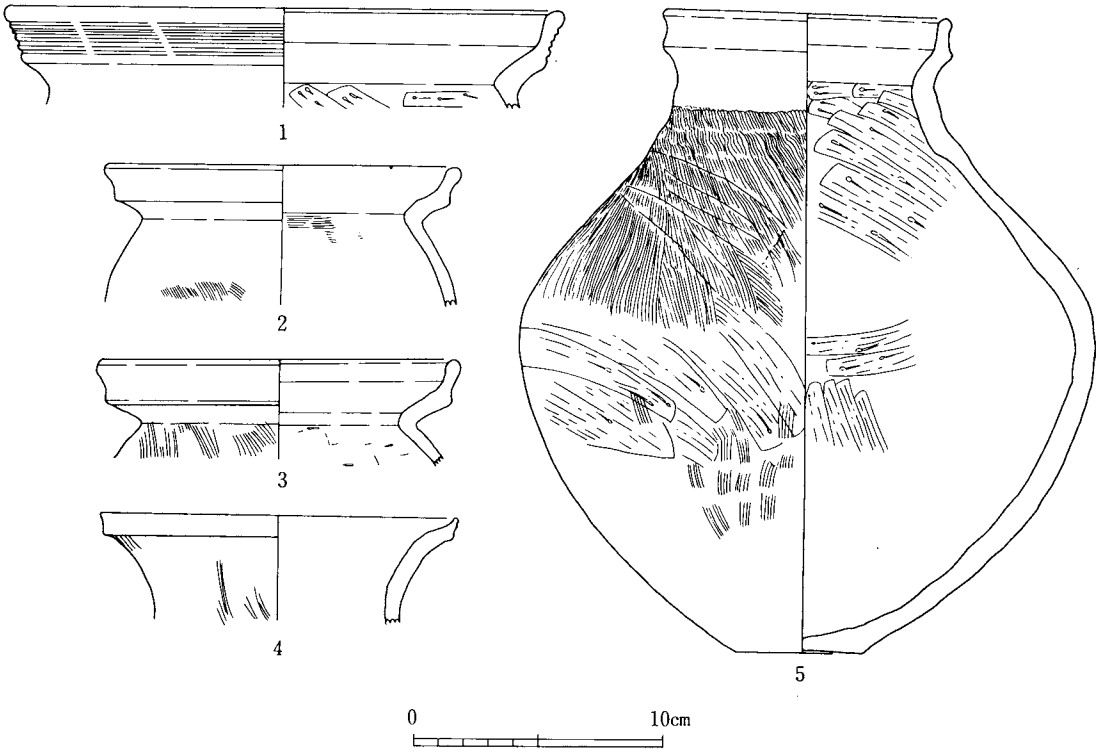
2．遺構と遺物

(1)　土坑

1号土坑（第14図・第19図1～5）

C－1・2区に位置する。明瞭な形はとらず、その周辺に位置する深さ数cm内外のくぼみ状の落ち込みに似る。遺構北側に土器が集中するため、建物に伴う周溝の一部かとも思われたが詳細は不明。

1～3の口縁端部はいずれも先細りせず丸くおさめる。1は砂粒の含みは少なく、B・C－2区に位置する溝状落ち込み遺構出土の土器片と接合する。2は内外面赤褐色で胎土は脆く、大粒の砂粒が浮き出ている。5は完形に復元できる壺。口縁部下のハケ調整は横ナデによって消され、銅部張り出し部分にはケズリ調整が見られる。



第19図　1号土坑出土遺物実測図（1/3）

(2) 溝

1・2号溝（第14図・第22図1～3）

D－2区に位置する。1号溝は幅50～60cm、深さ10cm前後で、西側は農道下に伸びる。2号溝も同様の規模を持ち、南北方向に完結する。

1は口縁下帯に粘土紐を付加して有段口縁とする。2は鉢の口縁部か。口縁端部を外側に折り返し肥厚させる。

3号溝（第20図・第22図4～5）

E・F－2区に位置する。ほぼ南北に伸び、南側は農道下を通ってA－3区の6号溝につながる可能性がある。また北側では浅く不定形に広がる。立ち上がりが明瞭な部分の溝幅は約1.5m、深さは30～40cmで水の流れは南から北と推察される。覆土は1～2層と3～5層で堆積状況が異なるため、一度埋まった後に再度機能していたことが分かる。F－2区の溝端に土器の集中が見られる。

4は全形をうかがえる小形の甕。口縁帯は短く内傾する。5の口縁端部は横ナデによりやや内傾し、弱い稜を持つ。二点共に土器集中地点からの取り上げである。

6号溝（第12図・第22図6）

A－3区に位置する。南から北に流れ、両端は調査区外へと伸びるが土層の共通性から3号溝とつながる可能性がある。幅約2m、深さ20～30cm。やはり3号溝と同様に最上層には白黄色粗砂層が観察される。2号周溝建物を構成する7号溝とは幅40cm程の溝を介して接続する。

6は脚部下方に雑なミガキ調整が見られる。

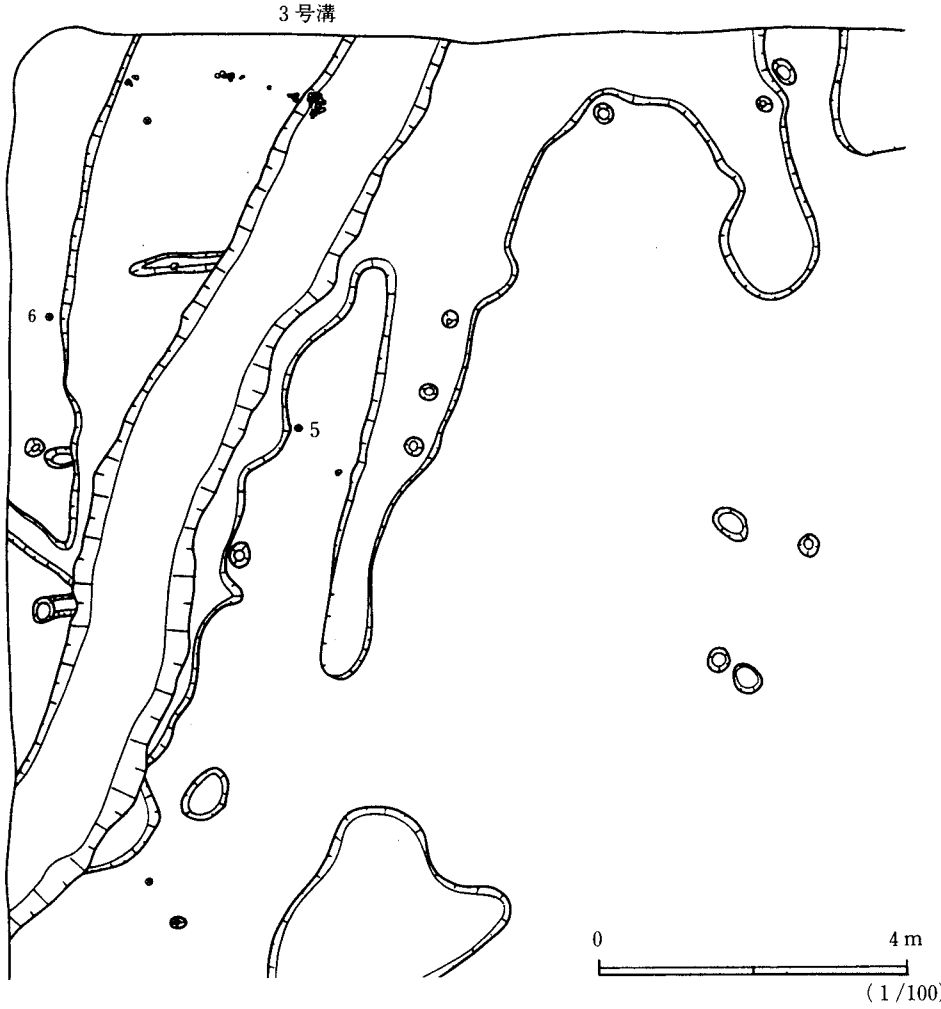
7・14号溝《2号周溝建物》（第21図・第22図7～11、第43図4）

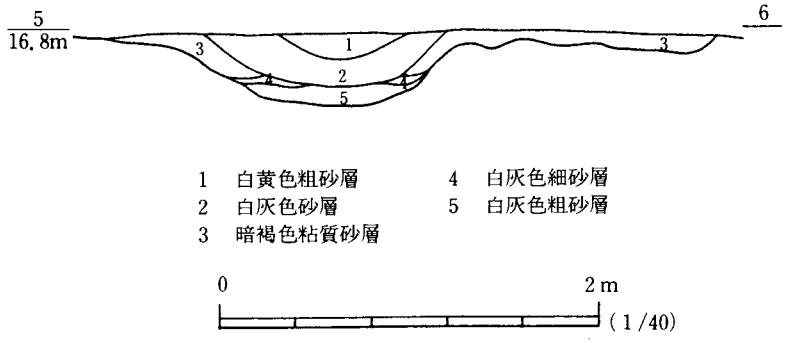
A－3・B－3・4区に位置する。全形は明らかではないが、周溝径13～14m程度の周溝建物を構成すると思われる。7号溝は幅80cm～1.4m、深さ約20cm、14号溝は幅1～2m、深さは5～10cmと浅い。7号溝の覆土第1・2層と14号溝第2・3層は、暗褐色粘質砂層・（灰）褐色粘質砂層と同質に近いため両溝のつながりに問題はないが、14号溝の第1層の暗灰色粘土層は7号溝には見られない。この層の広がりは必ずしも明確ではないが、建物最終期の溝跡と考えるならば、2号周溝建物の立て替えも想定される。なお柱穴等の残る建物中心部は調査区外のため不祥。

8は器表面に雲母が目立つ甕口縁部である。10は内外面にミガキ調整が施され、口唇部には丁寧な面取りが見られる。11は胎土が脆く、大粒の砂粒が浮き出している。0.6cm程の底部の穴は内側から開けられている。第43図4は長さ6.4cm、厚さ3.4cmの大きさを持つ軽石である。なお実測遺物はすべて7号溝からの出土である。

9・10号溝（第10～11図・第23図1～2）

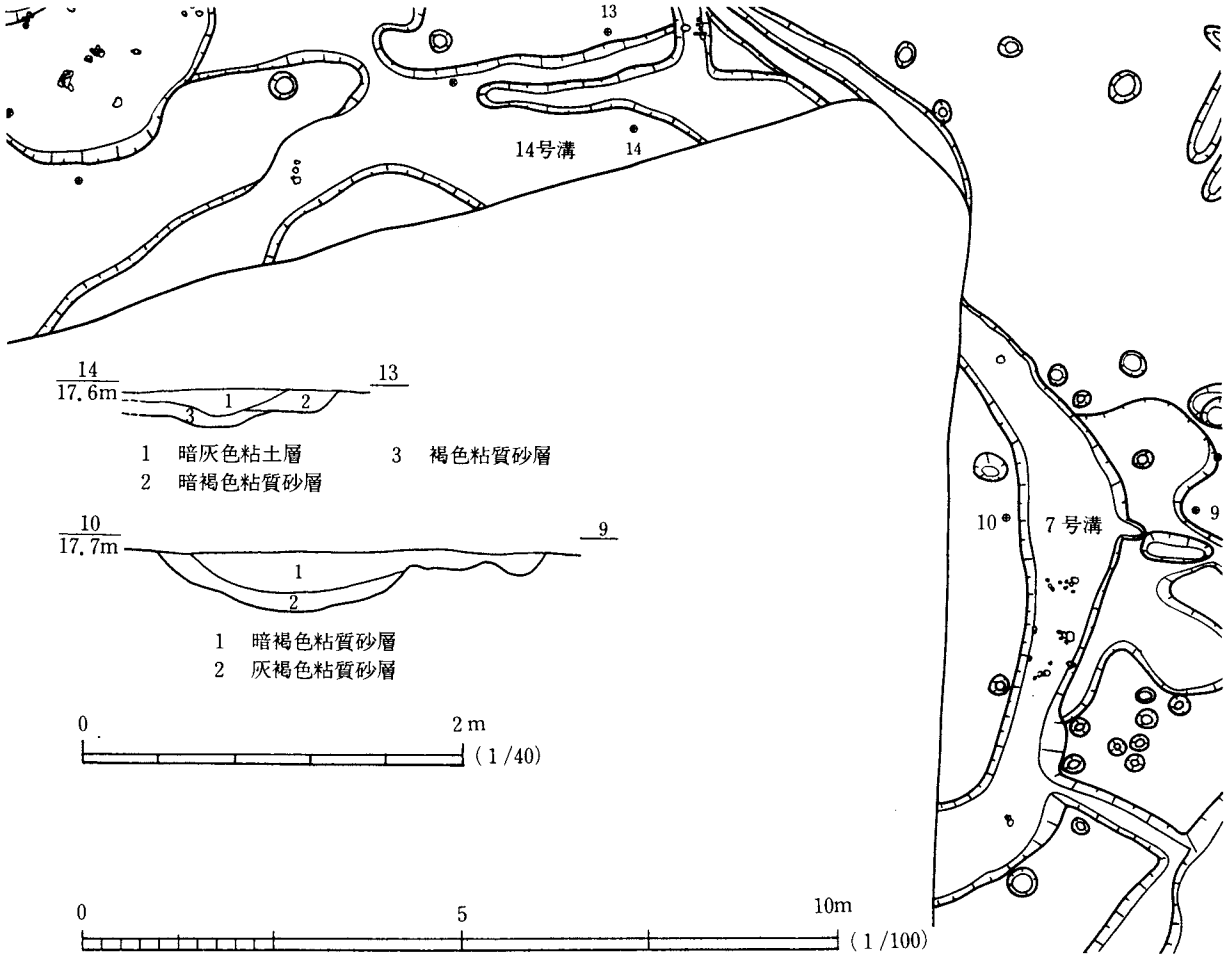
C－3区に位置する。9号溝は長さ7.3m、幅50cm～1.3m、深さ5～15cmの南北に完結する不定形の溝状遺構である。覆土第2層の暗褐色粘質砂層は3・6号溝の下層、7・14溝内の土層と共通する。また遺構中央には土器の集中が見られる。10号溝は深さ5cm程度の浅いくぼみ状の落





1　白黄色粗砂層　　4　白灰色細砂層
2　白灰色砂層　　5　白灰色粗砂層
3　暗褐色粘質砂層

第20図　3号溝平面（1/100）・土層断面（1/40）実測図



第21図　7・14号溝平面（1/100）・土層断面（1/40）実測図

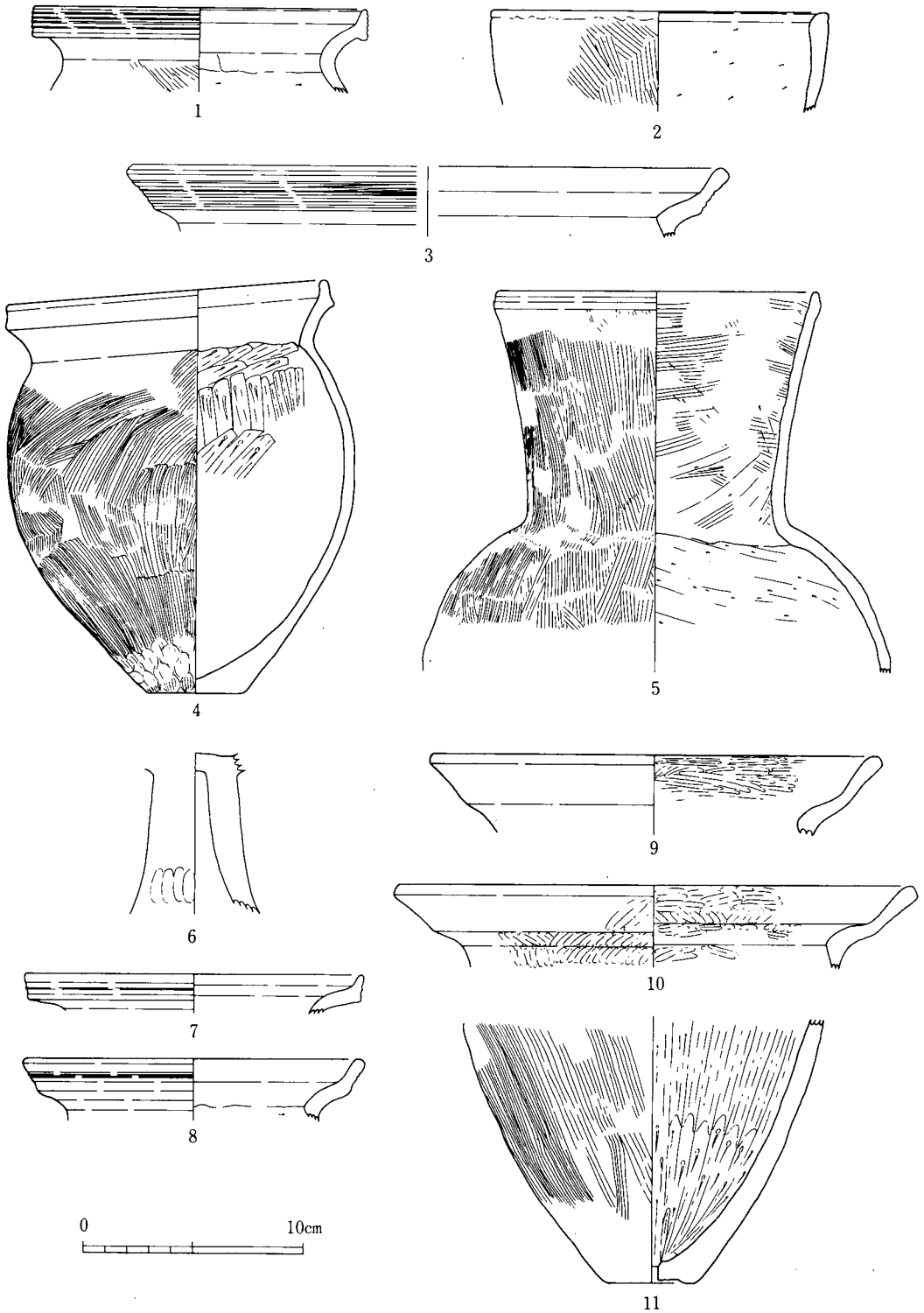
ち込みである。

1は口唇部を僅かに外側に折り曲げて肥厚させる。2は壺の口縁部か。口縁端を内湾させ、外面には丁寧なミガキを施す。

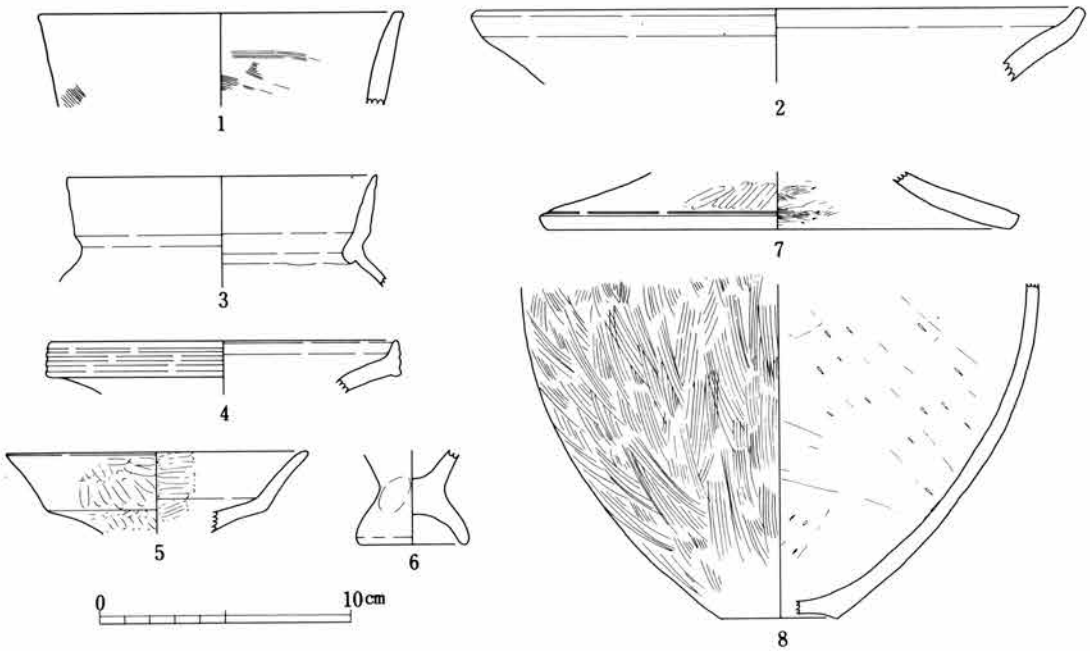
17・20号溝（第6～7図・第23図3～8・第26図12）

B－4・B・C・D－5区に位置する。17号溝は調査区を横断し、南東から北西方向に流れる幅約1m、深さ20～40cmの溝である。1号周溝建物を構成する21・22・23号溝が機能を失った後に掘り込まれている。覆土内には灰黄色粗砂層や淡黄褐色粗砂層が認められるため、3・6号溝上層との関連性も考えられる。20号溝は31号溝から溢れた水の流れが17号溝へ達したものであろうか。不定形の浅い落ち込みである。

3は頸部に接合痕を明瞭に残す。口唇部は先細りに仕上げられる。砂粒の含みは少ないが、海綿骨片・焼土塊が顕著に見られる。5は砂粒の少ない精製された胎土を用い、内外面にはミガキ調整が施される。6は指押さえ痕が残る雑な作りの脚台部である。7は脚端部に沈線状の圏線を巡らす。また割口には漆によると思われる補修痕が見られる。12の胎土中には1mm弱の短い海綿



第22図　1号溝（1～2）、2号溝（3）、3号溝（4～5）、6号溝（6）、7号溝（7～11）
出土遺物実測図（1/3）



第23図　9号溝（1）、10号溝（2）、17号溝（3～8）出土遺物実測図（1/3）

写真3　3号溝完掘状況（北より）

骨片が多く含まれる。

19・21・18・22・23号溝《1号周溝建物》(第24・25図)

B～D－3～5区に位置する。溝は数箇所で重複し、最大周溝径17m余りの建物跡を構成する。建物は周溝の切り合いから三時期程度が予想される。最初期は南側の一番内側を巡る19号溝に伴う建物である。19号溝は21号溝に切られその半分以下しか残ってはいないが、周溝径は14m程度と想定される。溝幅は50cm～1m、深さは10cm内外と浅く、一部は次代にも引き続き機能していた形跡がある。覆土は暗褐色系の粘質砂層である。

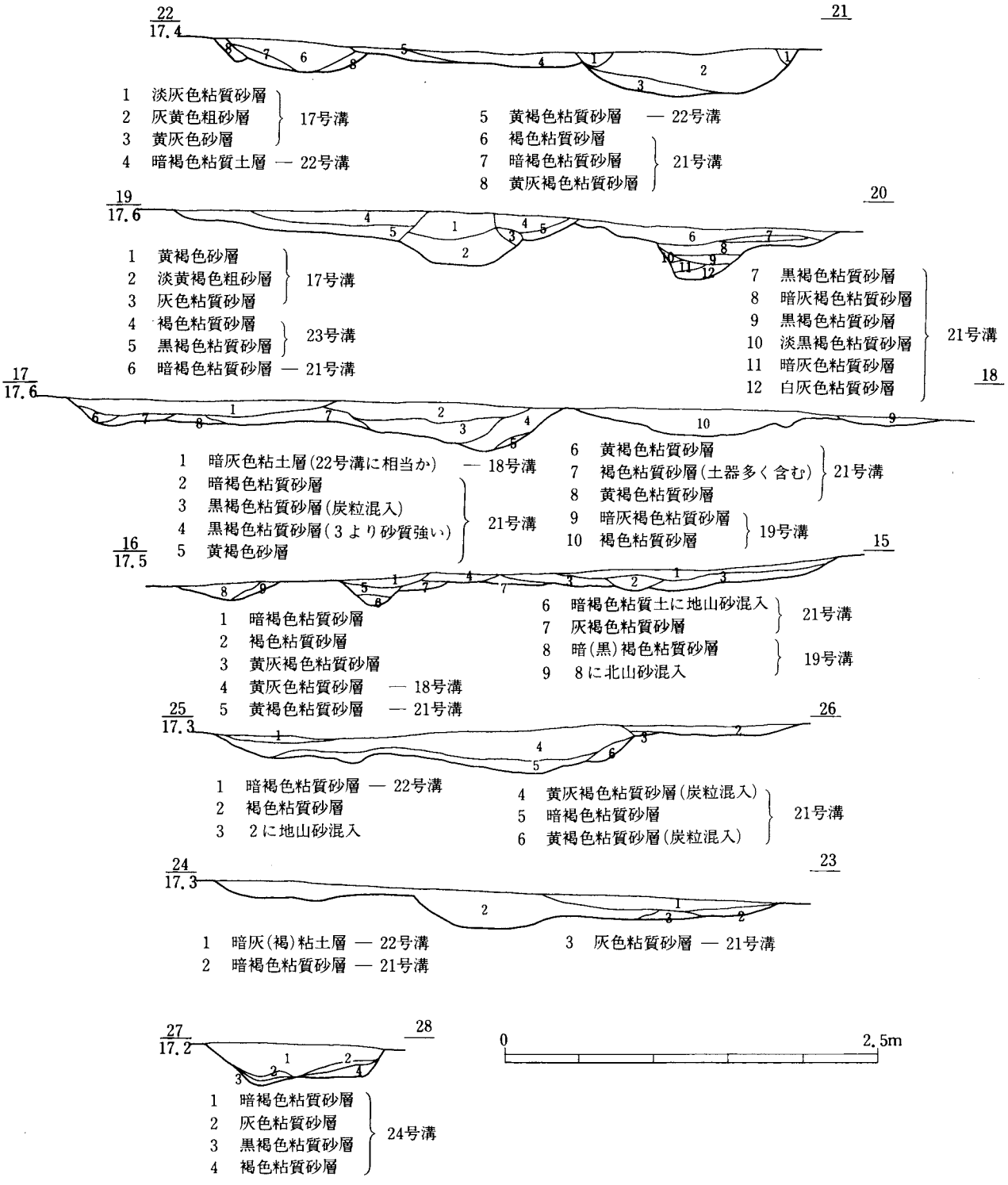
19号溝(第26図1～11)

1は頸部屈曲部に3cm間隔で二つの穴が見られる。穴は焼成前に外側から開けられている。2は直立する短い口縁帯を持つ。内面の口縁屈曲部には接合痕が観察される。4は頸部内面に明確な稜が見られず、丸みを持って体部へとつながる。6は口縁下帯部を付加して有段に仕上げる。7は図上では壺としたが、もう少し傾きが強く器台の脚部としたい。9は外面にハケ調整を施すが、脚端部周辺は粘土紐を付加したために調整が横ナデで消されている。10の外面は丁寧に磨かれ脚端部は明瞭に面取りされる。

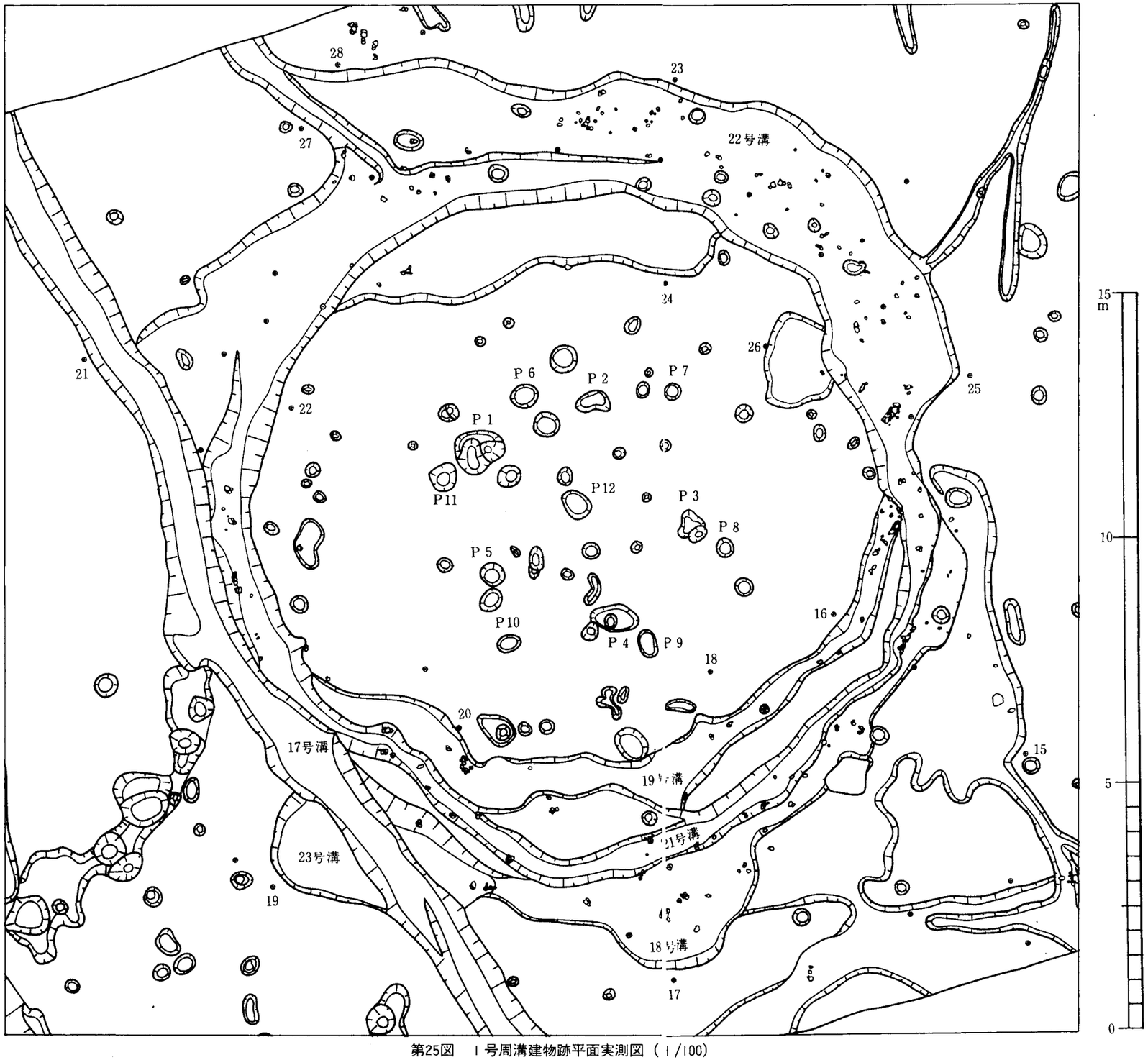
次に機能するのが円形に大きく巡る21号溝であり、周溝は拡大する。南西側の一部を17号溝に切られるが完全に寸断されてはいない。全体に内側は10～30cmと深く、外側は5～15cmと浅くなる。また溝幅は確認できる範囲では東側が最も狭く80cm、その他は2～3mと一定しない。当初は内側部分の深い範囲1m内外を21号溝としていたが、外側にも浅く広がることが確認されている。覆土は暗褐色粘質砂層を主体とし、遺物の残りは比較的良好である。

21号溝(第27・28図1～32)

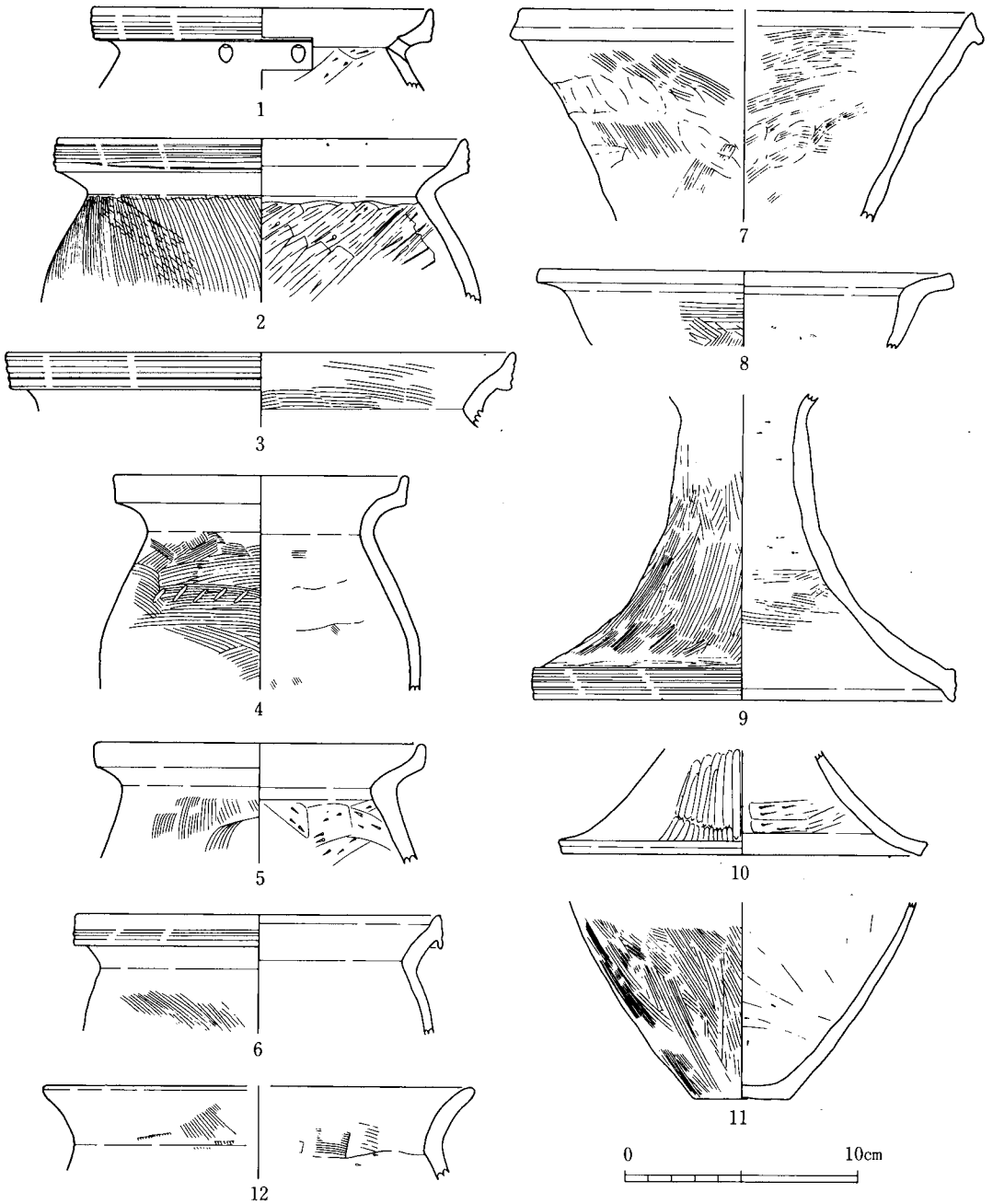
1は直立する口縁帯に明瞭な三本の擬凹線を巡らす。3～7は無文横ナデで有段の口縁帯を仕上げる。8～9はくの字状口縁を持ち、口縁端部を玉縁状にやや肥厚させる。11は緩い有段口縁となり、縁帯部外面には左下がり、頸部以下には右下がりのハケ調整が施される。また頸部中程には径7mm、深さ1mm程度の竹管状押圧文が一つ認められる。12はくの字状に屈曲する受け部を持つ器台か。内外面共に丁寧に磨かれ、内面には微かに赤彩痕が残る。13の鉢は器形全体に歪みを持ち、自立できるが傾く。口縁はつまみ出すように横ナデされ、底部はややせり上がる。14の口縁部は鍔状に大きく外反する。底部には穴が開けられ、器形は歪み安定しない。外面底部周辺はナデられているようで幾分すべすべする。15はやや外反する口縁に明瞭な面取りを施し、その上に粘土紐を付加して口縁部を強調させる。18は内外面共に磨かれ、口縁上端部はやや肥厚する。20の口唇部は赤彩、面取りされ下方向にやや肥厚する。21は屈曲する杯部を持ち口縁端部は外側に鍔状に引き出す。内外面共に磨かれ、内面屈曲部上方には赤彩が施される。22は21と同様の器形であるが、外面は漆黒に焼き上がり内面に赤彩痕は見られない。23の脚端部はやや外反し、24には明瞭な面取りが認められる。25～27は脚端部上方に粘土紐を付加し有段状とする。28は脚端部上に粘土帯を付加して方形に整え、その端部を上方につまみあげて先細りに仕上げる。透かし穴は四つである。29は屈曲した脚裾部に3.5cm間隔で二つの透かし穴が残る。胎土は他に較べ白



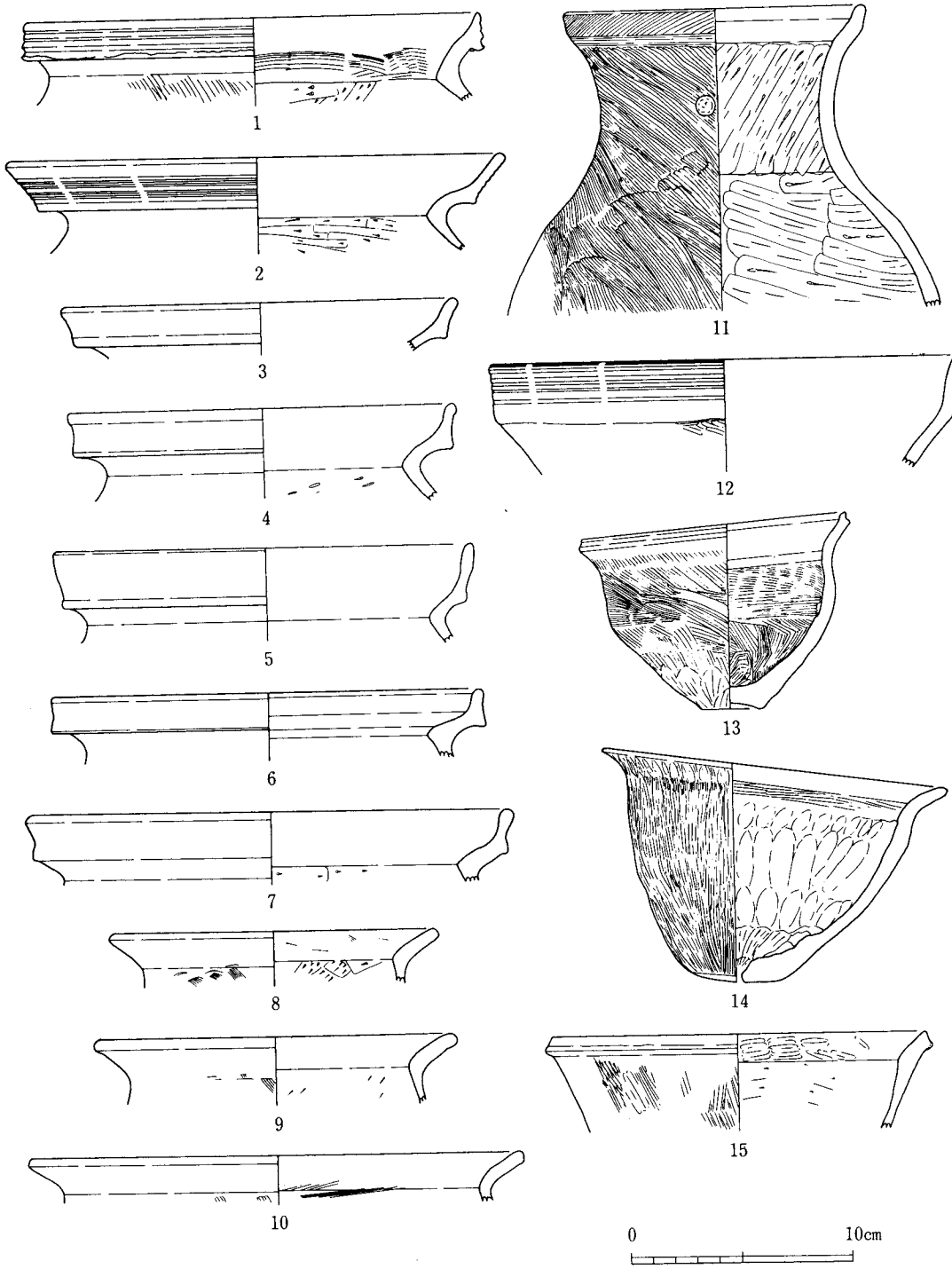
第24図　Ⅰ号周溝建物跡関連土層断面実測図（1/40）



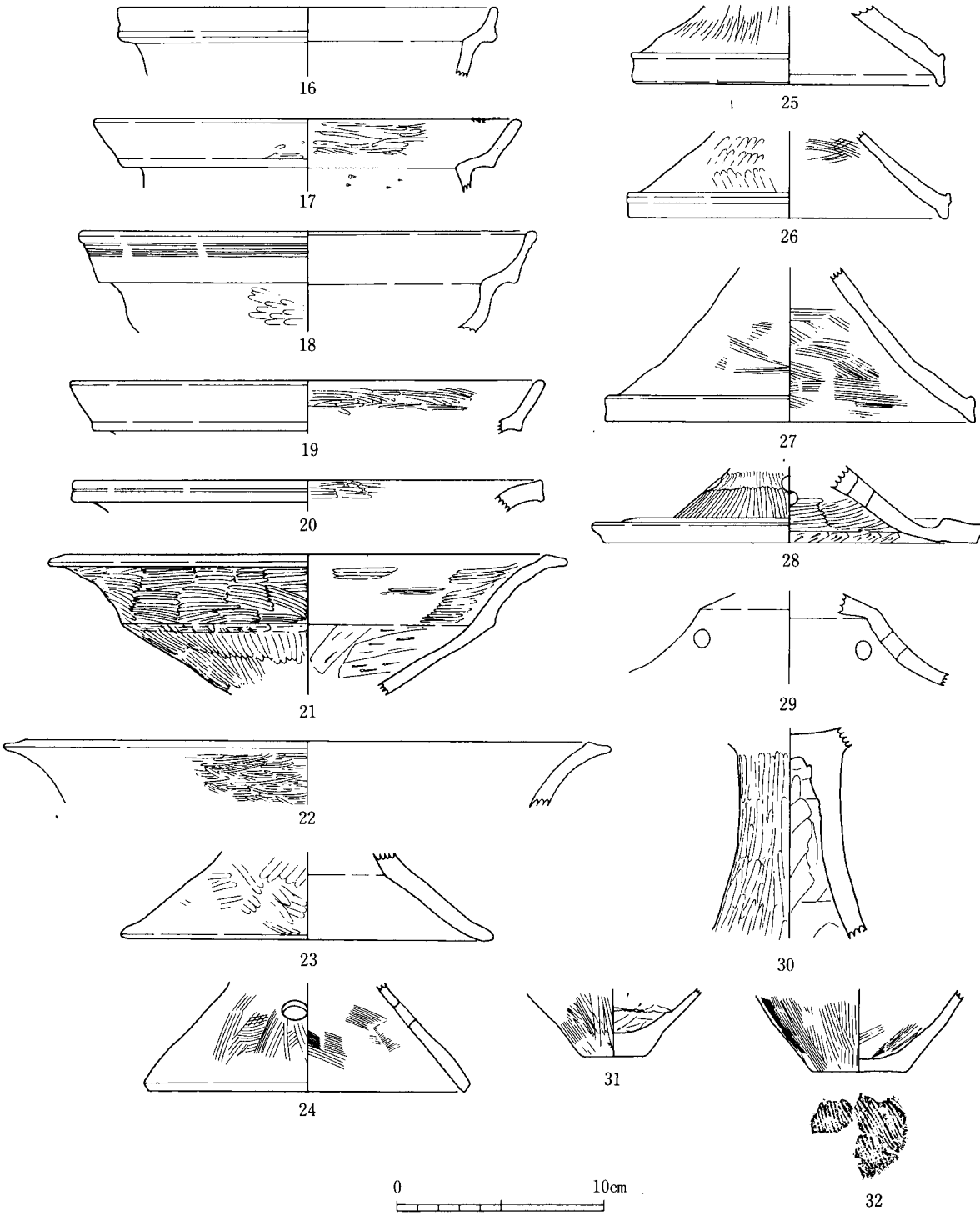
第25図　Ⅰ号周溝建物跡平面実測図（1/100）



第26図　19号溝（1～11）、20号溝（12）出土遺物実測図（1/3）

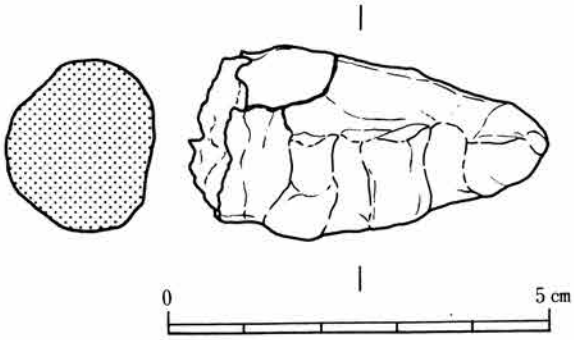


第27図　21号溝出土遺物実測図（1/3）



第28図　21号溝（17～32）、22号溝（16）出土遺物実測図（1／3）

っぽい。32は底部周辺および外底部にハケ調整が明瞭に残る製品である。なお上記遺物の多くは当初21号溝として認識していた溝内側部分からの出土であるが、16は22号溝の粘質土中から出ている。石製品では第43図２～３の砥石が確認されている。またそれ以外ではＣ－６区で単体で取り上げられた炭化物の塊が注目される（第29図・写真４）。全形は不明であるが先の丸く尖った円錐状の塊で現長4.7cm、中央の太い部分で径2.5cm、上端の欠損部で径２cmほどある。中身は１～1.5cm程の種子状の粒の集合体であり、表面に残る等間隔のくぼみは指で握った痕跡のように見受けられる。この炭化物は松谷暁子氏により「アブラナ属の種子の塊」との分析結果を得ているが、利用方法に関しては食用ではなく搾油用の種子としての可能性を指摘されている。



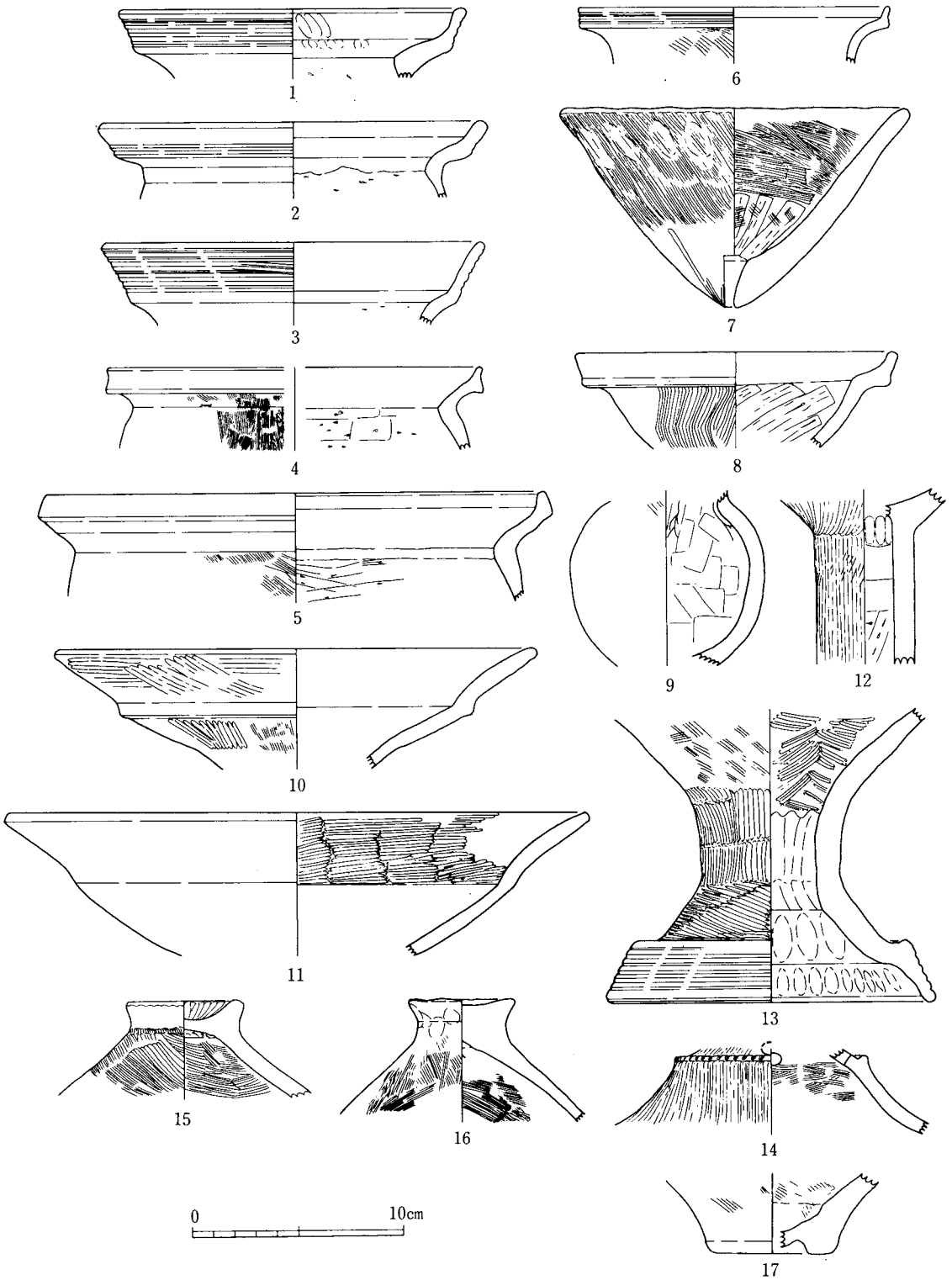
第29図　種子粒炭化物実測図（１/１）

写真４　種子粒炭化物出土状況

そして周溝の最終段階は18・22・23号溝である。21号溝外側の浅い部分を再度利用した幅１～1.5m、深さ10cm前後の溝で、周溝北側では22号溝、南側では18号溝としたが同一溝と思われる。18号溝の西側に接続する23号溝もやや深めではあるが連続する溝としておきたい。覆土は暗褐（灰）色粘（質）土層が主体となる。西側は17号溝に切られて定かではないが、その伸びから判断すると西側とその対の東側の計二箇所で溝が切れていた可能性もある。なお遺物の取り上げに際しては21号溝外側からのものを18・22号溝として扱ったため、その下層に伸びる21号溝の製品も数多く混入しているものと思われる。

18号溝（第30図１～17）

１～３は擬凹線の巡る有段口縁を持つ甕。３の口唇部は面取りされ、断面形は方形となる。４は口縁下帯に粘土紐を付加して有段状とする。外面の細かいハケ調整は頸部上方から施される。５は内傾する短い口縁帯を持つ。６は器壁が薄く華奢で、弱い擬凹線が見られる。７は厚く雑な作りで、口縁端に歪みを持つ。底部の穴は器面に沿うかのように斜めに開けられる。９は小壺の胴部か。器形は歪み、上から見ると楕円形である。胎土中には海綿骨片が多量に含まれる。10は受け部屈曲部に粘土紐を付加して有段状とする。外面と口縁部内面にはミガキ調整が施される。11は受け部を緩く屈曲させ有段に仕上げる。13は器壁は厚く重い。脚部には粘土紐を付加して擬凹線を巡らせる。14は砂粒の少ない精製された胎土で、外面はきれいに磨かれる。また有段部には等間隔に刻みが入る。15～16は蓋。16の方が薄く調整も細かく丁寧である。17の底部には輪状に大きくえぐりが入る。10は18号溝の脇から出土している。石製品では第43図１の砥石が確認されている。

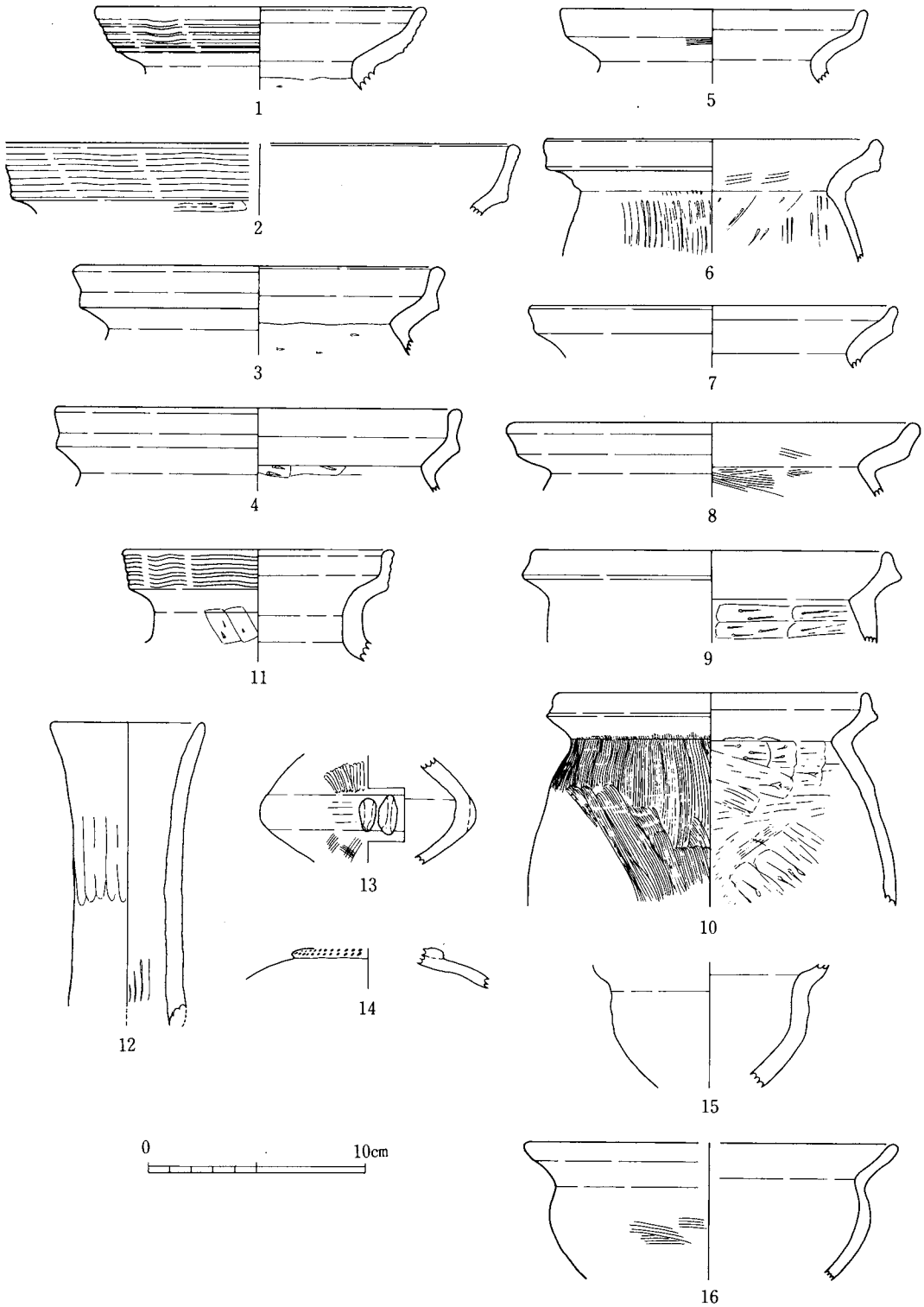


第30図　18号溝出土遺物実測図（1／3）

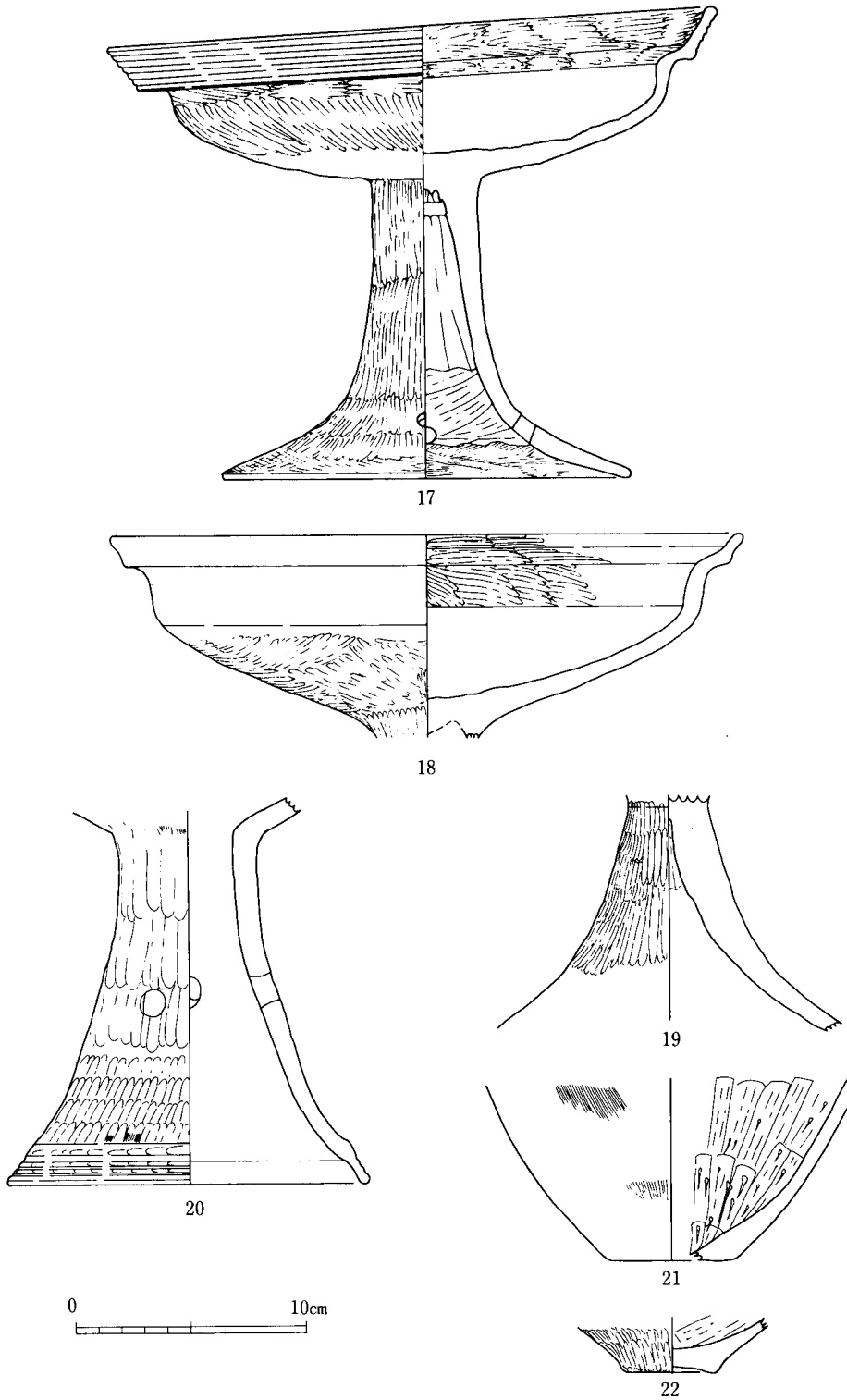
22号溝（第31・32図１～22）

２は鉢の口縁部片か。ミガキの入った縁帯部外面には赤彩痕が残る。５は有段口縁を持つ小形の壺か。内外面共に磨かれ、赤彩が施される。６～８は外傾気味、９～10は内傾する有段口縁を持つ。11は頸部のやや伸びた有段口縁の壺。短い縁帯部に四本の擬凹線が巡る。12の口縁部は緩やかに外反し、端部付近で再び弱く内湾する。外面にはミガキ調整と赤彩痕が僅かに残る。13は壺の胴部で、そろばん型の中央部には1.５㎝幅の平坦面を巡らし装飾の浮文を付加する。また部分的に赤彩痕が残る。14は壺の肩部付近。頸と肩の結合部を取り巻くように粘土紐を付加して二列の刺突文を施す。16の口縁は端部で緩やかに内湾する。胴部外面はハケ調整、内面にはミガキ調整が見られ、頸部以上には赤彩痕が残る。17はほぼ完器に復元される。六本の擬凹線を巡らせた有段口縁の杯部と偏平のラッパ状に広がる脚部を持つ。透かし穴は四つで、杯部外面に赤彩痕が残る。また杯部内底面の痛みははげしい。18は短い無文の有段口縁を持つ。杯部径は17より一回り大きい。20の脚端部は緩く屈曲し赤彩と擬凹線が施され、接地面は面取りされる。透かし穴は四つであるが、高さは一定せず不揃いである。器面には無数の海綿骨片が見られる。５・12・17は21号溝、２・７・９・13・14・20・22は22号溝の覆土である粘質土内からの出土が確認されているものである。

写真５　21・22号溝遺物出土状況（北より）



第31図　21号溝（5、12）、22号溝出土遺物実測図（1/3）



第32図　21号溝（17）、22号溝出土遺物実測図（1/3）

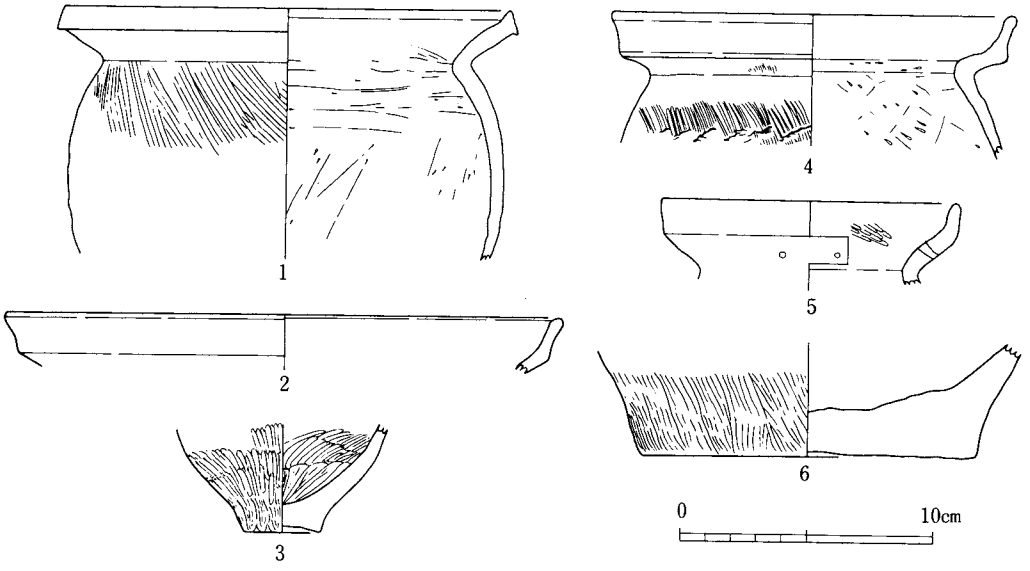
23号溝（第33図１～３）

１は口縁部を屈曲させ、端部は上下に肥厚する。３は壺の底部か。砂粒の含みは少なく、器面は丁寧に磨かれる。

床面付近（第33図４～６）

４は口縁部下端に粘土紐を付加する典型的な有段口縁の甕である。肩部には列点文が巡る。５は内外面に赤彩痕が残り、頸部には2.3cm間隔で二つの穴が開けられる。21号溝で同一個体が確認されている。４～５共に床面縁の浅いくぼみから出土している。

なお周溝の中心部に位置する建物を構成する主柱穴は多角形と思われ、ピット１～５（深さは順に23・29・19・23・35cm）とそれより一回り大きいピット６～11（深さは順に29・23・21・22・33・25cm）に大別が可能である。前者は切り合いが認められるため存続期間がある程度長いと想定し19・21号溝に、そして後者は最終段階の18・22・23号溝に伴う建物跡であろうか。また建物の中心部には深さ19cmのくぼみを持つ炉跡（ピット12）が残る。

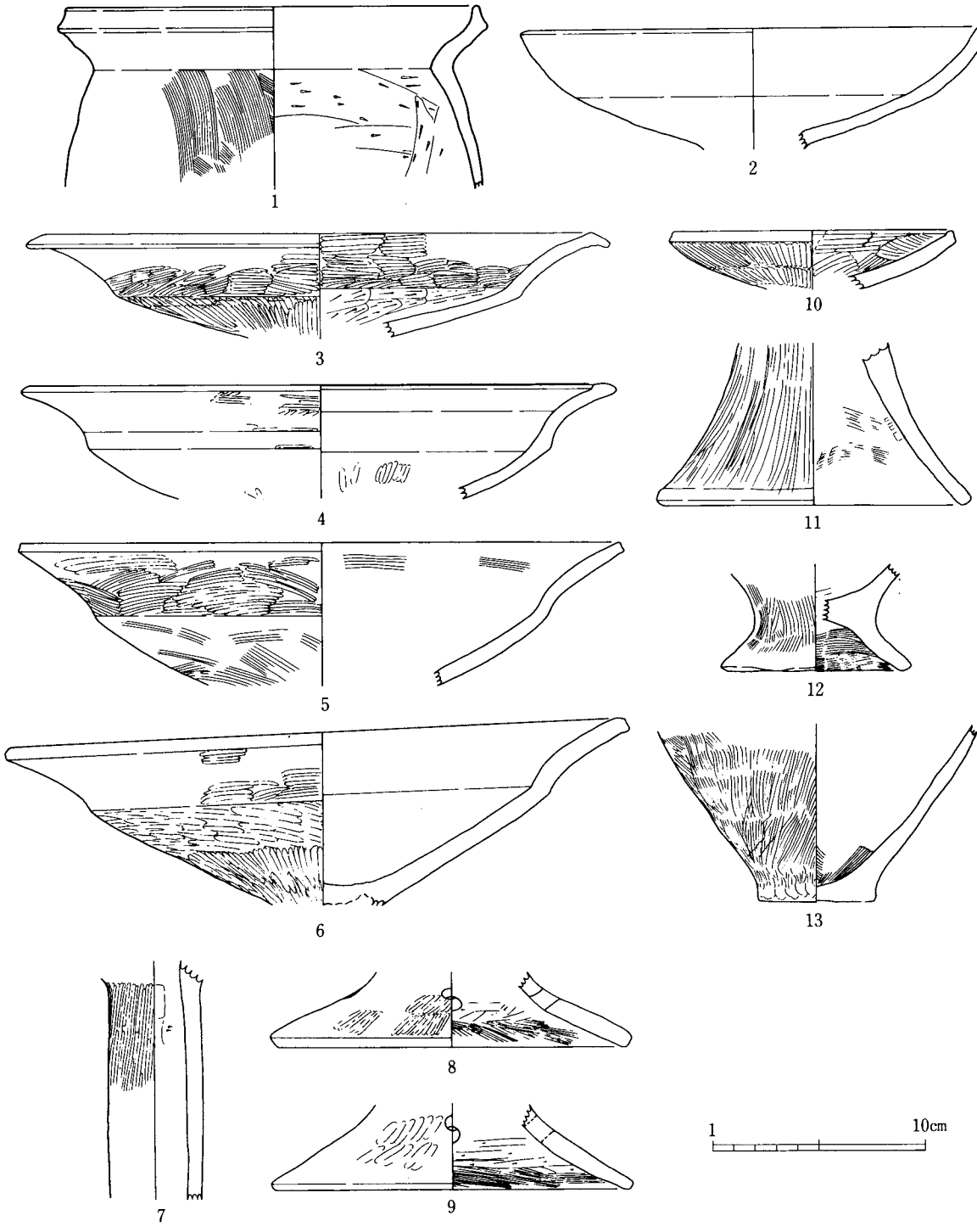


第33図　23号溝（１～３）、床面（４～６）出土遺物実測図（１/３）

溝間接合（第34図１～13）

溝間接合とは１号周溝建物に伴う各溝内（19・21・18・22・23号溝）でそれぞれ単独に取り上げられた遺物が接合したものである。

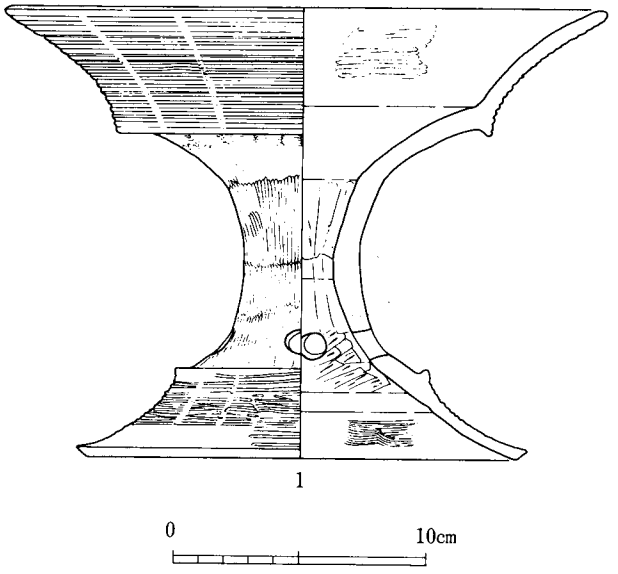
２の杯部は屈曲を持たず緩やかに内湾し、端部は面取り気味に丸くおさめる。４は屈曲する杯部を持ち、口縁端部上方に粘土紐を付加して玉縁状に肥厚させる。内面の所々には煤が明瞭に付着する。５～６の杯部は屈曲し、口縁端部には面取りが施される。６の外面には煤が明瞭に付着する。８～９は脚端部に弱い面取りを持つ。同一個体の可能性あり。10の受け部は緩やかに内湾



第34図　溝間接合遺物実測図（1/3）

し、端部はつまみ上げるようにして面取りを施す。11は立ち上がりの急な脚部。外面には縦、内面には横方向のハケ調整が入る。12は作りが雑で指痕を残し、器形も歪む。おのおのの出土状況から判断して、4・6・10は19号溝、1・2・3・5・8・9・11・12は21号溝、7は22号溝に伴う可能性がある。

なお第35図1は21号溝と1号掘立柱建物の南脇に位置するピット34から出土した破片が接合したものである。受け部、脚部共に有段部で外反する器台で、幅広の縁帯部には擬凹線が細かく巡る。また四つの透かし穴は棒状部下方に開けられる。



第35図　21号溝、ピット34接合遺物実測図（1/3）

溝複合（第36図1～18）

溝複合とは溝の特定はできないが、1号周溝建物に伴う数種の溝内からの遺物を一括して取り上げたものである。

1～9は18・19号溝を主体に、また10～18は21・22号溝として取り上げられている。3は有段鉢の口縁か。縁帯部外面には粘土紐を断面三角形状に付加する。5の口縁は屈曲部より緩やかに外反し、内外面には丁寧なミガキ調整が施される。6は焼き上がりが白く、砂粒の含みも少ない。割れ口には漆による補修痕が認められる。14は口縁端肥厚部内面に赤彩痕が残る。15は脚台部の内面付け部に接合痕が見られ、その上からハケ調整が施される。16は内面に丁寧なミガキ調整が残る。台付鉢の脚台部か。

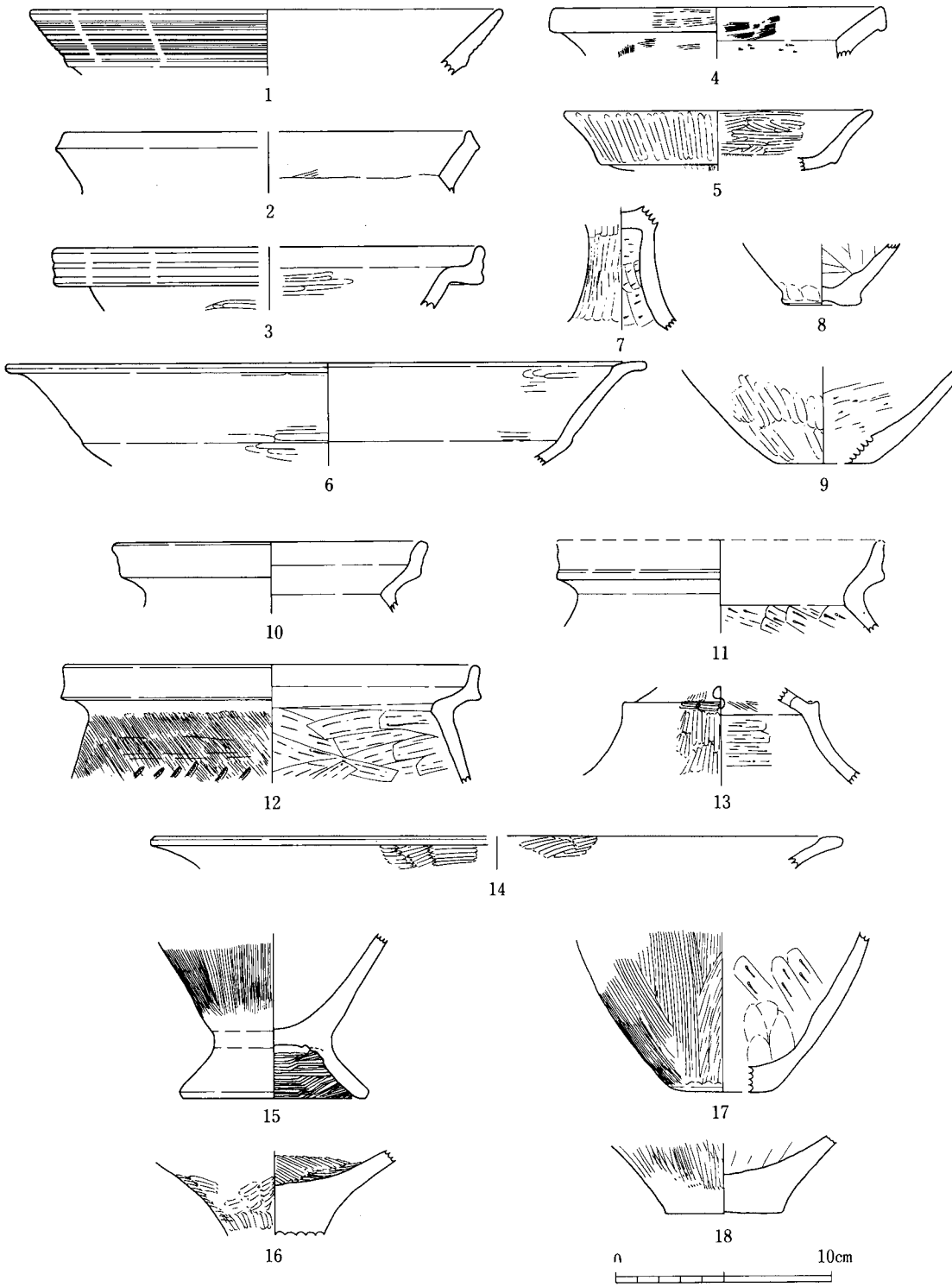
28・29号溝（第3～4図・第38図1～4）

A・B－6区に位置する。いずれも上層面の遺構である。6区は1～5区に比べ弥生時代の包含層が20cm程下がっており、31号溝が埋まった後に新しい包含層を持つ生活面が存在していたものと思われる。28号溝は幅20cm、南側でL字状に折れて26号溝へとつながる。29号溝は東西4m30cmで完結する不定形の溝状遺構で32号溝と33号溝に挟まれる。深さは10cm弱で西側の一角に土器が集中する。

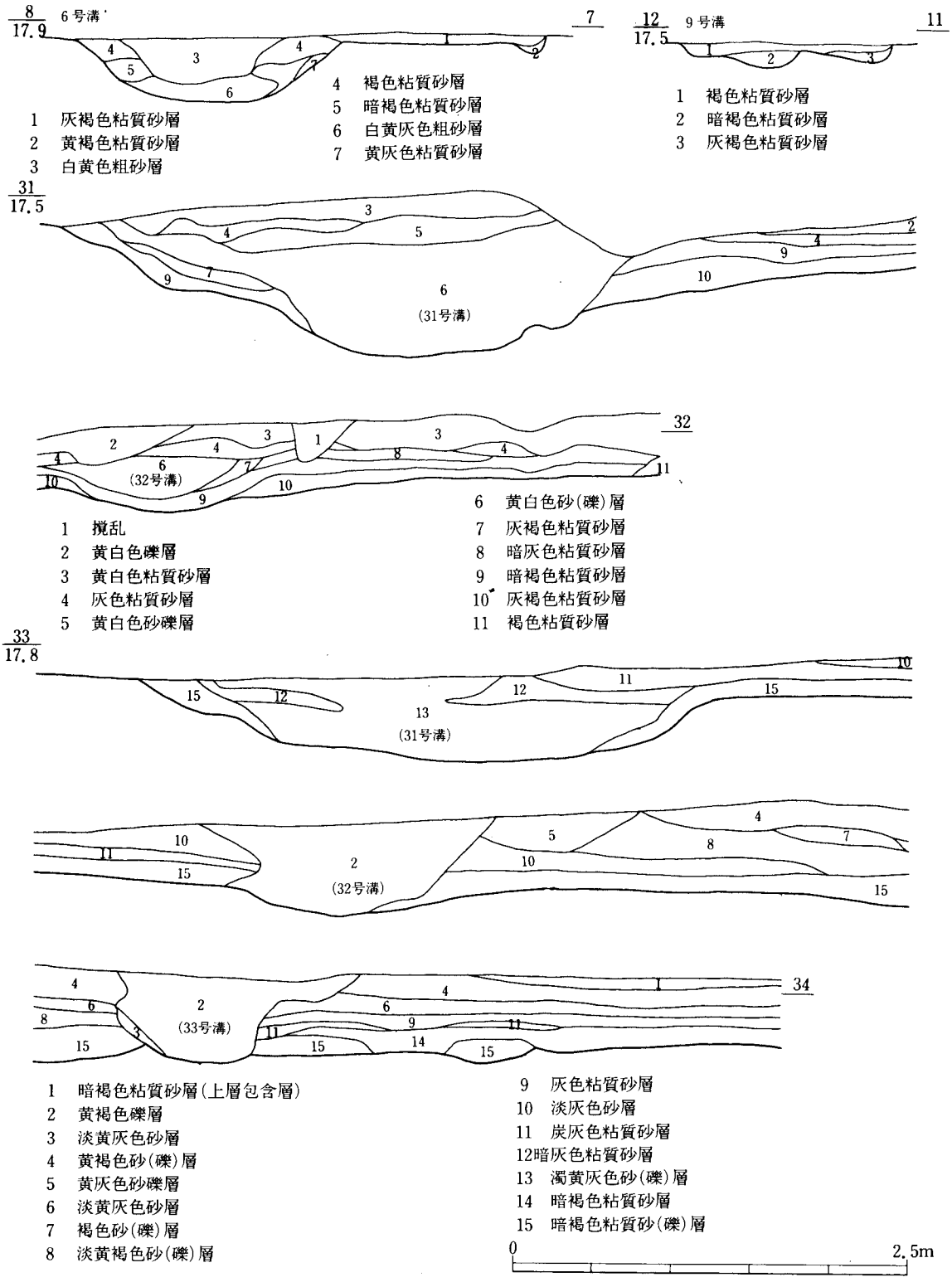
1の口縁部は頸部で大きく外反し、端部は横ナデによって面取り肥厚させる。胎土中には多量の海綿骨肩が見られる。3は外面にミガキ調整を残す壺の底部。やはり中程度の海綿骨片が認められる。

31・32号溝（第2～3図・第38図5～13）

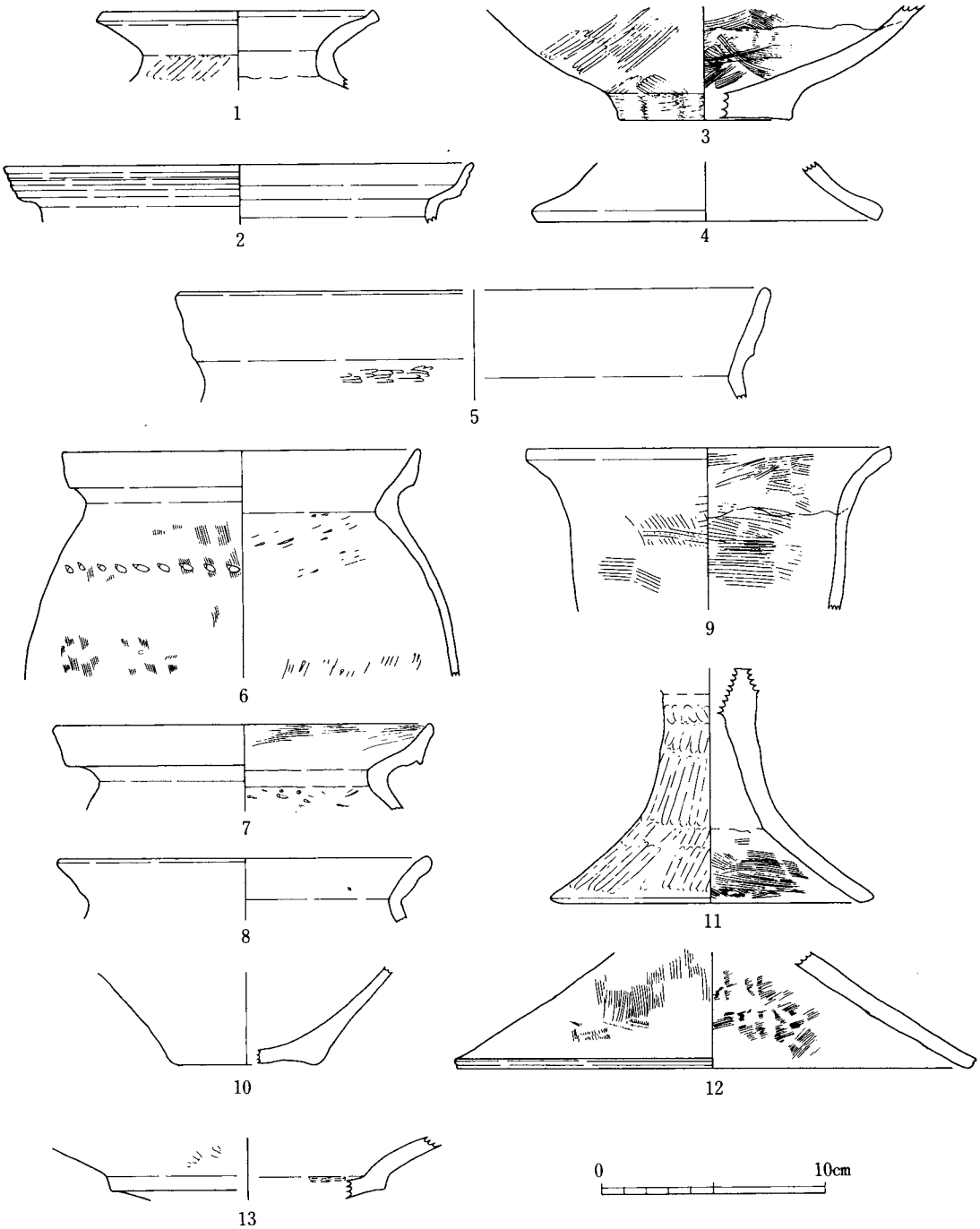
5・6区に位置する。31号溝は調査区を横断する幅3～4mの大溝で南東から北西に流れる。深さは40cm～1m程で、北西部では一部舟形状に深くなる箇所もある。覆土は黄色系の砂礫層を



第36図　溝複合遺物実測図（1/3）



第37図　土層断面実測図（1/40）



第38図　28号溝（1）、29号溝（2～4）、31号溝（5～12）、32号溝（13）出土遺物実測図（1/3）

主体とする。土層観察では弥生時代の包含層が31号溝の下に潜ることが確認されているため、弥生時代の集落とも併存した自然流路と考えている。32号溝は31号溝に平行する溝で幅90cm～2m、最終遺構面からの深さは15～20cmである。覆土はやはり黄色系の砂礫層を主体とする。31号溝との関連で見ると32号溝に切られる11層が31号溝の上方に堆積しているため、32号溝の機能時には31号溝はほとんど埋まっていたものと思われる。

5は口縁部下方に少量の粘土紐を付加して有段風に仕上げる。内外面にはミガキ調整が入る。6は口縁部内面に段を持たない。肩部には稲籾状の列点文が巡る。7の口縁部下端は、若干下方に引き出される。胎土中には大小様々な海綿骨片が多量に含まれる。9は胴部が直立気味になる鉢か。頸部内面には接合痕が残る。作りは雑である。11の脚部は段を持たずラッパ状に広がる。透かし穴は確認できない。

溝状落ち込み遺構（第15図・第39図1～11）

B・C－2区に位置する。調査区の外に伸びるため平面形は不明。確認できる長さは4m程であるが、深さは数cmと浅い。1・2区の遺構面が地表に近く上部が削平されているのも原因の一つと思われる。全体に土器量が多くまとまっているため、北側に位置する1号土坑とあわせ周溝状の遺構になる可能性もある。

1は厚手でしっかりとした口縁部に擬凹線が巡り、肩部には左下がりの列点文が並ぶ。2～4は無文の有段口縁、5はやや内傾する短めの口縁帯を持つ。6は口縁部内面にミガキ調整が見られる。7は口縁部で緩く内湾し、外面には粗いハケが入る。8は太めのずん胴に近い脚部から裾部へとラッパ状に広がる。裾端部内面にはハケ調整が認められる。11の外面には縦・斜め方向に細かい列点文が並び、その上から沈線でジグザグ模様が描かれる。内面にはミガキ調整が入るため、浅めの製品の底部か。

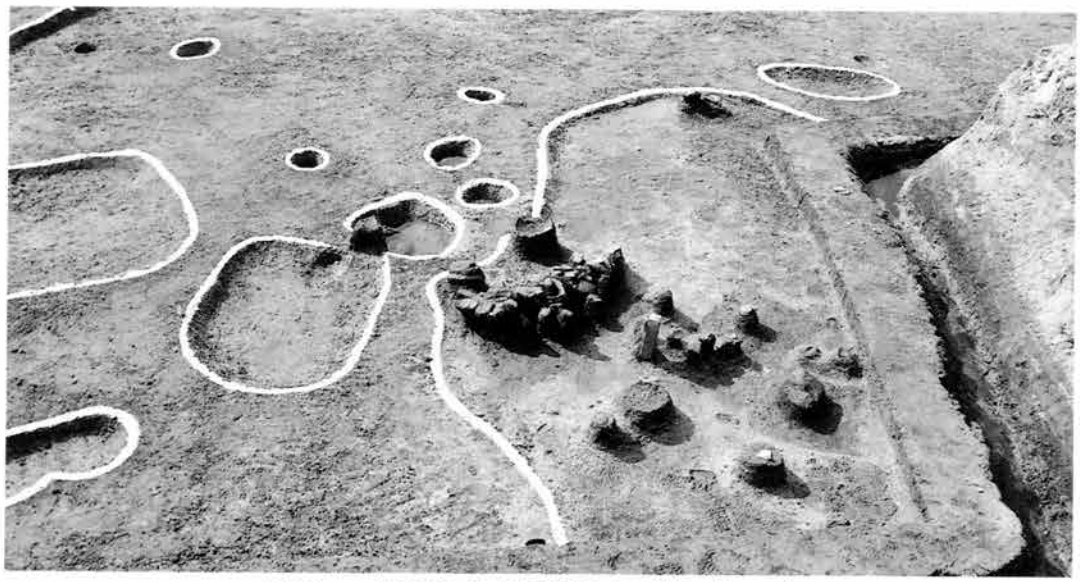
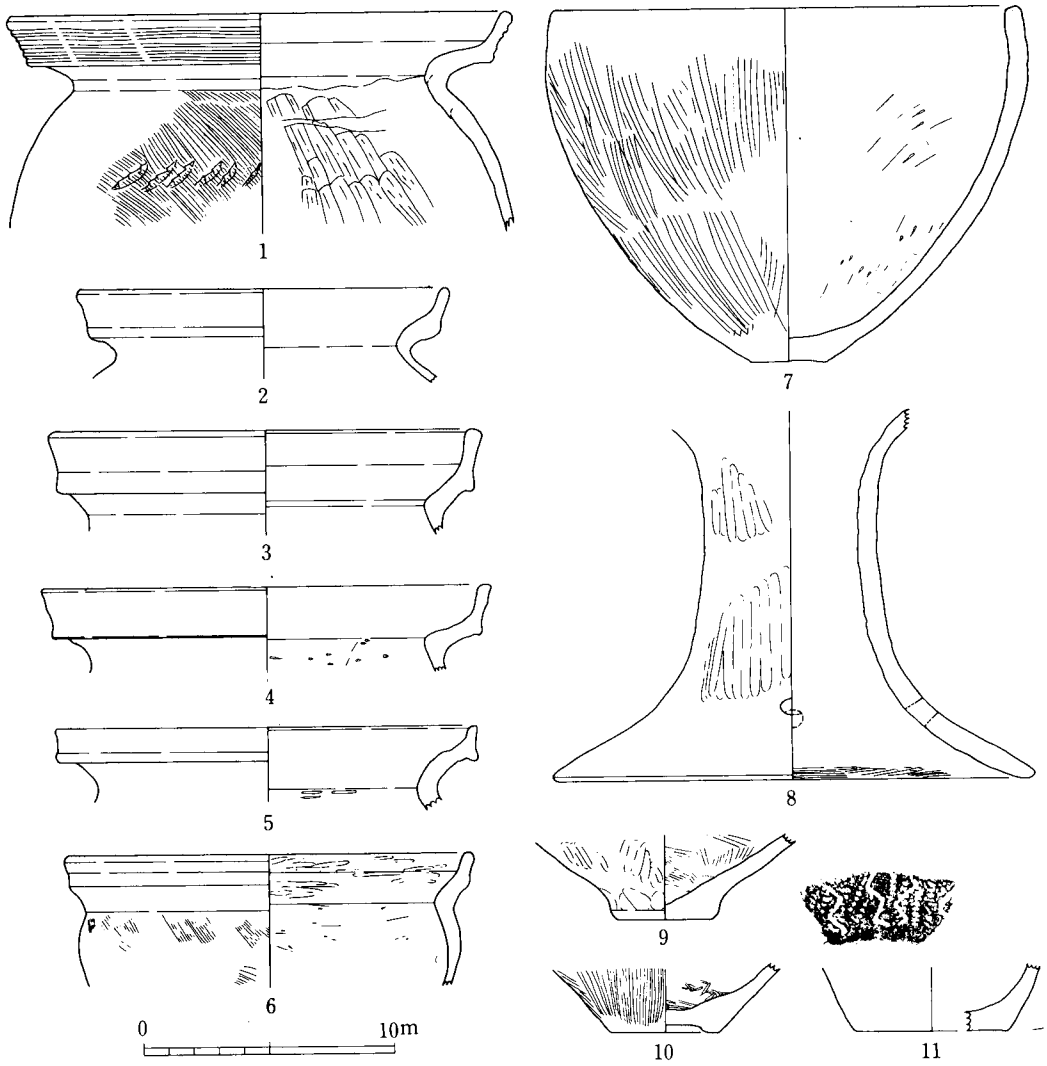


写真6　溝状落ち込み遺構遺物出土状況（南より）



第39図　溝状落ち込み遺構出土遺物実測図（1/3）

(3)　ピット

ピット6（第14図・第40図1）

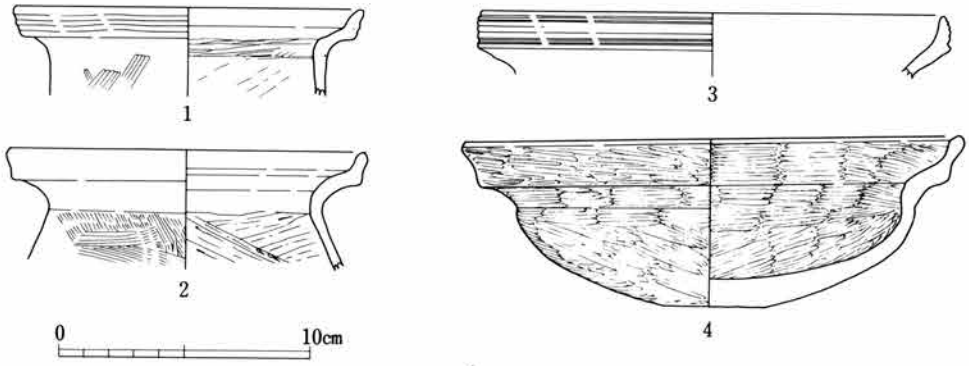
D－2区に位置する。径30cm、深さ18cm。

ピット30・25（第6～7図・第40図2～3）

C－4区に位置する。ピット30は1号周溝建物の床面縁上にあり径22cm、深さ11cm。2の甕が出土している。ピット25は1号周溝建物の19号溝に伴う主柱穴と思われ、深さ19cm。3は口縁部がやや内傾する甕か。

ピット7（第15図・第40図4）

C－2区に位置する。溝状落ち込み遺構脇のピットであり径45～55cm、深さ20cm。4は完形に復元できる無文の有段口縁を持つ鉢で、内外面にミガキ調整が施される。



第40図　ピット６（１）、ピット30（２）、ピット25（３）、ピット７（４）出土遺物実測図（１/３）

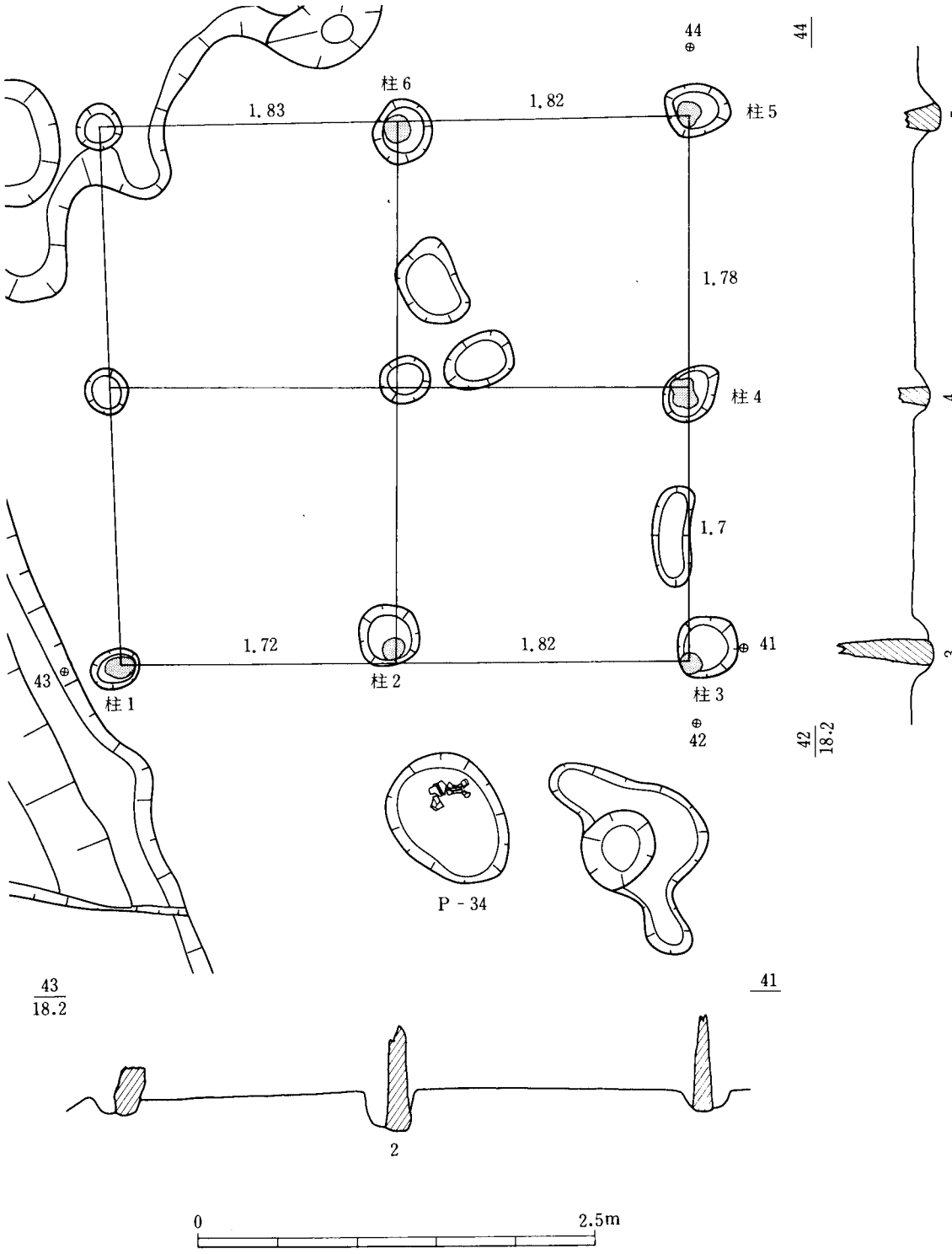
(4)　掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第41図・第42図１～３）

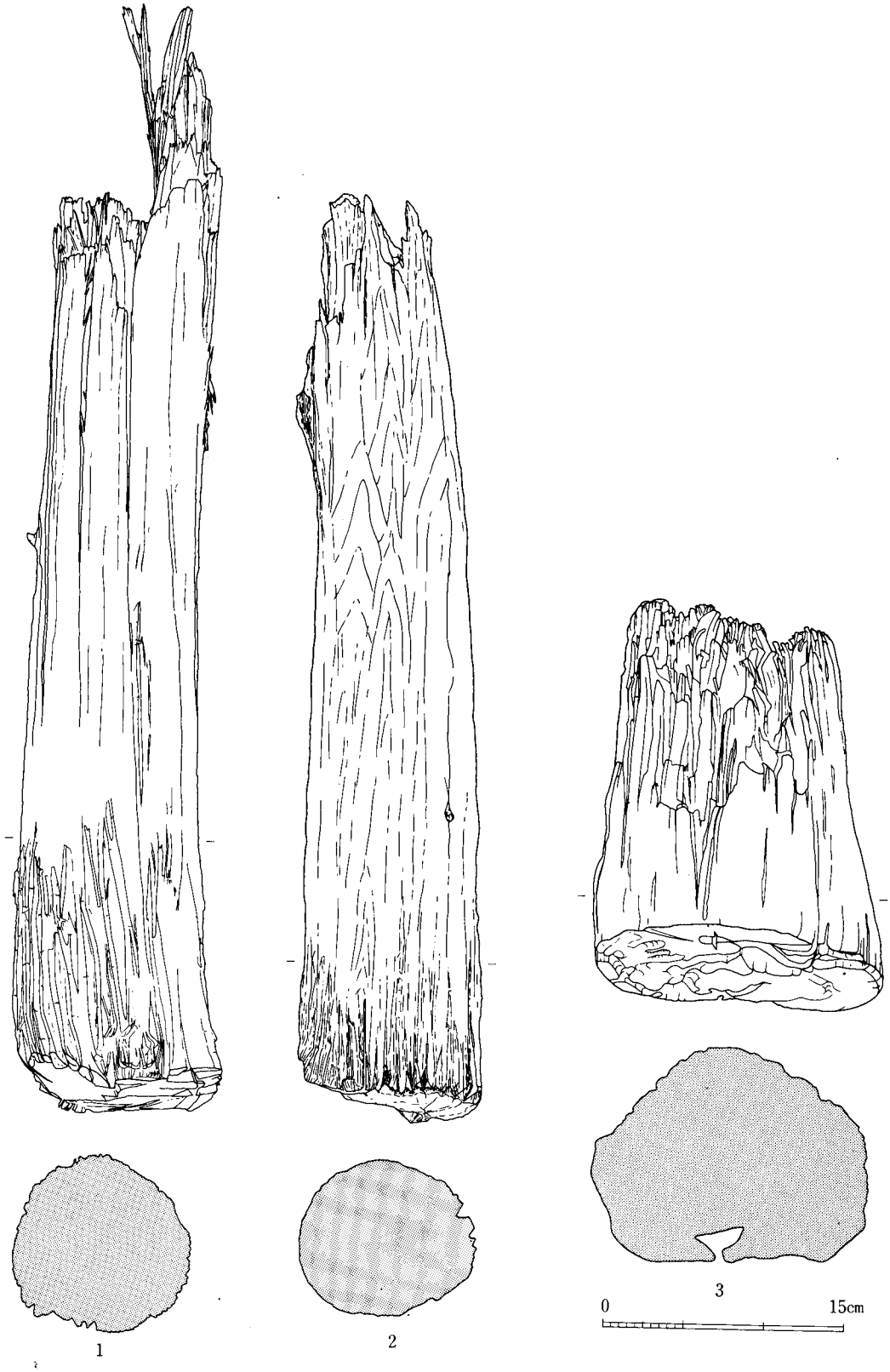
Ｂ－５区に位置する。２間×２間の総柱建物跡で主軸はN52°Ｅ。入口を東側に想定すれば桁行3.7m、梁行3.4mで柱間距離はほぼ1.7～1.8m代、平面積は約12.6m²となる。柱は表土除去の段階から認められ、６本が残る。柱掘方の径は25～40cm、確認できる深さは10～25cmである。土器を伴わないため時期の特定は難しいが、位置的な関係から１号周溝建物に付く倉庫的な建物の存在も考えられよう。

６本の柱の内、実測できたのは残りの良好な３本であった。１は柱２で現長69.7cm、最大径13.1cm。２は柱３で現長58.6cm、最大径11.5cm。３は柱５で現長25.7cm、最大径18.1cmである。共に心材で底面には多方向から削ったような工具痕が残る。

写真７　１号掘立柱建物跡検出状況（南より）



第41図　1号掘立柱建物跡実測図（1/40）

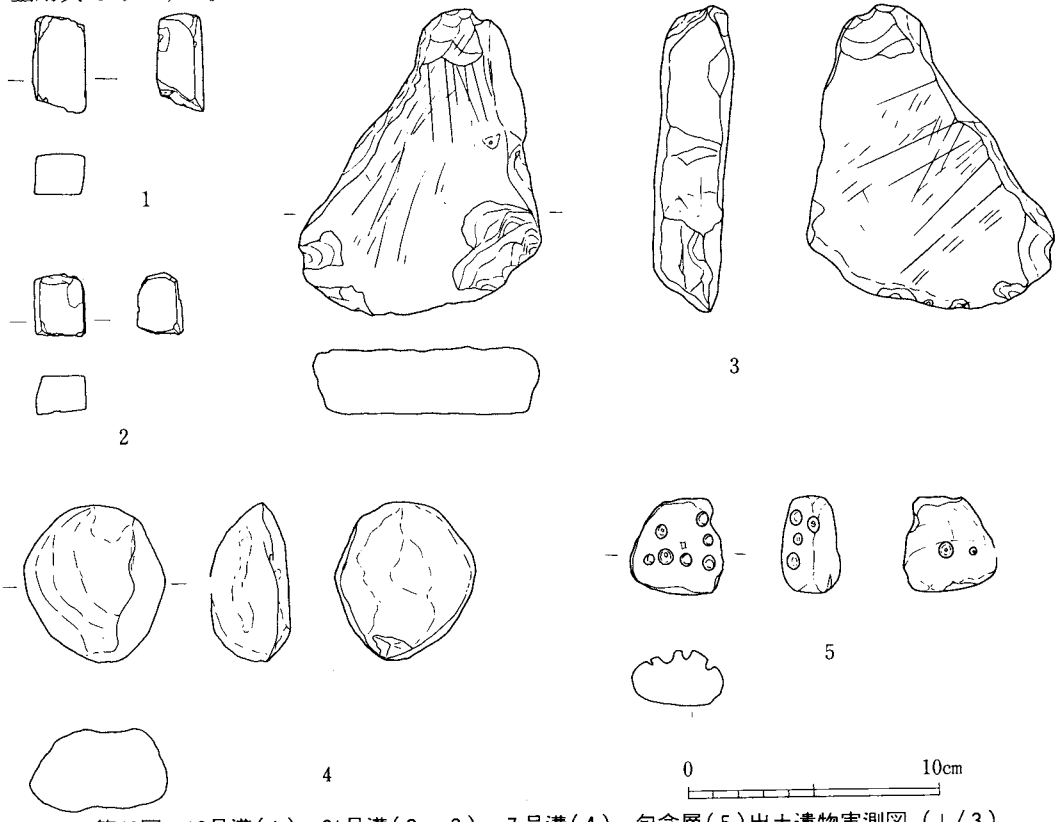


第42図　Ⅰ号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1／4）

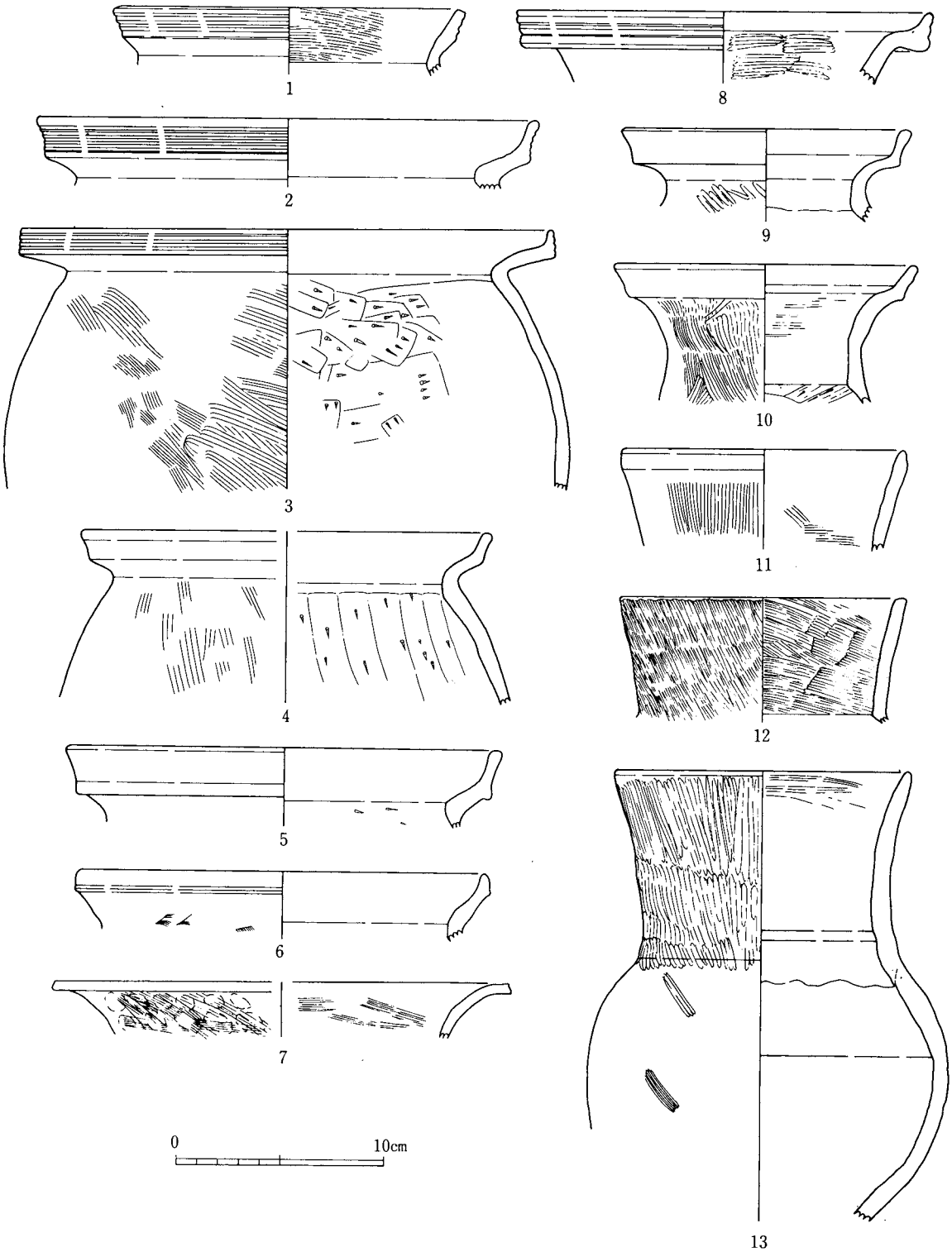
(5) 包含層（第44～45図１～25）

１は口縁部を有段風に仕上げ、内面には粗いハケ調整が入る。３はＢ－４区の19号溝と21号溝の間で取り上げられているため、21号溝に伴う１号周溝建物の床面に付く可能性がある。６は内湾させた口縁部外面に少量の粘土紐を付加して有段風に仕上げる。７は歪んだ口縁を持ち、外面にはハケ調整に重なる指押さえ痕が並ぶ。８の頸部外面には長さ1.2cmのヘラ描き状の痕跡が認められる。11は口縁部上方外面を横ナデして端部を先細りに仕上げる。13の頸部中央外面には長さ3.4cmの右下がりＵ字状のヘラ描きが刻まれる。14は薄手で偏平な胴部を持つ。外面は丁寧に磨かれ赤彩が施される。16は逆ハの字形に広がる器形で、柱状風の高台となる。17の口縁は大きく横に引き出され、口縁端部は凹凸になる。外面には縦方向の粗いハケ調整が見られる。18は内外面共に丁寧に磨かれ赤彩が施される。23の脚部は緩やかに屈曲し、端部は明瞭に面取りされる。

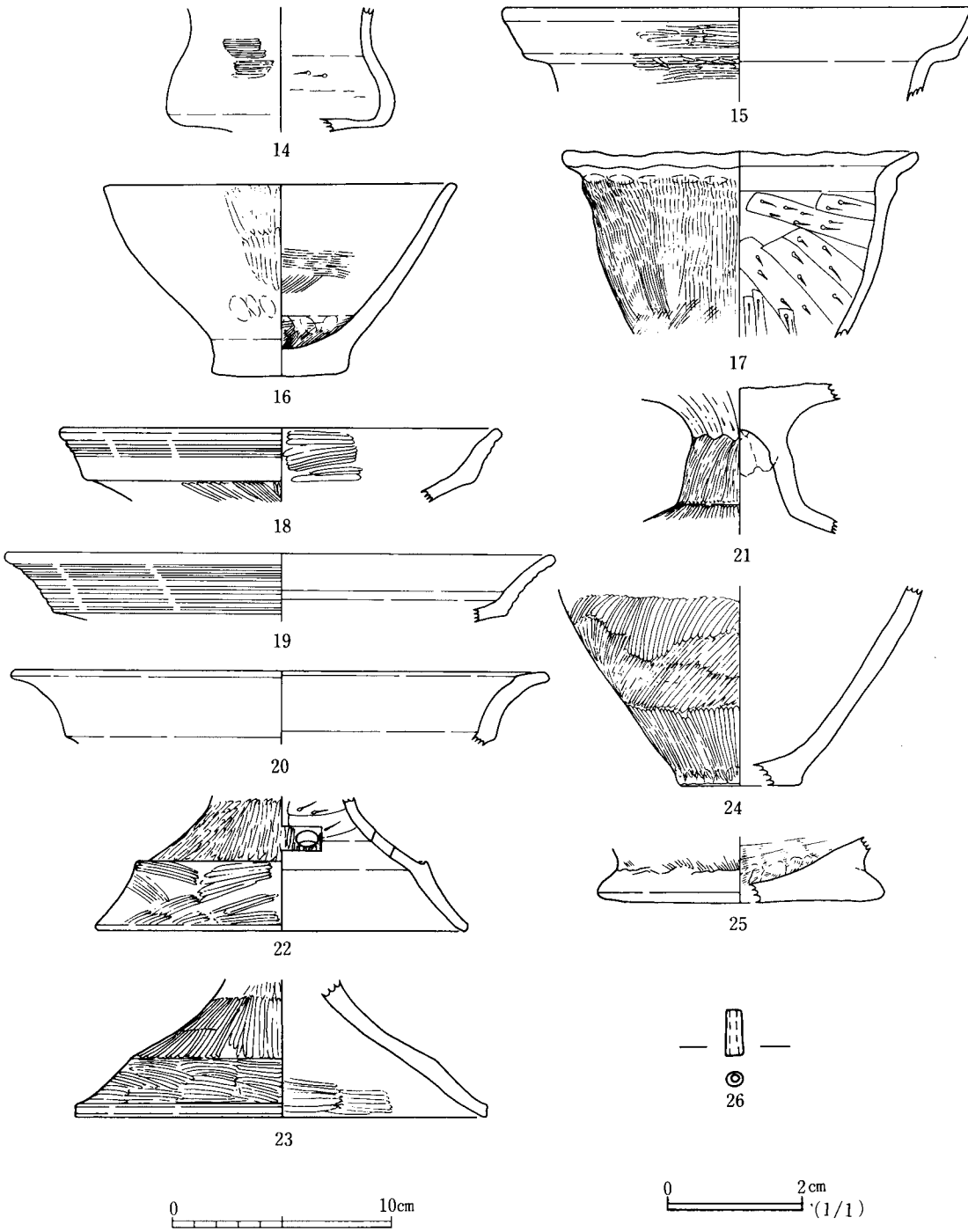
第45図26は表土除去中にＡ－４区より出土した完形の管玉である。やや色の薄い緑色凝灰岩で、長さ6.9mm、径2.8mm、穴径1.3mmと小ぶりである。結局調査中に確認できた管玉はこの１点のみであった。また第43図５は表面に幾つもの穴があいた軽石で、Ａ－３区から出土している。長さ3.9cm、幅3.7cm、厚さ2.3cmと丁度手の中に収まるほどの大きさである。穴径は0.3～0.6cm、深さは0.4～0.6cmで穴底の中央部には小突起が見られる。管玉製作の仕上げに用いられた整形調整用具であろうか。



第43図　18号溝（１）、21号溝（２～３）、７号溝（４）、包含層（５）出土遺物実測図（１/３）



第44図　包含層出土遺物実測図（1／3）



第45図　包含層出土遺物実測図（1/3）

遺物観察表（1）

図版番号	出土地点 グリッド	出土地点 遺構他	器種等	法量（cm）	海綿	雲母	備考
19/1	C 1・2	1号土坑 溝状落ち込み	甕	口径22.4			
2	C 1	1号土坑	甕	口径14.0		○	
3	C 1	1号土坑	甕	口径14.2			外面煤付着
4	C 1・2	1号土坑・包含層	壺	口径14.2		○	
5	C 1	1号土坑	壺	口径11.4、器高(25.7)、底径5.0		○	外面煤付着
22/1	D 2	1号溝	甕	口径15.1	極少	○	内外面煤付着
2	D 2	1号溝	鉢	口径15.2		○	
3	D 2	2号溝	甕	口径27.6			
4	F 2	3号溝	甕	口径14.2、器高18.6、底径4.3	極少	○	
5	F 2	3号溝	壺	口径14.5	極少	○	
6	A 3	6号溝	高杯				
7	A 3	7号溝	甕	口径15.5			2号周溝建物
8	A 3	7号溝	甕	口径15.7			2号周溝建物、外面煤付着
9	A 3	7号溝	壺	口径20.4	少		2号周溝建物
10	A 3	7号溝	壺	口径23.8		○	2号周溝建物
11	A 3	7号溝	鉢	底径3.8		○	2号周溝建物、有穴
23/1	C 3	9号溝	壺	口径14.6			
2	C 3	10号溝	壺	口径24.5	中		
3	C 5	17号溝	壺	口径12.4	多	○	
4	B 5	17号溝	甕	口径14.0	極少		
5	B 5	17号溝	高杯	口径12.1	極少	○	
6	C 5	17号溝	脚台部	脚台径4.3		○	
7	B 5	17号溝	脚部	脚径18.5	極少	○	割口漆付着
8	B 5	17号溝・包含層	底部	底径4.8	極少		外面煤付着
30/1	B 4	18号溝	甕	口径16.6	少		1号周溝建物、外面煤付着
2	B 4	18号溝	甕	口径18.6			1号周溝建物
3	B 4	18号溝	甕	口径18.3		○	1号周溝建物
4	B 4	18号溝	甕	口径17.6		○	1号周溝建物、外面煤付着
5	B 4	18号溝	甕	口径23.7		○	1号周溝建物、外面煤付着
6	B 5	18号溝	壺	口径14.8		○	1号周溝建物
7	B 4	18号溝	鉢	口径16.4、器高9.5		○	1号周溝建物、有穴
8	C 3	18号溝	鉢	口径15.2		○	1号周溝建物
9	B 4	18号溝	壺		多	○	1号周溝建物
10	C 3	18号溝脇	器台	口径22.6		○	1号周溝建物脇
11	C 3	18号溝		口径28.0		○	1号周溝建物
12	B 4	18号溝	高杯				1号周溝建物
13	B 4	18号溝	器台	脚径14.4		○	1号周溝建物
14	B 4	18号溝	高杯			○	1号周溝建物
15	B 4	18号溝	蓋	つまみ径5.4		○	1号周溝建物
16	B 4	18号溝	蓋	つまみ径5.1		○	1号周溝建物
17	B・C 4	18号溝	底部	底径5.7	極少		1号周溝建物

図版番号	出土地点 グリッド	出土地点 遺構他	器種等	法量（cm）	海綿	雲母	備考
26/1	C 4	19号溝	甕	口径14.6		○	1号周溝建物、外面煤付着
2	C 4	19号溝	甕	口径17.8		○	1号周溝建物、外面煤付着
3	B 4	19号溝	甕	口径22.0			1号周溝建物、外面煤付着
4	C 4	19号溝	甕	口径12.6		○	1号周溝建物、外面煤付着
5	C 4	19号溝	甕	口径14.0		○	1号周溝建物
6	B 4	19号溝	甕	口径15.8		○	1号周溝建物、外面煤付着
7	B 4	19号溝	器台	脚径(19.6)			1号周溝建物
8	C 4	19号溝	鉢？	口径17.8		○	1号周溝建物、外面煤付着
9	B 4	19号溝	器台	脚径18.2		○	1号周溝建物
10	B 4	19号溝	脚部	脚径14.4		○	1号周溝建物
11	C 4	19号溝	底部	底径4.1			1号周溝建物、外面煤付着
12	B 5	20号溝	甕	口径(18.4)	多	○	
27/1	C 4	21号溝	甕	口径20.4		○	1号周溝建物、外面煤付着
2	C 4・5	21号溝	甕	口径22.2	極少	○	1号周溝建物、外面煤付着
3	C 4・5	21号溝	甕	口径17.6			1号周溝建物、外面煤付着
4	C 4・5	21号溝	甕	口径15.4			1号周溝建物、内外面煤付着
5	BC 4・5	21号溝	甕	口径18.8		○	1号周溝建物、外面煤付着
6	C 4	21号溝	甕	口径19.4			1号周溝建物
7	C 4	21号溝	甕	口径21.4	極少	○	1号周溝建物、外面煤付着
8	C 4	21号溝	甕	口径14.4			1号周溝建物
9	C 3・4	21号溝	甕	口径15.8		○	1号周溝建物
10	C 3	21号溝	甕	口径22.2			1号周溝建物、外面煤付着
11	C 3・4	21号溝	壺	口径13.6		○	1号周溝建物、外面煤付着
12	C 4・5	21号溝	器台	口径21.0	少	○	1号周溝建物
13	C 5	21号溝	鉢	口径12.0、器高8.4、底径2.7		○	1号周溝建物、外面煤付着
14	B 4	21号溝	鉢	口径15.8、器高10.0		○	1号周溝建物、有穴
15	C 4・5	21号溝	鉢	口径16.9		○	1号周溝建物
28/16	C・D 4	22号溝	鉢	口径18.2			1号周溝建物、外面煤付着
17	C 4	21号溝	鉢	口径20.2			1号周溝建物、外面煤付着
18	D 4	21号溝	鉢	口径21.8		○	1号周溝建物
19	C 4	21号溝	鉢	口径22.6			1号周溝建物、外面煤付着
20	C 4・5	21号溝	器台	口径22.4			1号周溝建物
21	B 5	21号溝	高杯	口径25.0		○	1号周溝建物
22	C 5	21号溝	高杯	口径27.2			1号周溝建物
23	D 4	21号溝	脚部	脚径17.4	極少		1号周溝建物
24	C 4	21号溝	脚部	脚径15.2		○	1号周溝建物
25	C 4	21号溝	脚部	脚径14.6			1号周溝建物、内面煤付着
26	C 4	21号溝	脚部	脚径15.0			1号周溝建物
27	B 5	21号溝	脚部	脚径17.6		○	1号周溝建物
28	B 4・5	21号溝・包含層	高杯	脚径17.8		○	1号周溝建物
29	C 4	21号溝	脚部		極少	○	1号周溝建物

遺物観察表（3）

図版番号	出土地点 グリッド	出土地点 遺構他	器種等	法量（cm）	海綿	雲母	備考
30	C 4	21号溝	高杯				1号周溝建物
31	C 4・5	21号溝	底部	底径3.0			1号周溝建物、外面煤付着
32	C 4	21号溝	底部	底径4.5	極少	○	1号周溝建物、外面煤付着
31/1	C 3・4	22号溝	甕	口径15.2		○	1号周溝建物
2	C・D 4	22号溝	鉢	口径(24.2)			1号周溝建物
3	C 4	22号溝	甕	口径16.7	極少		1号周溝建物、外面煤付着
4	D 4	22号溝	甕	口径18.5	極少		1号周溝建物、外面煤付着
5	C 4	21号溝	壺	口径14.0	極少	○	1号周溝建物、赤彩
6	C 4	22号溝	甕	口径15.2			1号周溝建物
7	C・D 5	22号溝	甕	口径16.8			1号周溝建物
8	C 4	22号溝	甕	口径18.4			1号周溝建物
9	C・D 5	22号溝	甕	口径16.2			1号周溝建物
10	C 5	22号溝	甕	口径14.2		○	1号周溝建物、外面煤付着
11	D 4	22号溝	壺	口径12.2		○	1号周溝建物
12	C 4	21号溝	壺	口径6.8		○	1号周溝建物
13	C・D 5	22号溝	壺			○	1号周溝建物
14	C・D 5	22号溝	壺			○	1号周溝建物
15	D 4	22号溝	鉢				1号周溝建物
16	D 4	22号溝	鉢			○	1号周溝建物、内外面煤付着
32/17	C 4	21号溝	高杯	口径6.4、器高19.6、底径17.8		○	1号周溝建物
18	D 4	22号溝	高杯	口径27.6		○	1号周溝建物
19	D 5	22号溝	高杯				1号周溝建物
20	C・D 4	22号溝	器台	底径15.6	非多	○	1号周溝建物
21	C 5	22号溝		底径5.2			1号周溝建物、外面煤付着
22	C・D 5	22号溝		底径3.9			1号周溝建物、外面煤付着
33/1	B 4	23号溝	甕	口径22.4		○	1号周溝建物、外面煤付着
2	B 5	23号溝	甕	口径22.4			1号周溝建物、外面煤付着
3	B 5	23号溝	壺	底径3.0		○	1号周溝建物
4	C 5	床面付近	甕	口径15.8		○	1号周溝建物、外面煤付着
5	C 4	床面付近	壺	口径11.6	極少	○	1号周溝建物
6	C 4	床面付近		底径12.2		○	1号周溝建物
38/1	A 6	28号溝	壺	口径12.7	非多	○	
2	B 6	29号溝	甕	口径21.1			外面煤付着
3	B・C 6	20号溝・包含層	壺	底径7.6	中	○	
4	B 6	29号溝		底径15.3			
5	B・C 5・6	31号溝	壺	口径26.4		○	
6	B 6	31号溝	甕	口径16.0	極少	○	外面煤付着
7	B・C 5・6	31号溝	甕	口径16.8	多	○	
8	B 6	31号溝	甕	口径16.6	極少		
9	B・C 5・6	31号溝	鉢	口径16.3	極少	○	外面煤付着
10	B 6	31号溝		底径6.4			

図版番号	出土地点 グリッド	出土地点 遺構他	器種等	法量(cm)	海綿	雲母	備考
11	B・C5・6	31号溝	高杯	底径13.5		○	
12	B・C5・6	31号溝		底径23.0			
13	B・C6	32号溝	器台				
34/1	B4	18・21号溝	甕	口径19.4	少	○	1号周溝建物、外面煤付着
2	B4・5	18・21号溝	高杯	口径22.1	極少	○	1号周溝建物、18号溝下層、外面煤付着
3	B4・5	18・21号溝	高杯	口径27.8			1号周溝建物
4	B4・5	19・21・23号溝	高杯	口径28.4		○	1号周溝建物、内面煤付着
5	B4	18・21号溝	高杯	口径24.5	極少		1号周溝建物
6	B・C4	18・19号溝	高杯	口径29.0			1号周溝建物、外面煤付着
7	C・D4・5	21・22号溝	高杯				1号周溝建物
8	B4・5 C4	21・22・31号溝		底径16.8			1号周溝建物
9	B4	18・21号溝		底径17.0			1号周溝建物
10	B・C4	18・19・包含層	器台	口径13.3	極少	○	1号周溝建物
11	B・C4・5	21号溝		底径13.8		○	1号周溝建物
12	B・C3・4 C・D4	18・21・22号溝		底径10.3		○	1号周溝建物
13	B4、D3	19・34号溝		底径5.4			1号周溝建物
36/1	B4	18、19、21号溝	甕？	口径21.8			1号周溝建物
2	C3、4	18、19号溝	甕	口径(18.8)			1号周溝建物、外面煤付着
3	C3・4	18、19号溝	鉢？	口径(19.7)	中		1号周溝建物、外面煤付着
4	C3・4	18、19号溝	甕	口径15.2			1号周溝建物、外面煤付着
5	C4	18、19、21号溝	鉢？	口径14.2		○	1号周溝建物
6	C4	18、19、21号溝	高杯	口径29.7		○	1号周溝建物
7	B4	18、19、21号溝	高杯				1号周溝建物、赤彩
8	B4	18、19、21号溝		底径3.6			1号周溝建物
9	C4	18、19、21号溝		底径4.4	少		1号周溝建物
10	C4	21、22号溝	甕	口径14.6			1号周溝建物、外面煤付着
11	D4	21、22号溝	甕	口径(15.0)			1号周溝建物、外面煤付着
12	D4	21、22号溝	甕	口径19.2			1号周溝建物、外面煤付着
13	C4	21、22号溝				○	1号周溝建物
14	C4	21、22号溝	高杯	口径(32.4)			1号周溝建物、赤彩
15	D4	21、22号溝		底径8.8	極少	○	1号周溝建物
16	D4	21、22号溝					1号周溝建物
17	D4	21、22号溝		底径4.7			1号周溝建物
18	D4	21、22号溝		底径5.4			1号周溝建物、外面煤付着
35/1	B・5 C・5	21号 溝、P34、包含層	器台	口径24.0、器高18.2、底径17.2	極少	○	1号周溝建物
39/1	C2	溝状落ち込み	甕	口径20.2		○	外面煤付着
2	B・C2	溝状落ち込み	甕	口径14.6			
3	B・C2	溝状落ち込み	甕	口径17.4			外面煤付着
4	B・C2	溝状落ち込み	甕	口径17.9			
5	C2	包含層	甕	口径16.8			溝状落ち込み周辺、外面煤付着
6	B・C2	溝状落ち込み	鉢	口径16.4		○	外面煤付着

図版番号	出土地点 グリッド	出土地点 遺構他	器種等	法量（cm）	海綿	雲母	備考
7	B・C2	溝状落ち込み	鉢	口径18.2、器高14.2、底径3.0		○	
8	B・C2	溝状落ち込み	器台	底径19.2	極少	○	
9	B・C2	溝状落ち込み、包含層	壺	底径3.8	少		
10	C2	包含層		底径4.2	極少		溝状落ち込み周辺
11	C2	溝状落ち込み	鉢	底径6.2	少	○	
40/1	D2	P6	壺	口径14.0			
2	C4	P30	甕	口径14.2			外面煤付着
3	C4	P25	甕	口径18.4			外面煤付着
4	C2	P7	鉢	口径20.0、器高6.8、底径4.2	極少	○	
44/1	B6	下層包含層	甕	口径17.0		○	
2	C1	包含層	甕	口径24.0			
3	B4	床面？	甕	口径25.6			19号溝と21号溝の間
4	D5	包含層	甕	口径(19.4)			
5	C1・2	包含層	甕	口径20.6			外面煤付着
6	C1・2	包含層	甕	口径19.5			
7	B・C3	包含層	器台	口径(22.0)	少	○	
8	B3	包含層	壺	口径20.0	多	○	外面煤付着、ヘラ描き
9	B・C2	包含層	壺	口径13.9		○	溝状落ち込み上面
10	D2	包含層	壺	口径14.4		○	
11	E2	包含層	壺	口径13.4			
12	C2	包含層	壺	口径13.6	極少		
13	C・D5	包含層	壺	口径14.0	極少	○	外面煤付着
45/14	C2	包含層	壺		極少	○	外面赤彩
15	C2	包含層	鉢	口径21.4		○	
16	B・C6	下層包含層	鉢	口径16.2、器高8.8、底径6.1	少	○	
17	D2	包含層	鉢	口径16.0		○	外面煤付着
18	B6	包含層	器台	口径20.2	少		内外面赤彩
19	B・C2	包含層	器台	口径25.2	少		溝状落ち込み上面
20	C1・2	包含層	高杯	口径24.2			
21	表採	包含層	高杯		中		
22	B・C2 D2	包含層		底径17.0		○	溝状落ち込み上面、透穴4
23	A・B3	包含層		底径18.8	極少	○	
24	D5	包含層	壺	底径5.4	極少		
25	C6	下層包含層		底径13.0		○	

写真８　藤井サンジョガリ遺跡垂直写真(1)

写真 9　藤井サンジョガリ遺跡垂直写真(2)

写真10　藤井サンジョガリ遺跡垂直写真(3)

写真11　藤井サンジョガリ遺跡垂直写真(4)

写真13　東側調査区周辺整備作業（南より）

写真14　東側調査区遺構掘り下げ作業（東より）

写真15　東側調査区遺構完掘状況（東より）

写真16　1号土坑遺物出土状況（北より）

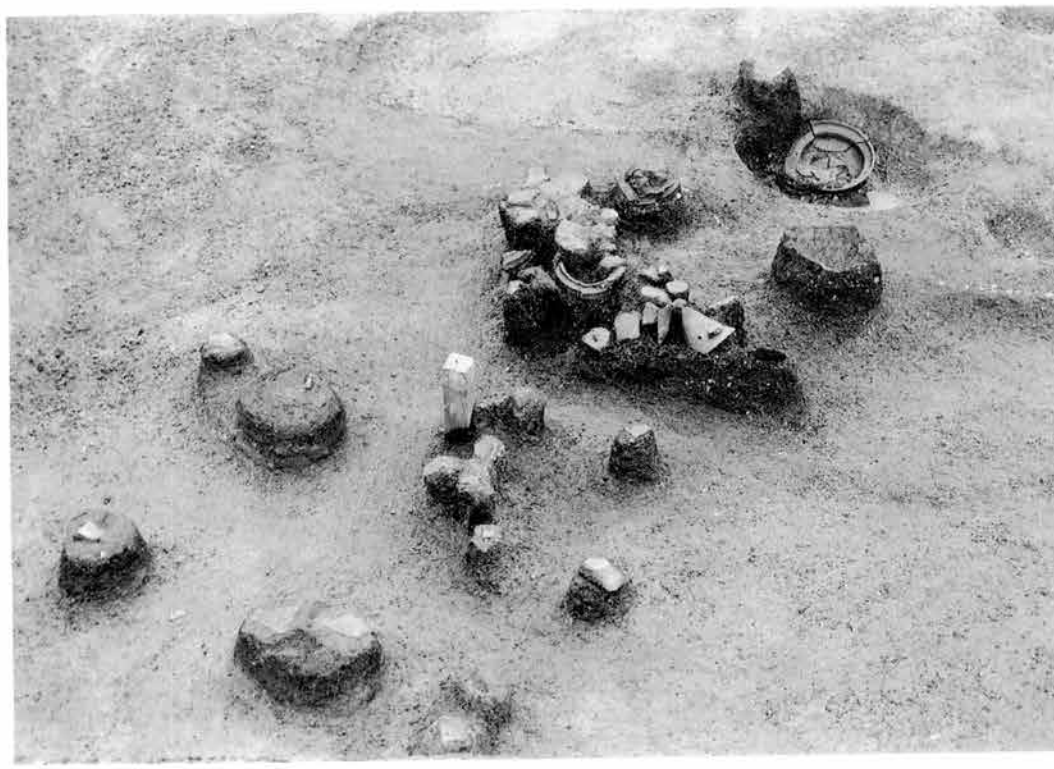


写真17　溝状落ち込み遺構遺物出土状況（東より）

写真18　6号溝周辺遺構掘り下げ作業（南より）

写真19　6号溝周辺遺構完掘状況（南より）

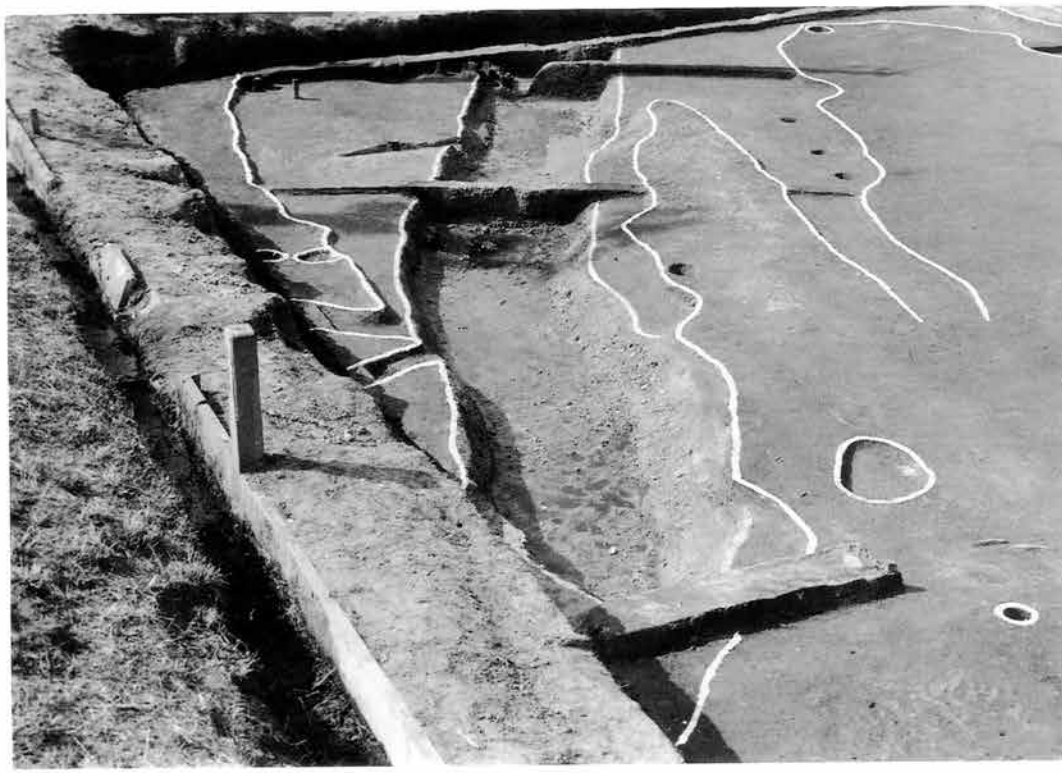


写真20　3号溝完掘状況（南より）

写真21　3号溝土層断面検出状況（S．P．5～6）

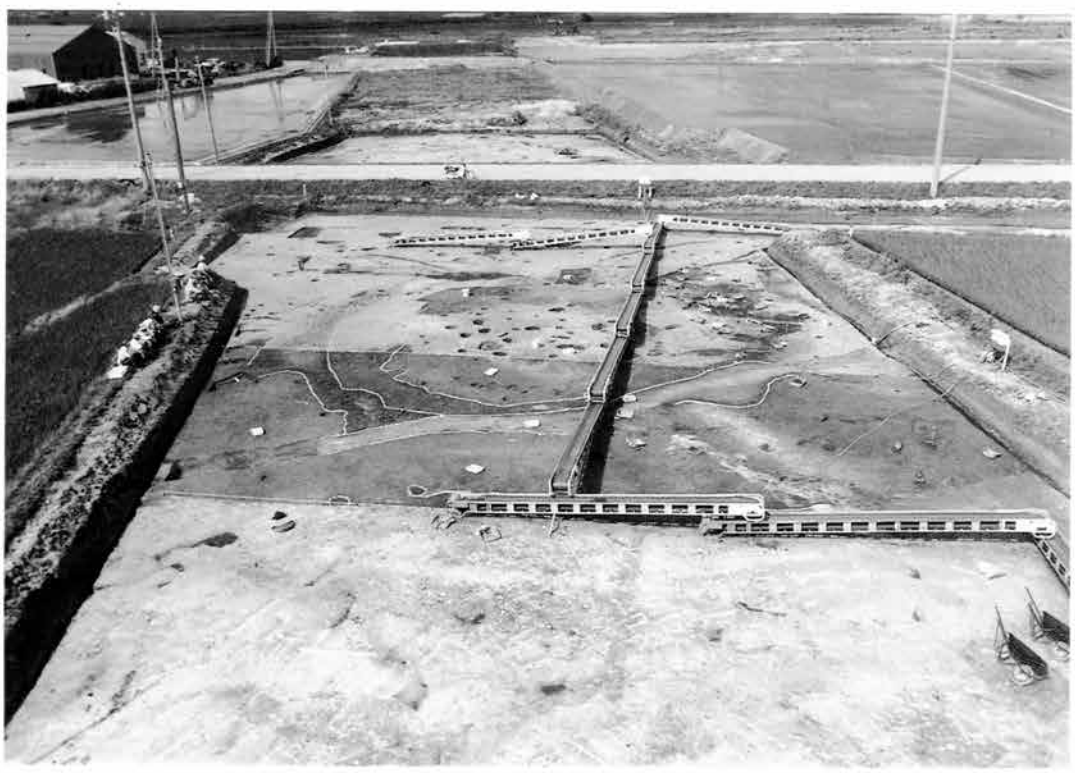


写真22　Ⅰ号周溝建物跡遺構検出作業（西より）

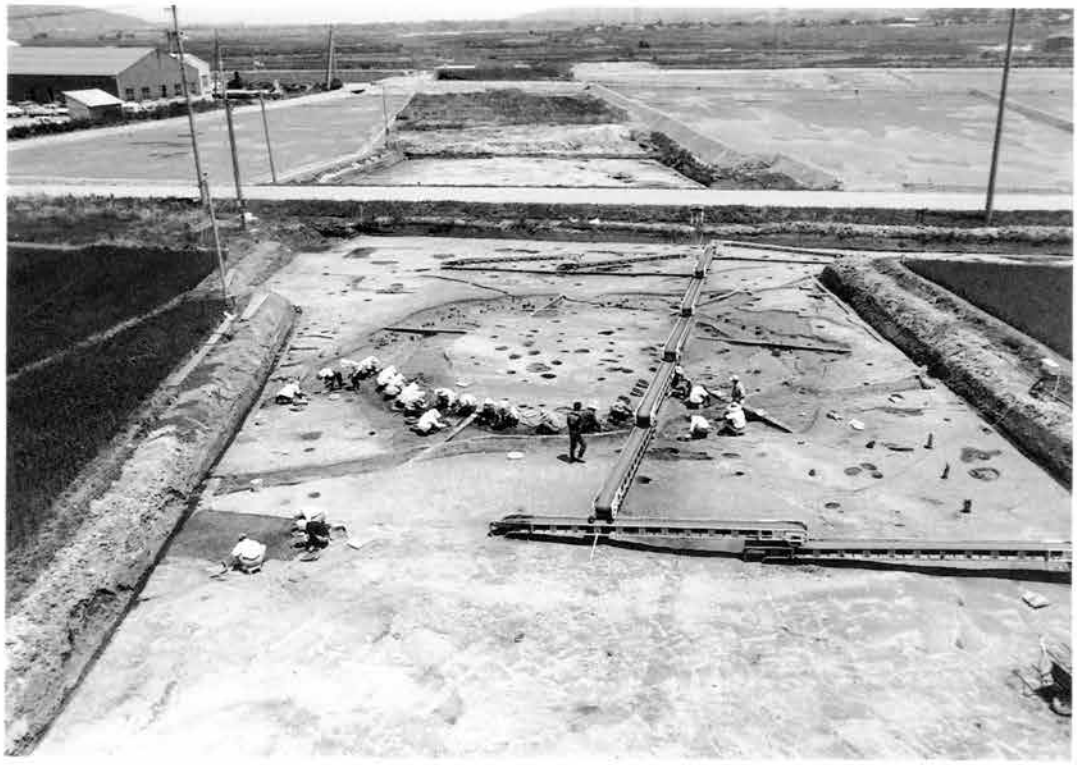


写真23　Ⅰ号周溝建物跡掘り下げ作業（西より）

写真24　調査区浸水状況（西より）

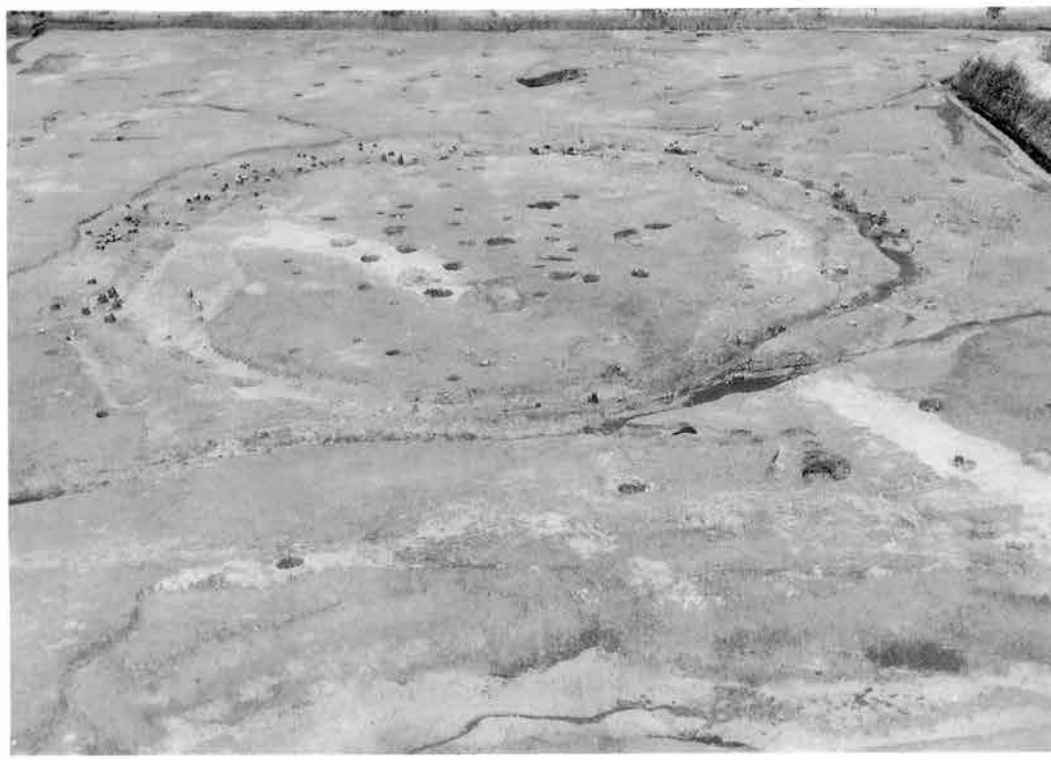


写真25　Ⅰ号周溝建物跡完掘状況（西より）

写真26　17号溝、21号溝、19号溝遺物出土状況（東より）

写真27　21号溝土層断面検出状況（S．P．19～20）

写真28　18号溝、21号溝、19号溝遺物出土状況（北より）

写真29　21号溝土層断面検出状況（S．P．17～18）

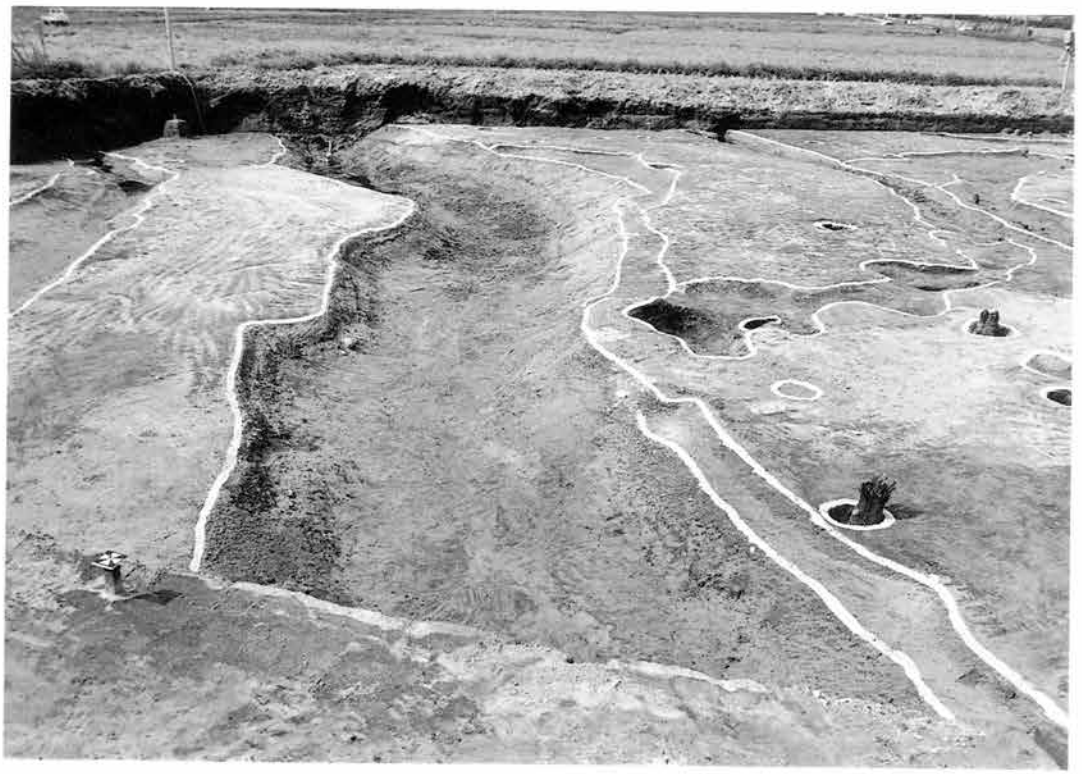


写真30　31号溝完掘状況（東より）

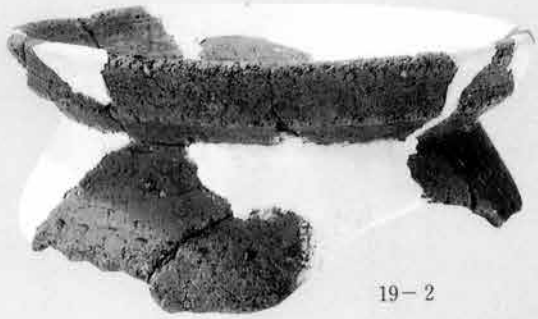
写真31　31号溝土層断面検出状況（S．P．31～32）

写真32　32号溝、33号溝完掘状況（東より）

写真33　33号溝土層断面検出状況（S．P．33～34）

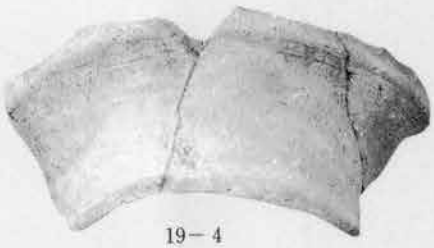
写真34　遺構出土遺物実測作業

写真35　西側調査区完掘状況（西より）



19－2

19－5



19－4

22－1

22－2

22－4

22－5

写真36

22－10

22－11

23－3

23－6

23－5

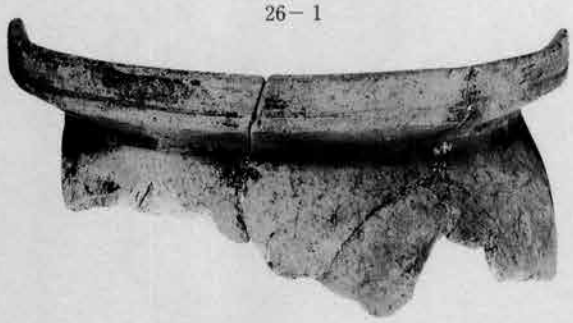
23－7

26－12

写真37

26－1

26－4



26－2

26－5

26－6

26－8

26－9

26－10

写真38

27－1

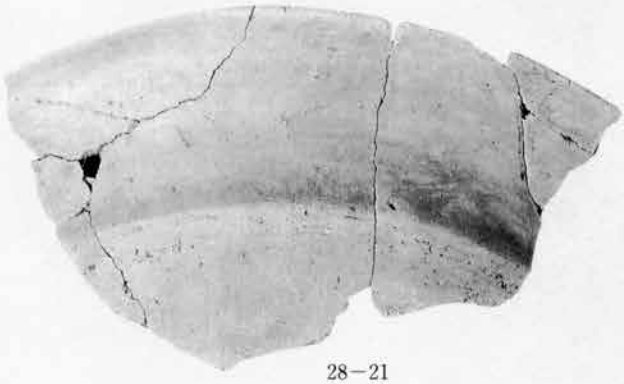
27－9

27－2

27－12

27－11

28－24



28－21

28－27

写真39

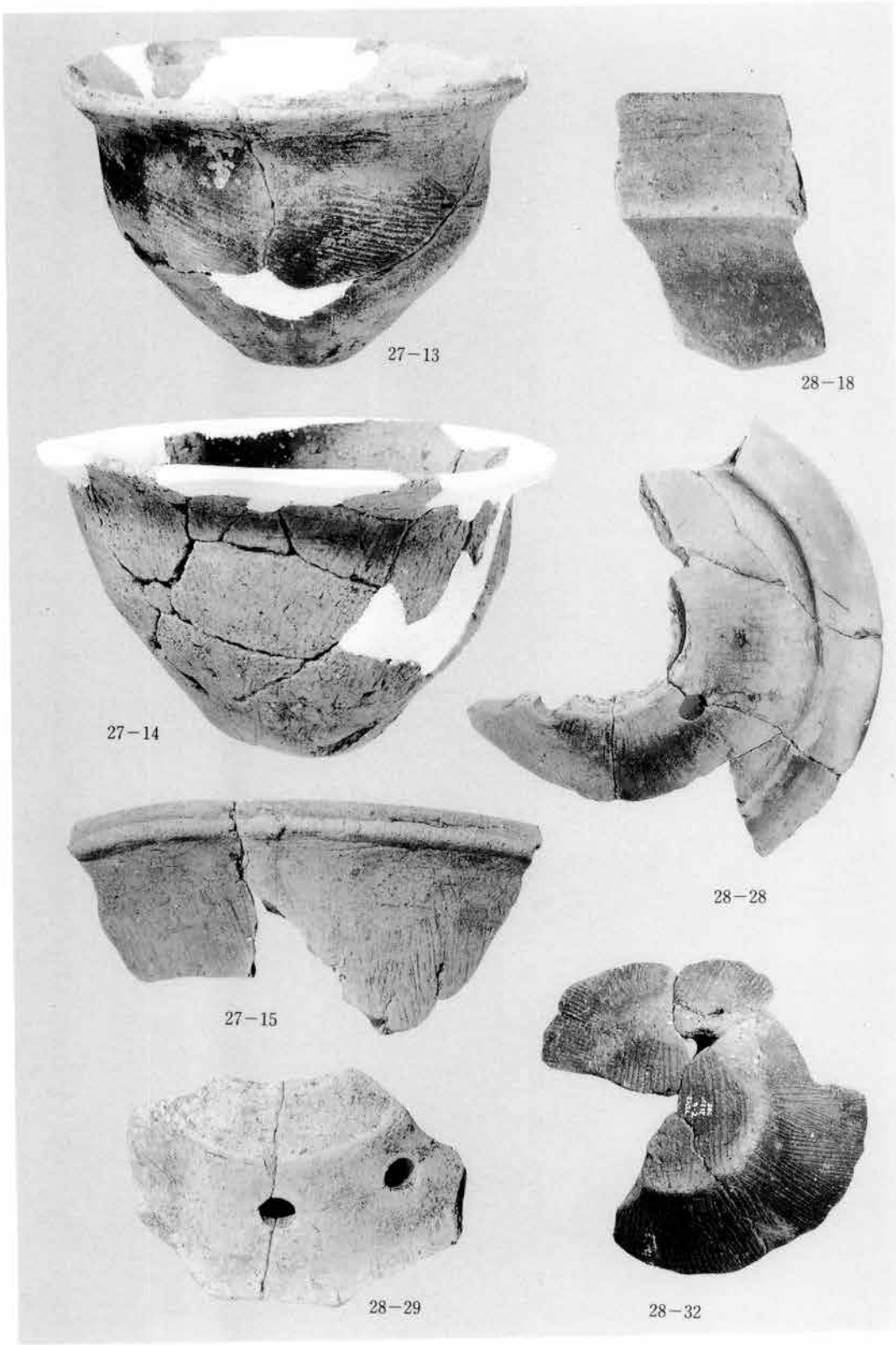
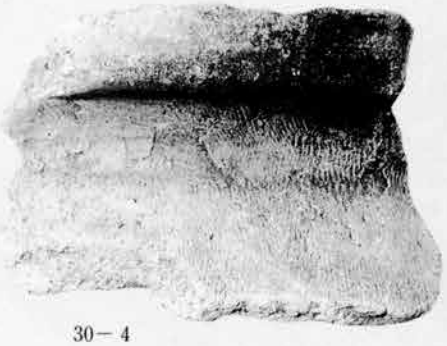


写真40

30－3

30－5



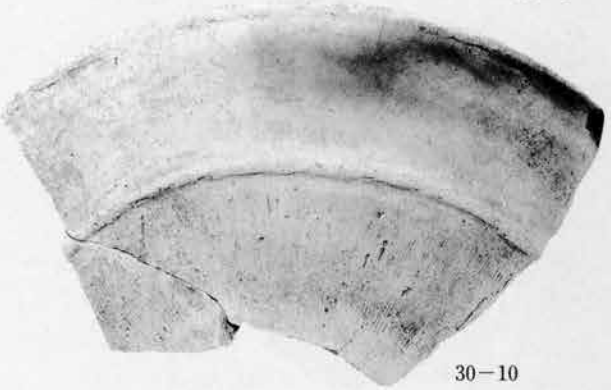
30－4

30－6

30－7

30－9

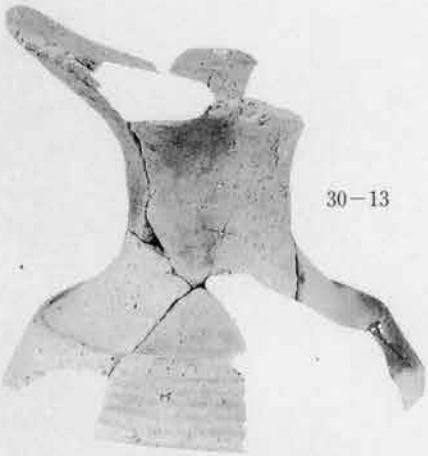
30－8



30－10

写真41

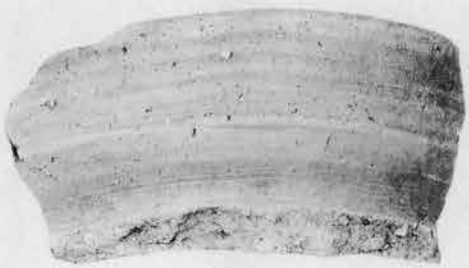
30－11



30－13

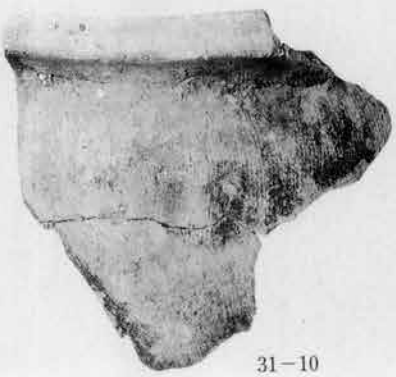
30－14

30－15



31－1

31－5



31－10

31－11

写真42

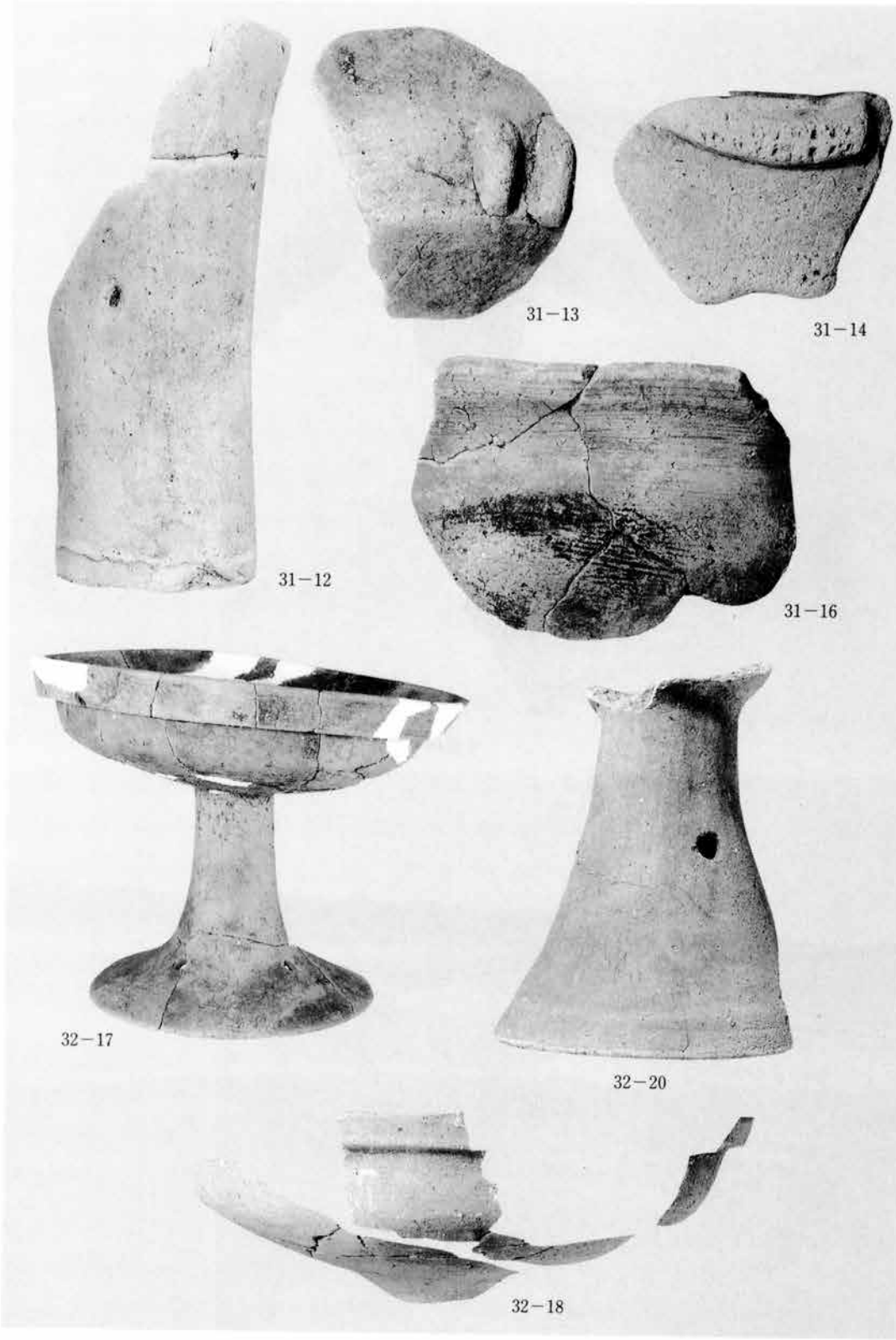


写真43

33－1

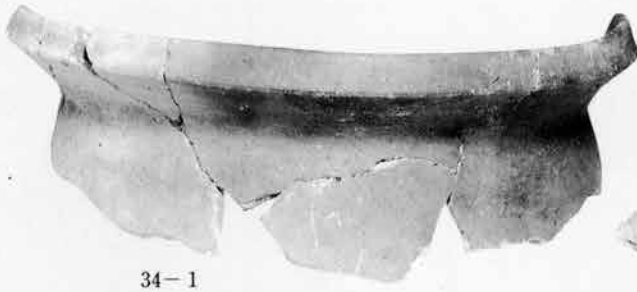
33－3

33－4

33－5

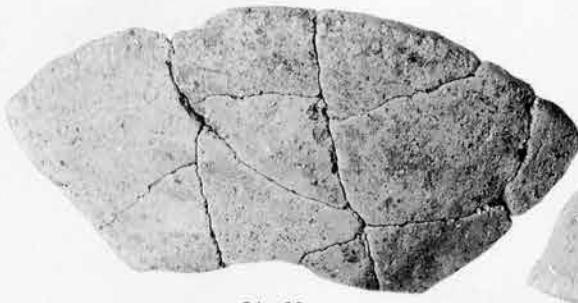
写真44

写真45　23号溝、17号溝土層断面検出状況（S．P．19～20）

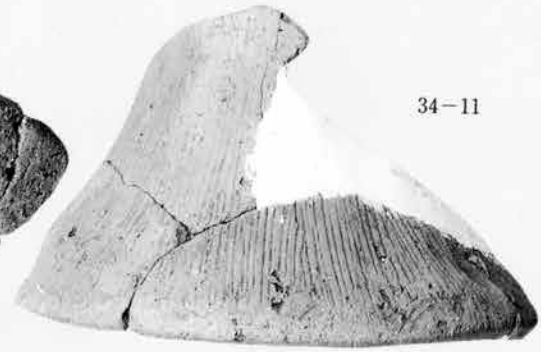


34－1

34－12



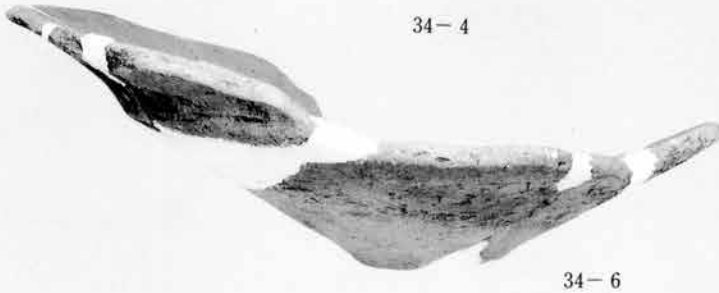
34－10



34－11

34－2

34－4

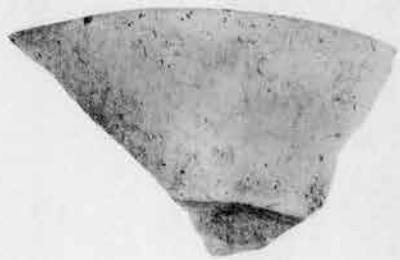


34－6

写真46

35－1

36－15



36－5

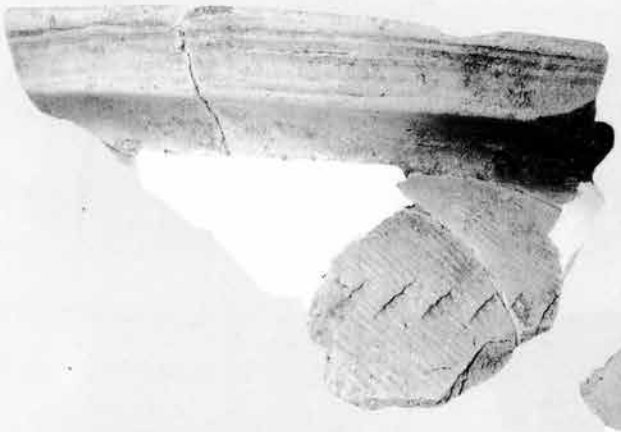
36－6

36－13

38－1

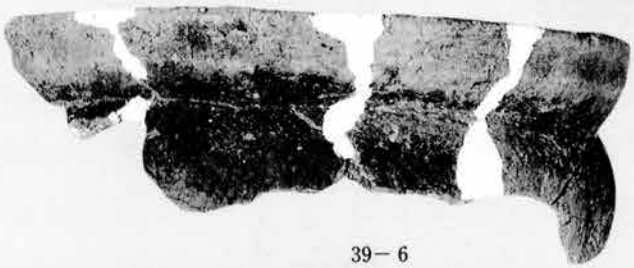
38－11

写真47



39－1

39－7



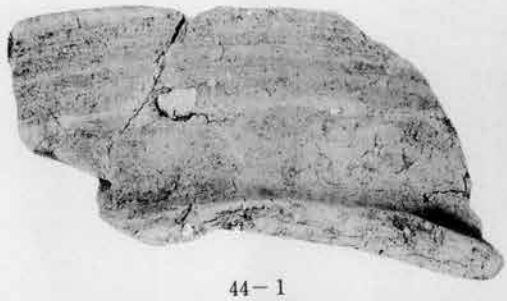
39－6

39－8

39－11

40－4

写真48



44－1

44－8

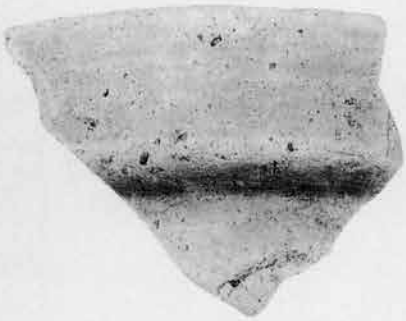
44－7

44－9

44－10

45－14

44－13

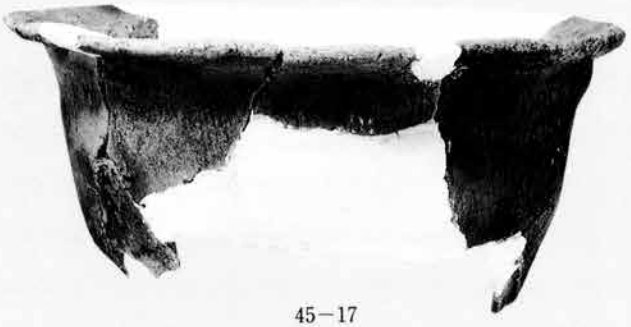


45－15

写真49

45－16

45－26



45－17

43－4

45－22

43－5

45－23

写真50

Ⅳ　高畠テラダ遺跡

Ⅳ　高畠テラダ遺跡

1．概要

幅約24～25m、長さ約90m、面積約2,000m²の調査域を持つ。調査区の東寄りを斜めに横切るように幅6mの農道が南北に走る。グリッドは農道の方向に沿って任意で基点を設け、10m単位で南からA～E区、西から1～7区と設定した(第1図)。最終遺構面は北側のE区で標高18.7m、南側のA区で18.8m、西側の1区で18.5m、東側の7区で18.7m前後と調査区域内での極端な標高差は認められない。包含層以下の土質は全体に砂気が多く水気を多く含むため掘り下げ作業はやり易いが、掘り上げた後の遺構が崩れ易いという欠点を持つ。基本的な土層は、1・耕土および盛土、2・灰褐色粘質土層（中世の包含層か)、3・暗褐色粘質土層（上層包含層)、4・灰色粘質土層（下層包含層)、5・地山層の五層からなる（第12図)。ただし場所によっては中世の包含層が削平されていたり、上層包含層が確認されないこともある。なお上・下層包含層は基本的に古代の遺物を包含する。

遺構は大きく土坑・溝・ピットで構成される。調査区を東西に横断する中世以降の大溝が両側に流れ、その溝に挟まれるように中央部に南北方向の畝溝状遺構が少しずつ方向を変えるように連続して並び、溝の東側にはピット群が位置する。畝溝覆土のほとんどは単層で黄灰色から灰褐色の粘質砂層であることが多く、いずれも炭粒を含む。また調査区東端には近世の落ち込みが広がっている。遺物は畝溝域を中心に奈良時代後半の須恵器・土師器が多く見られ、その両脇を中心に中世の陶磁器類が散在する。

写真1　東側調査区遺構掘り下げ状況（東より）

第１図　高畠テラダ遺跡（図郭割・グリッド配置図）

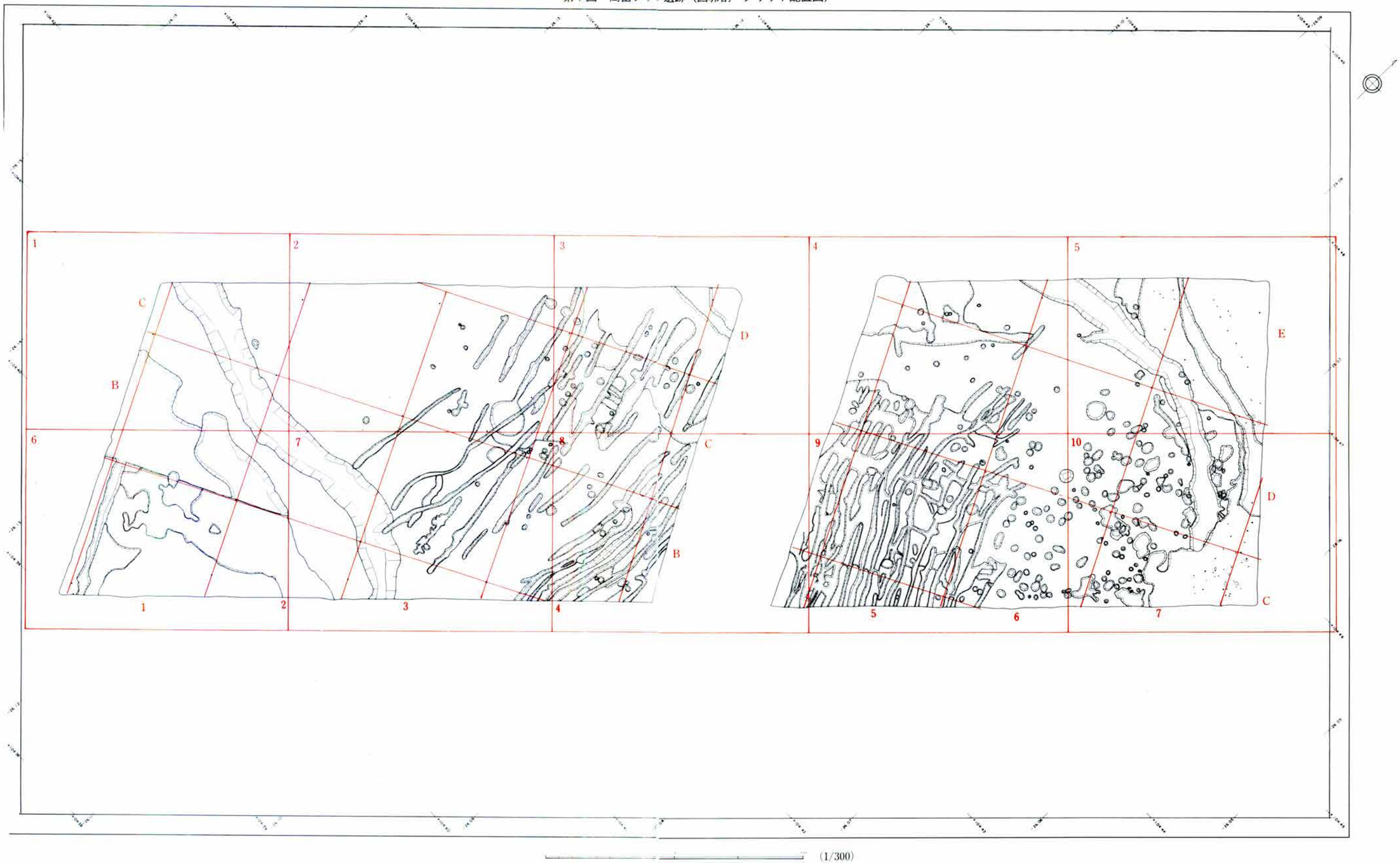
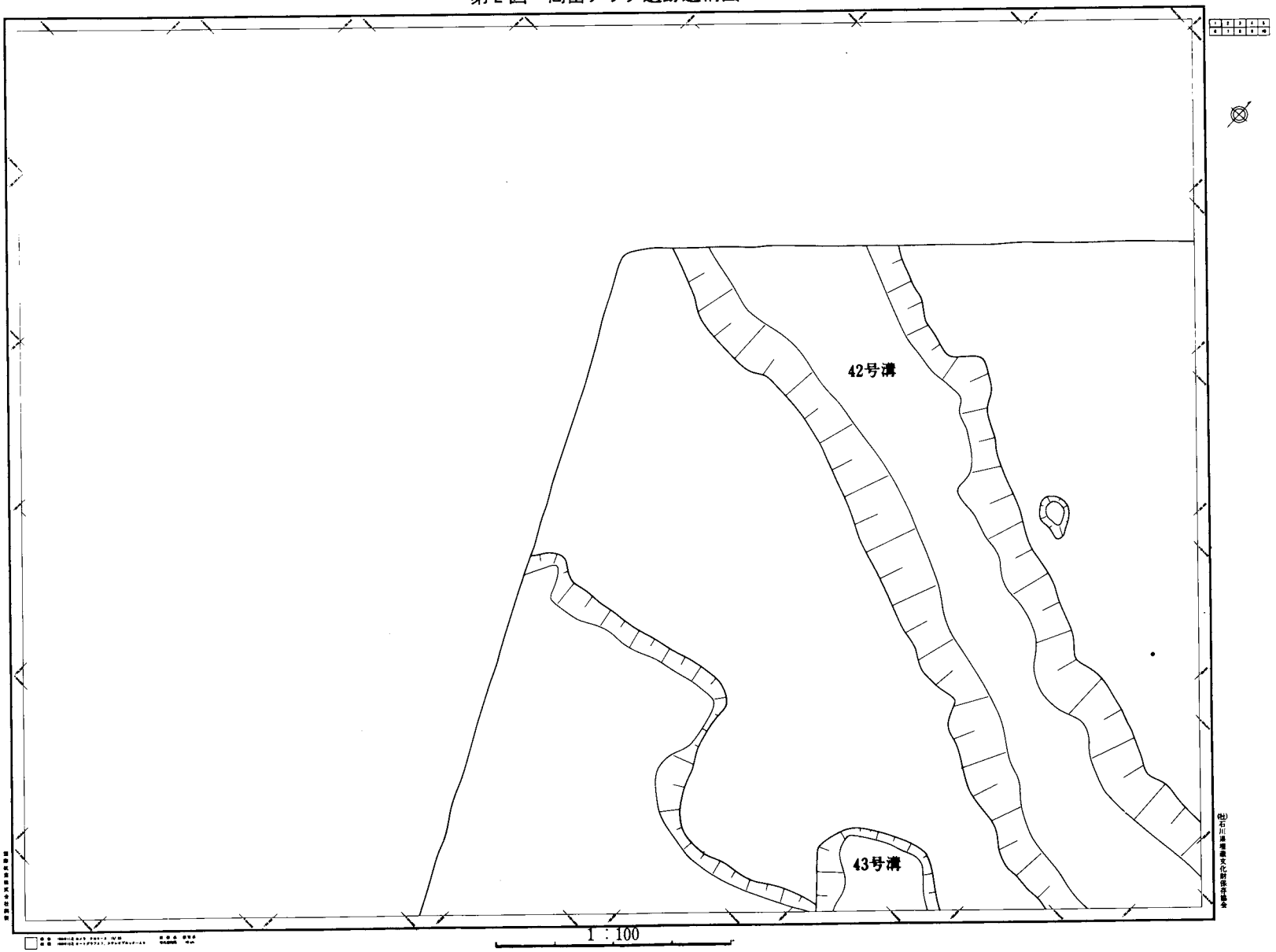
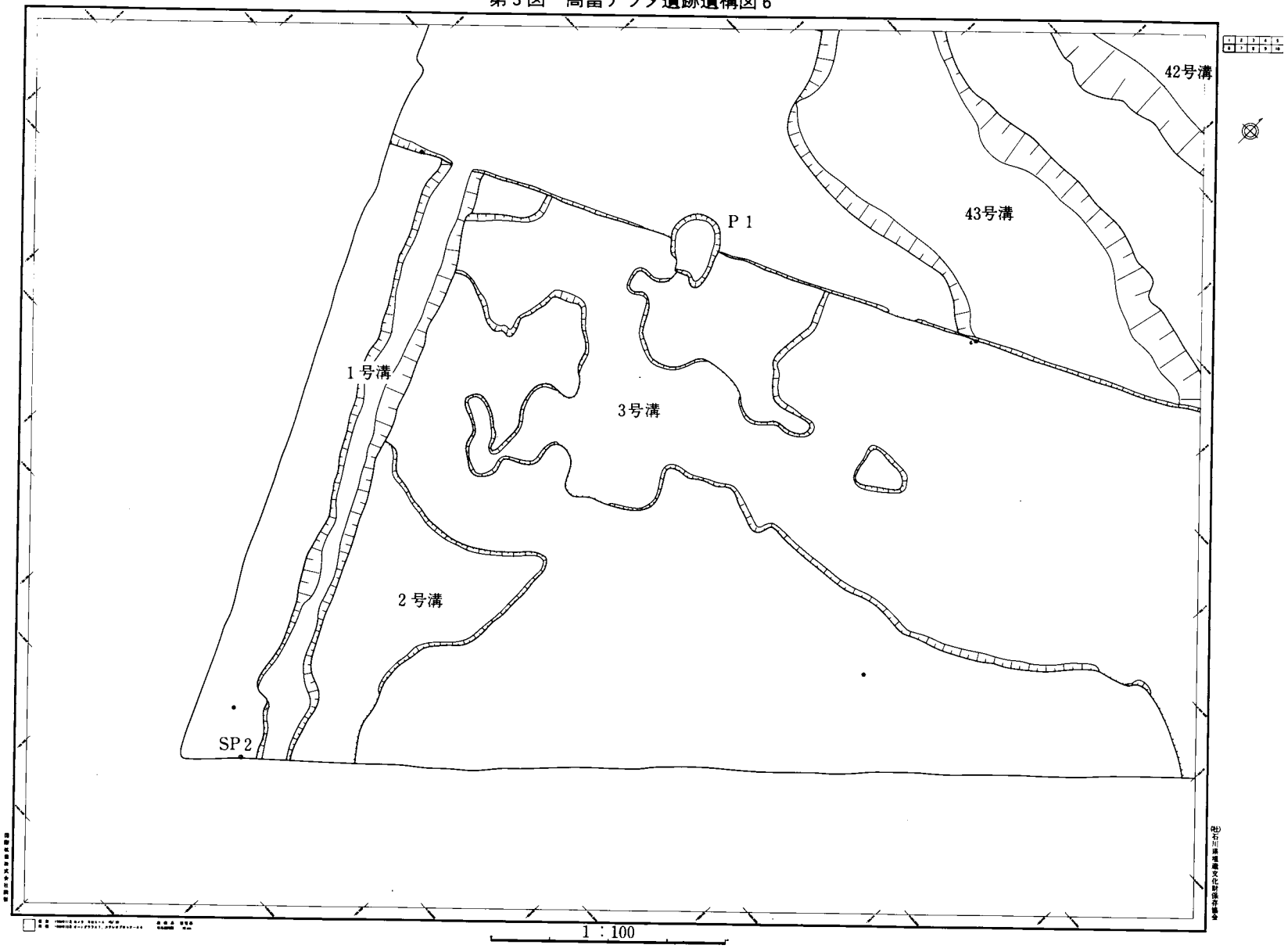


写真２　高畠テラダ遺跡全景

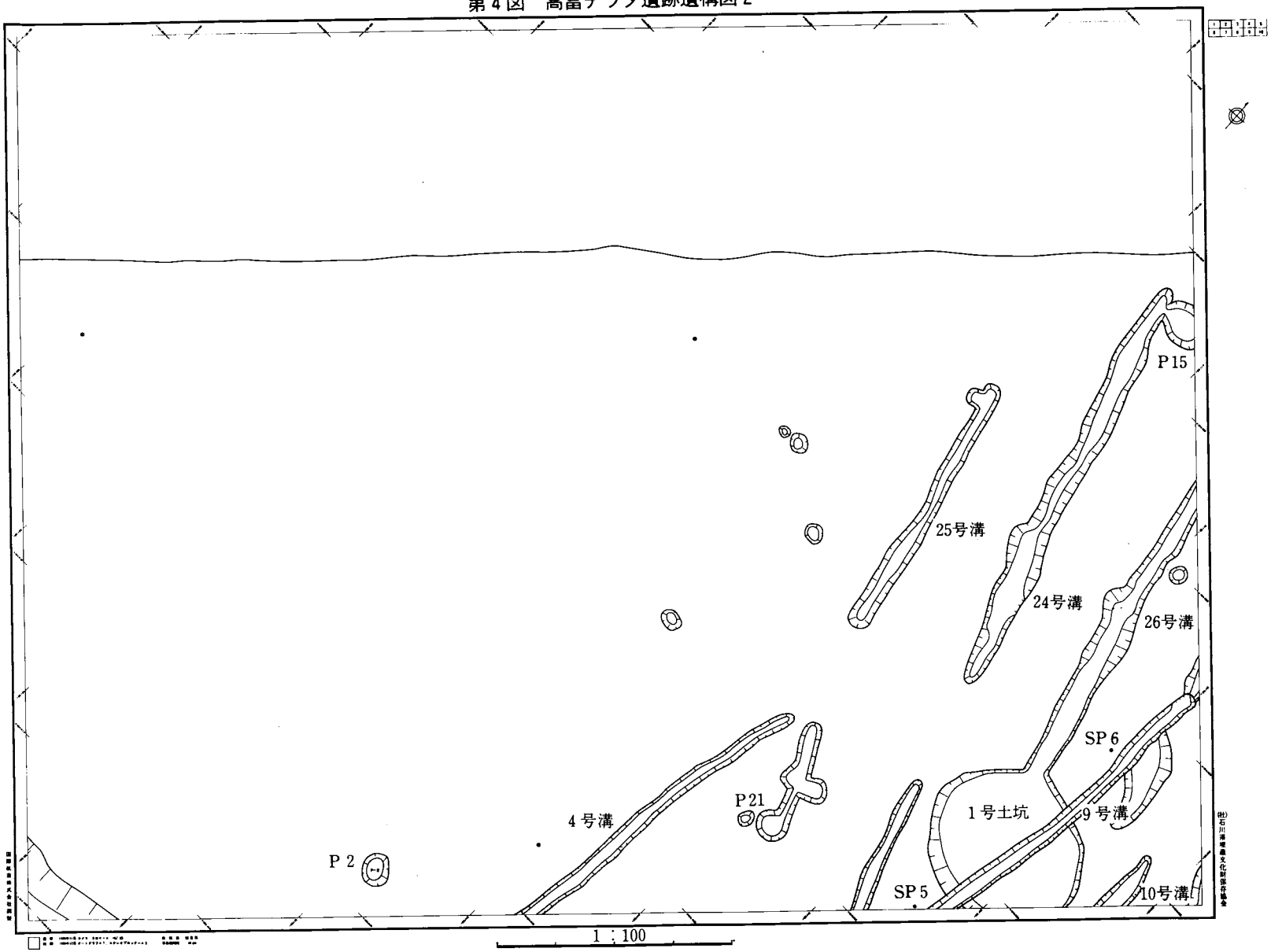
第２図　高畠テラダ遺跡遺構図Ⅰ



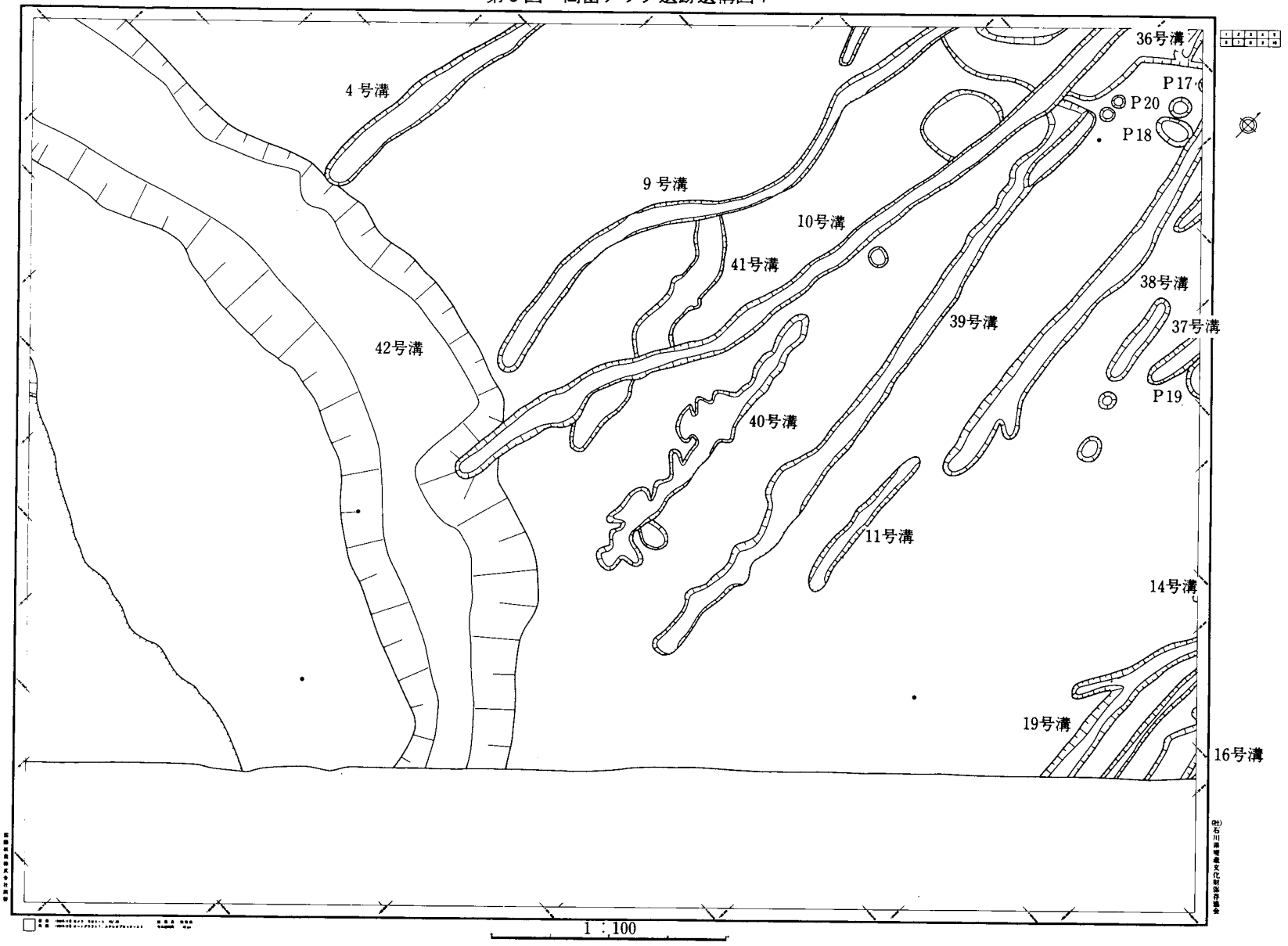
第３図　高畠テラダ遺跡遺構図６



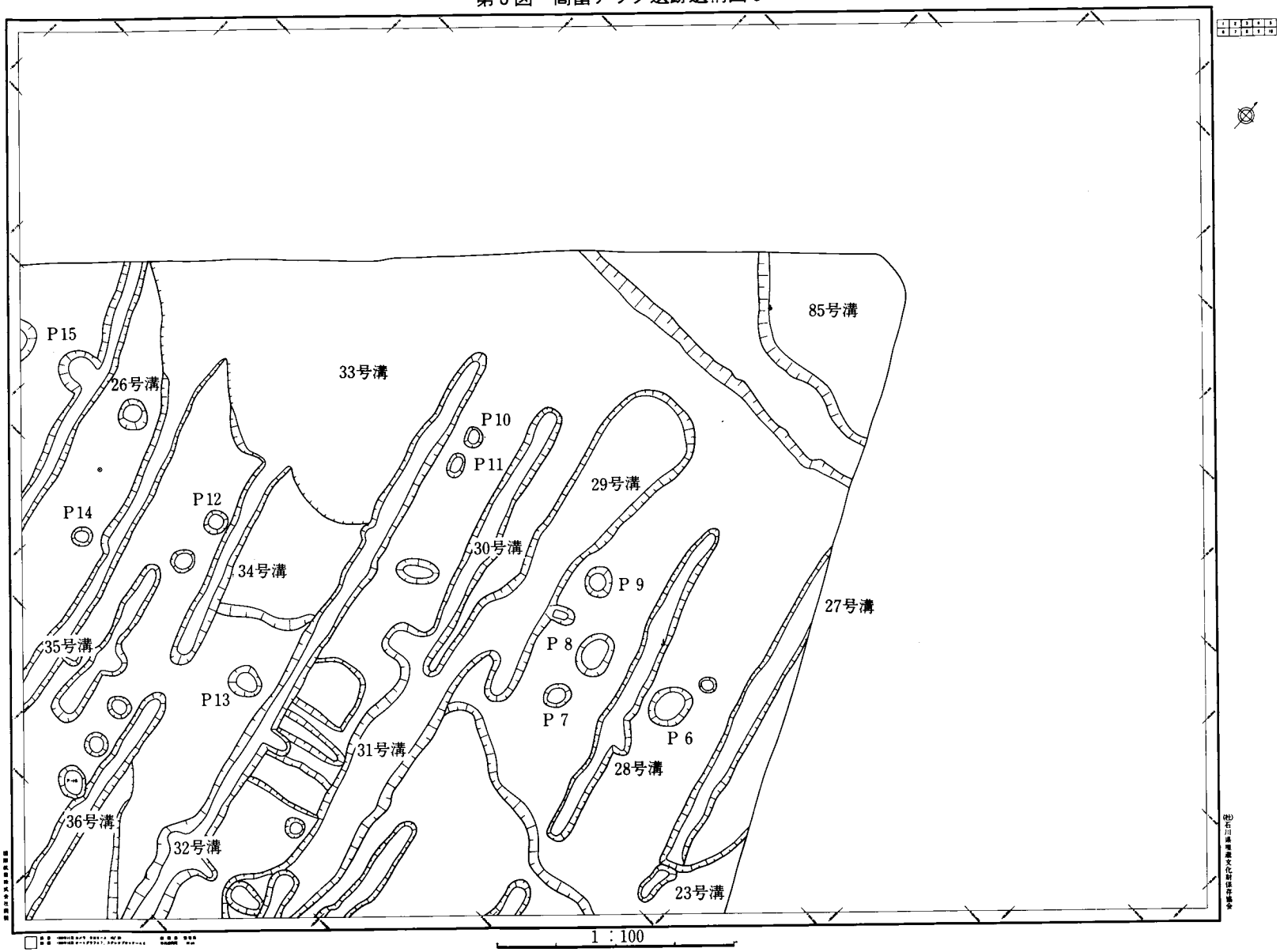
第4図　高畠テラダ遺跡遺構図2



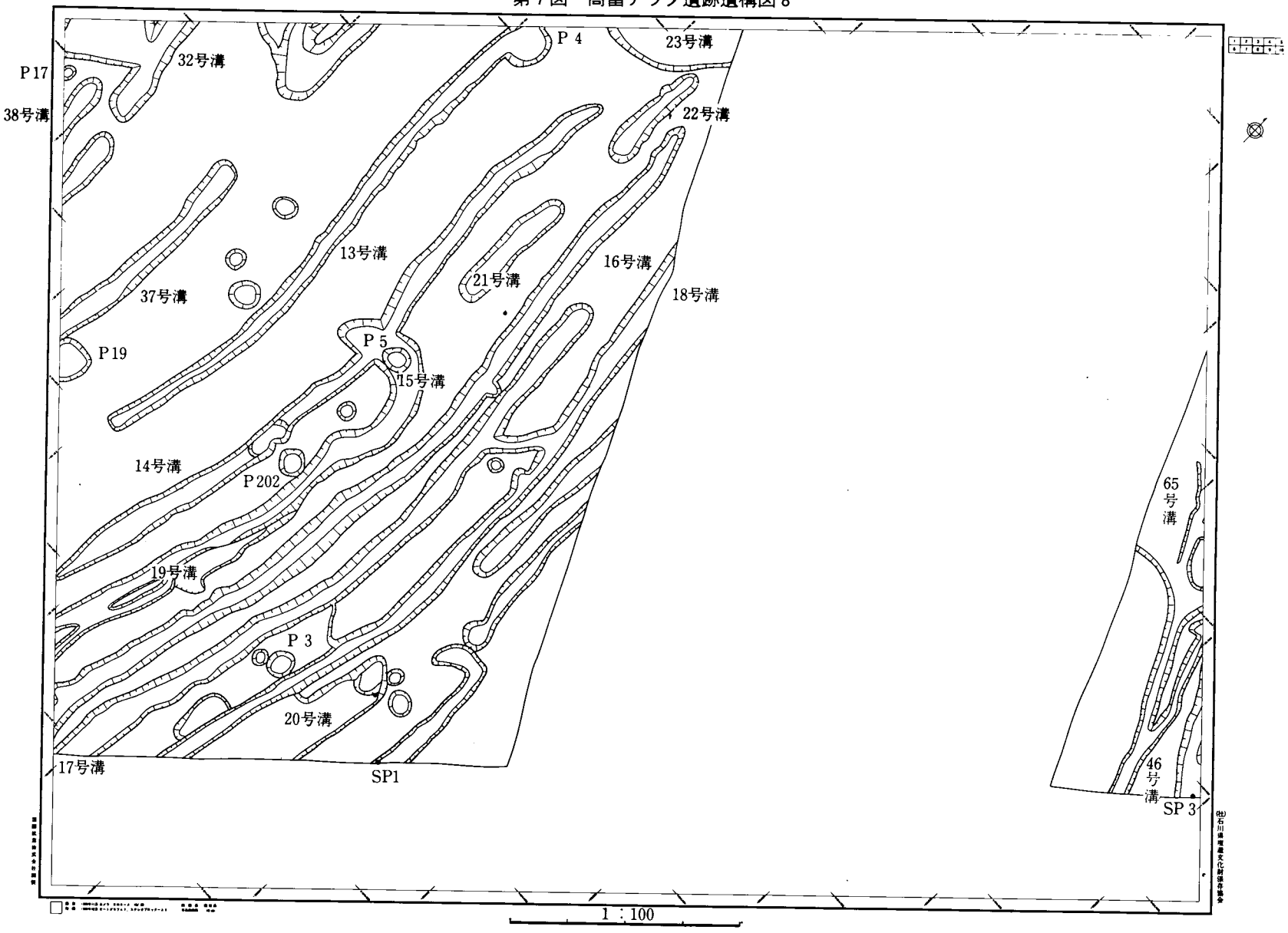
第５図　高畠テラダ遺跡遺構図７



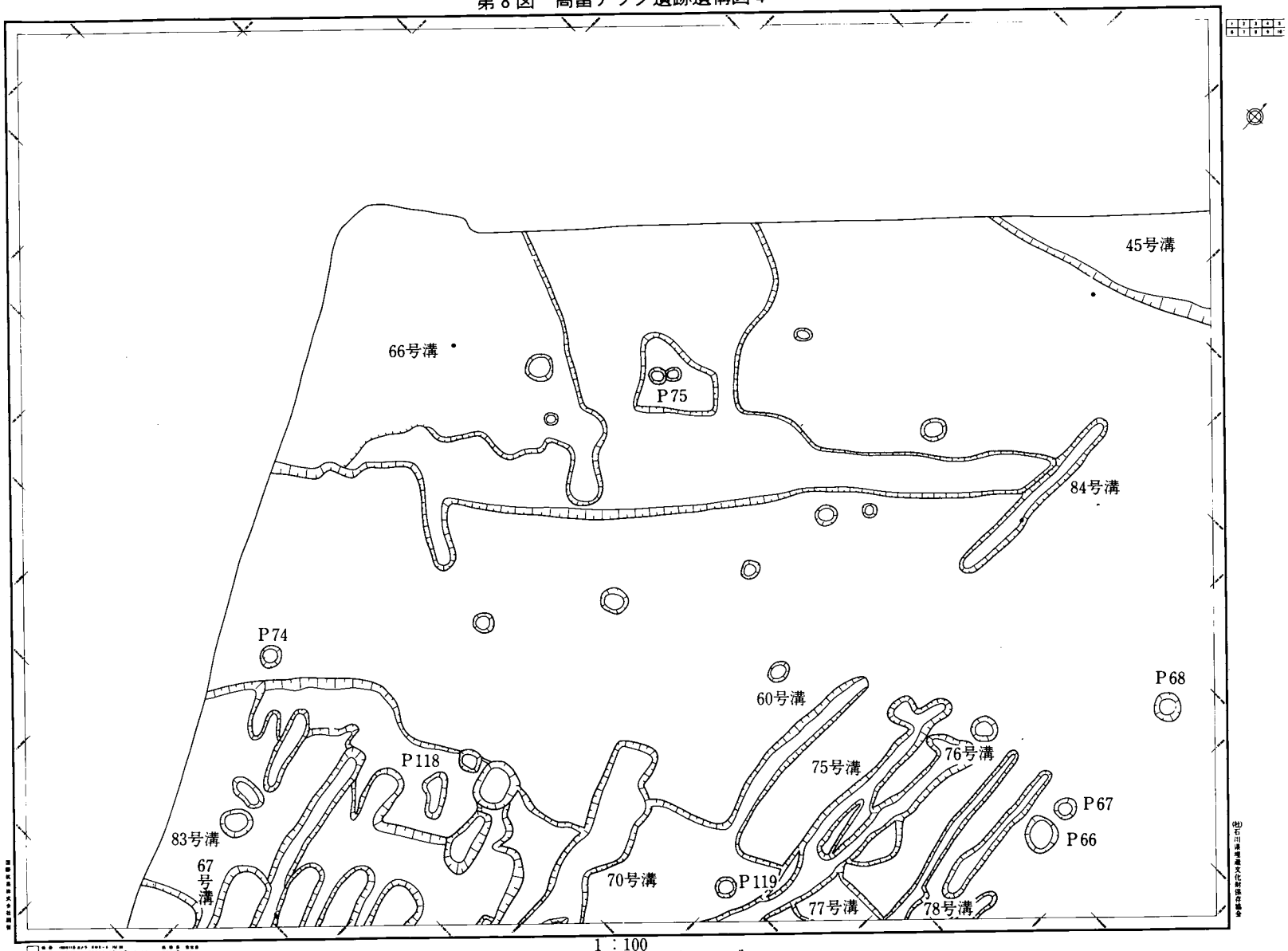
第６図　高畠テラダ遺跡遺構図３



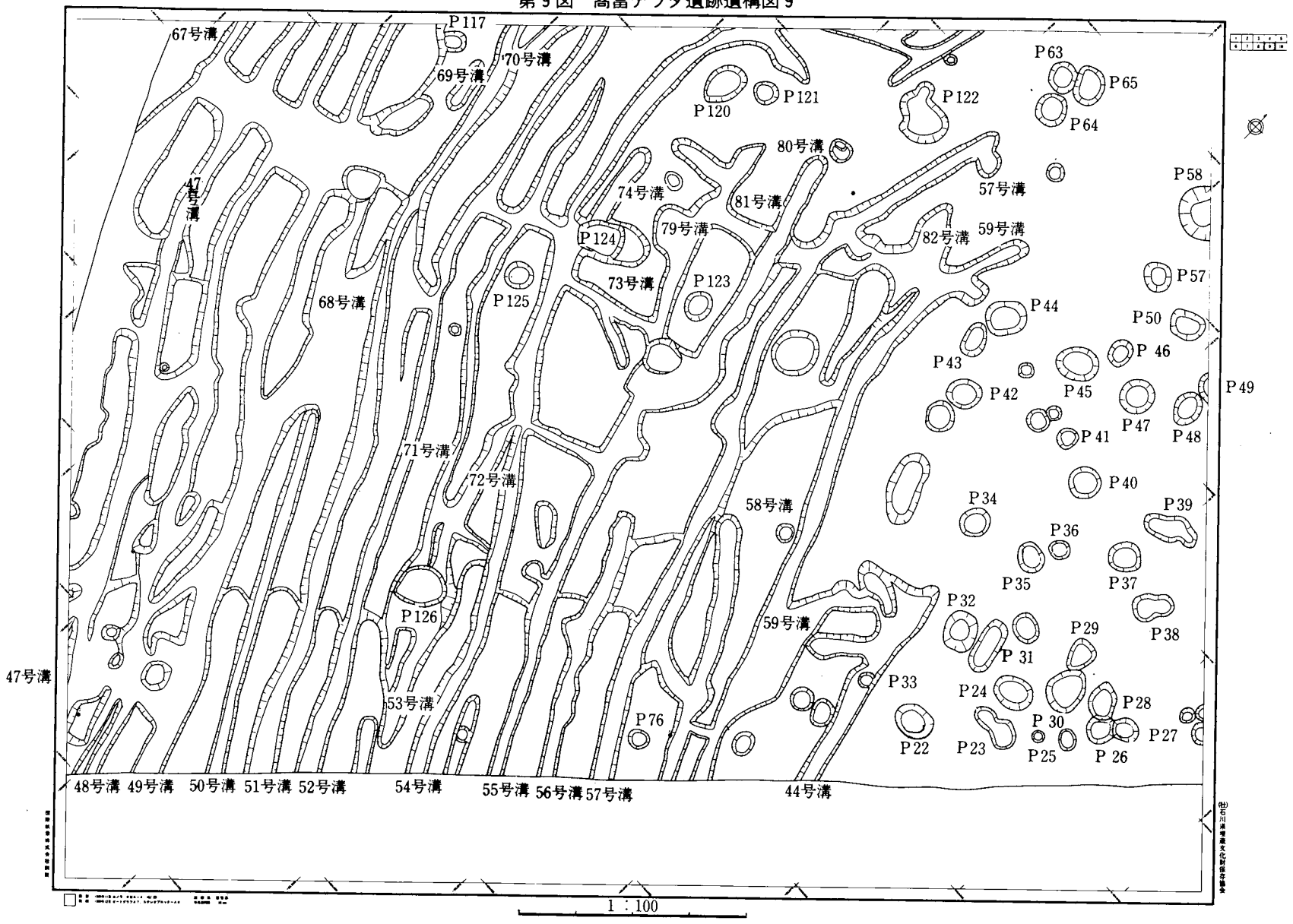
第７図　高畠テラダ遺跡遺構図８



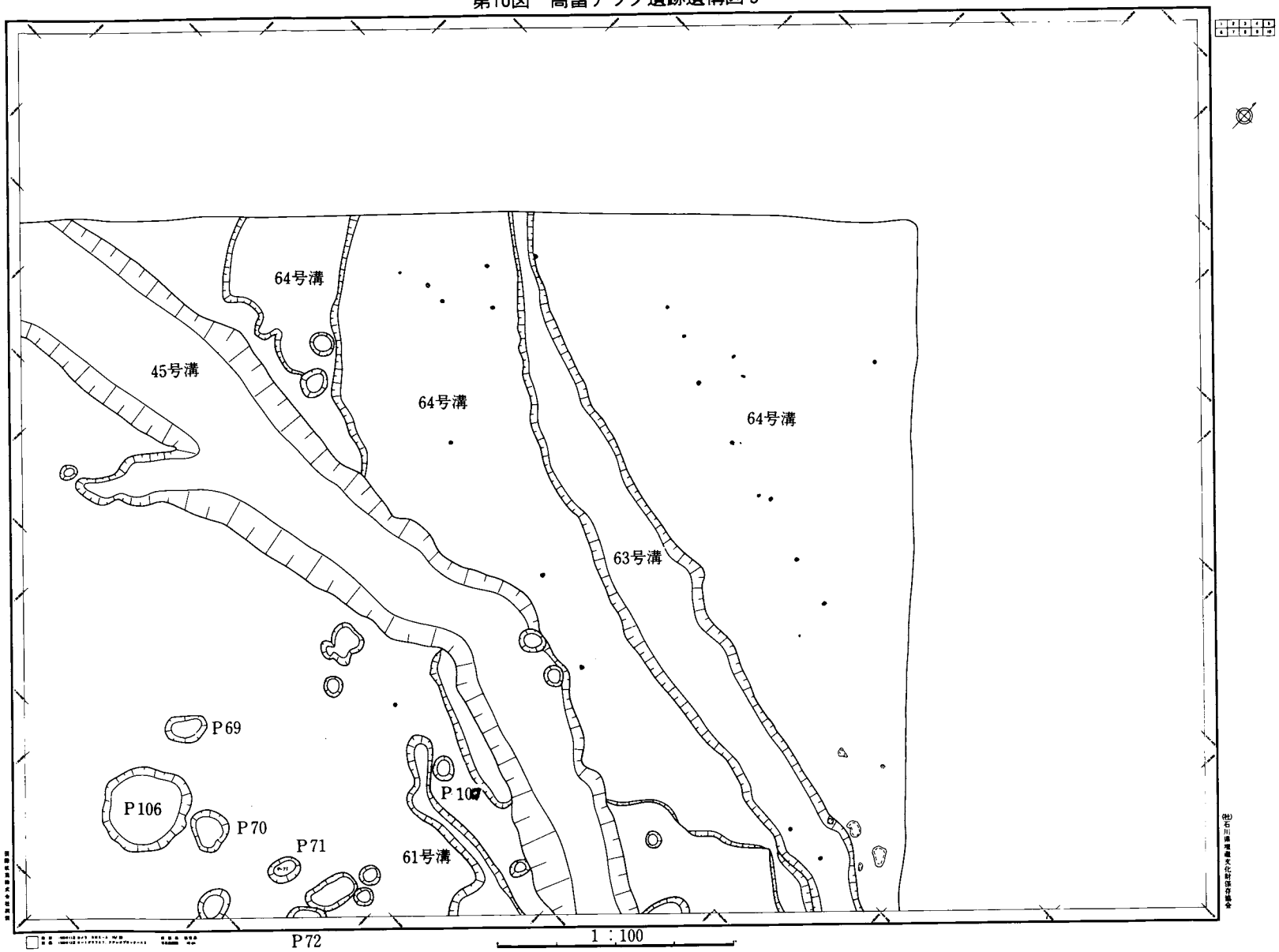
第8図　高畠テラダ遺跡遺構図4



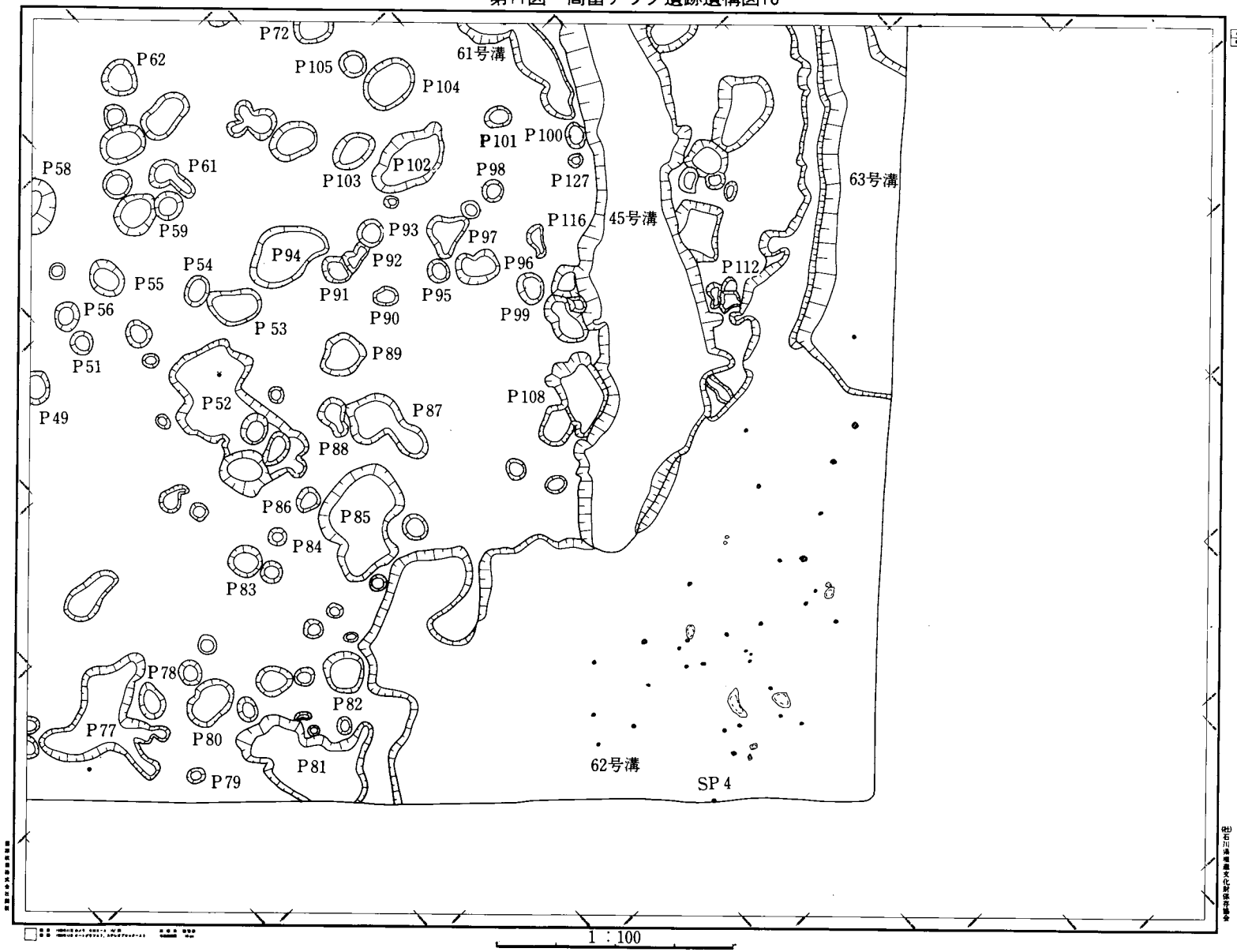
第９図　高畠テラダ遺跡遺構図９

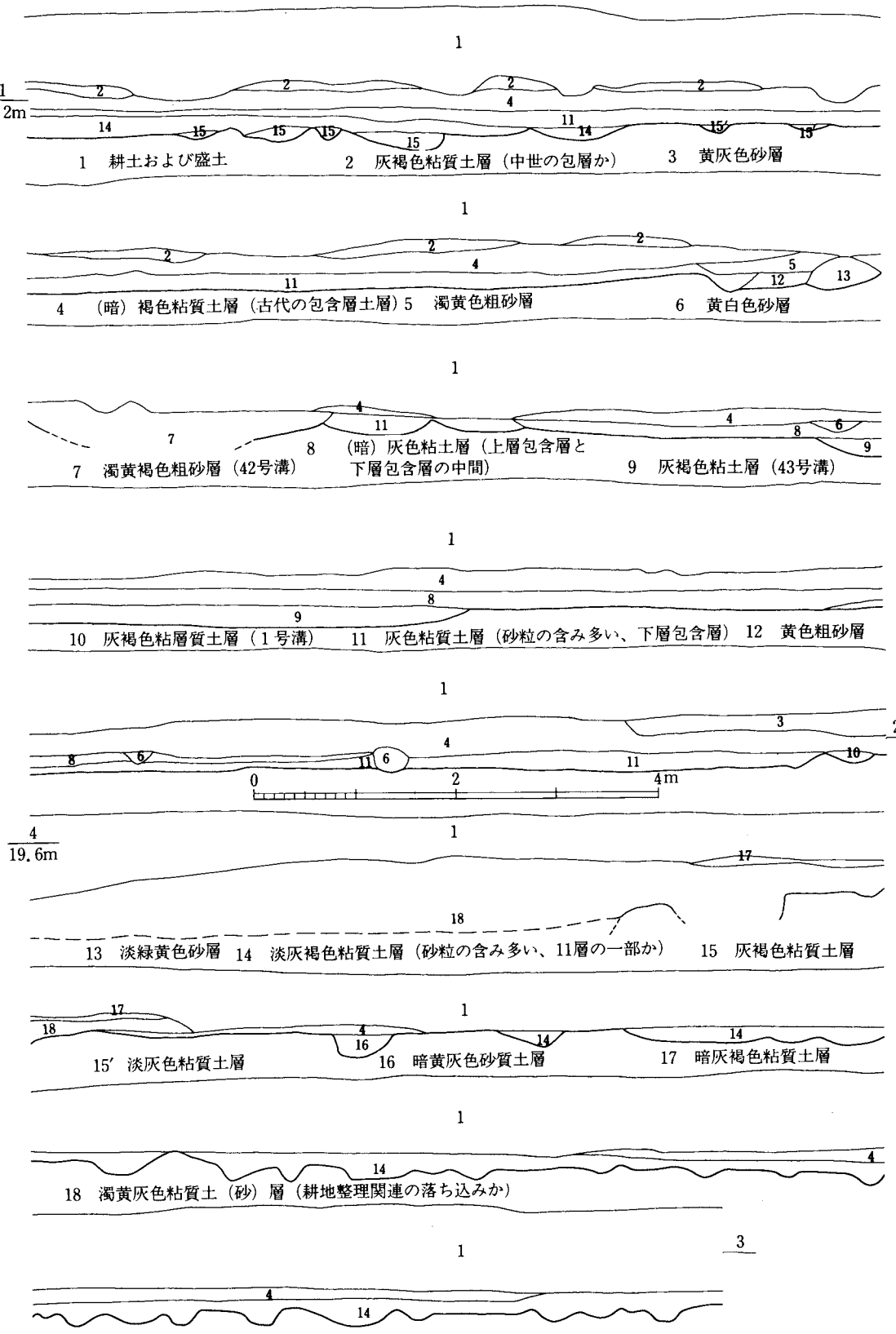


第10図　高畠テラダ遺跡遺構図５



第11図　高畠テラダ遺跡遺構図10





第12図　調査区土層断面実測図（1/60）

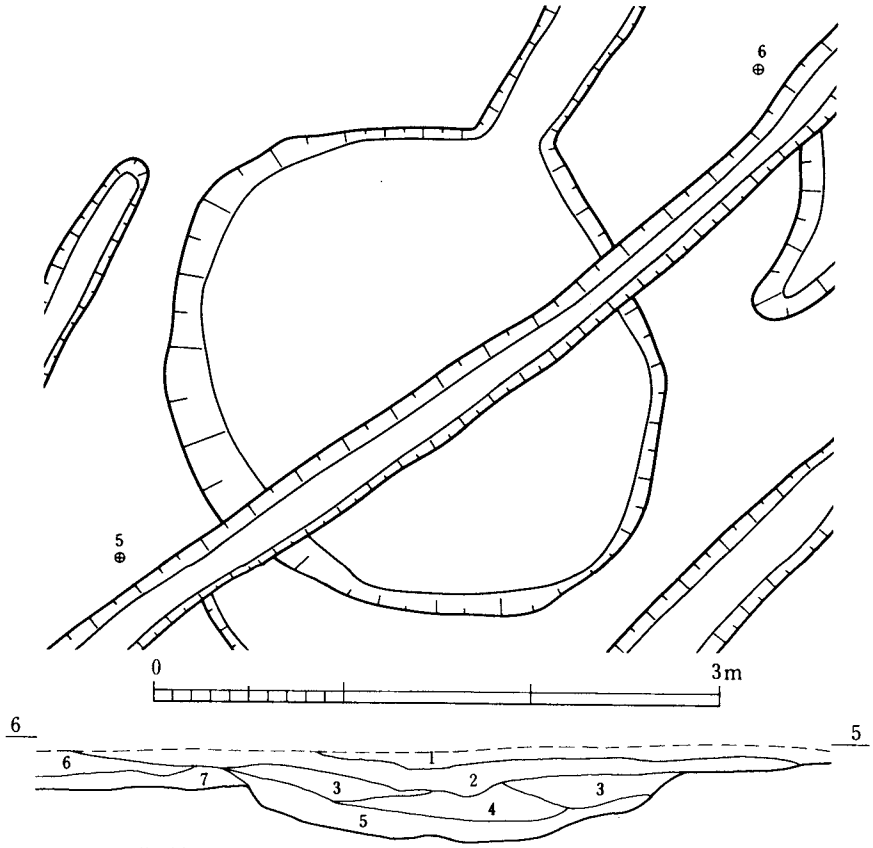
2．遺構と遺物

(1) 土坑

1号土坑（第13図・第14図1～5）

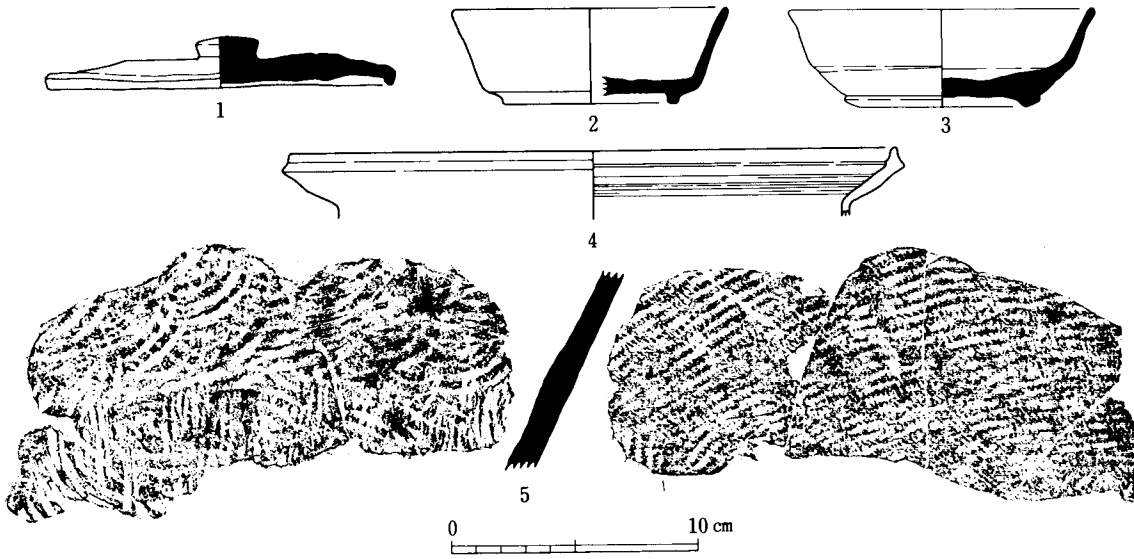
C－3区に位置する。畝溝状遺構中に唯一確認できた土坑である。平面形は楕円形で2.5×2.9m、深さ40cmの規模を持つ。上層遺構の9号溝に切られ、北側で26号溝につながる。水溜め的な機能を持つ穴であろうか。

1は歪みの大きい杯蓋。外面には降灰、内面やや内側には重ね焼きの痕跡が見られ、中央には長さ5.4cm‘のへら記号が線状に入る。2は小振りの製品で腰部から斜め上方へ直線的に立ち上がる。比較的丁寧な作りの高台内には墨痕が残る。3は腰折れの器形を持ち、口縁部は端反りとなる。高台内の作りは粗い。4は甕口縁部片。端部を断面三角形状に鋭角に仕上げる。39号溝からも同一固体と見られる細片が出土している。5は数少ない甕の体部片である。外面は磨耗する。



1　黄灰色粘質土層（下層包含層）
2　暗黄灰色粘質土層（炭粒少量含）
3　暗黄灰弱粘土層 ｝1号土坑
4　灰褐色粘土層 ｝1号土坑
5　褐色粘土層・1号土坑
6　オリーブ灰褐色粘土層
7　暗黄褐色粘土砂層

第13図　1号土坑平面・土層断面実測図（1/40）



第14図　1号土坑出土遺物実測図（1/3）

(2) 溝

2・3号溝（第19図1～2、第26図9）

A－1区に位置する。最終遺構面よりも20～30cm高い上層遺構面での検出であるが、共に不定形で深さも数cmと浅い。溝状遺構としたが、人為的なものではなく広範囲にわたる地形のくぼみと思われる。

1は珠洲焼の甕口縁部片である。断面は方形で口唇部は弱い面取りを施す。14世紀後半～15世紀にかけてのものか。2は土師器皿。精選された胎土を持ち、体部下半に横ナデによる稜が見られる。また口縁部には形成時に粘土を継ぎ足したような接合痕が入る。

第15図2の銅銭は「咸平元寳」と読める。北宗銭で初鋳年は咸平元年（998）である。なお珠洲焼と銅銭は2号溝、土師器皿は3号溝からの出土である。

13号溝（第15図4）

B・C－4区に位置する。長さ10.8m、幅40cm、深さ5～15cmで南北方向に完結する。覆土は濁灰褐色粘質砂の単層。溝のすぐ北側には一段深い落ち込みの23号溝が広がる。

4は甕口縁部片。端部の屈曲が弱く、外面には煤が付着する。

14号溝（第15図1～2）

B・C－4区に位置する。長さ12.7m、幅40～50cm、深さ5～14cmで南北方向に完結し、西側に1．2mの間隔をあけて13号溝が並走する。覆土は濁灰褐色粘質砂の単層。東側に並ぶ同規模の15・19号溝が西に折れて溝の中央部に重なる。

1は精良な胎土を持ち、外底面にはヘラ切り痕を残す。2は内外面に赤彩を施す土師器埦。内面は丁寧にミガキがかかり、胎土中には少量の海綿骨片が認められる。

17号溝（第15図３）

Ｂ－４区に位置する。現長11.9m、幅50cm、深さ７～12cmで南側は調査区外に伸び、北側は完結する。覆土は濁灰褐色粘質砂の単層。東側を並走する18号溝との間隔は60cmと狭い。

３は口縁部を欠くが、器高の高くなる製品である。体部は偏平な高台脇から立ち上がる。胎土は軟質である。

20号溝（第15図５～６）

Ｂ－４区に位置する。18号溝に切られ、南側は調査区外に伸びる。現長３m、幅70cm～１m、深さは４cmと浅い。

５は口縁端部につまみ上げるような横ナデを施す甕である。西側３～４mに位置する19号溝出土破片と接合した。６は焼成不良で素焼き状態の軟質な胎土を持つ。

23号溝（第15図７～28、第16図１～６）

Ｃ・Ｄ－４区に位置する。幅6.5～7.5m、深さ15cm前後で西側に向かってやや深くなり、東側は農道下へ伸びる。覆土は暗黄灰色粘質砂の単層。南北方向に並ぶ畝溝との切り合いは明瞭ではない。溝内からは多くの遺物が出土している。

７～14は坏蓋である。８は高いつまみを持ち、その周囲を水平に削り裾部との境を明瞭に仕上げる。10には比較的大きなつまみが付く。外面全体に降灰が見られる。11以下はつまみを欠く。12の外面には降灰、内面には墨痕が残る。やや平滑になっているため硯に転用された可能性もある。13～14も同様の器形を持つが、裾端部を屈曲させ水平気味に仕上げる。15はハの字形に踏ん張る高台脇から体部が立ち上がる。器高は高く口縁部は外反する。16は端正な高台を持ち、胎土は比較的堅緻である。17の底部は厚く、偏平な高台内には線状のヘラ記号が入る。18は底部から体部にかけて滑らかに立ち上がり、外面口縁部下には重ね焼きの痕跡を残す。20～22は緩やかに外反する口縁を持つ。23の体部は比較的まっすぐに立ち上がり口縁部は横ナデにより弱く外反する。胎土中にはごく僅かながら海綿骨片が入る。26は歪みのある坏身で、外底部脇には「諸」と読める墨書を記す。砂礫の含みは少なく胎土は砂っぽい。27～28は平坦な底部から体部が屈曲して直線的に立ち上がる共通の器形を持つ。また外底面にはハケ状の調整痕を部分的に残す。

１は口縁部が緩く内湾する埦で端部は丸くおさめる。内外面赤彩。２は外面赤彩、内面黒色の埦。口縁端部は先細りに外反し、胎土中には少量の海綿骨片が認められる。３～５は甕、６は鍋か。外面には煤の付着が見られる。

27号溝（第16図８）

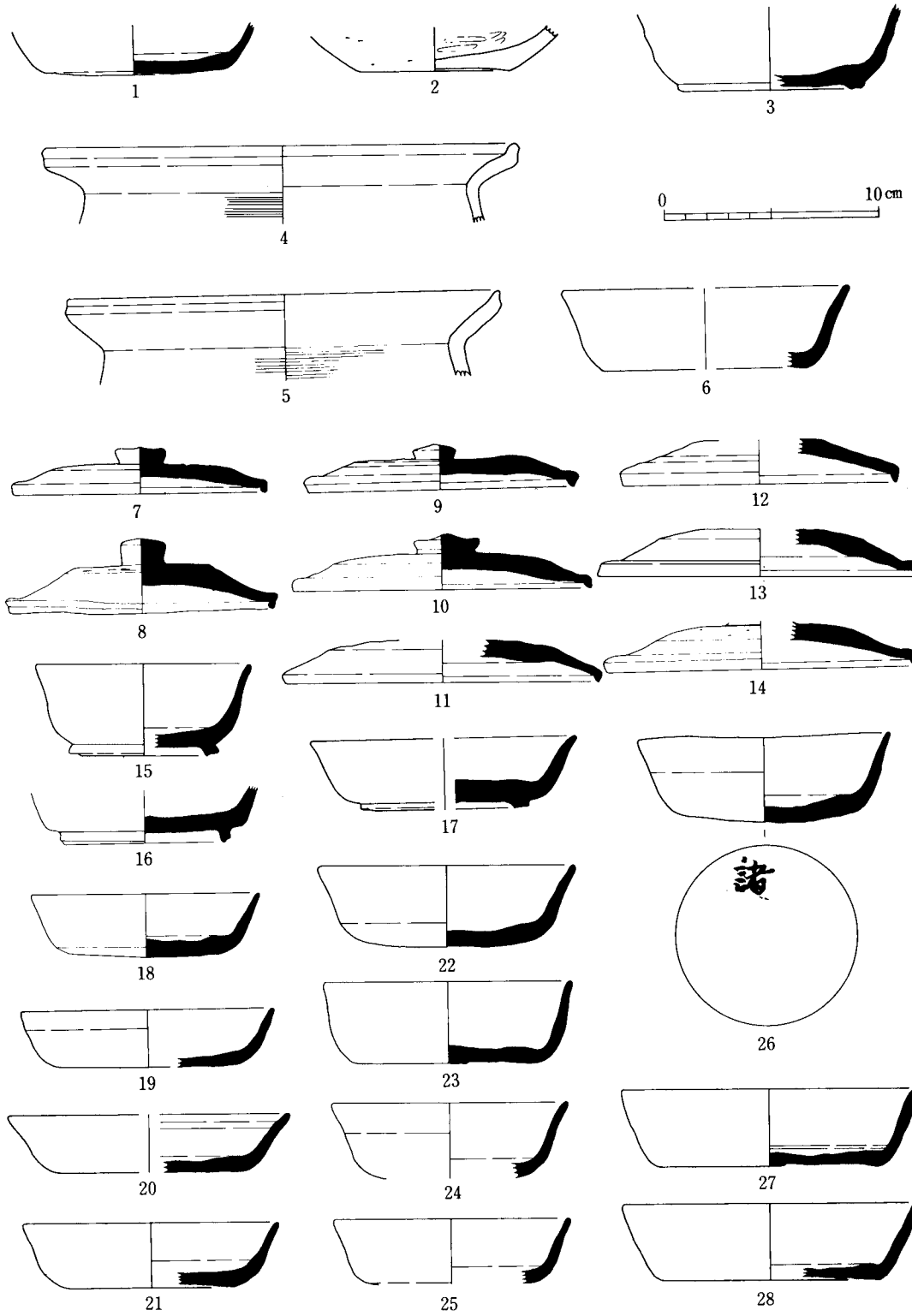
Ｃ・Ｄ－４区東に位置する。23号溝内にあり現長5.5m、幅50cm、深さ10～15cmで北側は農道下に伸びる。遺構レベルは他の23号溝外の溝に比べ20cm前後低い。

８は器壁の薄い甕。口縁部の内面1.5cm程だけが褐色に変色している。

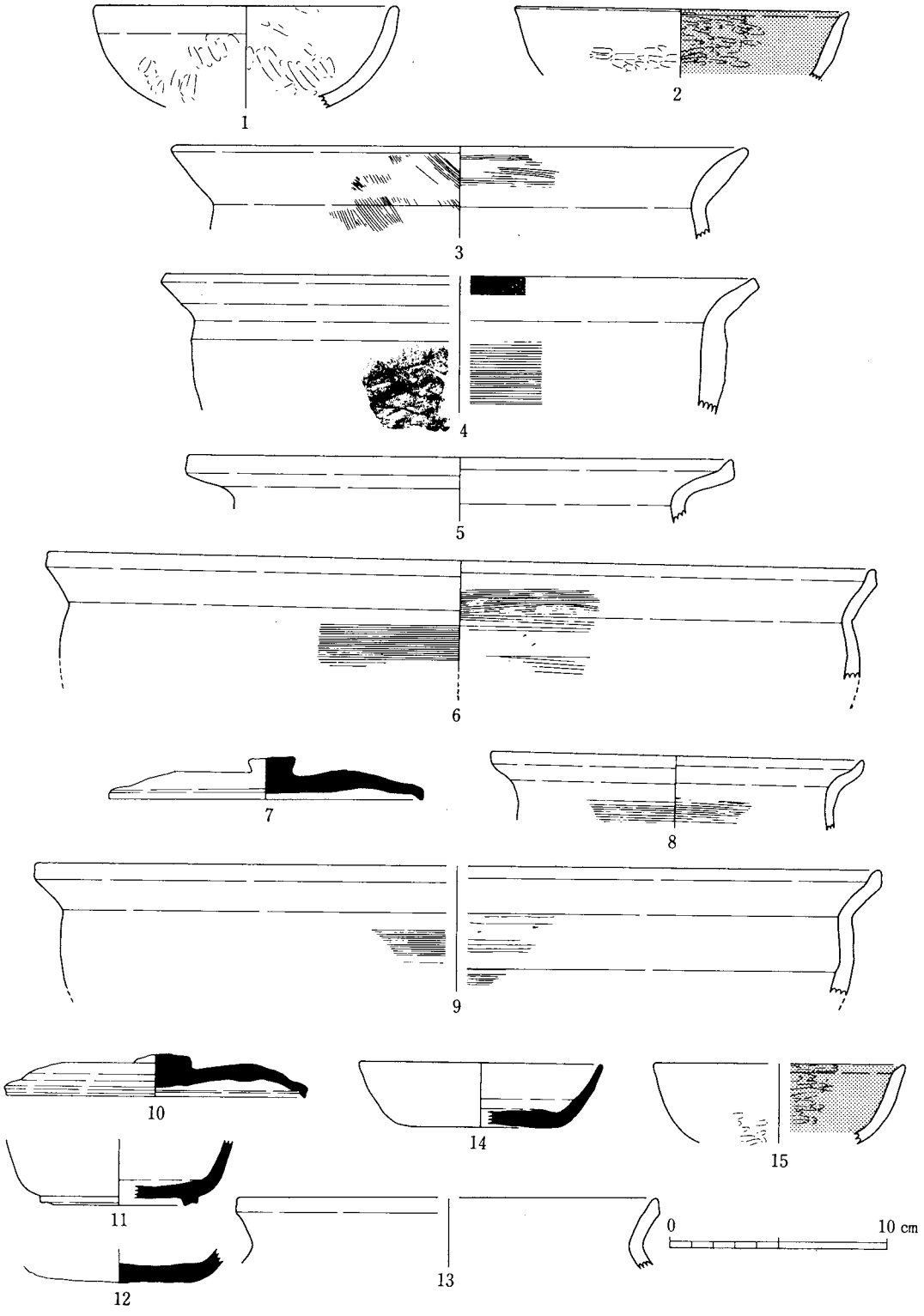
28号溝（第16図９）

Ｃ・Ｄ－４区に位置する。23号溝内にあり長さ5.9m、幅40～50cm、深さ５～10cmで南北方向に完結する。覆土は灰色粘質砂の単層。東側に並走する27号溝との間隔は1.5mである。

９は鍋片か。胎土中には黒雲母が目立ち、外面全体に煤が付着する。



第15図　13号溝(4)、14号溝(1・2)、17号溝(3)、20号溝(5・6)、23号溝(7～28)出土遺物実測図(1/3)



第16図　23号溝(1～6)、27号溝(7)、28号溝(9)、29号溝(8)、30号溝(14)、31号溝(10～13)、32号溝(15)出土遺物実測図(1/3)

29・30・31号溝（第16図７・第17図１～18、第16図14、第16図10～13）

Ｃ・Ｄ－４区に位置する。三本の溝の新旧は定かでなく、31号溝が23号溝内で一段低くなり29号溝と30号溝の二手に分かれ完結する。深さと覆土は31号溝が20cmで灰褐色粘質土層、29・30号溝は10cmで暗灰色粘質土層と若干異なる。29号溝からは多量の遺物が出土しているが、23号溝との混じりも十分に考えられる。

７の裾部片側には焼成時の重ね焼きの痕跡が残り、その部分が上からの重みでへこんでいる。１は外面に釉が掛かり、胎土中には多量の砂礫が入る。端部の反りは弱く僅かに引っ掛かりを残す程度である。２の胎土中には大粒の砂礫と僅かな海綿骨片が見られる。23号溝出土破片と接合。３はやや口の広がる小振りの坏である。高台断面は方形で丁寧に作られる。４は全体に歪み、高台の貼付痕を明瞭に残す。高台内中央にはヘラ記号が線状に入る。６の器形は歪み、口縁は波打つ。高台脇には部分的に平坦面が見られる。７～８は平坦な底部から斜め上方へ直線的に立ち上がる。７の口縁部外面には部分的に油痕状の付着物が認められる。９の底部境は丸みを帯び、口縁端部を僅かに外反させる。外底部にはヘラ切り痕を明瞭に残す。11～12は口縁端部を外反させ先細りに仕上げる。13の破片は23号溝および包含層からも確認されている。口縁部はくの字形に鋭角に開き、端部は外側に引き出されるように肥厚する。14の外面には平行タタキが入り、横方向に５～６cmの間隔をあけた３本の弱い沈線が見られる。15は口縁部を大きく外反させる長胴の甕。器壁は薄く外面には部分的に煤の付着が認められる。16は外面赤彩、内面黒色の埦。内面は丁寧に磨かれ、胎土中には少量の海綿骨片が観察される。17～18は甕の口縁部か。17は口縁端部に面を取らず玉縁状に仕上げる。以上29号溝を中心とした出土遺物である。

14は30号溝出土資料である。やや浅めで口縁部は緩やかに内湾して立ち上がる。外面口縁部に沿って重ね焼きの痕跡が残る。

10の外面には全体に降灰が見られる。23号溝出土破片と接合する。11は高台の高さおよび幅も一定し比較的丁寧に作られている。12は外底部隅に墨書が確認できる。単字句と思われるが判読不能である。以上31号溝を中心とした出土遺物である。

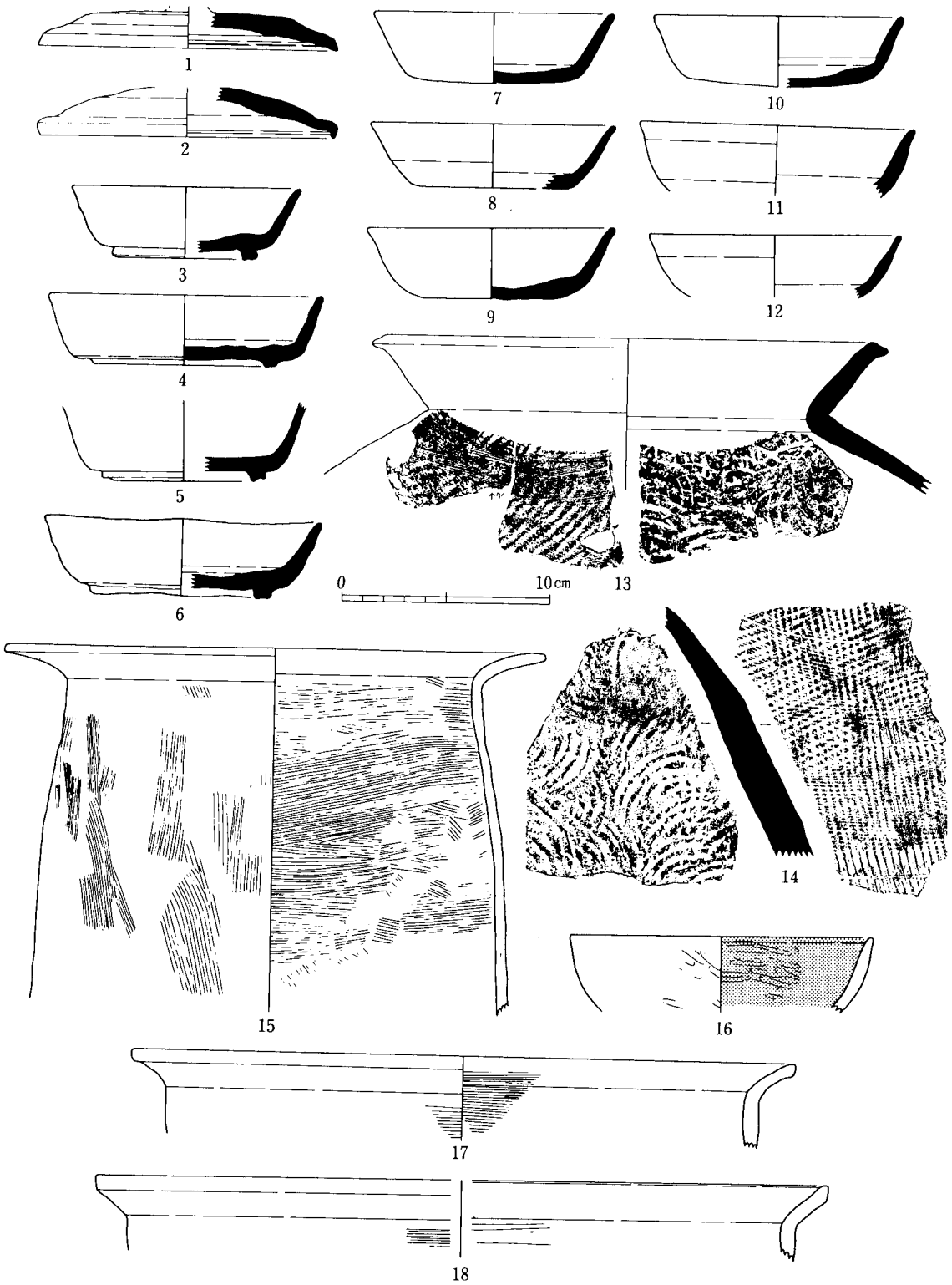
32号溝（第16図15）

Ｃ・Ｄ－４区に位置する。長さ13.3m、幅40cm、深さ10～20cmで南北方向に完結し、北側は23号溝内に伸びる。遺構レベルは23号溝内に入ると徐々に下がり、南側とは溝底で20～30cmの標高差が認められる。覆土は灰褐色粘質砂の単層。両脇に並走する溝との間隔は1.4m前後である。

15は外面赤彩、内面黒色の埦である。口縁部にかけて器壁は厚くなり、端部は緩やかに外反する。胎土中には海綿骨片が目立つ。

38・39号溝（第18図１～５）

Ｂ・Ｃ－３・４区に位置する。1.5m間隔で並走し、東側の37号溝等とは方向が、北側の32号溝等とは間隔が多少ずれる。38号溝は長さ8.5m、幅40cm、深さ６～８cmで南北方向に完結する。39号溝は長さ11.8m、幅40cm、深さはやはり５～８cmと浅く、覆土は両溝共に濁灰褐色粘質土の単層である。



第17図　29号溝出土遺物実測図（1／3）

1の外面には降灰が見られる。端部の反しは緩やかで先端も丸くおさめる。2は高台の作りは粗く、断面形は偏平な台形状となる。3は大振りの坏で高台を欠く。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に立ち上がる。以上38号溝。

4は雑な作りの底部を持ち、高台周辺に墨痕を残す。5は外面全体に煤の付着が見られる鍋片。胎土内には細かな金雲母が目立つ。以上39号溝。

42号溝（第18図6～12、第19図3）

A・B・C－1～3区に位置する。調査区を東西方向に横断する幅2～3.5m、深さ30～40cmの大溝で、比高差46cmで西方向に流れる。畝溝群の南にあり、直接は重ならない。覆土は濁黄褐色粗砂層で、出土遺物は古墳時代～中世と幅があるが、当遺跡内で最も古手の遺物が定量認められる溝である。

6は底部にケズリ調整を残す坏身。外面には降灰が見られる。7は緻密な胎土を持つ壺蓋。8も白っぽい精選された胎土を持つ。9は口縁部を内湾させる埦。端部は丸くおさめる。胎土中には海綿骨片が定量入る。10～11は内外面に赤彩状の痕跡が認められる。12は口縁部を大きく外反させる。胎土は粗く砂粒の含みも多い。

3は土師器皿。器形は大きく歪み口縁部は緩やかに外反する。中世の遺物である。

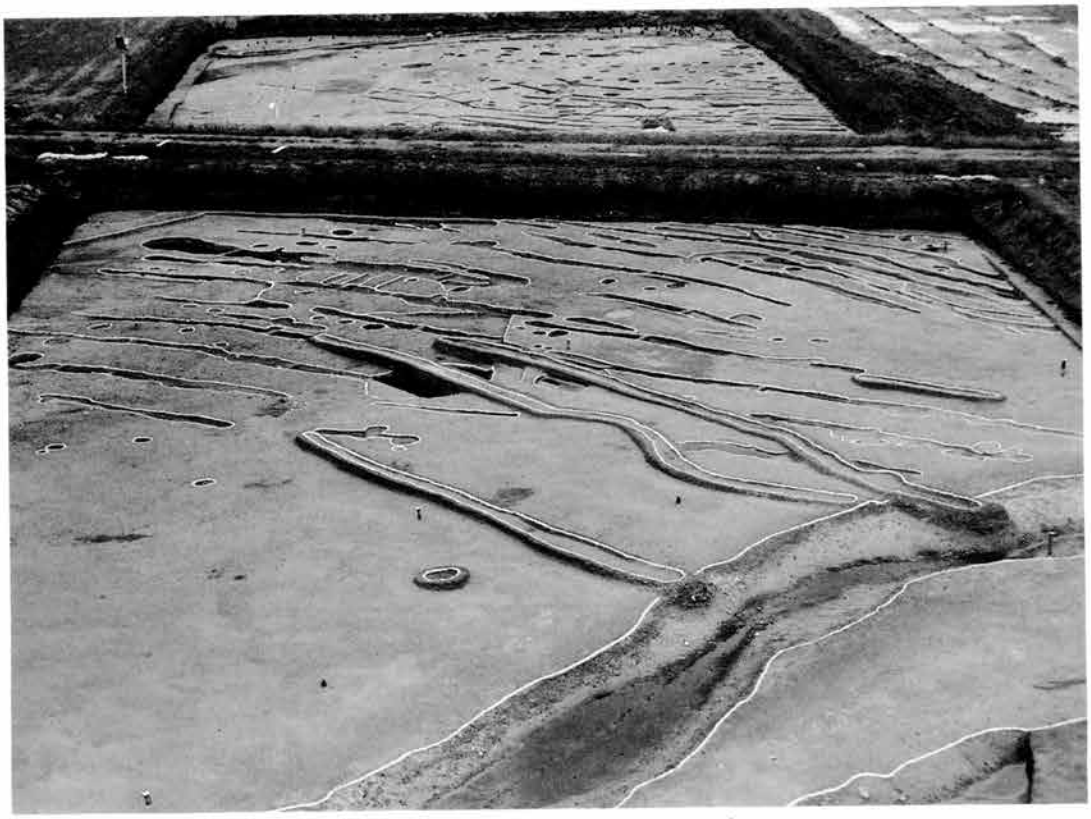
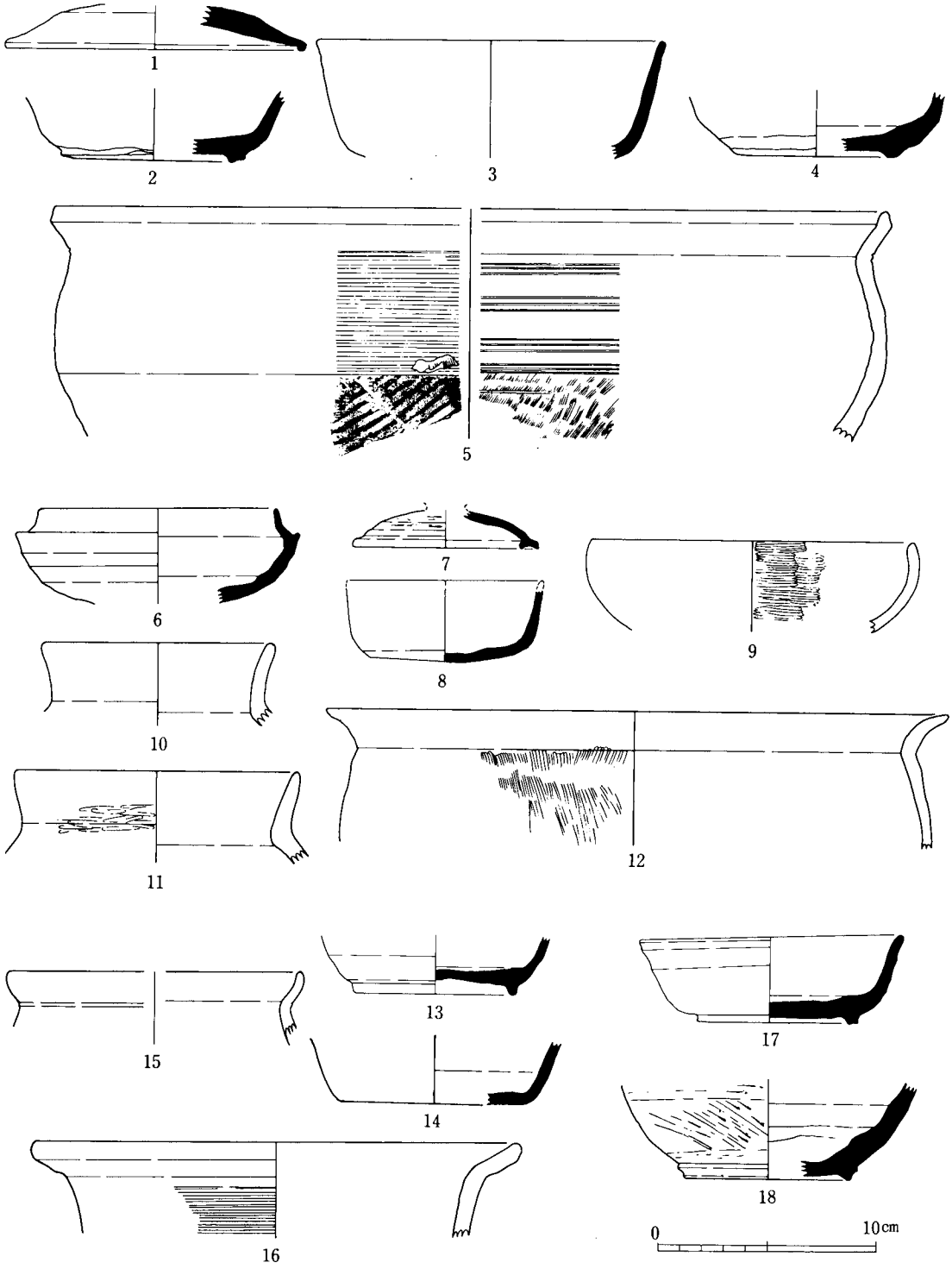


写真3　西側調査区完掘状況（西より）



第18図　38号溝（1～3）、39号溝（4・5）、42号溝（6～12）、56号溝（13～16）、58号溝（17）、63号溝（18）出土遺物実測図（1/3）

56・58号溝（第18図13～17）

調査区東側のB・C－5・6区に位置する。溝のはじまりが同位置で、1.5～1.8m間隔で並走する。両溝共に幅30～40cm、深さ10cm前後で北側に完結し、南側は調査区外へ伸びる。

13の高台断面は高めの台形状となるが、端部は丸めに仕上げる。胎土中には海綿骨片が定量入り高台内には墨痕が残る。15は短めの口縁部を緩やかに内湾させる甕。16の口縁部はやや玉縁状となり、外面には煤が付着する。以上56号溝。

17は58号溝から出土している。胎土内には大小合わせ多くの砂粒が入る。内外面共にざらついており顕著な使用痕は認められない。

62・63・64号溝（第18図18、第19図4～12、第20図1～7）

B～D－7区に位置する。62・64号溝は同一の落ち込みであり、東から西へと流れる63号溝はそれより新しい。62号溝には南北方向の、そして64号溝には東西方向の杭列が認められる。実測はされていないが近世以降の遺物が一定量出土している。

18は63号溝出土である。壷の底部であろうか。内外面共に磨耗が激しい。明らかな混入品である。

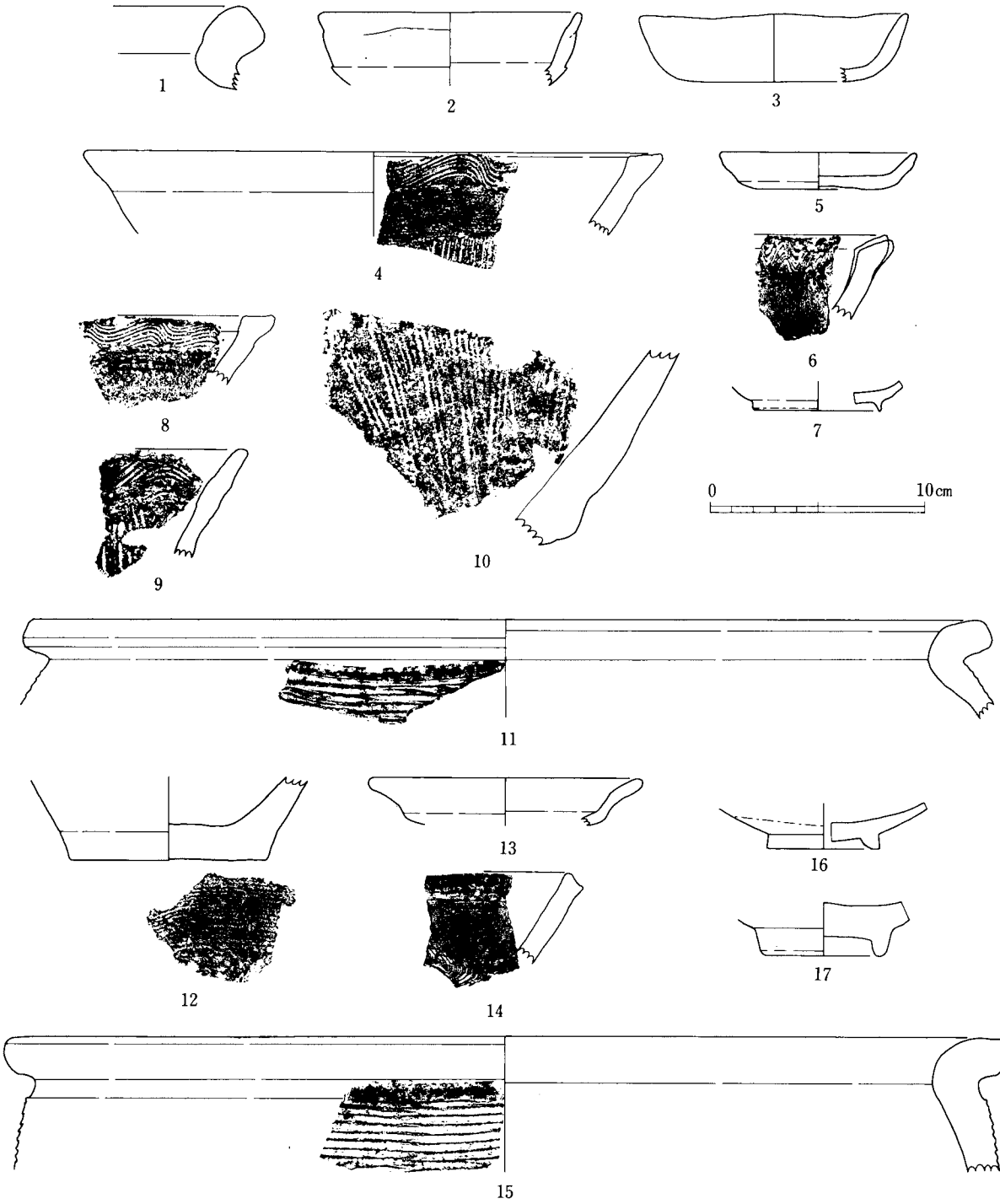
4・6・8～10は珠洲焼きの鉢で、口唇部内端面に波状文を持つタイプである。9は波状文と卸し目の間にほとんど段を持たない。また9、10の胎土が最も粗い。いずれも14世紀後半以降の所産であろう。5は全体にやや歪むが、口縁部が明瞭に立ち上がる硬質の土師器皿。13世紀後半～14世紀前半頃の製品と思われる。7は白磁皿の底部片である。素地は甘く、内外面に貫入が入る。中国製品とすれば16世紀代のものか。11の珠洲焼甕は口縁部が大きく外反する。口縁部内面には面取り状にナデた痕跡が残る。14世紀代の製品か。12は珠洲焼の底部片。外底面には静止糸切痕が見られる。なお4は62号溝、8～12は63号溝、5～7は64号溝からの出土である。

1は一木造りで歯の交換のきかない連歯下駄である。台部は薄く歯もかなり減っているように思われる。2は断面三角形状の台裏部に二列の溝を設け、歯を差し込み固定した陰卯下駄である。台表に歯を留めた痕跡は見られない。4～5は栓状の木製品。3・6～7は用途不明である。1～7はいずれも62号溝から出土している。

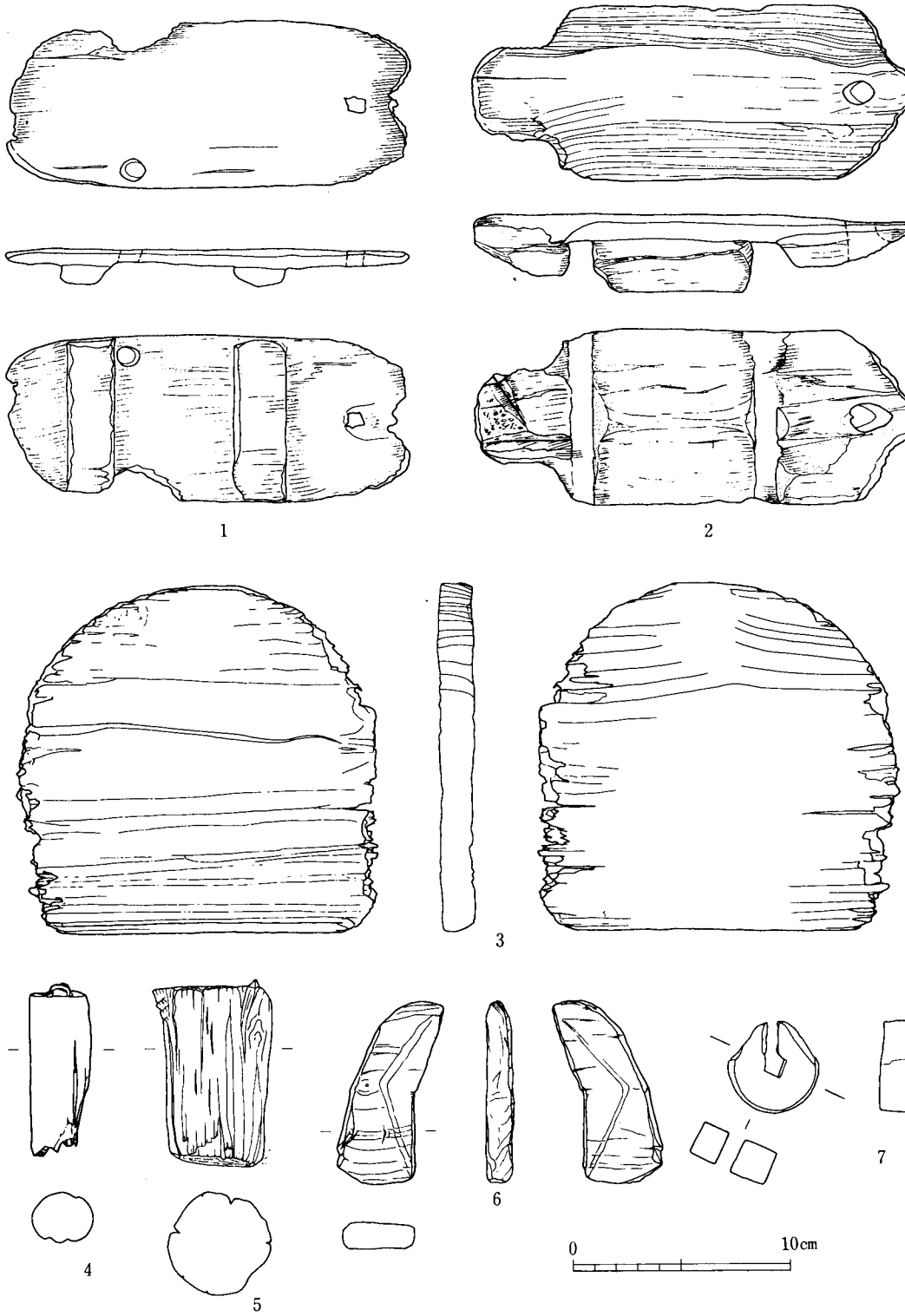
65・83号溝（第21図1～13、第21図18～21）

5区西の農道脇に位置する。両溝共に平面形は明瞭でなく、畝溝と重なり合うような深さ5cm程の落ち込み状遺構である。包含層の一部である可能性もある。

2は外面に降灰が見られる。端部の反しは明瞭でほぼ直角に屈曲し、断面は正三角形状となる。3は高台脇に弱い平坦面を持ち体部は直線的に立ち上がる。高台内は磨耗してすべすべしている。4は焼きの甘い軟質の底部片である。高台はハの字形に踏ん張る。5は実測図が天地逆で壷の蓋か。外面に釉が掛かる。6は外面に重ね焼きの痕跡を残すやや浅めの坏。7は底部境が明瞭ではなく全体に丸みを持った器形となる。9は底部境が明瞭で平坦な外底面から体部が直線的に立ち上がる。10は外面赤彩、内面黒色の埦である。内面のミガキは丁寧で胎土中には少量の海綿骨片が認められる。12は砂礫に少ない粉っぽい胎土中に海綿骨片が含まれる。13は口縁端部に明瞭に面取り肥厚させた甕片。外面には煤が付着する。以上65号溝を中心とした出土遺物である。



第19図　2号溝(1)、3号溝(2)、42号溝(3)、62・64号溝(4～7)、63号溝(8～12)、包含層(13～17)出土遺物実測図(1/3)



第20図　62号溝出土遺物実測図（1/3）

18の外底面には×状のヘラ記号が見られる。19～20は共に外面に煤の付着する器壁の薄い甕であるが、20はやや肩の張る器形となる。21は口縁端部外面に粘土紐を張り付けて玉縁状にしている。以上83号溝。

66号溝（第21図14～15）

D・E－5区に位置する。調査区隅に広がる深さ5cm前後の不定形の浅いくぼみである。南側の畝溝区域とは3～4mの間隔があく。西側調査区の85号溝とつながる可能性がある。65・83号溝と類似した落ち込みであり、明確な遺構として捉えられるかどうかは疑問である。

14は高台脇に8cm前後の幅広の平坦面を持つ。高台は比較的高く端部は鋭角に仕上げる。15は砂礫の含みが極めて少ない精選された胎土を持つ。色調は淡灰色でやや軟質である。

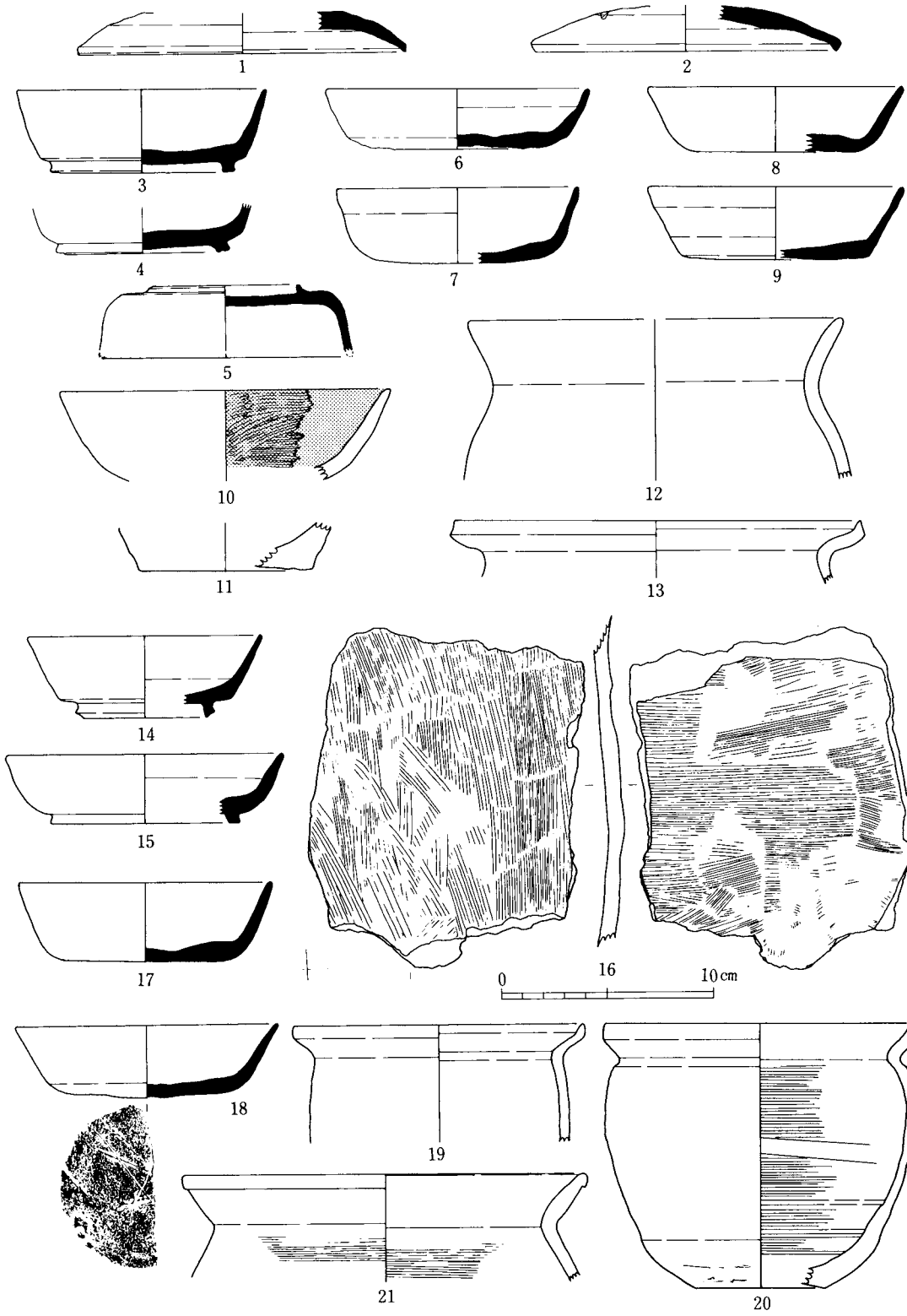
80・82号溝（第21図16～17）

C－5・6区に位置する。幅40～50cm、深さ10cm前後。それぞれ南側で55号溝、59号溝と接続する。

16は甕の胴部片である。外面は縦ハケ、内面には横ハケ調整が見られる。器面の調整は粗く全体に凹凸がある。80号溝出土。

17は完形に近い坏。焼きが甘く軟質なため器面に砂粒が浮き出している。82号溝出土。

写真4　東側調査区完掘状況



第21図　65号溝(1～13)、66号溝(14・15)、80号溝(16)、82号溝(17)、83号溝(18～21)出土遺物実測図(1/3)

(3) ピット

ピットはC・D－6・7区に集中し、ほとんどのピットから遺物は出土するが実測できるものは少ない。また堀立柱建物を構成する明確な柱穴は確認できていない。

ピット3（第22図9）

B－4区の17～18号溝間に位置する。径46×52cm、深さ9cm。9はフイゴの羽口片。胎土内には大粒の砂礫が多量に入る。二次焼成痕は見られない。

ピット7（第22図11）

C－4区の23号溝中に位置する。径38×50cm、深さ8cm。11は鍋の口縁部片か。外面には煤が付着し、胎土中には少量の海綿骨片が認められる。

ピット17（第22図8）

C－4区の38号溝西側に位置する。径24×30cm、深さ2cm。8は高台も含め作りの粗い底部片である。胎土内には5mm前後の大粒の砂礫が数個見られる。

ピット19（第22図5）

B－4区の37号溝東脇に位置する。径75cm、深さ4cm。5は砂礫の含みは少なく、口縁端部は丸くおさめる。

ピット30（第22図6）

C－6区の畝溝群の東側に位置する。径66×82cm。深さ15cm。6は腰部の屈曲の強い坏で内面には漆状の付着物が認められる。

ピット31（第22図3）

C－6区でピット30の西隣に位置する。径42cm×1m、深さ14cm。3は完形に近い坏蓋である。肩部が張り屈曲部にはケズリ痕が顕著に残る。

ピット48（第22図1）

C－6区のピット群の一角に位置する。径46×62cm、深さ17cm。1は焼成不良の軟質の坏蓋で外面上方にはナデによる稜を明瞭に残す。7世紀前半代の資料である。

ピット76（第22図7）

B－5区の57～58号溝間に位置する。径35×40cm、深さ25cm。7は口径が10cm代と小さく、胎土は全体に砂っぽい印象を受ける。海綿骨片が少量認められる。

ピット77（第22図10）

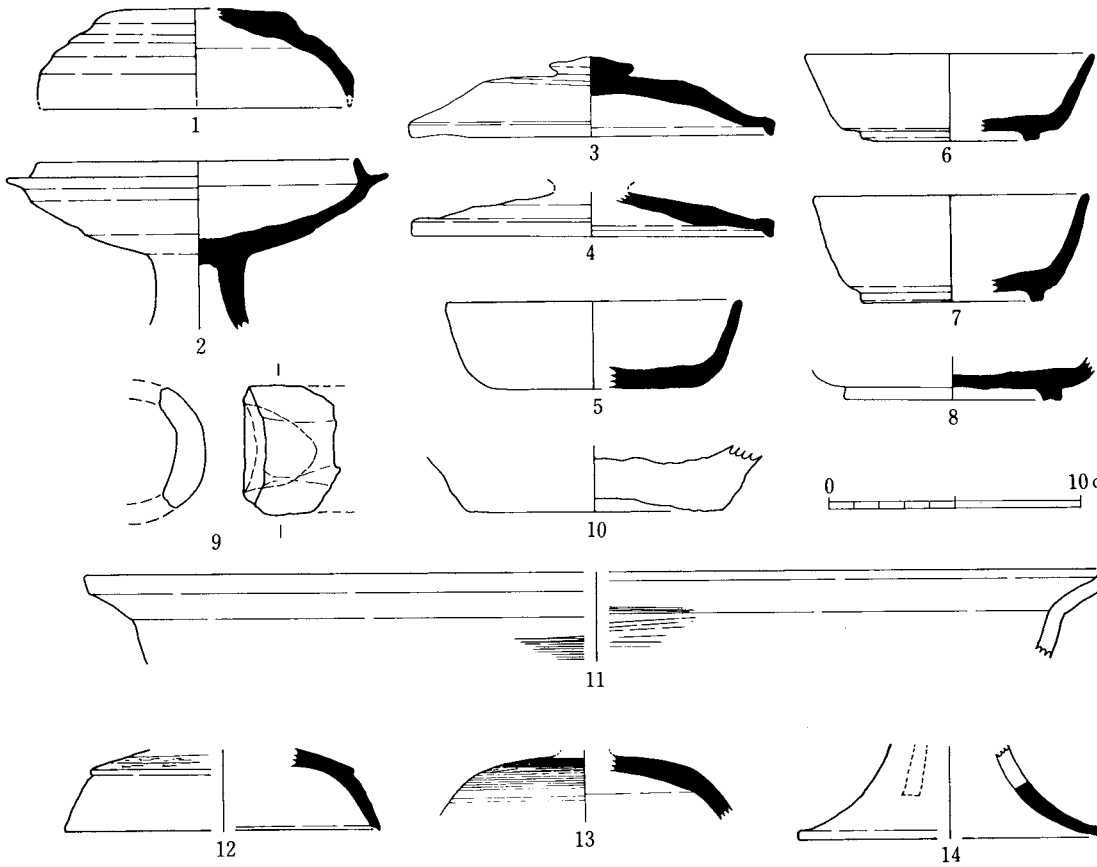
C－6・7区に位置する不定形のピット状遺構である。最大幅1.5m、深さ10cm。10は甕の底部片か。

ピット120（第22図2）

D－5区の54号溝東側に位置する。径58×86cm、深さ9cm。2は65号溝、下層包含層からの出土片と接合する高坏で、7世紀前半代の資料である。

ピット202（第22図4）

B－4区の14～15号溝間に位置する。径46cm、深さ14cm。4は偏平な器形を持ち、胎土は全体に砂っぽい。



第22図　ピット（1～11）、下層包含層（12～14）出土遺物実測図（1/3）

(4)　包含層

下層包含層（第22図12～14、第23図1～39、第24図1～33、第25図1～22）

下層包含層は調査区全域で確認できるが、特に3区以東で明確となる。中央部分に集中する畝溝状遺構のほとんどは下層包含層直下で検出されたものである。

12～14は下層包含層中に僅かに認められる7世紀前半代の資料である。

1～15は坏蓋。1は小さいつまみを持ち、口縁端部の反しは不明瞭。内面全体に平滑で墨痕が残る。3は器壁が厚くやや肩が張る。外面には降灰が見られる。4は器壁が薄く肩部の屈曲が強い。口縁端部を僅かに外側につまみ出す。5は比較的端正に作られる。胎土内の砂礫の含みは少ない。6は墨痕は見られないが内面は平滑である。つまみを打ち欠き転用硯とした可能性がある。7は胎土内に多量の砂礫が入る。折り返された口縁端部の断面は方形状となる。9～10は偏平な器形を持ち、外面に釉が掛かり胎土は灰紫色を呈する。12の器形は大きく歪み胎土内には細かい砂礫が多量に入る。13は山形の器形を持ち、肩部にはケズリ調整が認められる。15は口径18.4cmと出土資料中最大径の製品である。

16～39・1～15は有台坏。16は10cm代の口径を持つ小型の製品である。高台は高く体部は比較

的急角度で立ち上がる。17の高台径は16よりも一回り小さい。胎土内の砂礫は細かく全体に砂っぽい。18は高台脇に水平状の面を持ち、底部境は明瞭となる。20は華奢な高台を持つ。内面には部分的な剝離が見られる。21は高台脇に水平面を持ち底部境を明瞭とする。高台は畳付部が肥厚する。22は断面方形のハの字状に開く高台を持ち、口縁部は先細りに外反する。胎土は精緻で砂礫は少ない。23は高台脇から緩やかに立ち上がり体部にはナデによる弱い稜を持つ。24は器壁が厚く、やや腰部の張る器形となる。26の胎土はきめが細かく、高台は外側に踏ん張る。27～29の胎土内には砂礫の含みは少なく、見込みは平滑となる。33は全体に器壁が薄く、体部は直線的に立ち上がる。35は大きく器形が歪み、胎土内には多量の砂礫が含まれる。39は偏平な高台脇から体部が丸く立ち上がる。胎土はきめが細かく砂礫も少ない。１～８は偏平な高台を持つ一群である。１は胎土内に多量の砂礫を含み、口縁端部は僅かに外反する。９は端正な作りで胎土内には大粒の砂礫は少ない。10は焼成不良の軟質の製品である。高台径は広く高台端部を内側につまみ出している。15の全形は不明であるが高台内側を大きくアーチ状に仕上げる特徴を持つ。

16～32は無台坏。16は外底面に墨痕が見られる。17は外面口縁部直下に重ね焼きの痕跡が残る。18～20は焼成不良の軟質製品であるが、内面には使用痕が観察される。21は比較的底部境は明瞭で、口縁端部は先細りに仕上げる。23の胎土内には多量の砂礫が含まれる。外底部の中央横に×状のヘラ記号が入る。25は砂礫の含みの少ない精良な胎土を持ち、僅かに海綿骨片が見られる。26は腰の張る特異な器形を持つ。底部脇には強めにナデ調整が施される。28・29は底部境の立ち上がりが明瞭である。29は全体に砂っぽく胎土中には海綿骨片が定量認められる。30はやや開き気味の体部で砂礫の含みは少ない。胎土中には僅かに海綿骨片が見られる。32は大きく口縁部が外反する。胎土は層状を成し砂礫の含みは少ない。33は甕の口縁部片か。口縁端部は肥厚し面を持つ。外面には釉が掛かる。

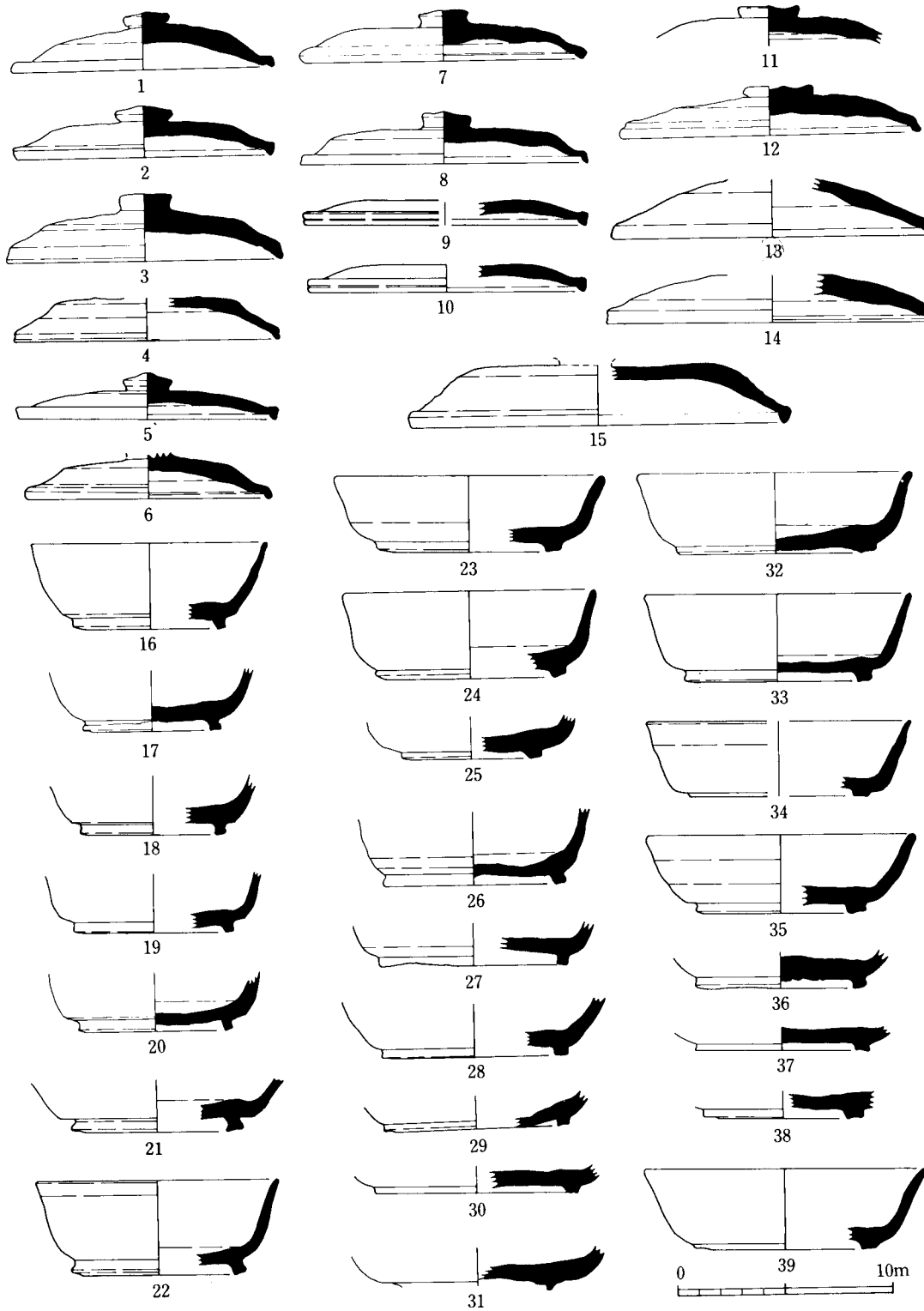
１・２は内面黒色の埦で胎土中には海綿骨片が認められる。また１には焼土塊が目立つ。４～９は口縁部の内屈する小型の甕である。10の外面全体には細かい縦方向のハケ調整が入る。11～13の口縁部は大きく外反し、14～18は口縁端部を面取りする。19・20は鍋口縁部片。22は竈の脚部か。外面にハケ調整が施される。

包含層（第27図１～31、第28図１～６、第19図13～17、第26図１～８・10）

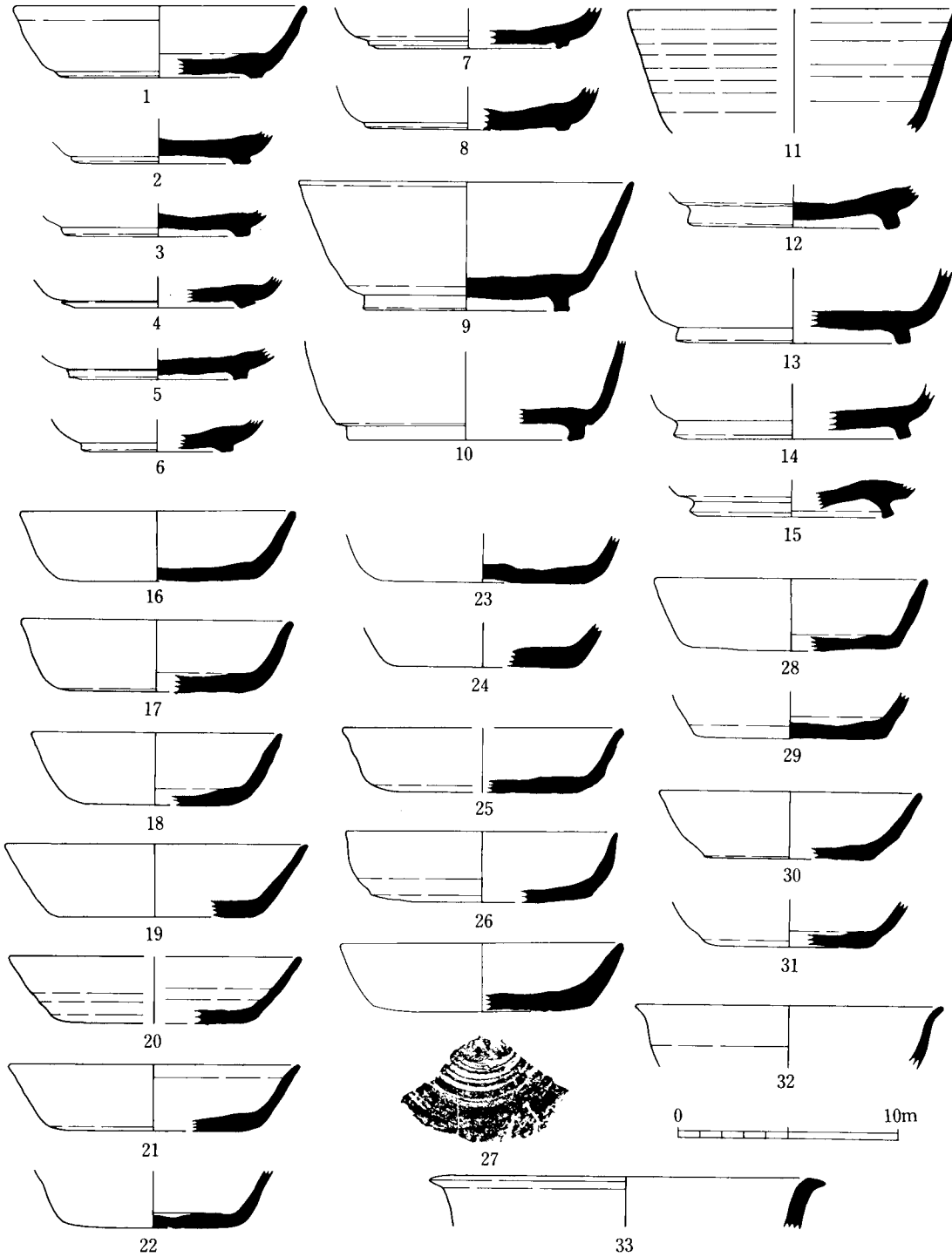
ここでの包含層出土遺物とは、明確に下層包含層として捉えることのできなかったものを指す。時期的には古代～中世が中心である。

１～７は坏蓋。１は外面裾部で大きく湾曲し幅に広い平坦面を作る。６は肩屈曲部にケズリ調整が見られる。

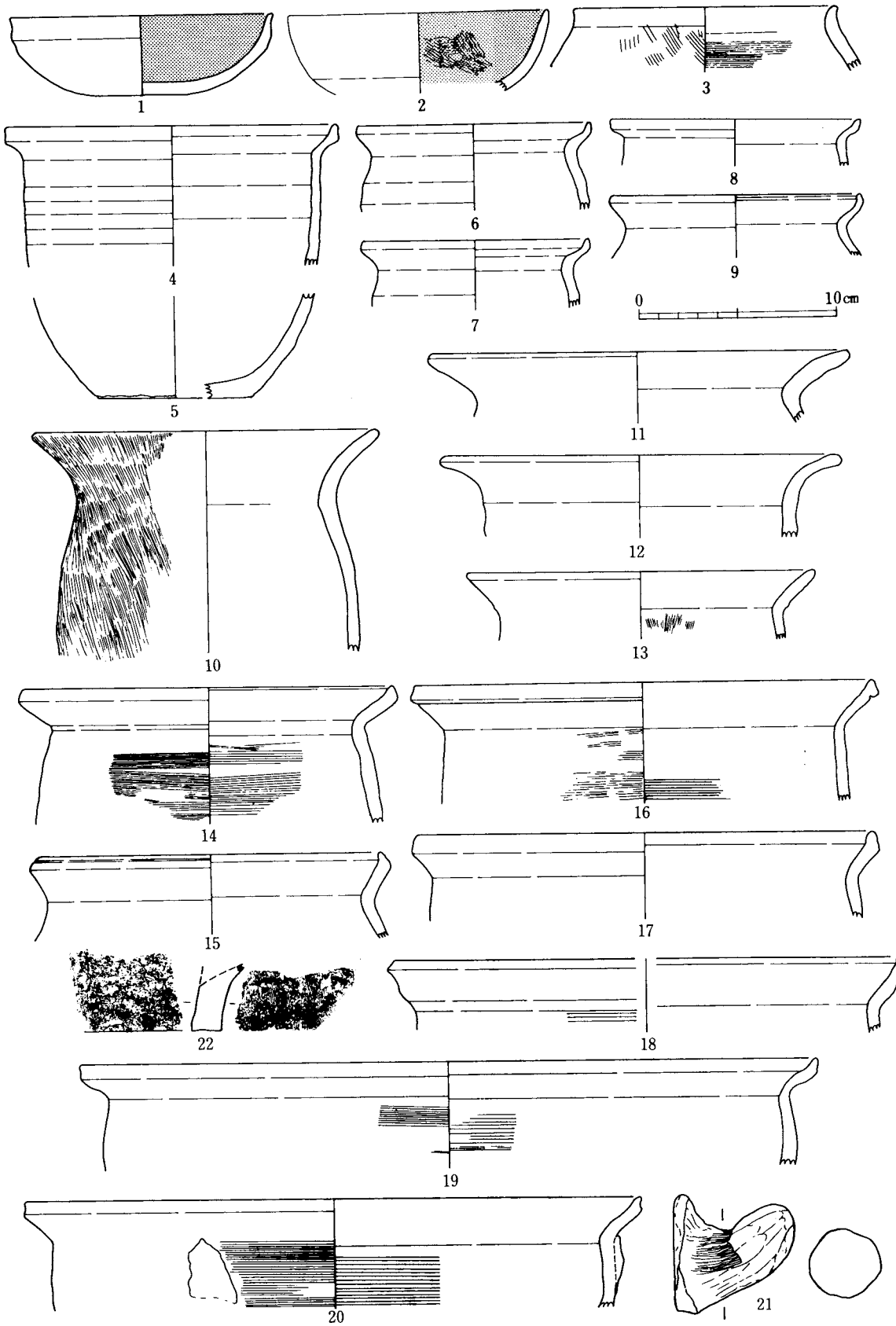
８～16は有台坏。８・９は高台脇から厚みをもって緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。10はやや器高が低く、口縁部は外反し端部は先細りに仕上げる。12は高台脇が広くとられ、高台断面は三角形状となる。13は内外面共に平滑な、砂礫の含みの非常に少ない製品である。14は箱形に近く、口縁部にはナデによる弱い稜を持つ。16は淡橙色の軟質製品で、高台端部は肥厚し面取りされる。



第23図　下層包含層出土遺物実測図（1/3）



第24図　下層包含層出土遺物実測図（1/3）



第25図　下層包含層出土遺物実測図（1/3）

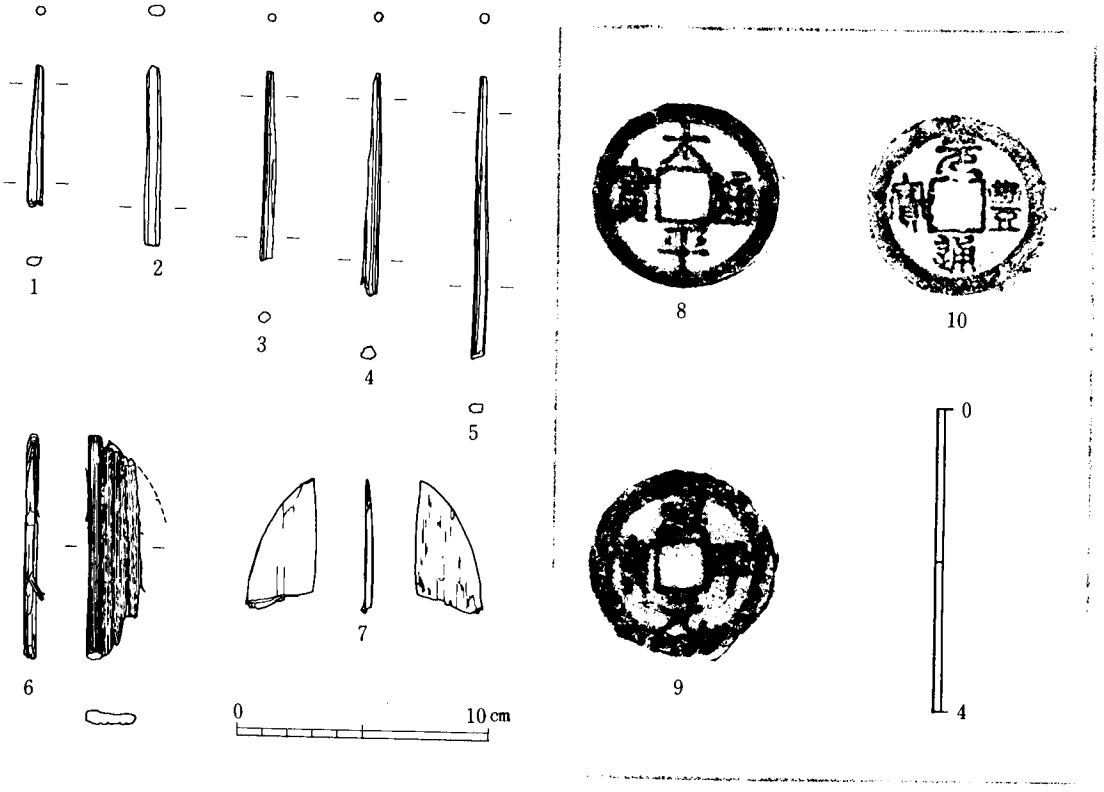
17～26は無台坏。17は小振りで全体にやや歪む。外底面には×状のヘラ記号が見られる。20の口縁部は外反し、器面には成形痕が残る。21・22はやや軟質気味で、胎土内の砂礫の含みは少ない。26は底部境は不明瞭で、器壁は全体に厚く胎土内には多くの砂礫が入る。

27～31は甕口縁部片。28は端部を玉縁状に折り返す。内外面に釉が掛かる。31は端部を肥厚させ、その直下に突帯を付加する。また外面にはヘラ描きされた波状文の一部が見られる。

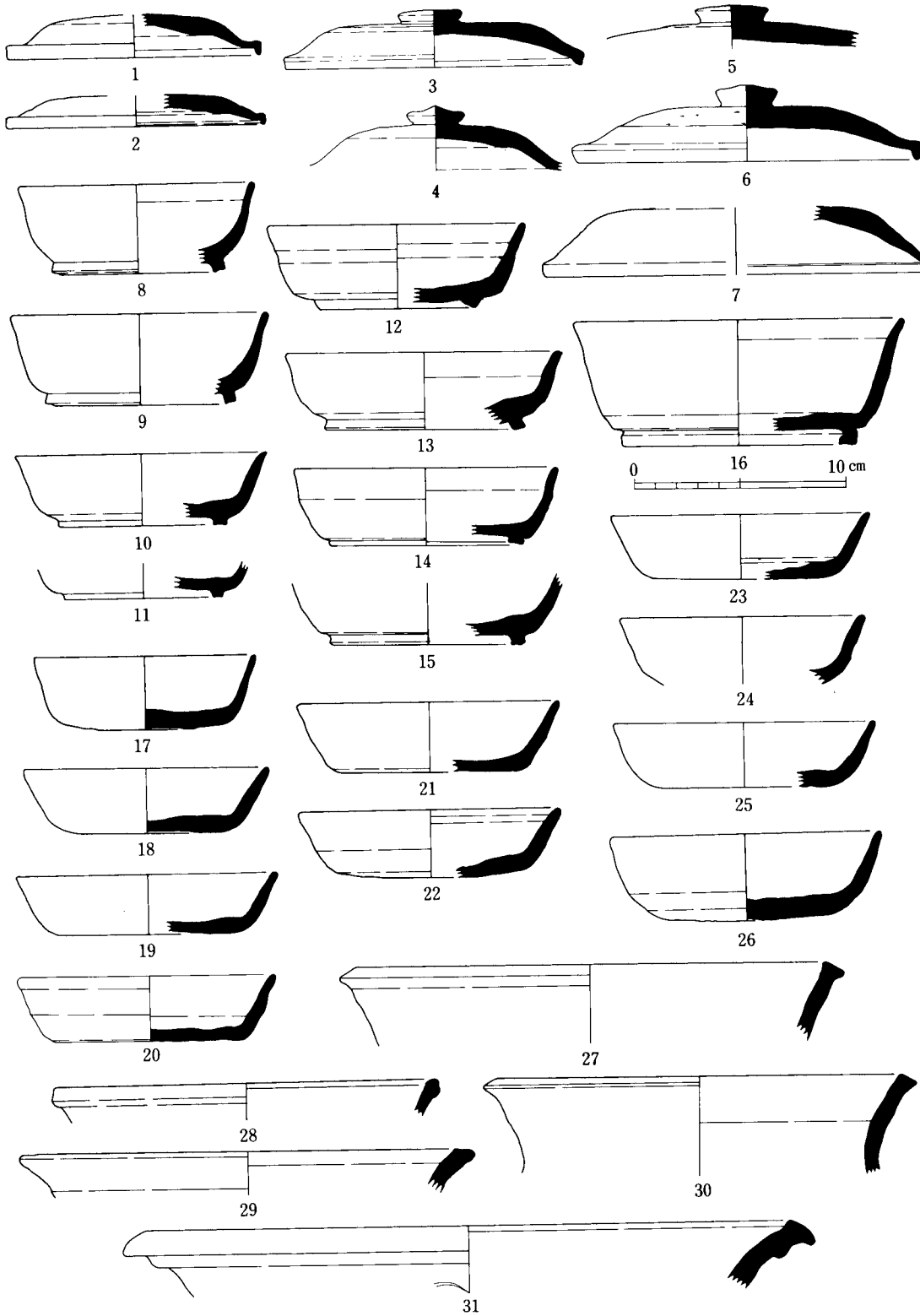
1はハの字形に開く椀の高台部。4は口縁部を大きく外反させ、端部を僅かにつまみ上げる鍋である。6は竈の脚部片で、内面には粘土帯の接合痕が明瞭に残る。

14は珠洲焼の鉢。口唇部は明瞭に横ナデされる。また内面には動きのある卸し目が入る。13世紀代の製品と思われる。16は中国製の白磁碗である。素地は灰色に近く高台周辺を残し、淡緑色の釉が掛かる。当地では12世紀代～13世紀前半代にかけて見られることが多い。17は中国製の青磁碗。胎土は灰色味を帯び、厚い器壁を持つ。高台内の釉を輪状に削り取る特徴がある。14世紀後半～15世紀代にかけての製品である。15は珠洲焼の甕。口縁部は大きく外反する。14世紀代の所産か。

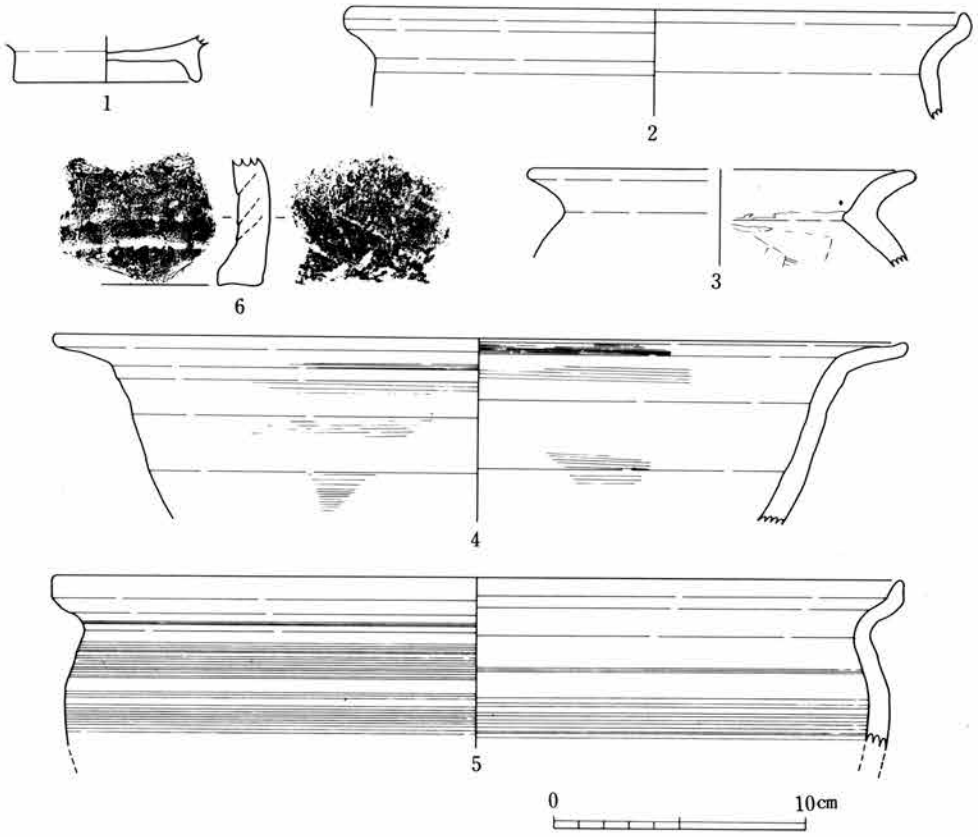
1～5は箸状木製品。6、7は曲げ物の底板か。8は「太平通寶」。北宋銭で初鋳年は太平興国元年（976）である。10は「元豊通寶」。北宋銭で初鋳年は元豊元年（1078）である。



第26図　2号溝（9）、包含層出土遺物実測図（1/3）



第27図　包含層出土遺物実測図（1/3）



第28図　包含層出土遺物実測図（1/3）

写真5　調査区南壁土層堆積状況（東より）

高畠テラダ遺跡図化須恵器・土師器一覧表

［番　　号］図版番号－土器番号を記入。

［器種分類］須恵器、土師器の別、器種、および細分類を記入。

［出土地点］上段に出土地区、下段に遺構および取り上げ層位を記入。「包含層」「下層包含層」は「包含」「下包含」と略す場合もある。地点を違え接合するものは、上段、下段毎にそれぞれ列記した。

［法　　量］各値、計測可能なものについて記入。A：口径、B：器高（接地面から頂部まで）、C：坏部底径、D：高台径（鈕径）、E：高台高（鈕高）を示す。

［調　　整］上段に器内面調整を、下段に器外面調整を記入。

［胎土・焼成／観察］上段には胎土・焼成等の観察を記入。須恵器ではP－●の胎土分類基準に加え、黒色吹出しの有無を1（少量存在）、2（多量に存在）で示した。なお、AAは特に砂粒の含みが多く粗い胎土を、CCはより精緻な胎土を表し、胎土分類の判断が困難なものはAB、BCと表す。焼成状態は還元硬質のものは特に記入していない。土師器では器表面の色調を記入。これらに加え海綿骨針を含むものを注記した。下段にはその他の観察内容を記した。

［残　　存］口縁部残存度を記入。全て○／12で示す。

［写　　真］項目名はないが、写真掲載のものは［残存］の下に○で示した。

番号	器種分類		出土地点	法量（cm）	調整（上から）	胎土・焼成／観察	残存
15－1	須	坏A II 1	B－4 14号溝、包含層	C:8.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C	0
15－2	土	長胴ツボ	B－4 14号溝	C:7.2	内面：ミガキ（赤彩） 外面：ケズリ（赤彩）	桃褐色・海綿骨針	0
15－3	須	坏B II 3	B－4 17号溝	A:12.2 C:8.9、D:8.6、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	0
15－4	土	甕B I 3	D－4 13号溝	A:22	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	淡褐色	1
15－5	土	甕B I 3	B－4 20号溝	A:23.6	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	淡褐色	2 ○
15－6	須	坏A II 1	B－4 20号溝	A:13.2、B:3.8 C9.6	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、還元軟質	1
15－7	須	坏蓋 III 1	C・D－4、C－3 23号溝、包含層	A:11.6、B:2.2 D:2.3、E:0.8	内面：ナデ 外面：ナデ	A	3
15－8	須	坏蓋 III 2	C・D－4 23号溝	A:12、B:3.5 D:2.1、E:1.2	内面：ナデ 外面ケズリ／ナデ	C 天井部ケズリ	6 ○
15－9	須	坏蓋 III 1	C・D－4、D－4 23号溝、包含層	A:11.7、B:2.1 D:2.1、E:0.7	内面：ナデ 外面ケズリ・ナデ	A	4 ○
15－10	須	坏蓋 II 1	C・D－4 23号溝	A:13.2、B:2.6 D:3.1、E:0.9	内面：ナデ 外面ナデ	C 2 外面釉被る	5
15－11	須	坏蓋 II 3	C・D－4 23号溝	A:14.6	内面：ナデ 外面：ナデ	B、還元やや軟質	2
15－12	須	坏蓋 III 2	C・D－4、C－3 23号溝、下層包含層	A:12.2	内面：ナデ 外面：ナデ	C、内面墨痕あり外面釉被る	3
15－13	須	坏蓋 II 1	C・D－4 23号溝	A:14.8	内面：ナデ 外面：ナデ	AA 外面釉被る	1
15－14	須	坏蓋 II 1	C・D－4 23号溝	A:14	内面：ナデ 外面ケズリ／ナデ	B 1 肩部周縁ケズリ	4

番号	器種分類		出土地点	法量（cm）	調整（上から）	胎土・焼成　観察	残存
15-15	須	坏B II 3	C・D-4 23号溝	A:11.4、B:4.3 C:6.6、D:6.9、E:0.4	内面：ナデ 外面ナデ	B 1	1
15-16	須	坏B II 1 a	C・D-4 23号溝	C:9、D:8、E:	内面：ナデ 外面：ナデ	C	0
15-17	須	坏B III 1	C・D-4 23号溝	A:11、B:3.4 C:8.8、D:8、E:1.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B 側面偏磨耗	1 ○
15-18	須	坏A III	C・D-4 23号溝	A:10.6、B:3 C:7	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A ヘラ記号	4 ○
15-19	須	坏A II 3	C・D-4 23号溝	A:11.8、B:2.7 C:8.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	2 ○
15-20	須	坏A II 3	C・D-4 23号溝	A:12.4、B2.7 C:9	内面：ナデ 外面ナデ／ヘラ切り	B、還元軟質	1
15-21	須	坏A II 1	C・D-4 23号溝	A:12.8、B:3.1 C8.2	内面：ナデ 外面ナデ／ヘラ切り	B	2
15-22	須	坏A II 1	C・D-4 23号溝	A:12.6、B:3.8 C8.6	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、還元軟質	1
15-23	須	坏A II 1	C・D-4 23号溝	A:12、B:3.8 C8.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	1
15-24	須	坏A II 1	C・D-4 23号溝	A:11.2	内面：ナデ 外面：ナデ	B	1
15-25	須	坏A II 1	C・D-4 23号溝		内面：ナデ 外面：ナデ	A	1
15-26	須	坏A II 1	D-4 23号溝	A:12.4、B:4.3 C:8.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C 墨書「諸」	6 ○
15-27	須	坏A I	C・D-4、A・B・C-2.3 23号溝、下層包含層	A:14、B:3.7 C:10.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B・海綿骨針、酸化硬質、ヘラ記号	3 ○
15-28	須	坏A I	C・D-4 23号溝	A:14.4、B:3.7 C:10.2	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、酸化硬質	3
16-1	土	[illegible]	C・D-4 23号溝	A:15.2	内面:ミガキ(赤彩) 外面:ミガキ(赤彩)	淡褐色	1
16-2	土	[illegible]	C・D-4 23号溝	A:14.8	内面：ミガキ（黒色） 外面：ミガキ赤	淡褐色・海綿骨針	1
16-3	土	甕B I 1	C・D-4 23号溝	A:27	内面：ハケ／ナデ 外面：ハケ	淡褐色	1
16-4	土	甕B I 2	C・D-4 23号溝	A:27.4	内面：ナデ／カキ目 外面ナデ／平行叩き	淡褐色・海綿骨針	1
16-5	土	甕B I 3	C・D-4 23号溝	A:25	内面：ナデ 外面ナデ	淡褐色	1
16-6	土	堝	C・D-4 23号溝	A:38.6	内面：カキ目／ケズリ 外面：ナデ／カキ目	褐色	1
16-7	須	坏蓋 II 3	C・D-4 27号溝	A:14.8、B:2 D:2.2、E:0.7	内面：ナデ 外面：ナデ	B 1	5
16-8	土	甕B II 3	C-4 29号溝	A:17.3	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	淡褐色	1
16-9	土	堝	C・D-4 28号溝	A:39.5	内面：ナデ／ケズリ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	淡褐色	1
16-10	須	坏蓋 III 1	C・D-4、C-4 23・31号溝	A:12、B:2 D:2.7、E:0.7	内面：ナデ 外面：ナデ	A 外面釉被る	5
16-11	須	坏B II 4	C-4 31号溝	C:7.6、D:7.4、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C 1	0
16-12	須	坏A II 1	C-4 31号溝		内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、還元軟質	0
16-13	土	甕B II 3	C-4 31号溝		内面：ナデ 外面：ナデ	淡褐色	1
16-14	須	坏A II 1	C・D-4 30号溝	B:3 C:7.2、D:、E:	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C	1
16-15	土	[illegible]	C・D-4 32号溝	A:11.6	内面：ミガキ（黒色） 外面：ミガキ（赤彩）	淡褐色・海綿骨針	1
17-1	須	坏蓋 II 1	C・D-4 29号溝	A13.6	内面：ナデ 外面：ナデ	AA外面釉被る	4

番号	器種分類		出土地点	法量（cm）	調整（上から）	胎土／焼成 観察	残存
17－2	須	坏蓋 II 1	C・D－4、C・D－4 23・29号溝	A:14	内面：ナデ 外面：ナデ	A・海綿骨針 還元軟質	4
17－3	須	坏B III 1	C・D－4 29号溝	A:11、B:3.4 C:8.2、D:7、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	1
17－4	須	坏B II 5	D－4 29号溝	A:12.2、B:3.9 C:9、D:7.2、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A 2 ヘラ記号「－」	9 ○
17－5	須	坏B II 5	C・D－4 29号溝	C:8.6、D:7.8	内面：ナデ 外面：ナデ	A	0
17－6	須	坏B II 5	C・D－4 29号溝	A:12.6、B:3.8 C:9.4、D:8.4、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A 1	5 ○
17－7	須	坏A II 1	C・D－4 23号溝、29号溝	A:11.8、B:3.4 C:8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C、還元軟質	2 ○
17－8	須	坏A II 1	C・D－4 29号溝	A:11.8、B:3.1 C:7.2	内面：ナデ 外面：ナデ	B 2・海綿骨堀	1
17－9	須	坏A II 1	D－4 29号溝	A:11.8、B:3.4 C:6.8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A、酸化硬質	5 ○
17－10	須	坏A II 1	C・D－4 29号溝	A:12、B:3.4 C:8.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A、酸化硬質	1
17－11	須	坏A II	C・D－4 29号溝	A:13.1	内面：ナデ 外面：ナデ	A	1
17－12	須	坏A II	C・D－4 29号溝	A:11.8	内面：ナデ 外面：ナデ	A	1
17－13	須	甕 2	C・D－4、C・D－4、C・D－4 23・29号溝、包含層	A:23.2	内面：同心円当具 外面：平行叩き	A	2 ○
17－14	須	甕体部	C・D－4 29号溝		内面：同心円当具 外面：平行叩き	B	0
17－15	土	甕A I	D－4 29号溝	A:25	内面：ナデ／ハケ 外面：縦ハケ	淡灰褐色 非ロクロ	4 ○
17－16	土	埦	C・D－4 29号溝	A:14.4	内面：ミガキ（黒色） 外面：ミガキ（赤彩）	淡褐色・海綿骨針	1
17－17	土	甕B I 3	C・D－4 29号溝	A:23.4	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	淡褐色	1
17－18	土	甕B I 3	C・D－4 29号溝		内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	淡褐色・海綿設計	1
18－1	須	坏蓋 II	B－4 38号溝	A:12.6	内面：ナデ 外面：ナデ	A	2
18－2	須	坏B II b	B－4 38号溝	C:9、D:8.4、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B 2	0
18－3	須	坏B I	B－4 38号溝	A:16.2	内面：ナデ 外面：ナデ	B 1	1
18－4	須	坏B II 3	B－3、C－3、B・C－3・4 39号溝、包含、下層包含	D:7.6、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	AB、還元やや軟質高台内墨痕有り	0
18－5	土	堝	B－3 39号溝	A:39	内面：ナデ／カキ目／ハケ目 外面：叩き後カキ目／平行叩き	淡褐色・海綿骨堀	1 ○
18－6	須	坏H身	A・B・C－1・2・3 42号溝	A:11	内面：ナデ 外面：ナデ／ケズリ	CC 底部ケズリ	1 ○
18－7	須	壺蓋	B－2・3 42号溝	A:7	内面：ナデ 外面：ケズリ／ナデ	C 天井部ケズリ	3 ○
18－8	須	坏G身	B－2・3 42号溝		内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C 天井部ケズリ	0 ○
18－9	土	埦	A・C－1・3 42号溝	A:14.8	内面：ナデ 外面：ナデ	海綿骨針	1
18－10	土	甕	A・B・C－1・2・3 42号溝	A:12.6	内面：ナデ 外面：ナデ	海綿骨針	1
18－11	土	甕B III 1	B・C－1・2 42号溝	A:14.6	内面：ミガキ／ケズリ 外面：ミガキ	淡褐色・海綿骨針	1
18－12	土	甕A I	B・C－1・2 42号溝	A:29	内面：ナデ／磨耗 外面：ナデ／縦ハケ	褐色・海綿骨針 非ロクロ	1 ○
18－13	須	坏B II 4	C－5 56号溝	C:8、D:7.6、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、海綿骨針 高台内墨痕あり	0

番号	器種分類		出土地点	法量（cm）	調整（上から）	胎土／焼成　観察	残存
18-14	須	坏A II 1	B・C－5 56号溝	C:11	内面：ナデ 外面：ナデ：ヘラ切り	B	0
18-15	土	甕B III 4	B・C－5 56号溝	A:13	内面：ナデ 外面：ナデ	淡桃褐色	1
18-16	土	甕B I 3	B・C－5 56号溝	A:21.4	内面：ナデ 外面：ナデ／カキ目	淡褐色	1
18-17	須	坏B II 3	C－6、C－6・7、C－6 58号溝、包含、下層包含	A:12.2、B:4.2 C:8.2、D:8.1、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A、黒色付着物あり磨耗なし	1
18-18	須	壺底部	DF－7 63号溝	D:8.2	内面：ナデ 外面：ケズリ－ナデ／ナデ	A	0
21-1	須	坏蓋 II	C・D－5 65号溝	A:15.6	内面： 外面：	B	5
21-2	須	坏蓋 II 2	C・D－5、D－5、C－5、B・C－5 65・66号溝、包含、下包	A:14	内面：ナデ 外面：ナデ	B 1 外面釉被る	6
21-3	須	坏B II 2	C・D－5 65号溝	A:11.6、B:4 C:9.4、D:8.8、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、側面偏磨耗 底部内面磨耗	4 ○
21-4	須	坏B I	C・D－5 65号溝	C:8.6、D:8.2、E:	内面：ナデ 外面ナデ	AB、還元軟質	0
21-5	須	壺蓋	C・D－5、D・E－5、C・D－5 65号溝、包含、下層包含	A:11	内面：ナデ 外面：ナデ	B 1 外面釉被る	0 ○
21-6	須	坏A II 3	C、B・C、D 65号溝、包含、下層包含	A:12.8、B:2.8 C:8.8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B 1、還元軟質	2 ○
21-7	須	坏A II 1	C・D－5 65号溝	A:12、B:3.6 C:8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B 2、還元軟質	1
21-8	須	坏A II 1	C・D－5 65・70号溝	A:12.2、B:3.1 C:7.2	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A 2、酸化硬質	1
21-9	須	坏A II 2	C・D－5 65号溝	A:11.8、B:3.5 C:8.6	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	2 ○
21-10	土	壺	C・D－5 65号溝	A：15. 2	内面：ミガキ 外面：ナデ(赤彩)	淡褐色	2
21-11	土	甕底部	C・D－5、B・C－5、C－5、 65号溝、下層包含、包含	C:8.2	内面： 外面：	淡褐色	0
21-12	土	甕B I 1	6・7 65号溝		内面：ナデ／ケズリ 外面：ミガキ	淡褐色・海綿骨針	1
21-13	土	甕B I 3	C・D－5 65号溝	A:22	内面：ナデ 外面：ナデ	淡褐色・海綿骨針	1
21-14	須	坏B III 2	D－5 66号溝	A:11.2、B:3.9 C:8.2、D:6.6、E:0.7	内面：ナデ 外面：ナデ	A	4
21-15	須	坏B II 6	D－5 66号溝	A:13.8、B:3.3 C:9.2、D:8.8、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ	CC 1、還元軟質胎土 精良・緻密	1 ○
21-16	土	甕A	C－5 80号溝		内面：横ハケ 外面：縦ハケ	淡褐色 非ロクロ	0
21-17	須	坏A II 1	C－6 82号溝	A:12、B:3.8 C:7.6	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A、酸化硬質	3
21-18	須	坏A II 1	D－5 83号溝	A:12、B C:3.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A 1	3 ○
21-19	土	甕B III 3	D－5 83号溝	A:13.6	内面：ナデ 外面：ナデ	赤褐色	2
21-20	土	甕B III 3	D－5 83号溝	A:14.6、B:12.7 C:6	内面：カキ目 外面：ナデ／ケズリ	淡桃褐色	2 ○
21-21	土	甕B I 3	D－5 83号溝	A:22.6	内面：ナデ／ハケ 外面：ナデ／ハケ	淡褐色・海綿骨針	1
14-1	須	坏蓋 II 3	C－3 1号土坑	A:14、B:2.1 D:2.4、E:0.8	内面：ナデ 外面ナデ	B 2 外面釉被る	9
14-2	須	坏B III 4	C－3 1号土坑	A:11.2、B:3.8 C:8.4、D:7、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ	BC 高台内墨痕有り	2
14-3	須	坏B II 3	C－3 1号土坑	A:12.3、B:3.9 C:7.8、D:7.8、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ケズリ	B 2 側面磨耗良好	1 ○
14-4	土	甕B I 3	C－3、C－3 1号土坑、39号溝	A:21.8	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ	淡褐色	6

番号	器種分類		出土地点	法量（cm）	調整（上から）	胎土／焼成　観察	残存
14－5	須	甕体部	C－3、B－4、C・D－4 1号土坑、包、下層包		内面：同心円当具 外面：平行叩き	B	0
22－1	須	坏H蓋	C－6 P－48		内面：ナデ 外面：ナデ／ケズリ	A、酸化軟質	0 ○
22－2	須	高坏	C・D-5、C・D-5、D-5 P-120、65号溝、下層包	A12.8	内面：ナデ 外面：ナデ	C	3
22－3	須	坏蓋 II 2	C－6 P－31	A:13.8、B:3.2 D:3.4、E:0.7	内面：ナデ 外面：ケズリ／ナデ	B 1、還元やや軟質肩部周縁ケズリ	7 ○
22－4	須	坏蓋 II 1	B-4、A・B-2・3 P－202、下層包含層	A:14.8	内面：ナデ 外面：ナデ	C	3
22－5	須	坏A II 1	B－4 P－19	A:11.8、B:3.5 C:8.2	内面：ナデ 外面：ナデ／ケズリ	A	2
22－6	須	坏B II 2	C－6 P－30	A:12.1、B:3.5 C:8.6、D:7、E:0.4	内面：ナデ 外面：ケズリ／ナデ	B C、黒色付着物側面偏磨耗	1
22－7	須	坏B III 3	B－5 P－76	A:10.4、B:4.3 C:8.4、D:7.6、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ケズリ	B 1	3 ○
22－8	須	坏B II 1 b	C－4 P－17	C:9.6、D:8.7、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	0
22－9	土	羽口	B－4 P－3	A:5.8	内面： 外面：	桃褐色	
22－10	土	甕底部	C－7 P－77	C:10.4	内面： 外面：		0
22－11	土	塝	C－4 P－7		内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	桃褐色	1
22－12	須	坏蓋	A・B－2・3 下層包含層	A:12.6	内面：ナデ 外面：ケズリ／ナデ	C 天井部ケズリ	1
22－13	須	坏蓋 II	C・E－7 下層包含層		内面：ナデ 外面：カキ目	B C 天井部カキ目	0
22－14	須	高坏	C・D－5 下層包含層		内面：ナデ 外面：ナデ	B	1
23－1	須	坏蓋 III 1	C・D－5 下層包含層	A:12.2、B:2.7 D:2.2、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ	C 1 内面墨痕有り	11 ○
23－2	須	坏蓋 III 1	C－3・4 下層包含層	A:12、B:2.4 D:2.6、E:0.7	内面：ナデ 外面：ナデ	C 1	2
23－3	須	坏蓋 II 1	B－4 下層包含層	A:13、B:3.1 D:2.3、E:0.7	内面：ナデ 外面：ナデ	A 外面釉被る	2 ○
23－4	須	坏蓋 II 1	A・B－2・3 下層包含層	A:13.8	内面：ナデ 外面：ナデ	A A	1
23－5	須	坏蓋 III 1	D－5、D－6 下層包含層	A:12.2、B:2.2 D:2.3、E:0.8	内面：ナデ 外面：ケズリ／ナデ	C 2、還元やや軟質	1
23－6	須	坏蓋 III 2	B・C－1・2 下層包含層	A:11.6	内面：ナデ 外面：ナデ	C、鈕打ち欠かれる転用硯	9
23－7	須	坏蓋 II 1	C・D－5 下層包含層	A:13.2、B:2.4 D:2.4、E:0.7	内面：ナデ 外面：ケズリ／ナデ	A A	7 ○
23－8	須	坏蓋 II 1	C－5 下層包含層	A:13.2、B:2.4 D:2.4、E:0.7	内面：ナデ 外面：ナデ	B 1、還元やや軟質	3 ○
23－9	須	坏蓋 II 1	B・C－5 下層包含層	A:13.6	内面：ナデ 外面：ナデ	C	2
23－10	須	坏蓋 II 1	D－5 下層包含層	A:12.6	内面：ナデ 外面：ナデ	C 外面釉被る	2
23－11	須	坏蓋 II 1	C・D－5 下層包含層	D:2.6、E:0.6	内面：ナデ 外面：ナデ	B	0
23－12	須	坏蓋 II 1	C・D－6 下層包含層	A:14、B:2.3 D:3.3、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ	A A 墨痕	6 ○
23－13	須	坏蓋 II 3	B：C－5 下層包含層	A：15	内面：ナデ 外面：ケズリ／ナデ	C、還元やや軟質	2
23－14	須	坏蓋 II	C－6 下層包含層	A:15.2	内面：ナデ 外面：ナデ	A	1
23－15	須	坏蓋 I 1	A・B・C-2・3・4、B・C-1 B-4、B・C-3・4下層包含	A:18.4	内面：ナデ 外面：ナデ	B 1、還元やや軟質	1

番号	器種分類		出土地点	法量（cm）	調整（上から）	胎土／焼成 観察	残存
23-16	須	坏B Ⅲ3	C-6 下層包含層	A:10.6、B:4.1 C:8、D:7、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ	C	2
23-17	須	坏B Ⅲ1	C-5 下層包含層	C:7、D:6.4、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C	0
23-18	須	坏B Ⅱ2	C-5 下層包含層	C:7.6、D:6.8、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	0
23-19	須	坏B Ⅱ2	B・C-2・3 下層包含層	C:8.4、D:7.4、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C	0
23-20	須	坏B Ⅱ2	B・C-2・3 下層包含層	C:8.4、D:7.2、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	0
23-21	須	坏B Ⅱ2	D-5 下層包含層	C:9、D:8、E:0.6	内面：ナデ 外面ナデ／ヘラ切り	B	0
23-22	須	坏B Ⅱ3	C-5 下層包含層	A:11.5、B:4.5 D:9.2、E:0.5	内面：ナデ 外面ナデ／ヘラ切り	C	6
23-23	須	坏B Ⅱ3	B-4 下層包含層	A:12.8、B:3.6 C:9.4、D:8.6、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ	B2	2 ○
23-24	須	坏B Ⅱ3	A・B-2・3 下層包含層	A:12、B:4.1 C:9、D:9、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C	1
23-25	須	坏B Ⅱ3	B・C-3、B-4 下層包含層	C:8.6、D:6.6、E:0.3	内面:ナデ 外面:ナデ/ヘラ切り	A、還元やや軟質磨耗良好	0
23-26	須	坏B Ⅱ1a	C-3・4 下層包含層	C:8.6、D:2.6、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C、還元やや軟質	0
23-27	須	坏B Ⅱ1a	B・C-5 下層包含層	C:9.6、D:8.8、E:0.5	内面：ナデ 外面ナデ／ヘラ切り	C	0
23-28	須	坏B Ⅱ1a	B・C-3・4 下層包含層	C:9.2、D:8.8、E:0.4	内面：ナデ 外面ナデ／ヘラ切り	C	0
23-29	須	坏B Ⅱ1a	C-6 下層包含層	D:8.4、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C、還元やや軟質	0
23-30	須	坏B Ⅱ1a	B・C-5 下層包含層	D:9.6、E:0.3	内面：ナデ 外面ナデ／ヘラ切り	C2	0
23-31	須	坏B Ⅱ 5	D-5 下層包含層	C:9.2、D:7、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	AB	6
23-32	須	坏B Ⅱ1b	C-3、C-3・4 下層包含層	A:12.6、B:3.8 C:8.4、D:8.3、E:0.2	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	3
23-33	須	坏B Ⅱ1b	B-4・5 下層包含層	A:12.2、B:4.1 C:9.6、D:8.6、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	2
23-34	須	坏B Ⅱ1b	C・E-7 下層包含層	B:3.6 C:9.4、D:8.4、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	BC	1
23-35	須	坏B Ⅱ1b	B・C-2・3 下層包含層	B:3.7 C:8.8、D:7.8、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A ゆがむ	2
23-36	須	坏B Ⅱ1b	C-6 下層包含層	D:7.8、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B1	0
23-37	須	坏B Ⅱ1b	D-5 下層包含層	D:8、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	3
23-38	須	坏B Ⅱ1b	B-4 下層包含層	D:7.4、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	0
23-39	須	坏B Ⅰ1	C-6 下層包含層	A:15.4、B:3.8 C:9、D:8.6、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ	BC、酸化硬質	2
24-1	須	坏B Ⅱ1b	C-6 下層包含層	A:13.6、B:3.3 C:0.2、D:9.4、E:0.2	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	2 ○
24-2	須	坏B Ⅱ1b	C-4 下層包含層	C:9.4、D:8.4、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	0
24-3	須	坏B Ⅱ1b	B・C-2・3、B-4 下層包含層	D:8.4、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、高台内磨耗内面磨耗弱い	0 ○
24-4	須	坏B Ⅱ1b	B・C-5 下層包含層	C:10、D:8.8、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、還元やや軟質	0
24-5	須	坏B Ⅱ1b	B：C-5 下層包含層	D:8.2、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	0
24-6	須	坏B Ⅱ1b	B・C-3・4 下層包含層	D:7、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、酸化硬質	0

番号	器種分類		出土地点	法量（cm）	調整（上から）	胎土・焼成／観察	残存
24－7	須	坏B I	C－6 下層包含層	C:10.4、D:9.2、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、還元やや軟質	0
24－8	須	坏B I	B・C－3・4 下層包含層	C:10.2、D:9.4、E:0.2	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、還元軟質	0
24－9	須	坏B I	C・D－5 下層包含層	A:15.6、B:5.9 C:10.2、D:9.4、E:0.7	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	BC	1
24－10	須	坏B I	B・C－3・4、C－5 下層包含層	A:15.6 C:11.6、D:10.9、E:0.7	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、酸化硬質	0 ○
24－11	須	坏B I	D－5 下層包含層	A:16.2	内面：ナデ 外面：ナデ	BC・海綿骨針 酸化硬質	3
24－12	須	坏B I	D－5 下層包含層	C:10.4、D:9.6、E:0.7	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B2	4
24－13	須	坏B I	B・C－5 下層包含層	C:11.6、D:10.6、E:0.7	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	0
24－14	須	坏B I	B・C－5 下層包含層	C:11.8、D:10.7、E:0.6	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	0
24－15	須	坏B I	D－5 下層包含層	C:10.4、D:9.4、E:0.8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、還元軟質	4
24－16	須	坏A II1	B・C－5 下層包含層	A:11.8、B:3.2 C:9.2	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	3
24－17	須	坏A II1	A・B－2・3 下層包含層	A:12.3、B:3.4 C:8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	1
24－18	須	坏A II1	A・B－2・3 下層包含層	A:11.6、B:3.4 C:7	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A、還元軟質	2
24－19	須	坏A II1	C－5 下層包含層	A:13.5、B:3.4 C:9	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B1、還元軟質	2
24－20	須	坏A II1	C・D－5 下層包含層	A:13.2、B:3.1 C:8.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B1、還元軟質	1
24－21	須	坏A II1	D－6 下層包含層	A:13、B:3.1 C:9	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A、酸化硬質	1
24－22	須	坏A II1	D－5 下層包含層	C:8.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B2	0
24－23	須	坏A II1	B・C－3・4 下層包含層	C:9.6	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A ヘラ記号	0
24－24	須	坏A II1	BC－3・4 下層包含層	C:8.6	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、還元軟質 へら記号	5
24－25	須	坏A II3	C－5、B・C－5 下層包含層	A:12.8、B:2.9 C:8.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C1	1
24－26	須	坏A II3	B－4 下層包含層	A:12.5、B:3.6 C:10	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	1
24－27	須	坏A II4	B・C－3・4 下層包含層	A:12.8、B:3 C:10	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	AB、還元軟質	1
24－28	須	坏A II2	B・C－5 下層包含層	A:11.2、B:3.2 C:9.8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B1	2
24－29	須	坏A II2	D－5 下層包含層	C:8.8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B・海綿骨針	0
24－30	須	坏A II5	C－5 下層包含層	A:11.8、B:3.1 C:7.6	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C2、還元硬質	2 ○
24－31	須	坏A II5	C－6 下層包含層	C:6.8	内面：ナデ 外面：ミガキ？／ヘラ切り	C	0
24－32	須	坏A II6	B・C－5 下層包含層	A:13.8	内面：ナデ 外面：ナデ	B1	1
24－33	須	甕 2	D－5 下層包含層	A:16.6	内面：ナデ 外面：ナデ	B1	1
25－1	土	高杯	B・C－5 下層包含層	A:13、B:4	内面：ミガキ（黒色） 外面：朱	淡褐色・海綿骨針	1 ○
25－2	土	高杯	C－6 下層包含層	A:13.8	内面：ミガキ（黒色） 外面：ナデ	淡褐色・海綿骨針	1
25－3	土	壺	C・D－5 下層包含層	A：13	内面：ナデ／ハケ 外面：ナデ／ハケ	淡褐色	1 ○

番号	器種分類		出土地点	法量（cm）	調整（上から）	胎土・焼成／観察	残存
25－4	土	甕B II 3	C・D－5 下層包含層	A:16.6	内面：ナデ 外面：ナデ	淡褐色・海綿骨針	1
25－5	土	甕B II	C－5 下層包含層	C:7.8	内面：ナデ 外面：ナデ	赤褐色	0
25－6	土	甕B III 3	C・D－5 下層包含層	A:11.8	内面：ナデ 外面：ナデ	淡褐色	2 ○
25－7	土	甕B III 3	B・C－5 下層包含層	A:12.2	内面：ナデ 外面：ナデ	淡褐色	1
25－8	土	甕B III 3	B－6 下層包含層	A:12.2	内面：ナデ 外面：ナデ	淡褐色	1
25－9	土	甕B III 4	C・D－5 下層包含層	A:12.6	内面：ナデ 外面：ナデ	淡黄褐色	1
25－10	土	甕A I	B・C－1・2 下層包含層	A:22.5	内面：磨耗 外面：縦ハケ	褐色・海面骨針 非ロクロ	1 ○
25－11	土	甕B I 1	B・C－4 下層包含層	A:22	内面：ナデ 外面：ナデ	淡褐色	1
25－12	土	甕B I 1	B・C－5 下層包含層	A:21.7	内面：ナデ 外面ナデ	淡褐色	1
25－13	土	甕B II 1	D・E－6 下層包含層	A:19	内面：ナデ／ハケ 外面：ナデ	淡褐色	1
25－14	土	甕B II 3	D－6 下層包含層	A:17	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ・カキ目	淡桃褐色	0 ○
25－15	土	甕B II 3	C・D－5 下層包含層	A:19.6	内面：ナデ 外面：ナデ	淡褐色	0
25－16	土	甕B I 3	B・C－5 下層包含層	A:25	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／ハケ	淡褐色・海面骨針	1 ○
25－17	土	甕B I 3	C－5 下層包含層	A:22.4	内面：ナデ 外面：ナデ	淡褐色	1
25－18	土	甕B I 2	C・D－5 下層包含層	A:21.2	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	淡桃褐色	0
25－19	土	堝	1～4 下層包含層	A:37	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	淡褐色・海面骨針	0
25－20	土	堝	B・C－5 下層包含層	A:31.6	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	淡褐色	1
25－21	土	堝	B・C－5 下層包含層		内面：ハケ 外面：ハケ	桃褐色	0
25－22	土	竈	3、4 下層包含層		内面：ナデ 外面：ハケ	淡褐色	
27－1	須	坏蓋 II 1	B-4 包含層	A:13.8	内面：ナデ 外面：ナデ	A、還元軟質	1
27－2	須	坏蓋 III 1	C・D－4 包含層	A:12	内面：ナデ 外面：ナデ	C	3
27－3	須	坏蓋 II 3	南側 包含層	A:13.8、B:2.8 D:3.1、E:0.6	内面：ナデ 外面：ナデ	AB、還元軟質	6 ○
27－4	須	坏蓋 II 1	C・D－4 包含層	D:2.8、E:0.9	内面：ナデ 外面：ケズリ／ナデ	C 肩周縁ケズリ	0
27－5	須	坏蓋 I	C・D－4 包含層	D:3.4、E:0.8	内面：ナデ 外面：ナデ	B	0
27－6	須	坏蓋 II 1	D－5 包含層	A:16.2、B:3.6 D:2.9、E:1	内面：ナデ 外面ケズリ／ナデ	A天井部ケズリ	2 ○
27－7	須	坏蓋 I	C・D－4 包含層	A:18	内面：ナデ 外面：ナデ	A、酸化軟質	1 ○
27－8	須	坏B II 3	南側 包含層	A:12.6、B:4.3 C:8、D:8.2、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	2
27－9	須	坏B I 3	C－4 包含層	A:11、B:4.4 C:11、D:10、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	0
27－10	須	坏B II 4	D－4 包含層	A:11.5、B:3.5 C:8.6、D:8、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C1	2
27－11	須	坏B II 4	C・D－4 包含層	C:8.4、D:7.5、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B	0

番号	器種分類		出土地点	法量（cm）	調整（上から）	胎土・焼成／観察	残存
27－12	須	坏B II 2	南側 包含層	A:12、B:4.1 C:9、D:7.5、E:0.4	内面：ナデ 外面ナデ／ヘラ切り	A	1
27－13	須	坏B II 6	B－7 包含層	A:13.8、B:3.6 C:10.6、D:9.6、E:0.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	CC、還元軟質 胎土精良・緻密	1
27－14	須	坏B II 1 b	C・D－4 包含層	A:12.5、B:3.7 C:9.6、D:8.8、E:0.3	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	2
27－15	須	坏B I	C－4 包含層	C:11.6、D:10.6、E:0.5	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B 1	0
27－16	須	坏B I	D－5 包含層	A:16、B:5.9 C:12、D:11、E:0.8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、酸化硬質	1
27－17	須	坏A III	D－4 包含層	A:10.4、C:7.8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A ヘラ記号	1 ○
27－18	須	坏A II 1	南側 包含層	A:11.4、B:3.1 C:7	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	BC 1	1
27－19	須	坏A II 1	C・D－4 包含層	A:12.6 C:8.6、D:2.8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B、還元軟質	3
27－20	須	坏A II 1	C－3 包含層	A:12.6、B:3.1 C:7	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	1
27－21	須	坏A II 1	C－3 包含層	A:12.4、B:3.3 C:8.6	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C、還元軟質	2
27－22	須	坏A II 1	C－3 包含層	A:12.7、B:3.2 C:8.8	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	B 2、還元軟質	2
27－23	須	坏A II 1	D－4 包含層	A:12.4 C:8.2	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A、酸化硬質	1
27－24	須	坏A II 1	C－3 包含層	A:11.6、B:3.4	内面：ナデ 外面：ナデ	B	1
27－25	須	坏A II 1	B－4 包含層	A:12.8、B:3.1 C:8.2	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	C	1
27－26	須	坏A II 1	A・B・C－4 包含層	A:13 C:8.4	内面：ナデ 外面：ナデ／ヘラ切り	A	4 ○
27－27	須	甕 2	北側 包含層	A:24	内面：ナデ 外面：ナデ	A	1
27－28	須	甕 3	不明 包含層	A:18	内面： 外面：	B	1
27－29	須	甕 2	C－4、D－4 包含層	A:19.8	内面：ナデ 外面：ナデ	B	1
27－30	須	甕 2	B－4 包含層	A:27	内面：ナデ 外面：ナデ	A	1
27－31	須	甕 1	D・E－5 包含層	A:33.1	内面：ナデ 外面：ナデ	A	1
28－1	土	埦	B－1 包含層	D:7.2、E:0.8	内面：ナデ 外面：ナデ	桃褐色	0
28－2	土	甕B I 3	D－5 包含層	A:23	内面：ナデ 外面・ナデ	淡褐色	0
28－3	土	甕B II 1	C・D－3 包含層	A:19.8	内面：ナデ／ケズリ 外面：ナデ	淡褐色・海綿骨針	1
28－4	土	堝	C－4 包含層	A:34.2	内面：カキ目 外面：ナデ／カキ目	桃褐色	1 ○
28－5	土	堝	南側 包含層	A:33.8	内面：ナデ／カキ目 外面：ナデ／カキ目	桃褐色・海綿骨針	1
28－6	土	竈	C－6 包含層		内面： 外面：底面磨耗	桃褐色	

図版番号	出土地点 グリッド	出土地点 遺構他	器種等	法量(cm)	海綿	雲母	備考
19/1	A－1	2号溝	甕（珠洲）			○	
2	A－2	3号溝	皿（土師器）	口径12.6	少	○	
3	A·B·C-1·2·3	42号溝	皿（土師器）	口径12.6器高(3.3)	少	○	
4	C・D－7	62号溝	鉢（珠洲）	口径29.2			
5	D・E・7	64号溝	皿（土師器）	口径9.2器高1.7		○	
6	D・E・7	64号溝	鉢（珠洲）		極少	○	
7	D・E・7	64号溝	皿（白磁）	高台径6.1			
8	D・E・7	63号溝	鉢（珠洲）	底径10.5			
9	D・E・7	63号溝	鉢（珠洲）		極少		
10	D・E・7	63号溝	鉢（珠洲）				
11	D・E・7	63号溝	甕（珠洲）	口径44.8	少		
12	D・E・7	63号溝	底部（珠洲）	底径9.2	少		
13	表採	包含層	皿（土師器）	口径12.7	少	○	
14	A・B・3	包含層	鉢（珠洲）			○	
15	表採	包含層	甕（珠洲）	口径46.8	極少		
16	表採	包含層	碗（白磁）	高台径5.3			高台辺無釉
17	表採	包含層	碗（青磁）	高台径5.9			高台内の釉を輪状に削り取る

写真6　高畠テラダ遺跡垂直写真（1）

写真７　高畠テラダ遺跡垂直写真（２）

写真８　高畠テラダ遺跡垂直写真（３）

写真９　高畠テラダ遺跡垂直写真（４）

写真10　表土除去作業（西より）

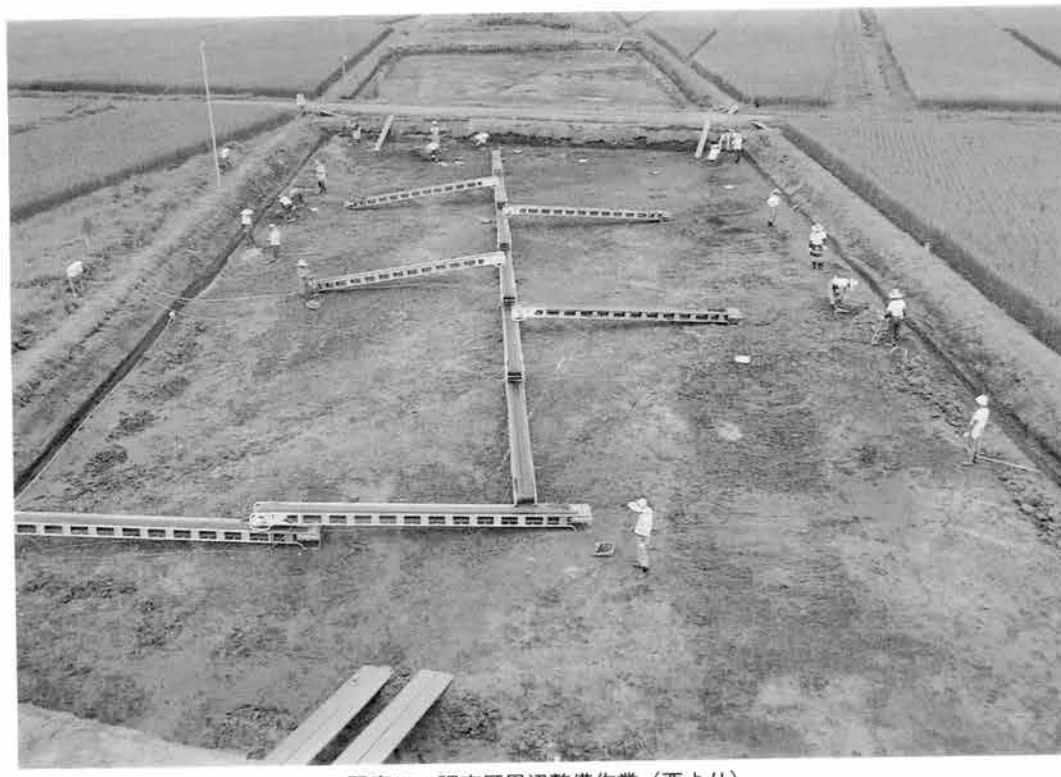


写真11　調査区周辺整備作業（西より）

写真12　西側調査区遺構掘り下げ作業（西より）

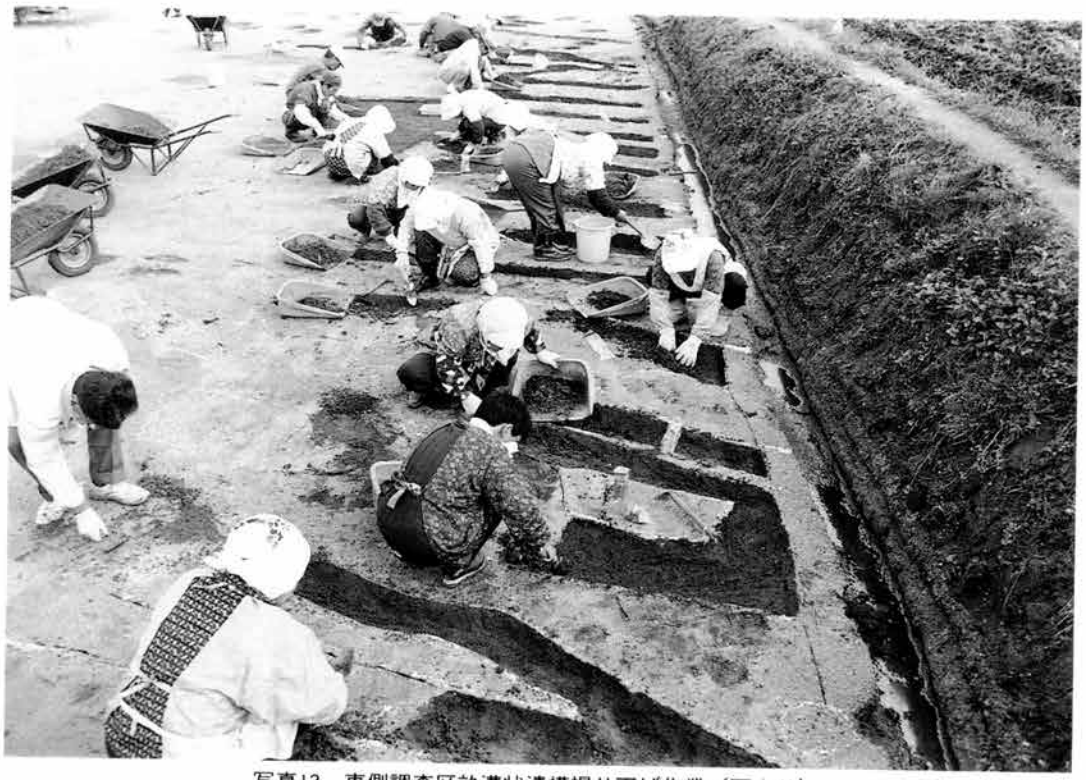


写真13　東側調査区畝溝状遺構掘り下げ作業（西より）

写真14　1号土坑土層断面検出状況（S．P．5～6）

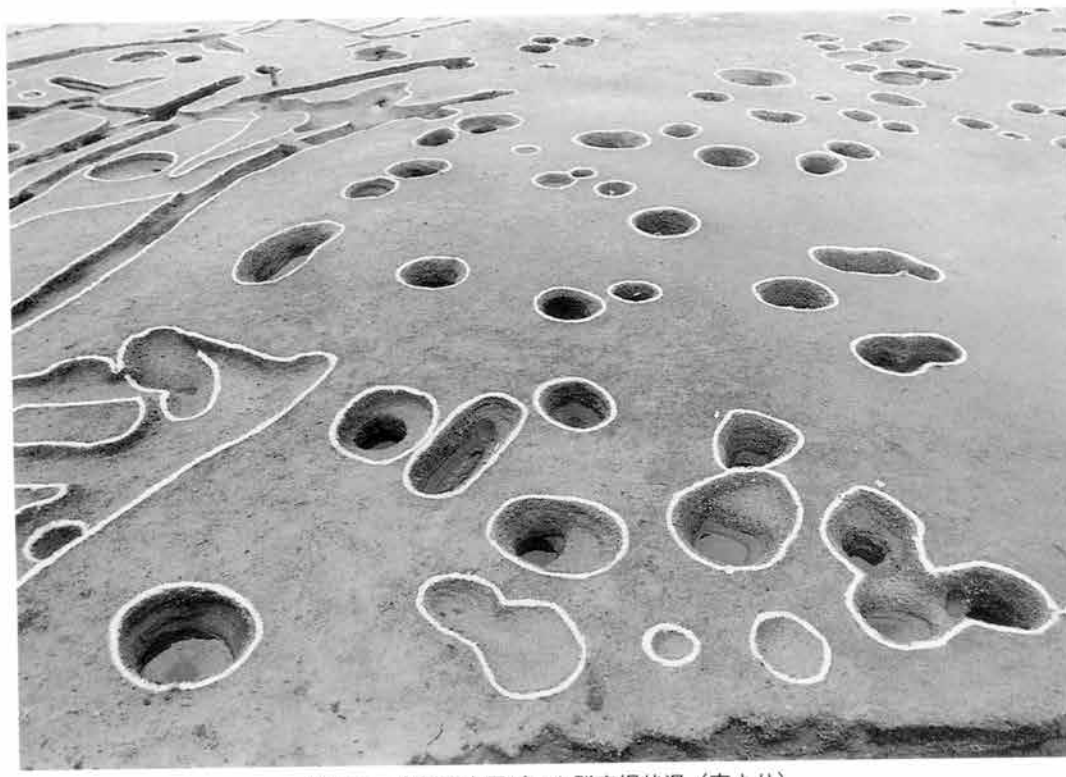


写真15　東側調査区ピット群完掘状況（南より）

写真16　航空測量準備作業（東より）

写真17　東側調査区完掘状況（東より）

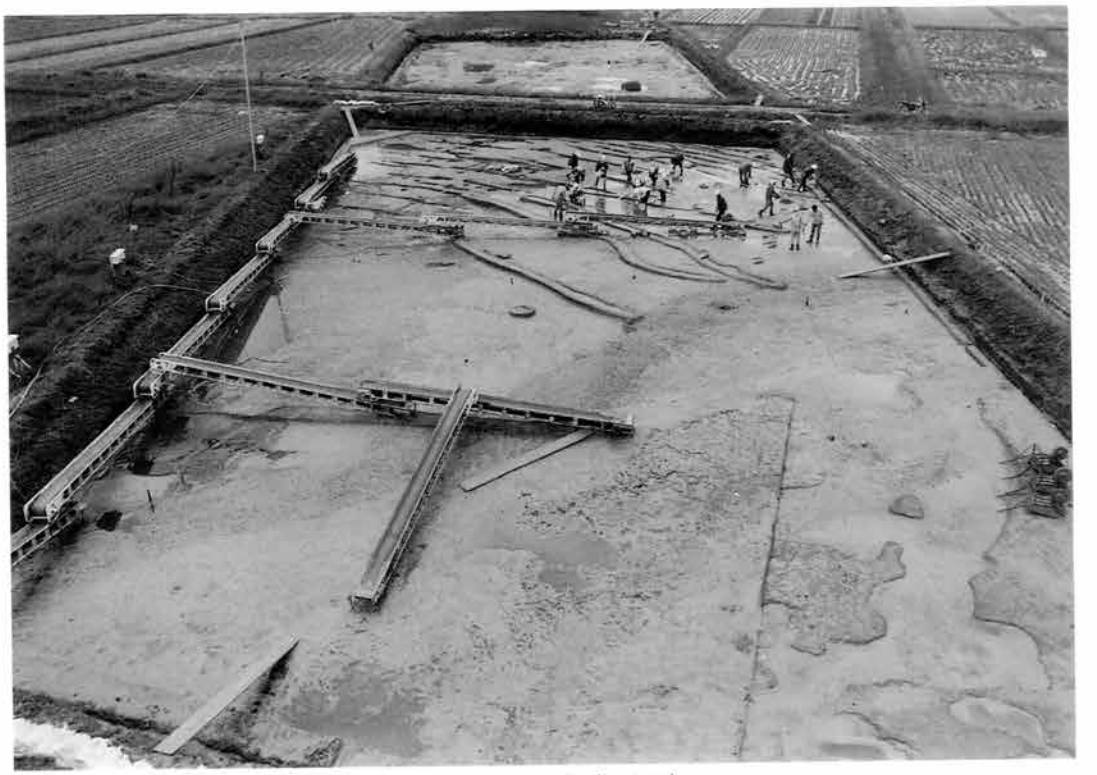


写真18　排水作業（西より）

写真19　西側調査区完掘状況（西より）

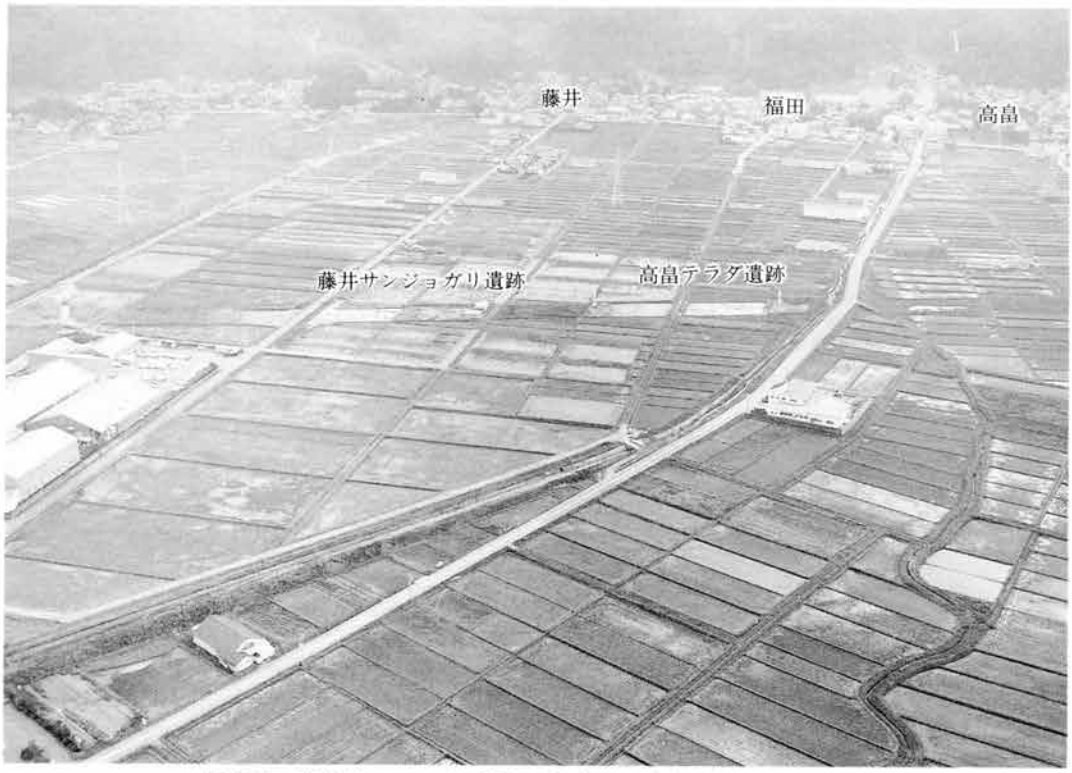


写真20　藤井サンジョガリ遺跡、高畠テラダ遺跡遠景（北より）

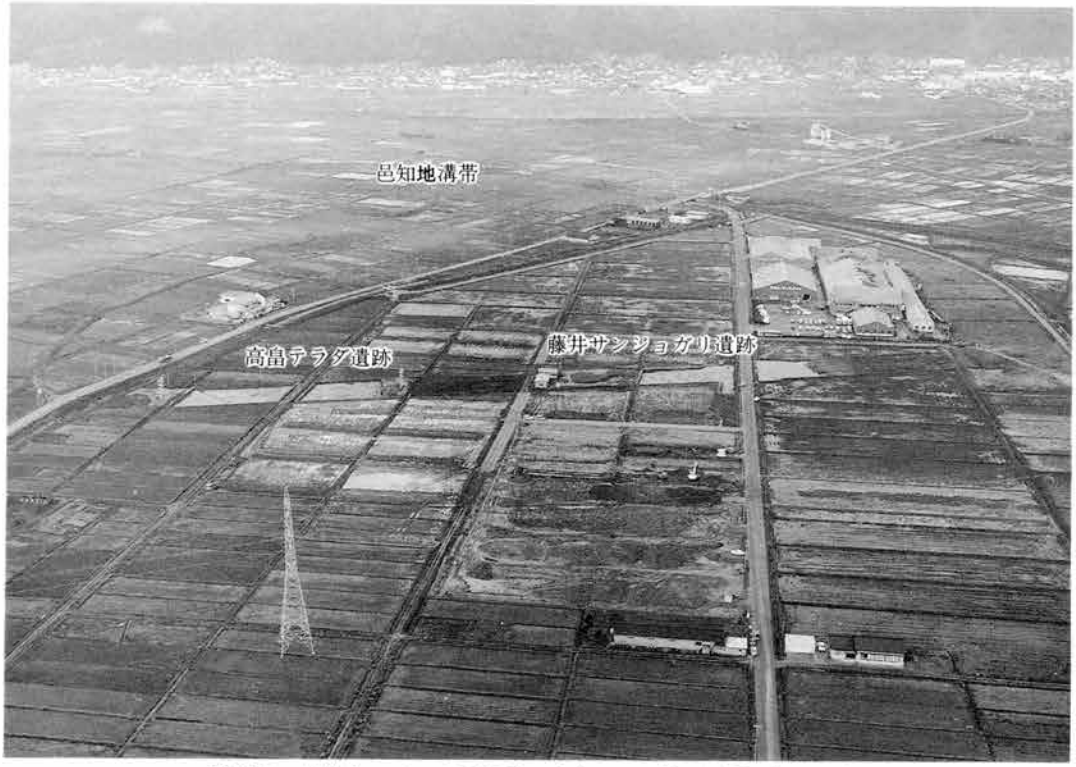


写真21　藤井サンジョガリ遺跡、高畠テラダ遺跡遠景（南より）

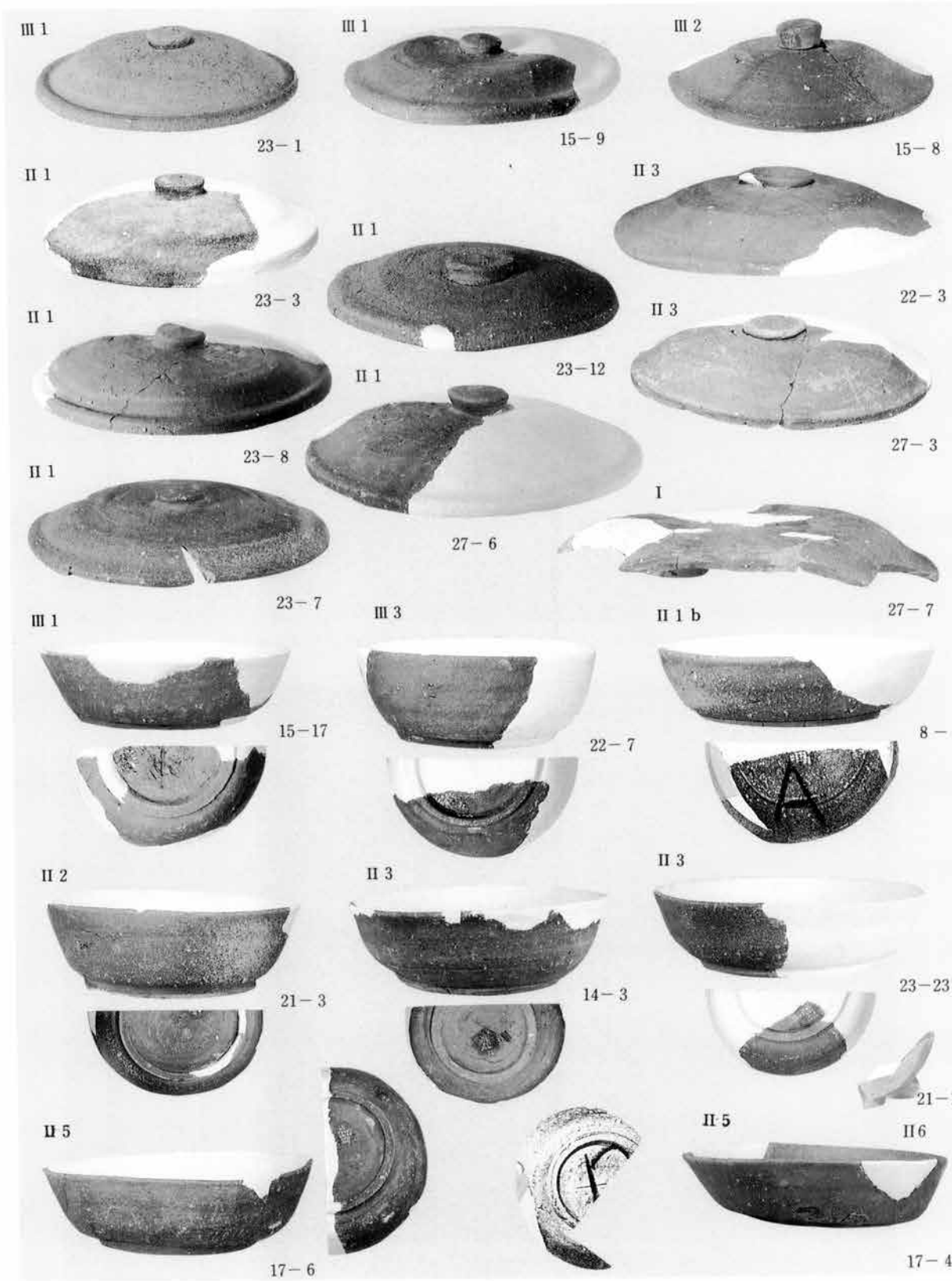

Ⅲ 1
23－1
Ⅲ 1
15－9
Ⅲ 2
15－8
Ⅱ 1
23－3
Ⅱ 1
23－12
Ⅱ 3
22－3
Ⅱ 1
23－8
Ⅱ 1
27－6
Ⅱ 3
27－3
Ⅱ 1
23－7
Ⅰ
27－7
Ⅲ 1
15－17
Ⅲ 3
22－7
Ⅱ 1 b
8－1
Ⅱ 2
21－3
Ⅱ 3
14－3
Ⅱ 3
23－23
21－15
Ⅱ 5
17－6
Ⅱ 5
Ⅱ 6
17－4

写真22

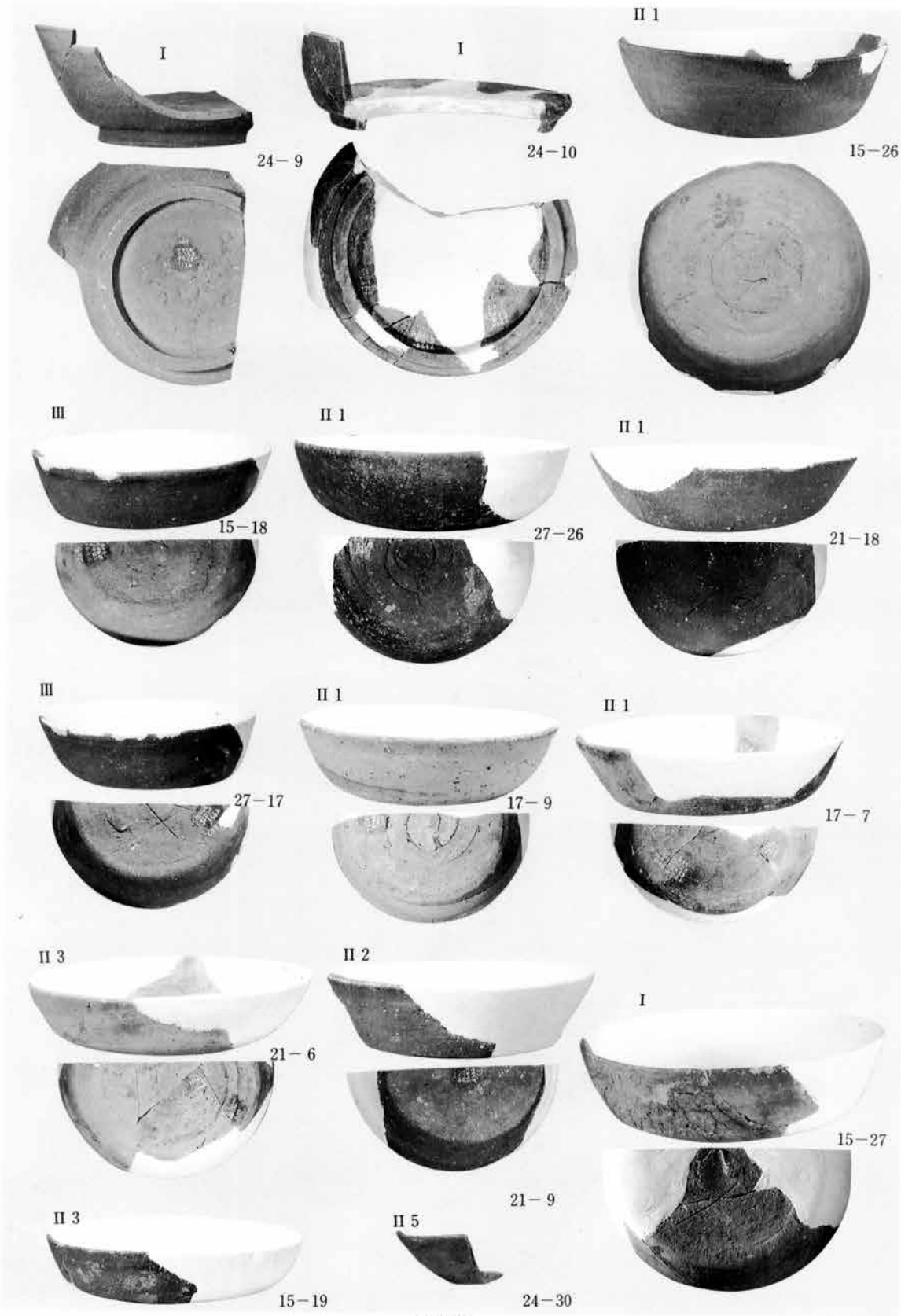

I
24－9
I
24－10
II 1
15－26
III
15－18
II 1
27－26
II 1
21－18
III
27－17
II 1
17－9
II 1
17－7
II 3
21－6
II 2
21－9
I
15－27
II 3
15－19
II 5
24－30

写真23

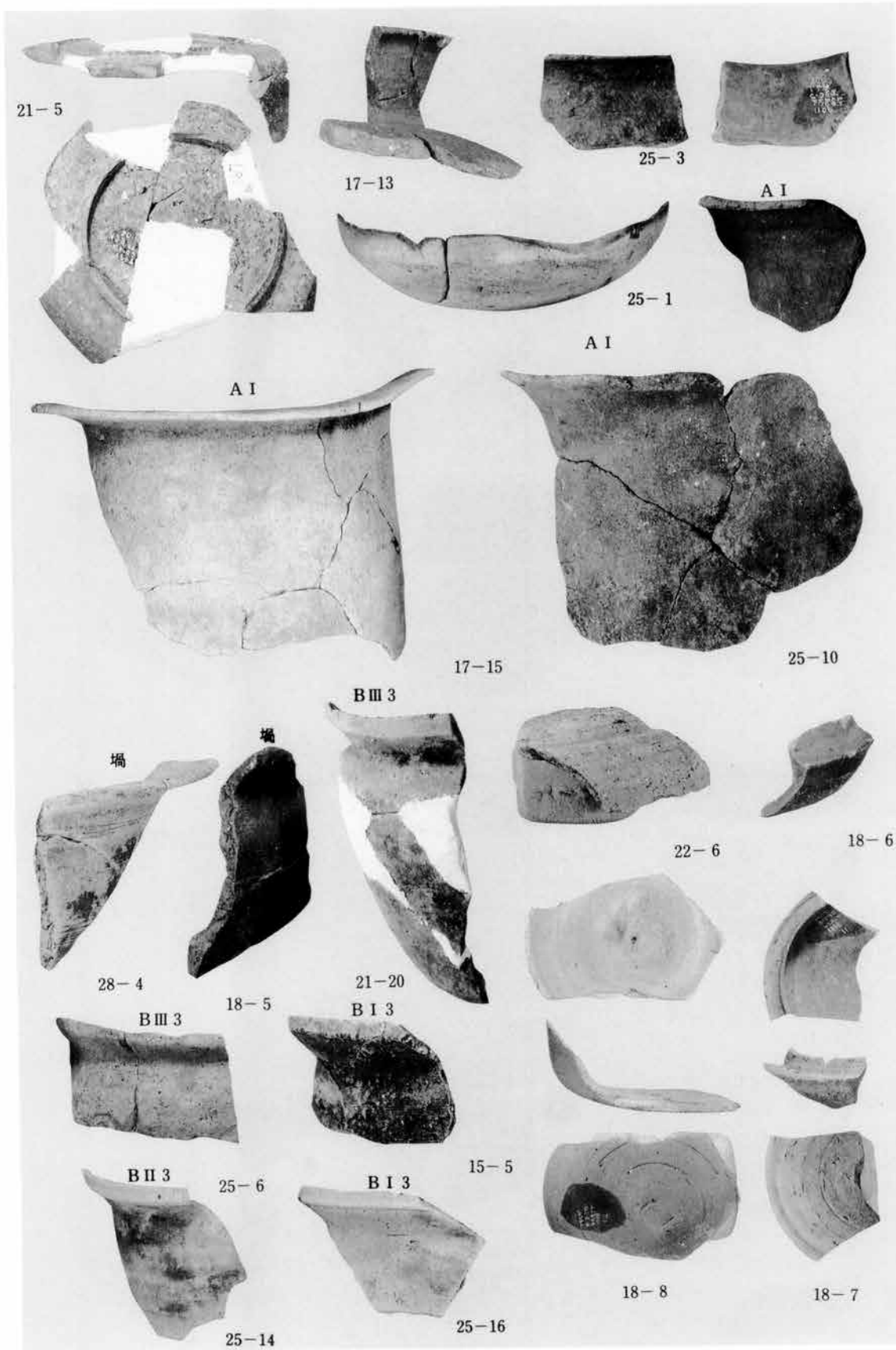
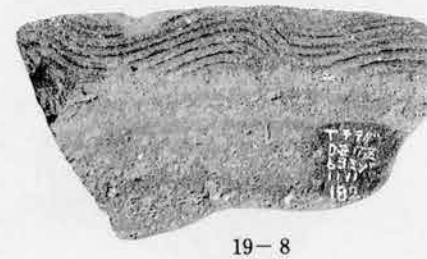
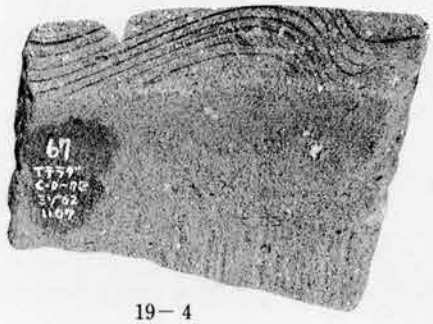

21－5
17－13
25－3
A I
25－1
A I
A I
17－15
25－10
B III 3
堝
堝
28－4
18－5
21－20
22－6
18－6
B III 3
B I 3
15－5
B II 3
25－6
B I 3
25－14
25－16
18－8
18－7

写真24

19－2



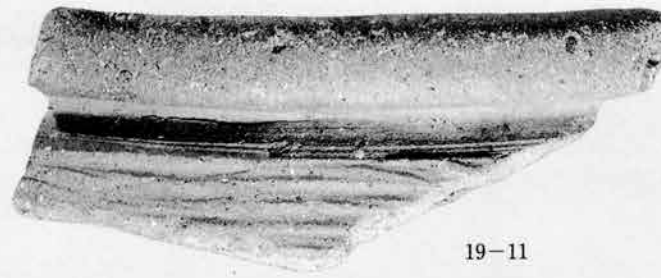
19－8



19－4

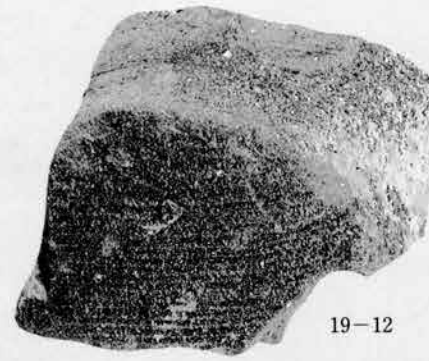
19－9

19－6



19－11

19－7



19－12

写真25

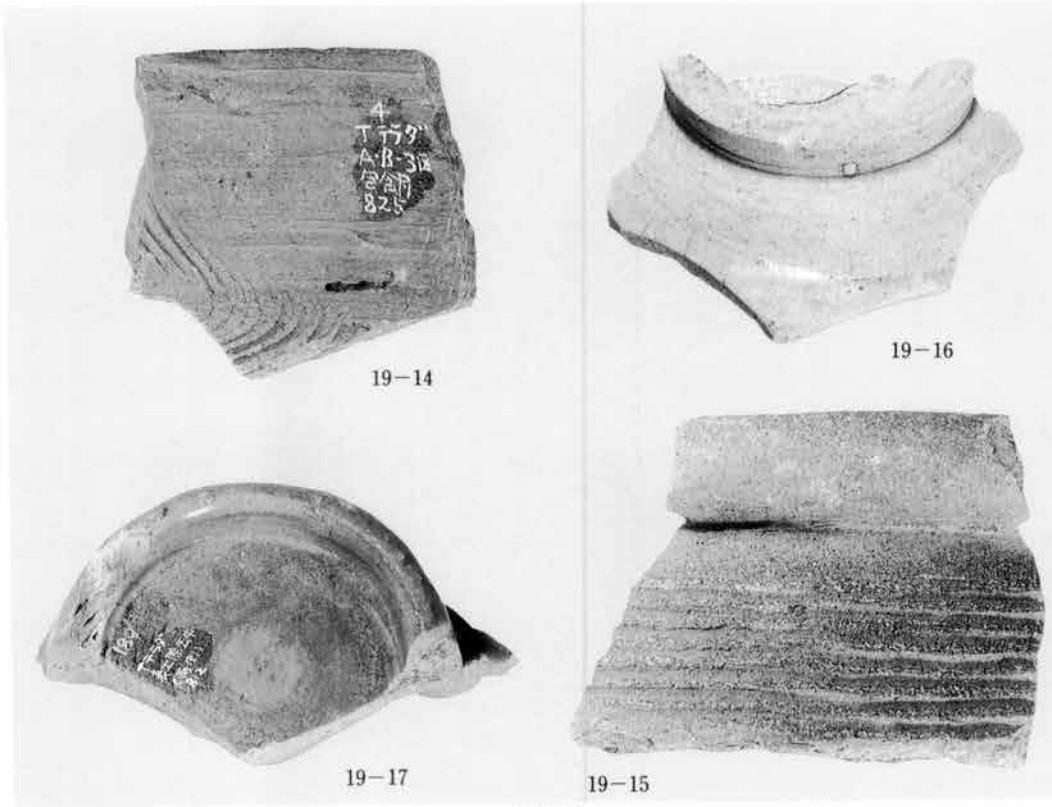


写真26

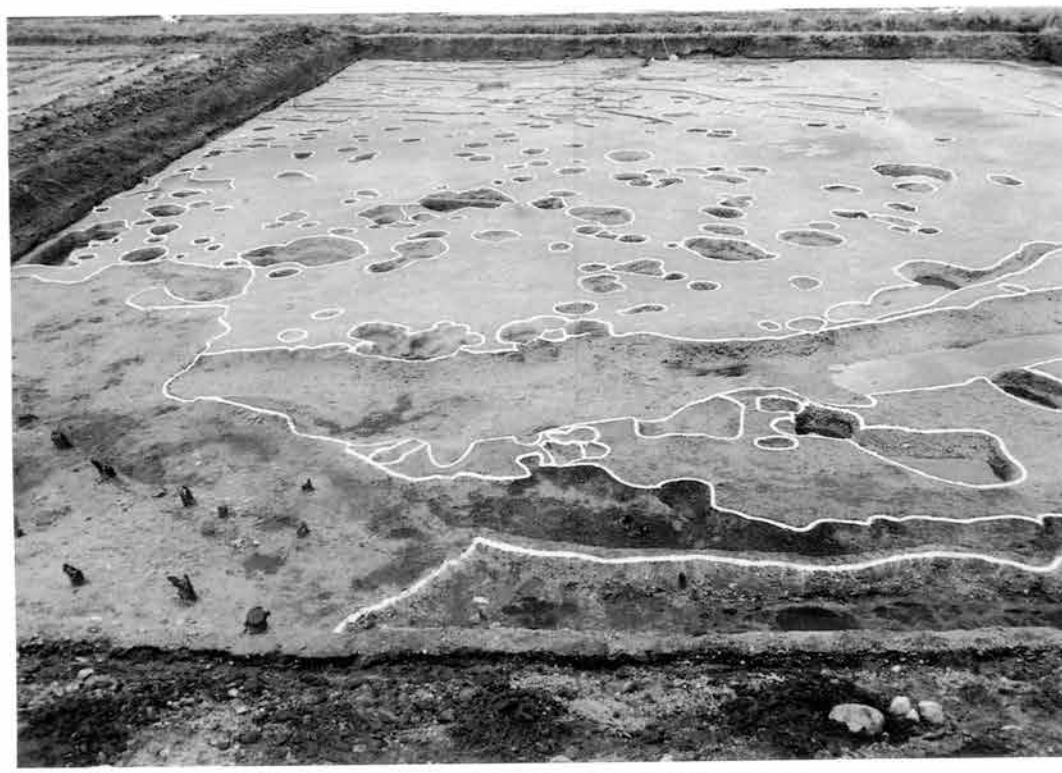
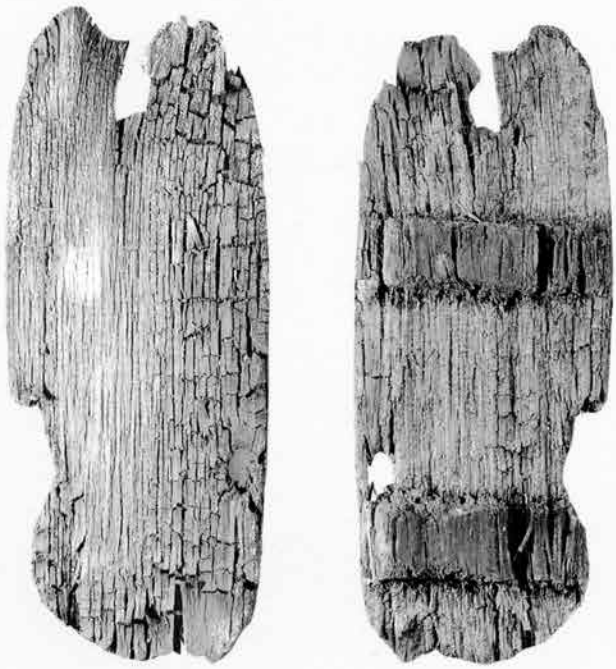


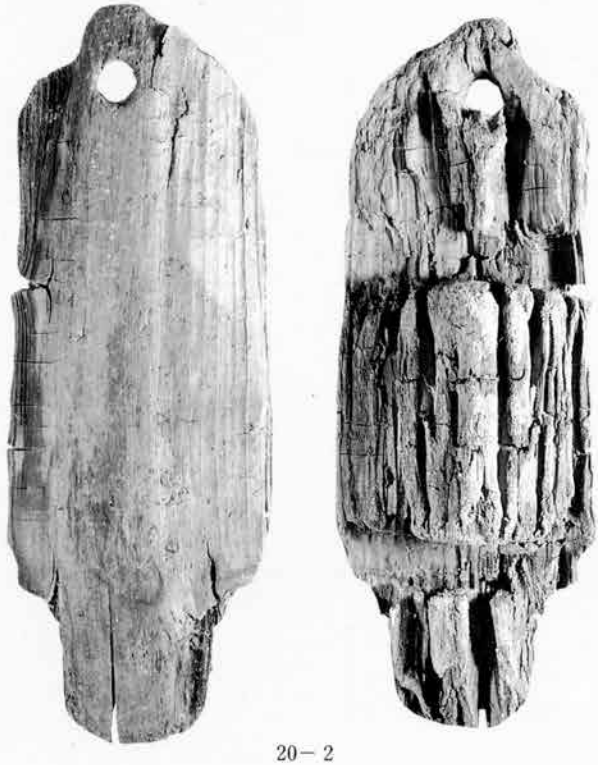
写真27　62号溝、63号溝周辺遺構完掘状況（東より）



20－1

26－8

26－9



20－2

26－10

写真28

V　高畠カンジダ遺跡

V　高畠カンジダ遺跡

1．概要

幅約24m、長さ約88m、面積約2,100m²の調査域を持つ。調査区中央東寄りを横断する幅1.5mの水路が南北に流れる。グリッドは調査区の長軸方向に沿って任意で基点を設け、10m単位で南からA～C区、東から1～9区と設定した(第1図)。遺構検出面は北側のC区で標高18.3～18.6m、南側のA区で18.9～19.2mと20m強の距離で60cm程度の高低差があり、集落側に高く邑知地溝帯側に低くなることが分かる。東西方向での極端な標高差は認められない。包含層以下の土質は全体に砂気を帯びた粘質土で、掘り下げ作業はやり易いが、掘り上げた後の遺構が崩れ易いという難点を持つ。基本的な土層は、1・耕土、2・灰色粘質土層、3・淡黄灰色粘質土層、4・(暗) 褐色粘質土層(包含層)、5・地山層の五層からなる (第12～13図)。

遺構は大きく土坑・溝・掘立柱建物・ピットで構成される。土坑の多くは風倒木痕であるが、縄文時代前期のものも確認されている。調査区の西側には東西に伸びる大溝が見え中近世の陶磁器が出土した。また東端で検出された3号溝と4号東溝からは弥生時代後期後半の遺物が一括出土している。掘立柱建物は調査区の東側に集中し、南北および東西に長軸を持つ総柱建物が数棟確認できた。

写真1　東側調査区遺構掘り下げ作業（東より）

第１図　高畠カンシダ遺跡（図郭割・グリッド配置図）

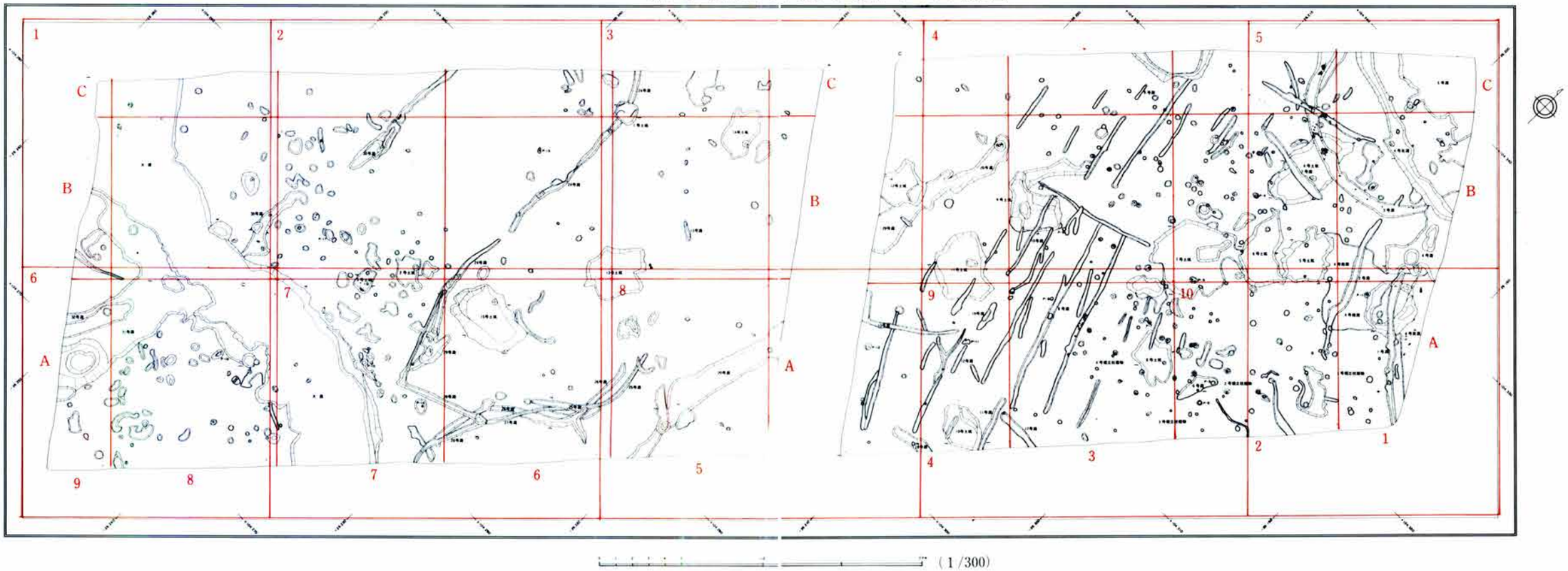
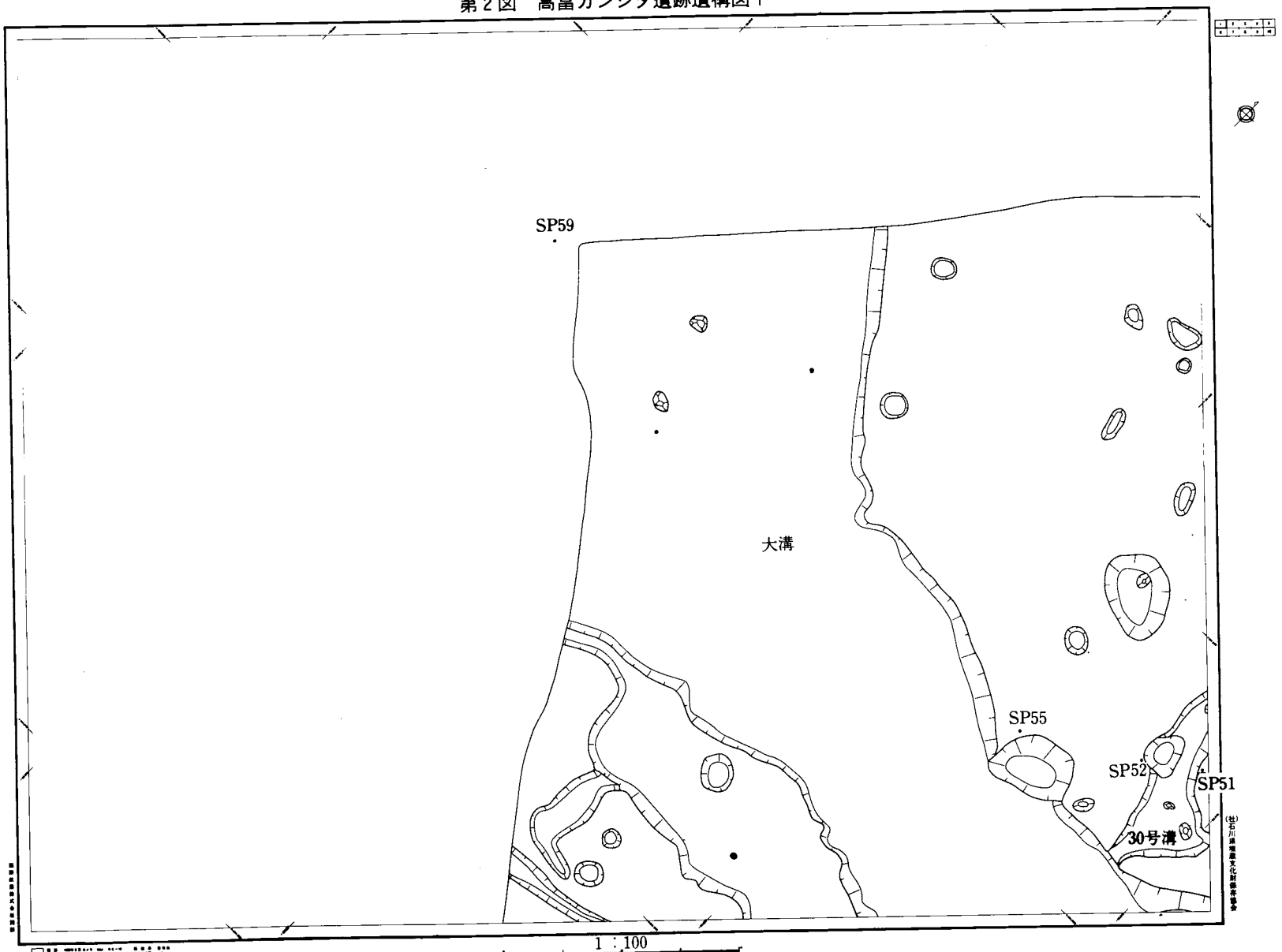
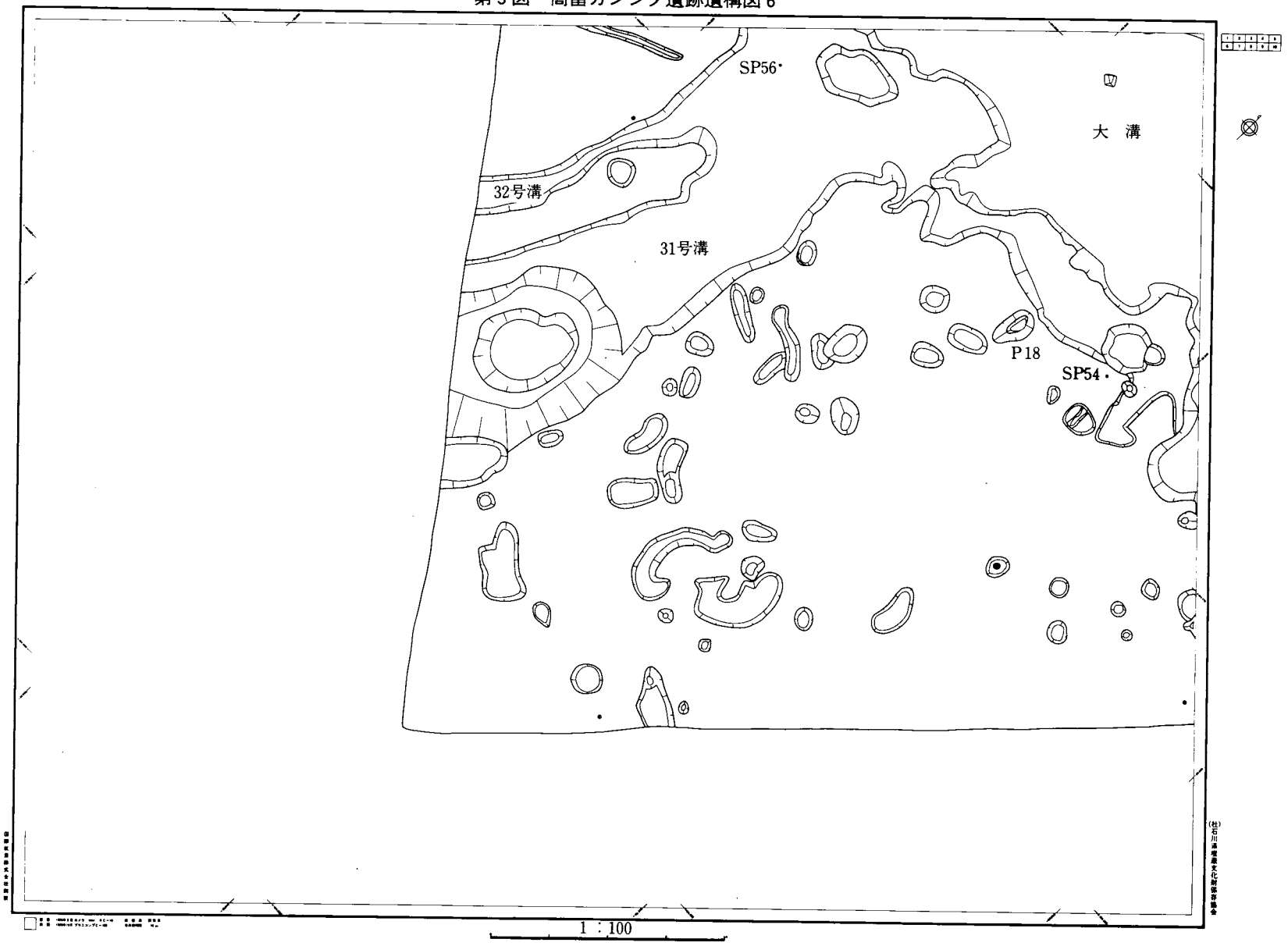


写真２　高畠カンジダ遺跡全景

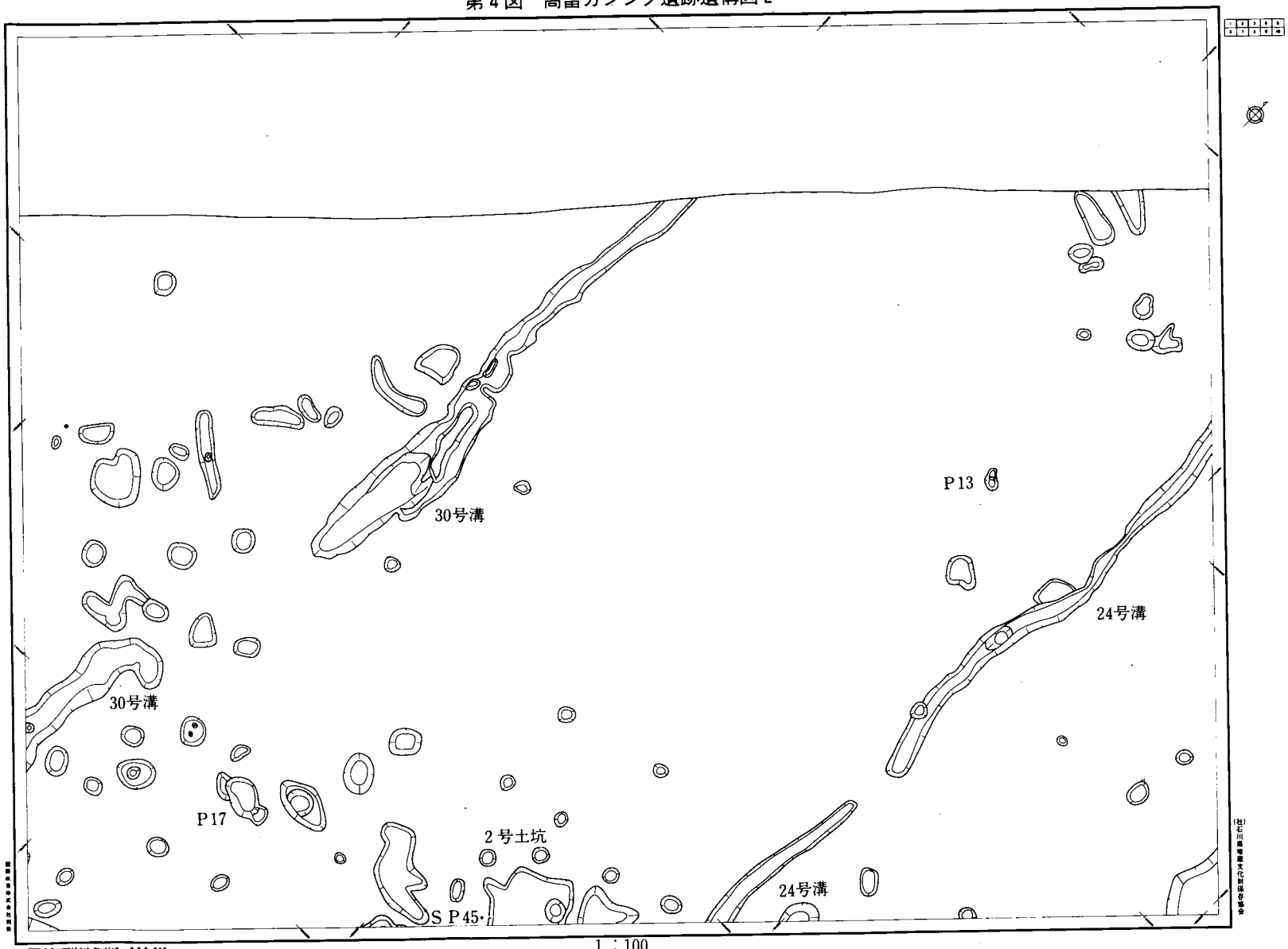
第２図　高畠カンジダ遺跡遺構図Ⅰ



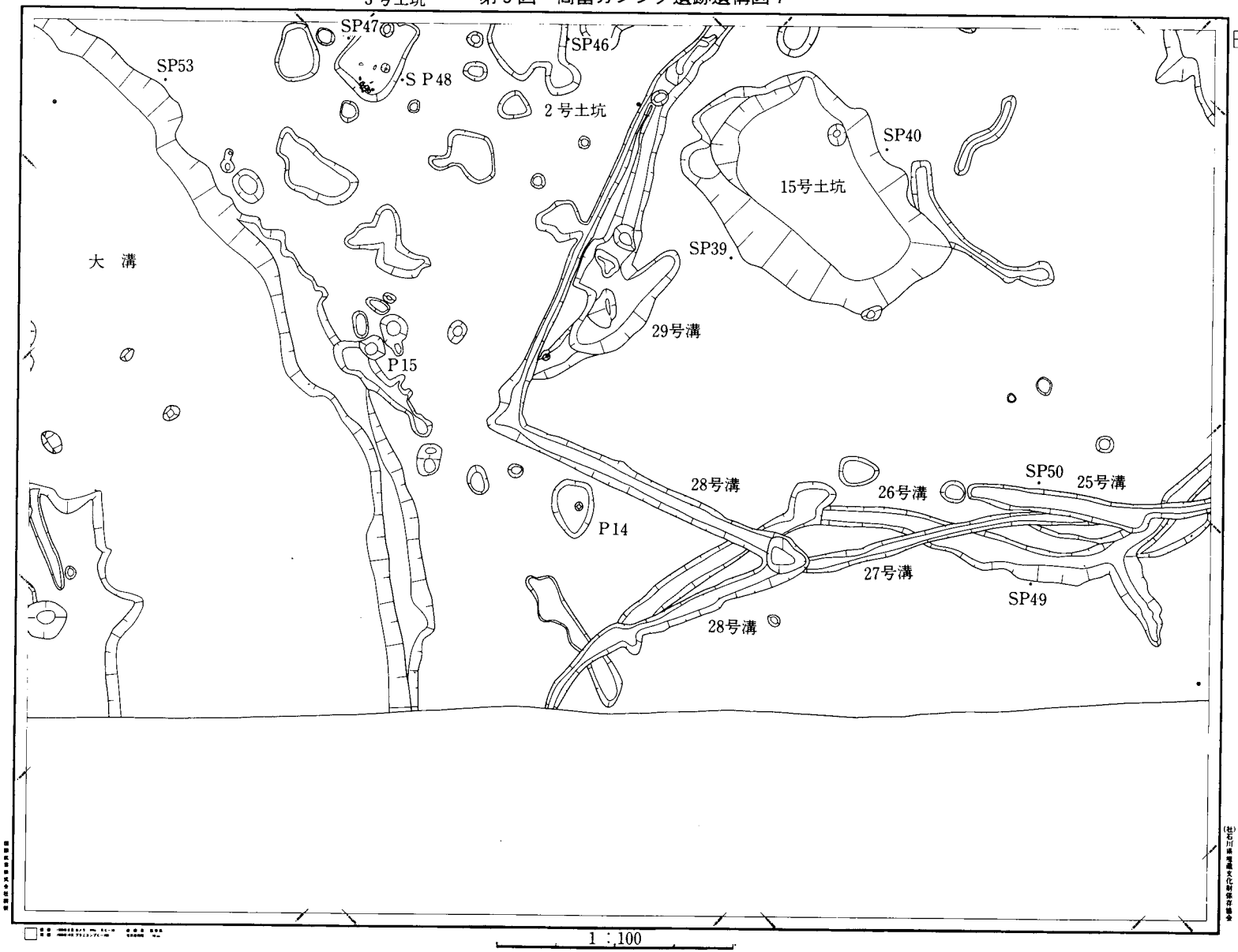
第３図　高畠カンジダ遺跡遺構図６



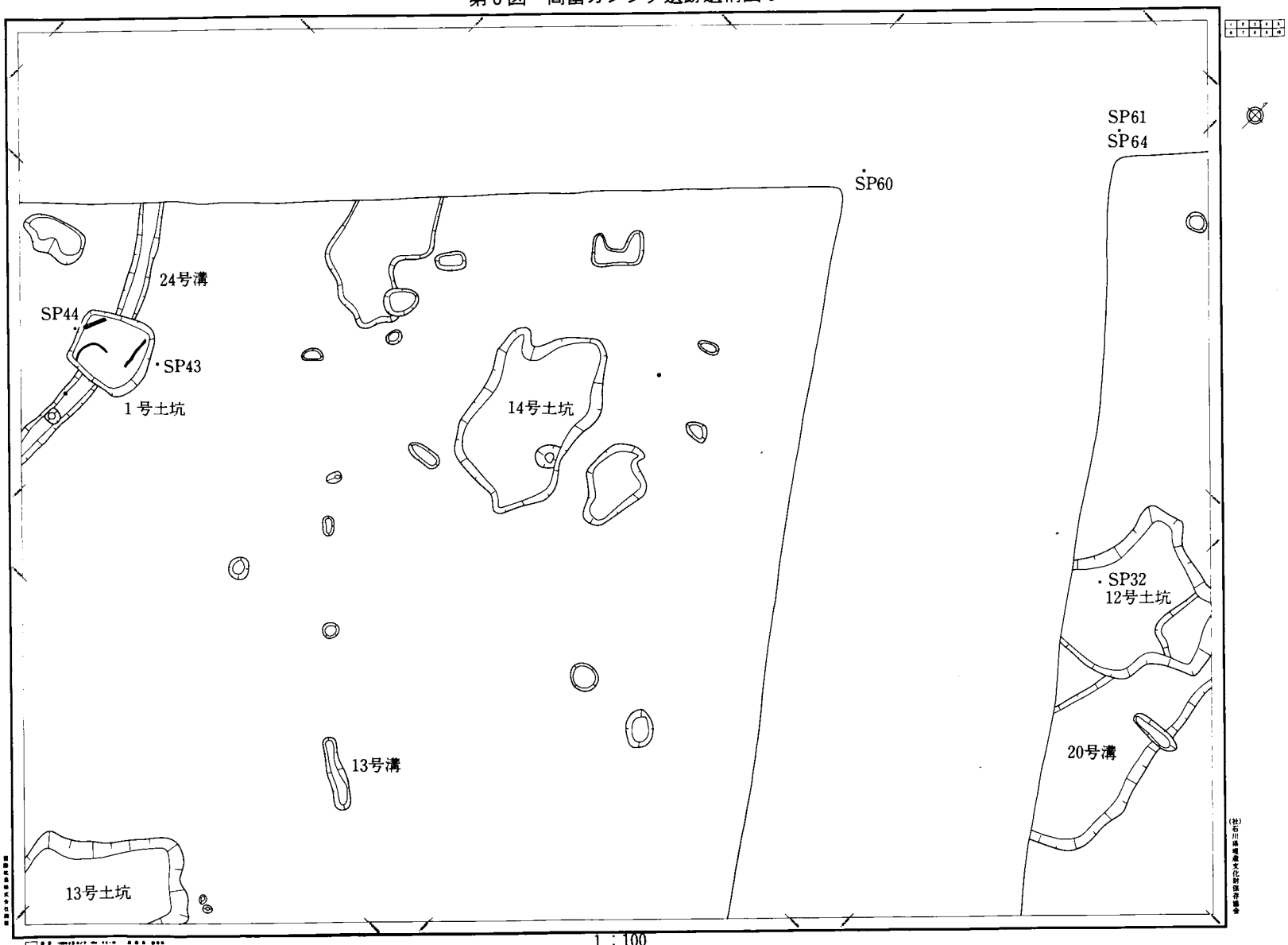
第４図　高畠カンジダ遺跡遺構図２



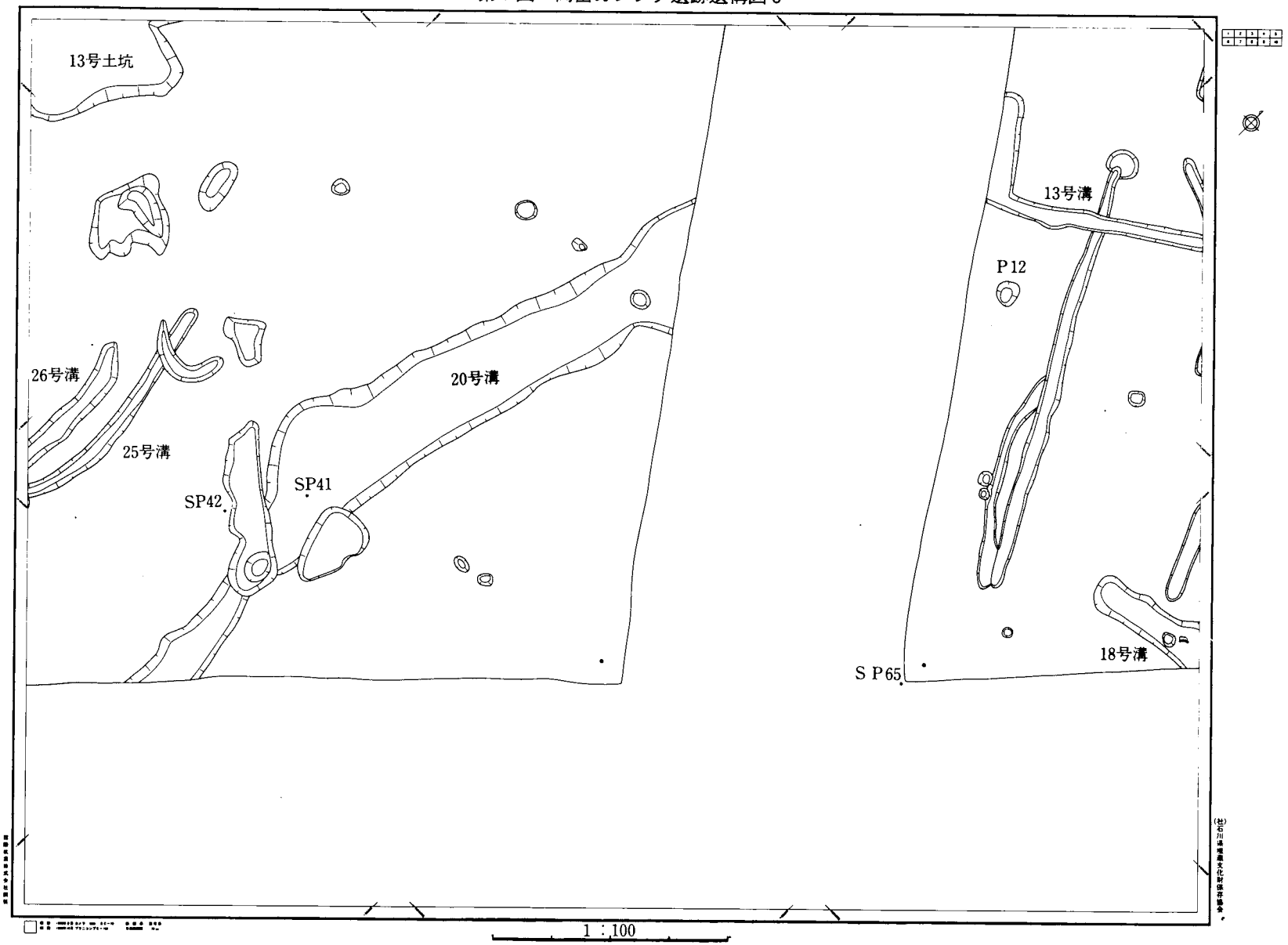
第５図　高畠カンジダ遺跡遺構図７



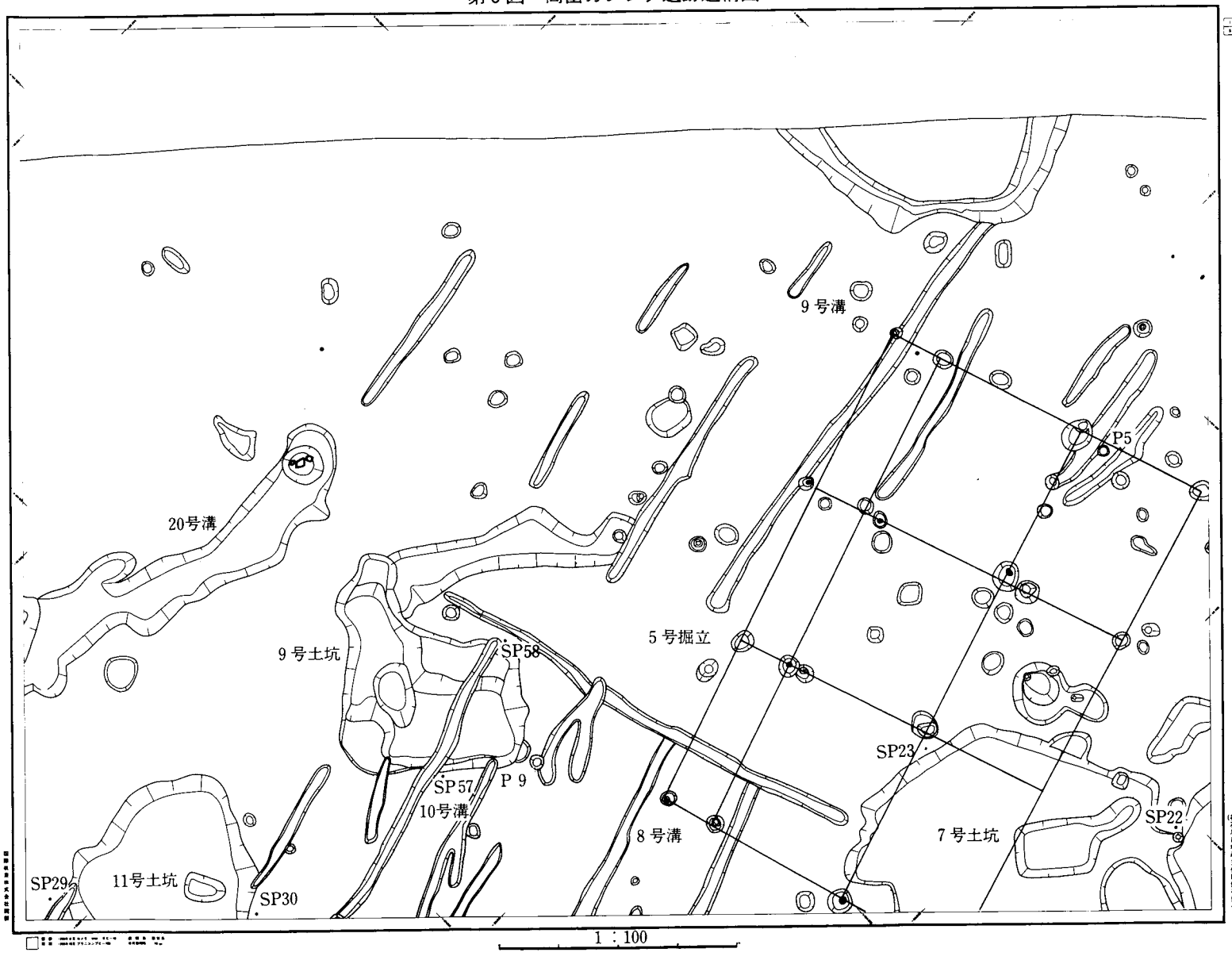
第６図　高畠カンジダ遺跡遺構図３



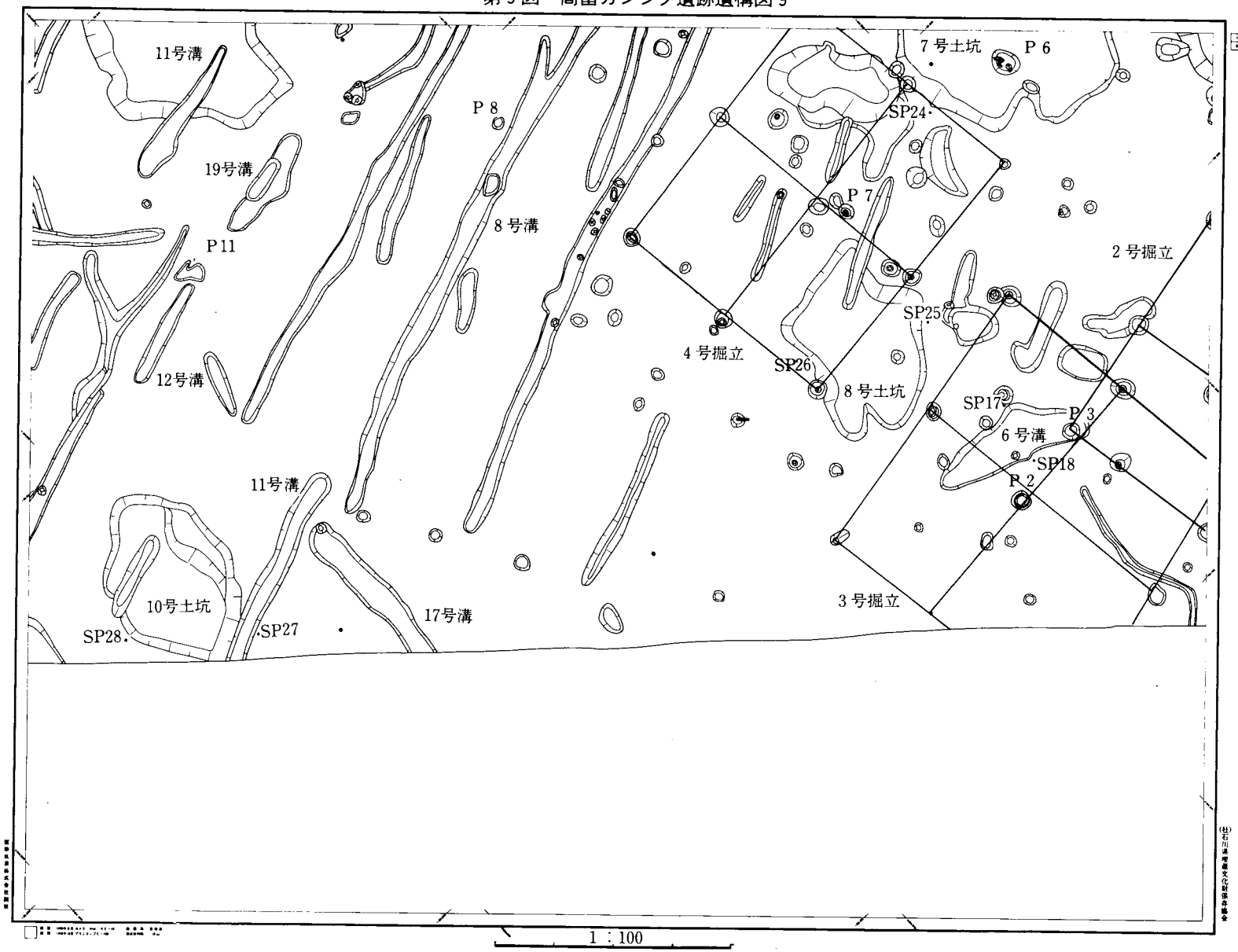
第７図　高畠カンジダ遺跡遺構図８



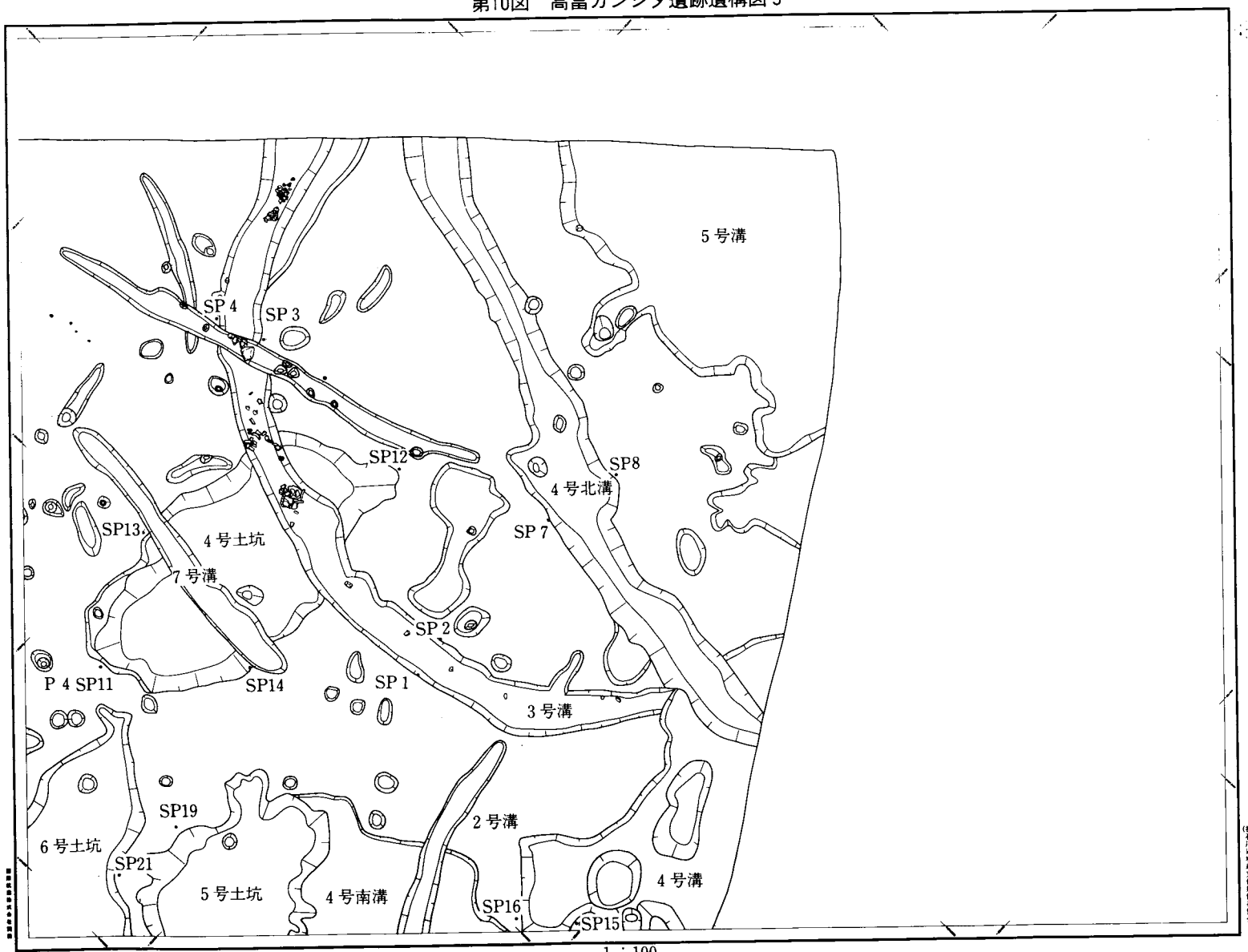
第8図　高畠カンジダ遺跡遺構図4



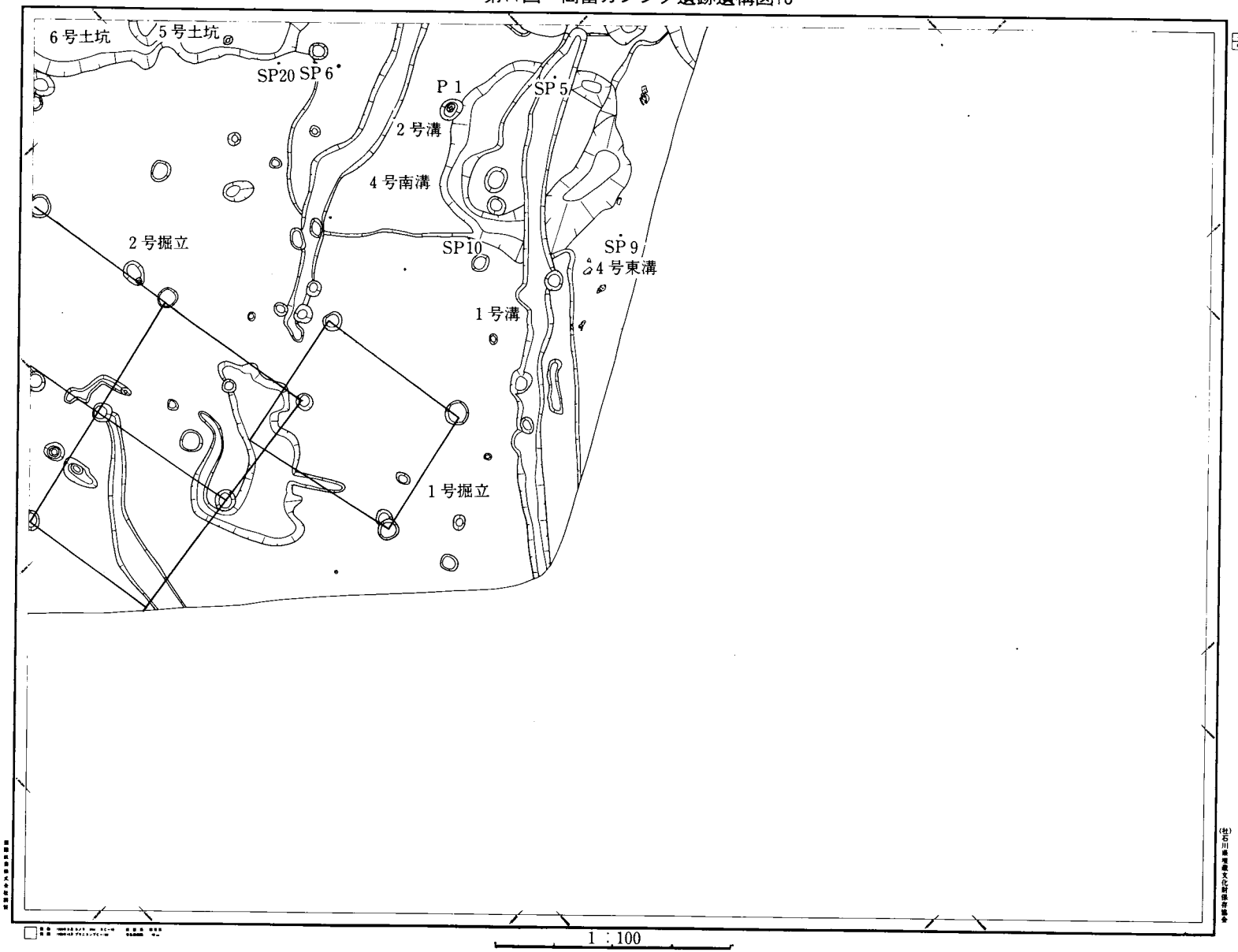
第９図　高畠カンジダ遺跡遺構図９

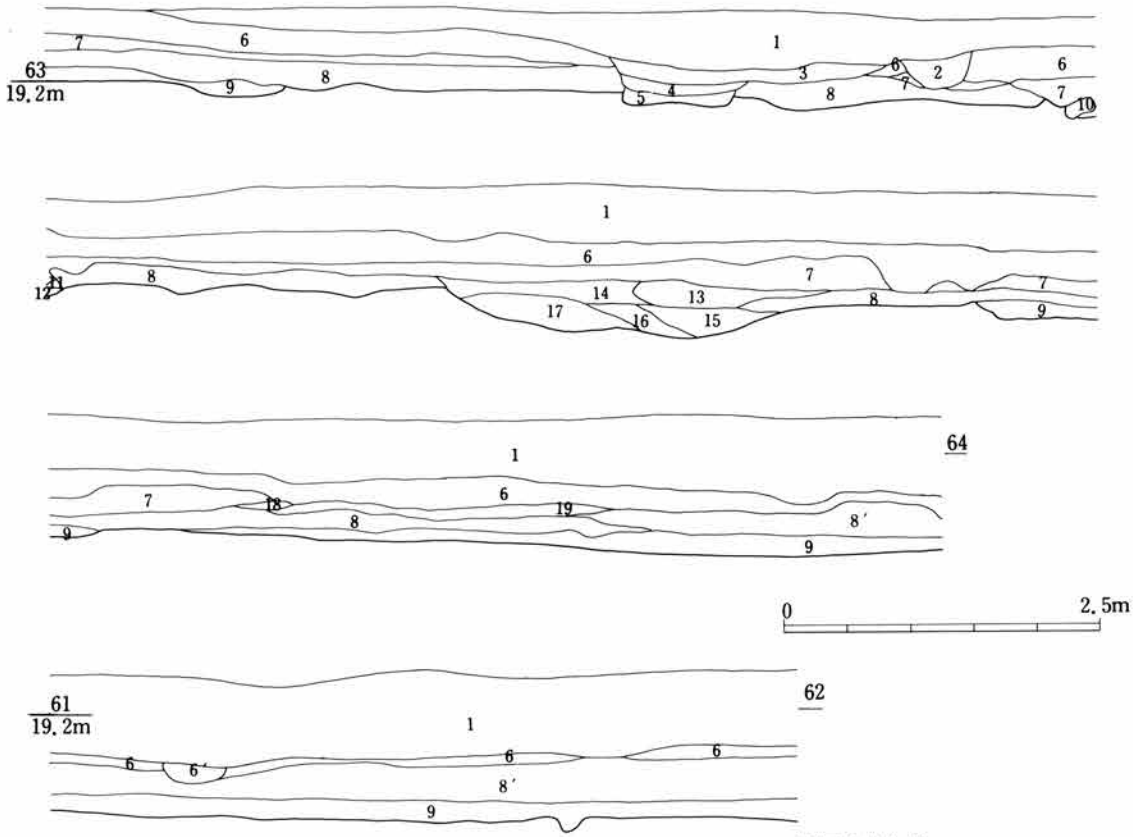


第10図　高畠カンジダ遺跡遺構図５



第11図　高畠カンジダ遺跡遺構図10

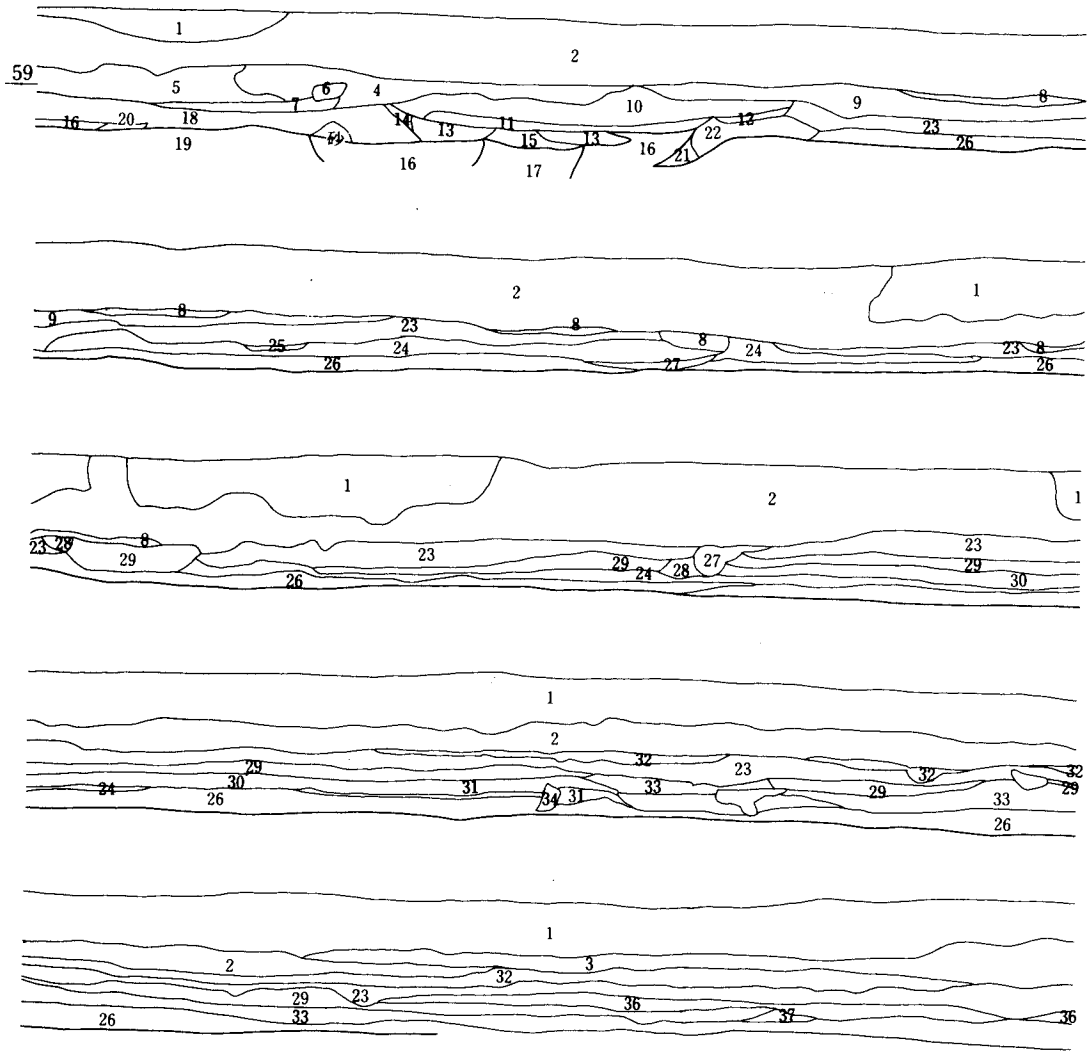




1　黄灰色粘質土層(耕土)
2　1に黄色砂混入(排水浄)
3　籾殻層
4　淡灰色粘質土層　暗渠排水温
5　暗灰褐色粘質土層
6　灰色粘質土層
6′　6に褐色ブロック混入
7　淡黄灰色粘質土層
8　暗褐色粘質土層　包含層
8′　灰褐色粘質土層
9　褐色粘質土層
10　灰褐色粘質土層
11　暗灰色粘質土層
12　灰黄色粘質土層
13　濁灰色粘土層
14　暗褐色粘質土層(黄色ブロック混入)
15　黄色砂層　20号溝
16　黄灰色砂層
17　黄色砂層
18　黄褐色粘質土層
19　淡色粘質土層(白色ブロック混入)

第12図　調査区土層断面実測図（1/60）

写真3　第17図ＳＰ61～62間土層堆積状況（南より）



1 腐食土層(芦根生える)
2 灰色粘質土層
3 淡黄灰色粘質土層
4 褐色粘砂質土層
5 灰褐色粘砂質土層
6 灰褐色粘質土層
7 暗褐色砂質層
8 暗褐色粘砂質土層
9 4と同層
10 7と同層
11 黄白色砂層
12 暗灰色粘質土層
13 灰色砂層
14 暗灰色砂層
15 14に黄白色砂多く含有
16 淡白色砂層（2～3cm大の礫多く含む）
大溝
17 暗灰色粘質土層
18 暗灰褐色粘質土層
19 暗褐色粘砂質土層(粘性強い)
20 暗灰色砂層
21 淡褐色粘質土層
大溝
22 暗褐色粘質土層(粘性強い)
23 暗褐色粘質土層
包含層
24 淡黄灰色粘質土層
25 暗灰色粘質土層
26 灰褐色砂質土層
27 褐色砂質土層
28 黄白色砂層
29 黒褐色粘質土層
30 淡褐色砂層
31 暗灰色粘質土層
32 褐色粘砂質土層
33 黄褐色粘砂質土層
34 暗黄白色砂層
35 灰色粘質土層
36 褐色砂質土層
37 暗褐色砂質土層

第13図　調査区土層断面実測図（1/60）

2．遺構と遺物

(1)　土坑

1号土坑（第6図）

B・C－5区に位置する。平面形は方形に近く、1.25×1.34mの大きさで、深さは12cm程度。真下を通る24号溝より新しく、覆土は粘性の強い黒褐色粘質土の単層である。中からは丸太状、板状、そして片方に焦げめを持つ弧状の木片3点が出土している。土器は確認できなかった。

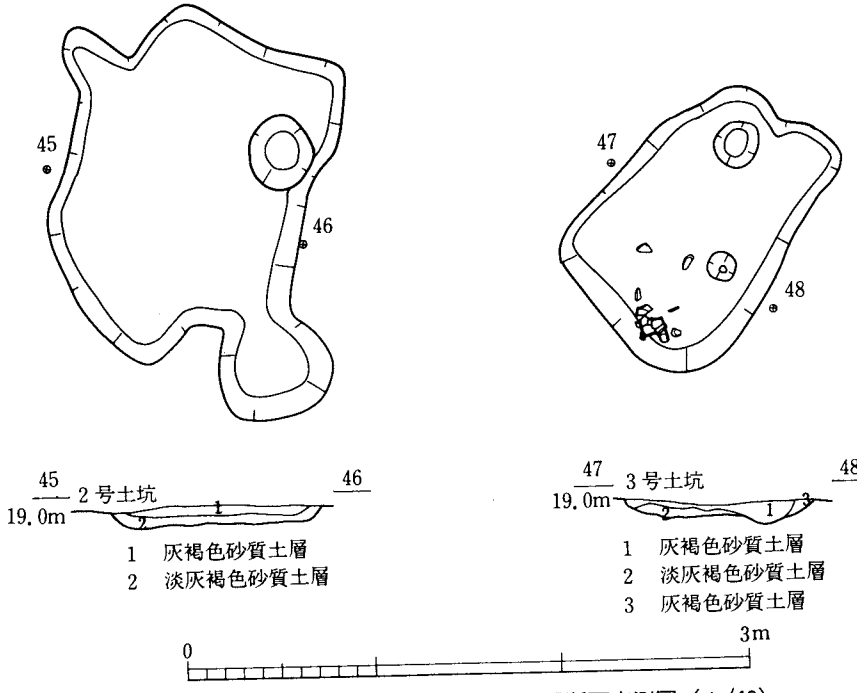
2号土坑（第14図・第15図1～7）

A・B－7区に位置する。不定形であるが、1.3×1.8m、深さ10cm程度の規模を持つ。覆土は第1層が灰褐色砂質土、第2層が淡灰褐色砂質土と砂気が多い。当土坑周辺では遺構検出の段階から縄文土器が認められている。なお出土遺物は大変脆く、水溶性の接着剤を用いて取り上げた。

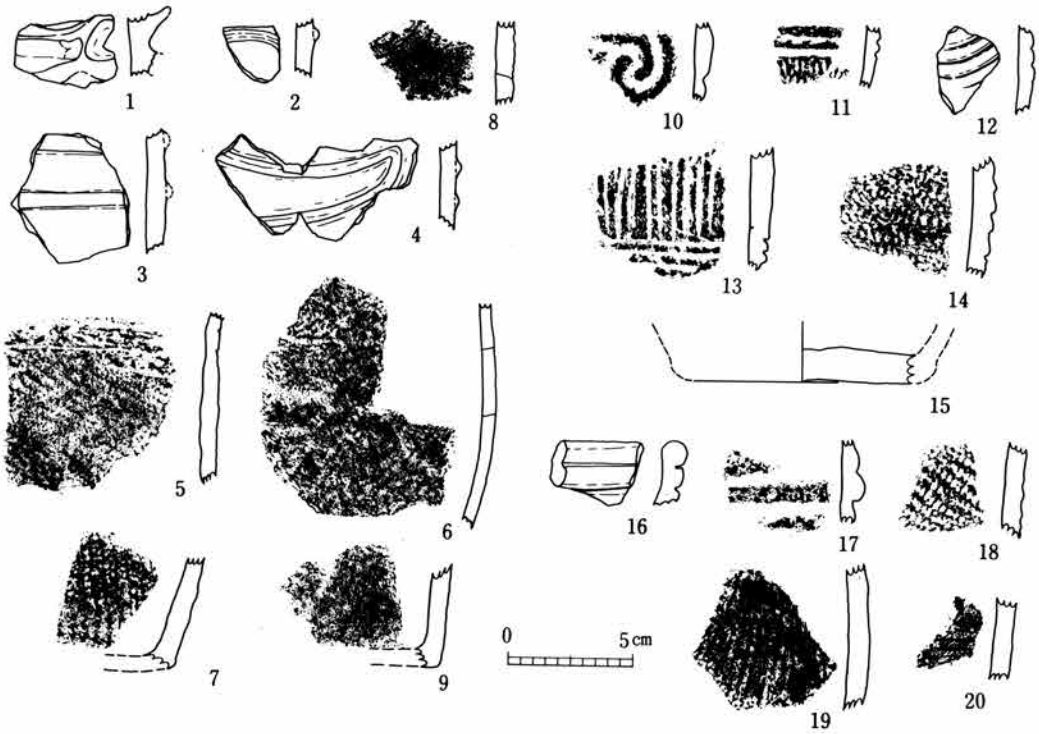
1～4は同一個体と考えられ、器面に粘土紐を貼りその間をなでる。赤彩が施される器体は磨耗が激しく、器形を含め全体像は復元し難い。5～7も同一個体と思われ、5の上端には沈線を2条平行に加える。いずれも器壁は薄く、縄文時代前期後葉蜆ケ森式に含められるものであろう。

3号土坑（第14図）

A・B－7区に位置する。1×1.5mの大きさで南北に長軸を持つ方形の土坑である。深さは10cm前後で覆土の基本層序は隣接する2号土坑と等しい。南隅に縄文土器が集中するが、細片のため実測はできなかった。ただし2号土坑との共通性は大きいと思われる。



第14図　2号土坑、3号土坑平面・土層断面実測図（1/40）



第15図　2号土坑(1～7)、ピット13(8)、24号溝(9)、20号溝(10～12)、5号土坑(19)、4号溝(20)、大溝(13～15)、包含層(16～18)出土遺物実測図（1/3）

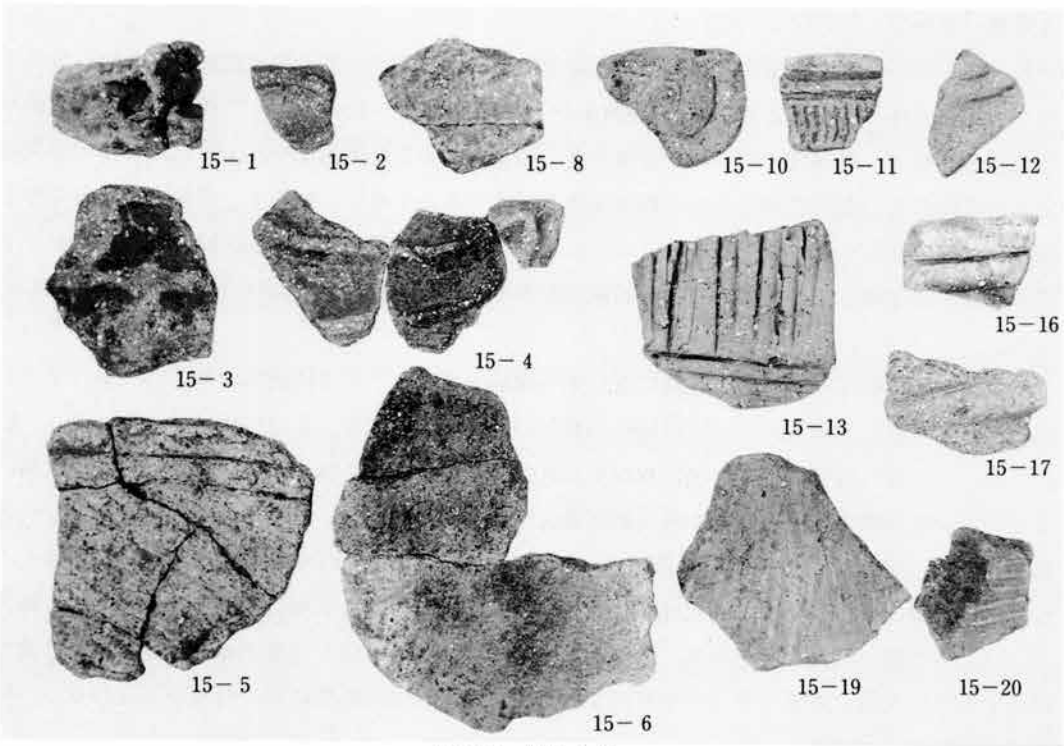


写真4　縄文土器

4～15号土坑（第5～11図・第15図19）

6区以東に位置する。いずれも平面形は明確でなく、不定楕円形に近い。最も小形の10号土坑で長軸3m、大型の4号土坑では6mの長さがあり、深さは30～40cm代のものが大半を占める。覆土も一定しないが、黄灰色粘質土（地山質）の周囲や片側に暗（黒）褐色粘質土が入り込むといった変則的な土層状況が多く見られる。いわゆる風倒木痕と呼ばれる土坑である。すべてが同時期のものかどうかは判断しかねるが、B－2区の4号土坑は弥生時代後期後葉の遺物を出土する3号溝より古い。またB－4区の12号土坑は縄文時代中期前葉の遺物を出土する20号溝より新しい。なお6・7号土坑と接続するB－2区の5号土坑底からは縄文時代晩期～弥生時代前期の土器片が出土している。これらの状況からすると風倒木痕の形成された時期は、縄文時代中期前葉より新しく、晩期以降の可能性があり、弥生時代後期後葉には既に埋没していたと推測される。

19は5号土坑底より出土している。条痕を施すものであり、縄文時代晩期～弥生時代前期に位置付けられよう。

(2) 溝

2号溝（第10～11図）

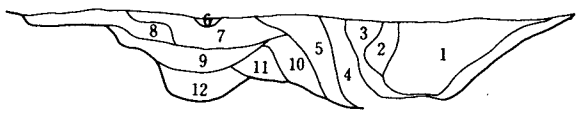
A・B－1・2区に位置する。長さ9.3m、幅50cm前後、深さ5～20cmで南北に完結する。弥生土器の細片が出土している。

3号溝（第18図・第19図1～15）

B・C－1・2区に位置する。調査区北端で検出された弧状に巡る溝状遺構で、北側3分の2近くは調査区外へ伸びると思われる。幅40cm～1m、深さ10～20cm、そして復元周溝径は12m程度と予想される。周溝底の標高は、遺物が多く残る西側の方が東側より20cm程低くなる。中央部分に柱を配置し、周囲に溝を巡らす周溝建物を構成するとも考えられるが、内側の様子は4号北溝と5号溝に切られはっきりしない。ただしピット1～3（深さは順に26・15・16cm）はピット底の標高もほぼ等しく、主柱穴になる可能性がある。なお遺物は溝底に付く形で一定量出土している。

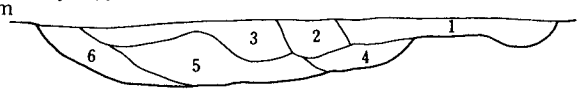
1は直立する幅広の口縁帯と球状に近い丸い体部を持つ。2～4は短い口縁帯の一群。4は完形に復元できる。列点文の下方には縦位の細かいハケ調整が入る。6は肩部に列点文が巡り、器壁は薄い。7は口縁帯の上部に擬凹線が見られない。8は口縁全体が歪む。口縁部下端は水平に仕上げる。9は肩部のせりだしが弱く胴部最大径は口径より小さくなる。頸部下には片押し状の施文が巡る。10は口縁部が歪み、頸部内面には幅広の弱い面取り部分が認められる。器壁は薄く、外面には多量の煤が付着する。12は現長32.2cmの壺。内外面共に丁寧に調整が施される。口縁部下には二本の弱い圏線が見られる。外面胴部下半の片側一方に煤が付着する。13は口縁部付近で内湾する小型土器。外面下半はやや平滑な調整となる。15は外底面に煤の付着が見られる。

13
18.8m 4号土坑 14



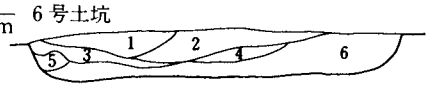
1 黒褐色粘砂質土層
2 淡灰褐色砂質土層
3 淡黄褐色砂質土層
4 暗灰色粘質土層
5 黒褐色砂質土層
6 暗黄褐色砂質土層
7 2と同色
8 淡黒褐色砂質土層
9 暗黄褐色砂質土層
10 黄褐色砂質土層
11 淡灰色砂質土層
12 淡灰色砂質土層

19
18.8m 5号土坑 20



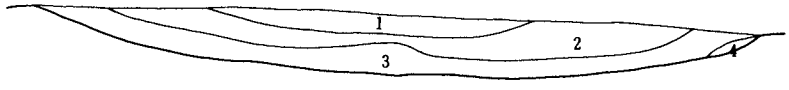
1 暗黄褐色粘質土層
2 黄灰色粘土層
3 褐色粘砂質土層
4 極暗褐色粘土層
5 灰褐色粘質土層
6 暗灰褐色粘質土層

21
18.8m 6号土坑 22



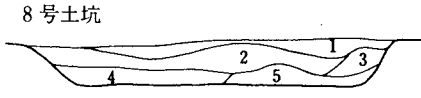
1 暗褐色粘質土層
2 淡黄灰色粘質土層
3 黒褐色粘質土層
4 淡灰色粘土層
5 4と同色
6 淡灰褐色粘質土層

23
18.9m 7号土坑 24



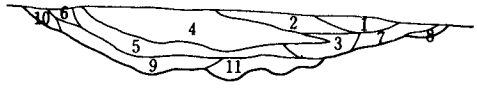
1 淡黄灰色粘質土層
2 淡灰褐色粘質土層
3 灰褐色粘質土層
4 黄褐色粘質土層

25 8号土坑 26



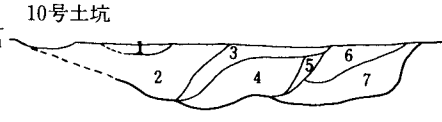
1 褐色粘質土層
2 淡黄灰色粘質土層
3 黄灰色粘質土層
4 淡灰褐色粘質土層
5 淡褐色粘質土層

57
18.8m 9号土坑 58



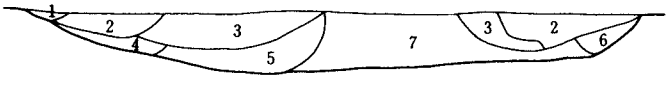
1 黒褐色粘質土層
2 灰褐色粘質土層
3 灰色粘土層
4 黄灰色粘質土層
5 褐灰色粘質土層
6 褐色粘質土層
7 暗褐色粘質土層
8 黄灰褐色粘質土層
9 灰褐色粘質土層(粘性強い)
10 8と同層
11 極暗褐色粘土層

27
19.2m 10号土坑 28



1 淡褐色砂質土層
2 暗黄白色砂質土層
3 暗黄灰色粘質土層
4 淡褐灰色粘質土層
5 4に鉄分含む
6 黒褐色粘砂質土層
7 暗黄白色砂質土層

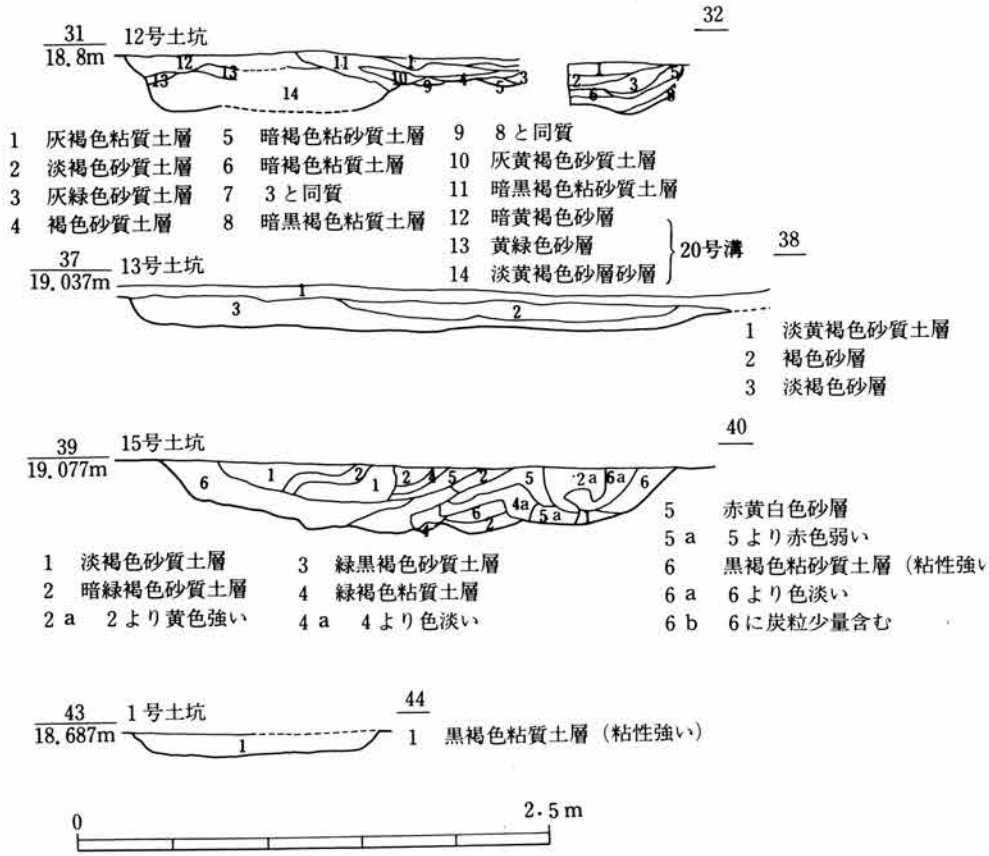
29
19.0m 11号土坑 30



1 黄褐色粘質土層
2 暗褐色粘質土層
3 淡黄灰色粘質土層
4 淡灰褐色粘質土層
5 黄灰色粘質土層
6 黄灰色砂層
7 オリーブ灰色粘質土層

0 2.5m

第16図 4号土坑～11号土坑土層断面実測図 (1/40)



第17図　1号土坑、12号土坑～15号土坑土層断面実測図（1/40）

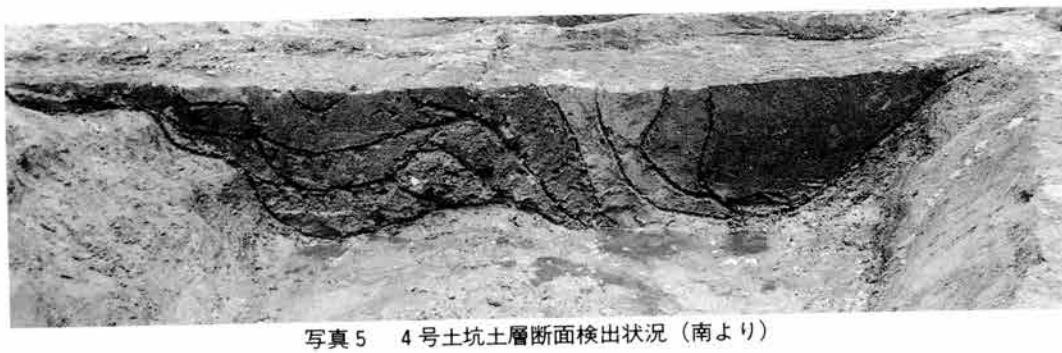


写真5　4号土坑土層断面検出状況（南より）

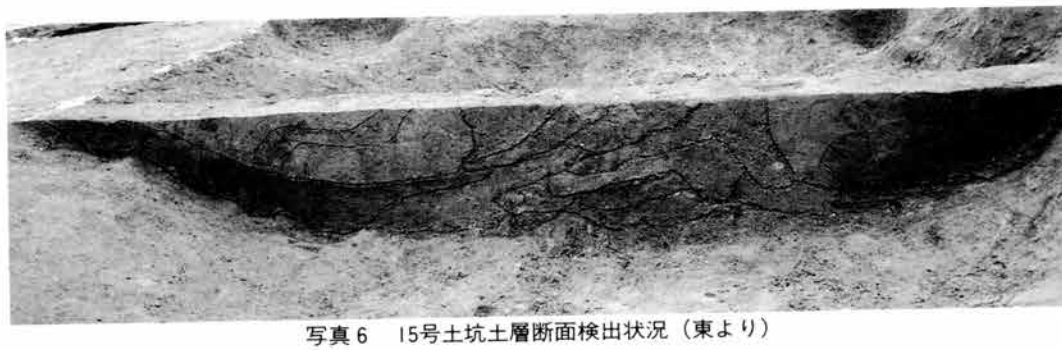
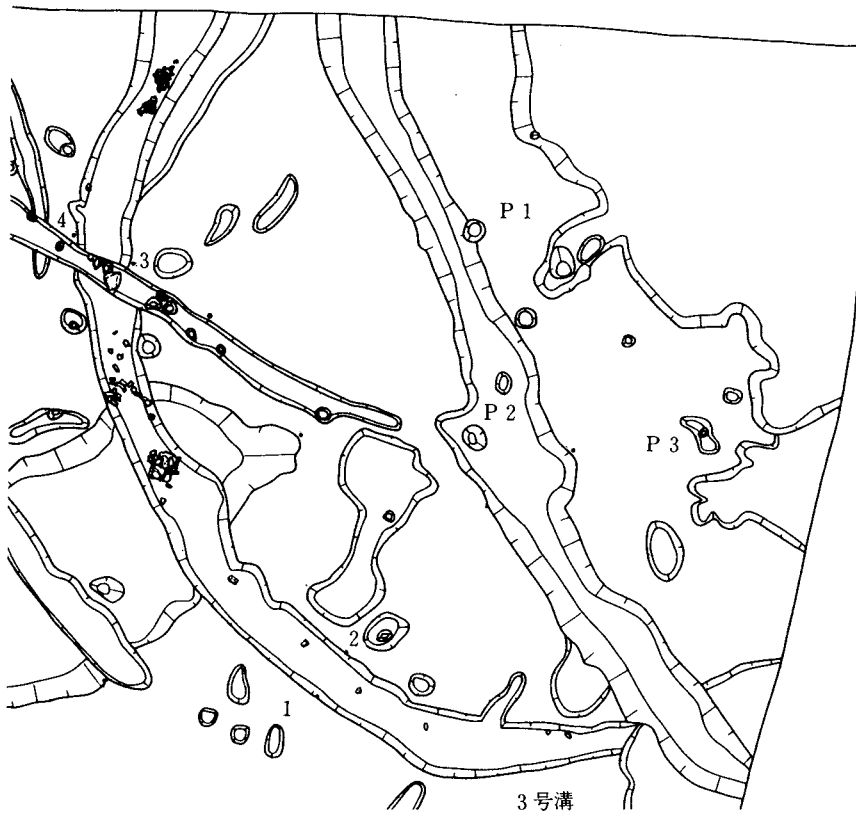
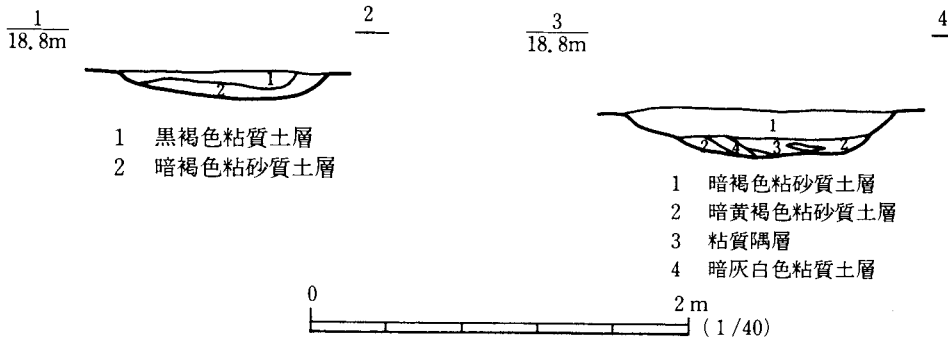


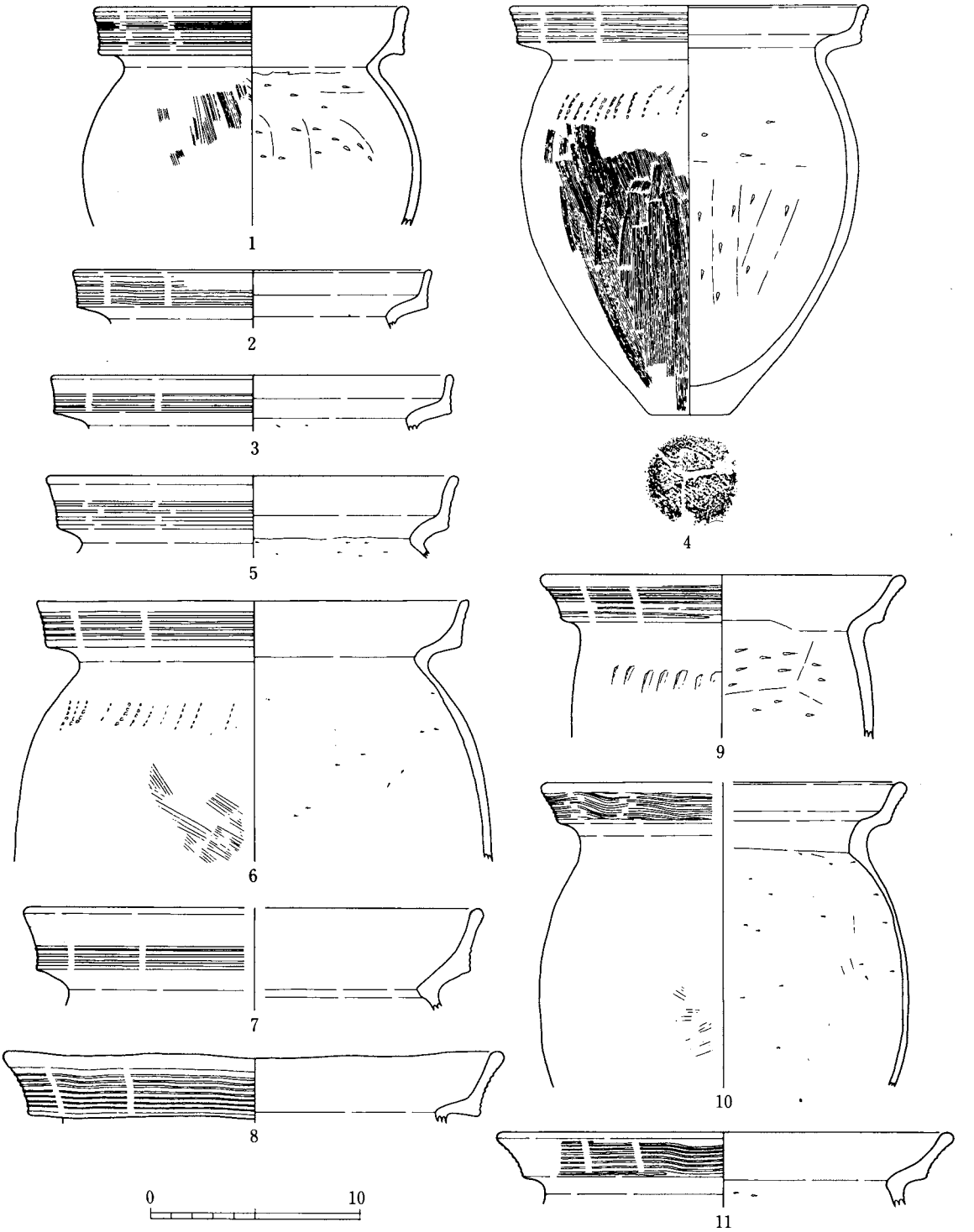
写真6　15号土坑土層断面検出状況（東より）



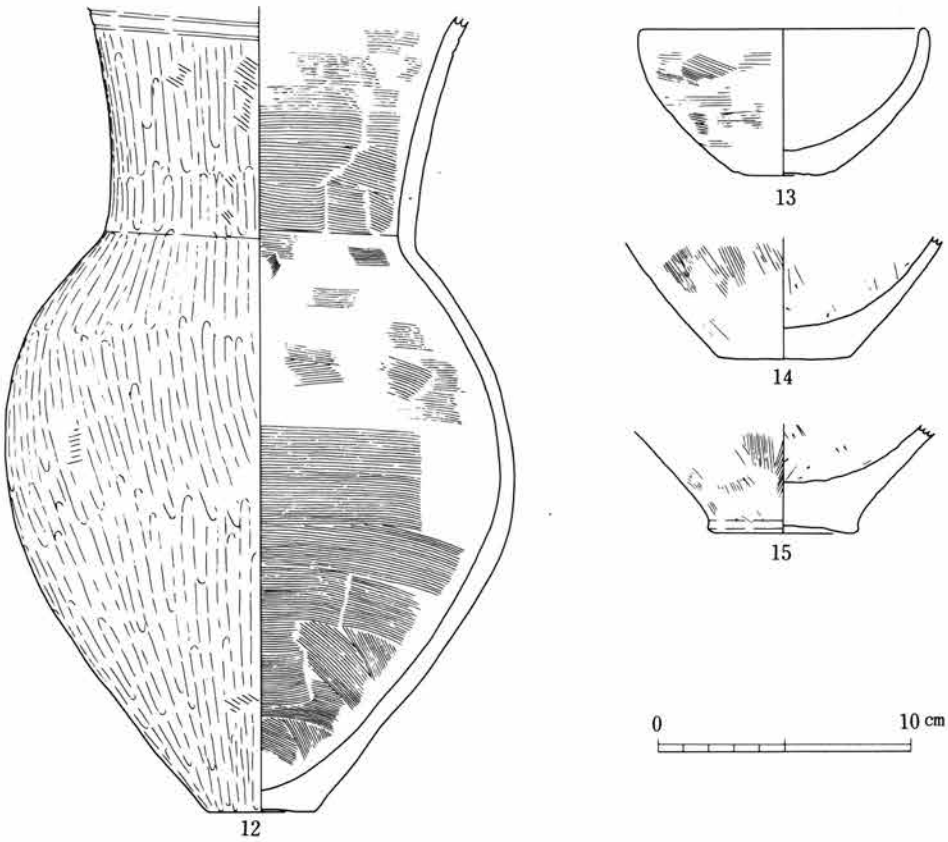
0　5　10m　(1/100)



第18図　3号溝平面（1/100）・土層断面（1/40）実測図



第19図　3号溝出土遺物実測図（1/3）



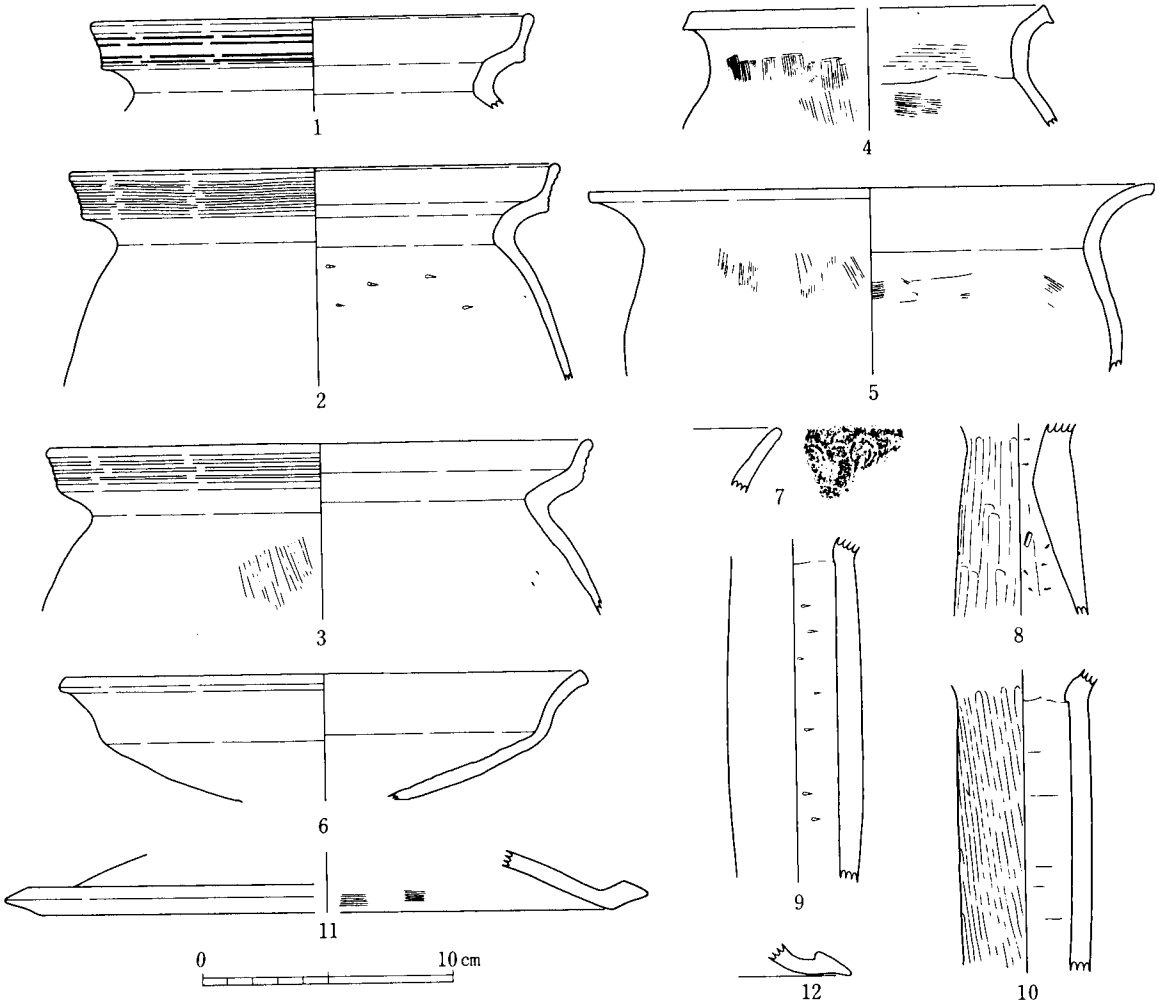
第20図　3号溝出土遺物実測図（1/3）

写真7　3号溝遺物検出状況（東より）

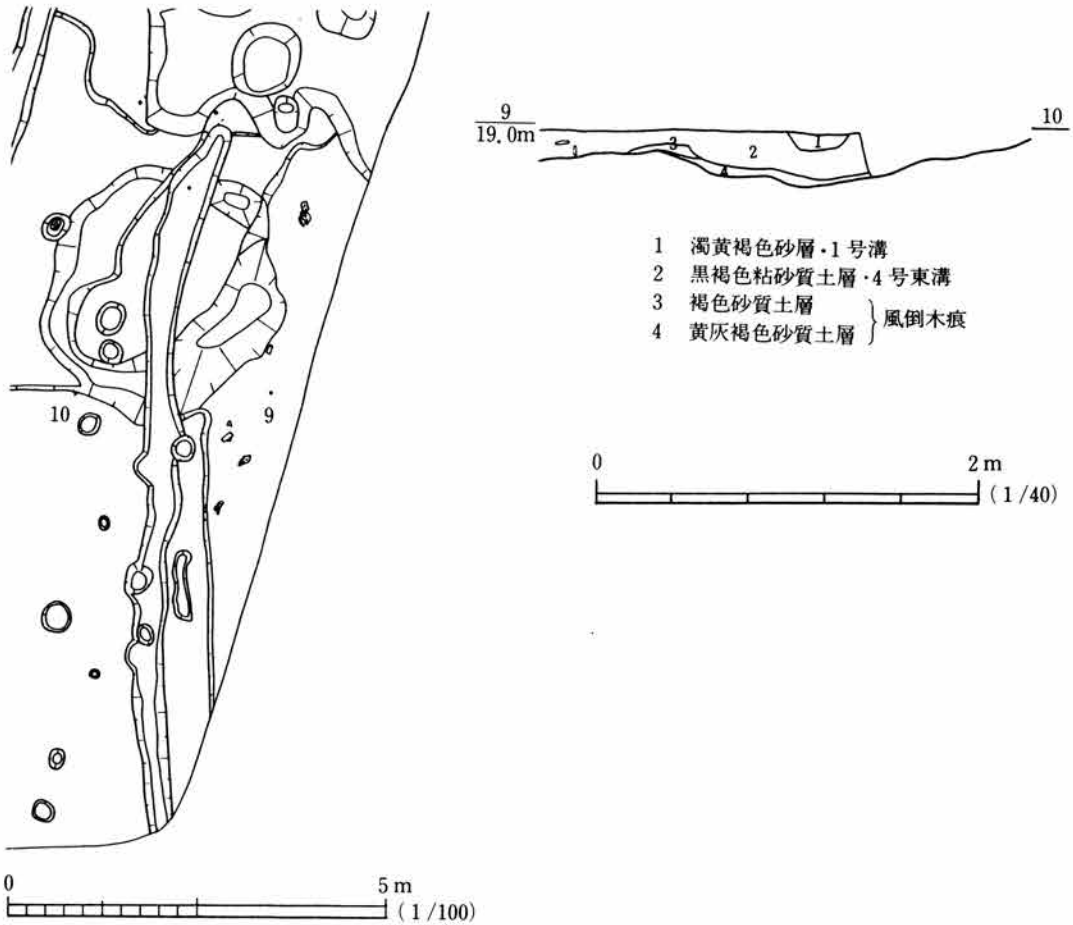
4号東溝（第22図・第21図１～12）

Ａ－１区に位置する。全形は明らかでなく、調査区内では西側の落ち込みのみを確認している。北側の一部で径３ｍ程の風倒木痕と重なるが、溝の方が新しい。深さが５～15cmと浅く、また所々に土器の集中も見られることなどから、３号溝と同様の周溝状遺構になる可能性がある。

１～２は頸部内面に幅のある平坦部分が認められる。３は口縁部下端の稜を丸く仕上げる。外面および口縁内面に煤が付着する。４は頸部が直立し、口縁端部は面取り肥厚する。５は大きく外反する口縁を持ち、端部には弱い面取りが施される。器面は灰白色で砂粒の含みは少ない。６の杯部は緩やかに屈曲し、口縁端部は玉縁状に面取り肥厚する。７は外面に直径1.2cmの三重同心円のスタンプ文が二つ確認できる。口縁に沿って施文されるようであるが、器種は定かでない。11は脚端部をＶ字状に折り返す。内面には多量の煤が付着する。12は脚端部に粘土紐を付加して肥厚させる。



第21図　４号東溝出土遺物実測図（１/３）



第22図　4号東溝平面（1/100）・土層断面（1/40）実測図

写真8　4号溝周辺遺構完掘状況（南より）

4号北溝（第10図・第25図22、第15図20）

B・C－1区に位置する。3号溝の内側を東西に伸びる幅60cm～1m、深さ20cm程の溝で、水の流れは東から西である。下層部分には暗黄褐色砂や黄褐色砂が堆積し、小河川として機能していたことをうかがわせる。中世の土師器皿片が数点見られた。

22は土層観察の畦脇から出土している。県内では珍しい土製羽釜の鍔の部分である。胎土中には少量ながら海綿骨片が認められ、在地産の可能性も否定できない。

第15図20は、4号北溝と4号東溝間の落ち込み状を呈する4号溝から出土した条痕の施された土器細片。縄文時代晩期～弥生時代前期に位置付けられよう。

6号溝（第9図）

A－2区に位置する。不定形の溝状遺構で、長さ2.7m、最大幅92cm、深さ10cm弱で南北に完結する。弥生時代後期の高杯脚部片が出土している。北隅に重なるピット3は6号溝より新しい。

8・12・18号溝（第7～9図・第23図1～3）

A・B－3・4区に位置する。8号溝は長さ12.5m、幅20～40cm、深さ5～10cmで南北に完結し、北端で東西方向に伸びる溝と接する。左右に並走する溝との間隔は1.5～1.8mである。12号溝は長さ1.92m、幅20～25cm、深さ7cm、また18号溝は東側が調査区外へ伸びており、現長2.8m、幅58～80cm、深さ5cm前後である。畝溝状の遺構であり、方位的にみて共に関連性があると思われるが、単発的で遺物量も少なく詳細は不明である。

1の杯部は屈曲外反し、口縁端部には弱い沈線が巡る。色は赤橙色である。2～3は口縁部下端に粘土紐を付加して有段状に仕上げる。3はそれが顕著である。1・2・3はそれぞれ8・12・18号溝から出土している。

20号溝（第7～8図・第15図10～12）

A・B－4・5区に位置する。途中で一度水路に切られ、北側は完結、南側は調査区外へ達する。溝際はやや蛇行しながら南北方向に伸び、12号土坑および33号溝に切られる。溝幅は中央部分で1.6～1.9m、両側の狭くなる部分で60cm～1.1mである。深さは20～30cmで、溝底の標高は南側が50cm近く高い。覆土は基本的に黄色系の砂質土である。

遺物の文様は竹管により施され、11は横位平行線文下に縦位刻みを加えている。縄文時代中期前葉に位置付けられよう。当溝からは他何点かの縄文土器が出土しているがいずれも細片である。

24号溝（第4～6図・第15図9、第26図1～2）

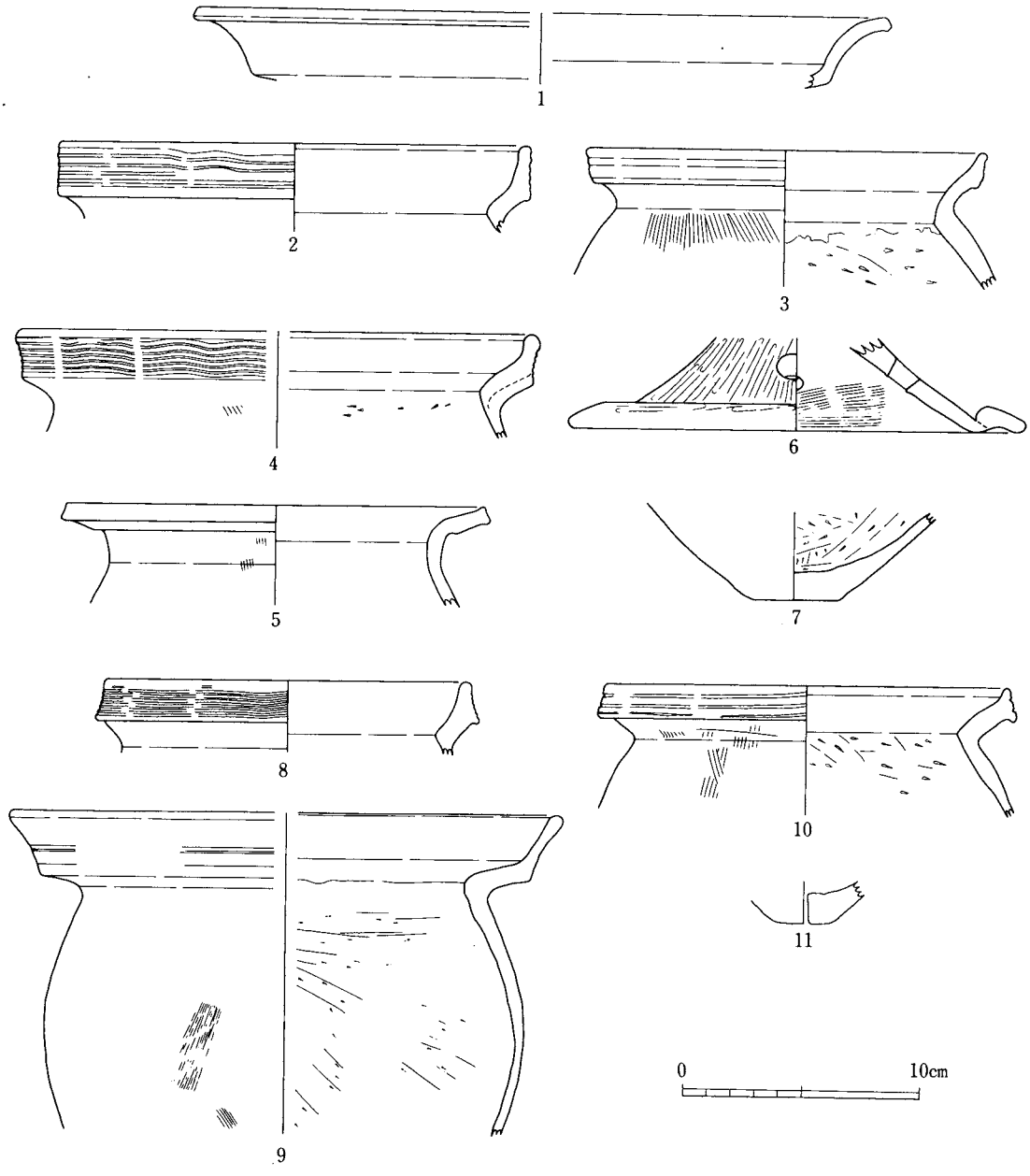
A～C－5・6区に位置する。B－6区で一度途切れ70cm程の間をおくが、それぞれ南北に伸びる。幅20～30cm、深さ10～30cmのやや湾曲する溝状遺構で北側では1号土坑に、そして南側では28・29号溝に切られる。

9は薄い器壁や鋭角的に立ち上がる底部形態よりみて縄文時代前期に属するものとしてよい。

C－5区の溝底からは2点の打製石斧が出土している。1～2共に片麻岩と思われる。

大溝（第2～5図・第15図13～15、第25図1～21、第26図3～7）

A～C－7～9区に位置する。調査区を東西に横断する幅5m余りの大溝で、東から西に流れ



第23図　8号溝(1)、12号溝(2)、18号溝(3)、ピット6(4～7)、
包含層(8～11)出土遺物実測図(1/3)

る。溝内での標高差は30cm前後と小さく、そのためか溝底の凹凸は激しい。場所によっては土層観察により大きく二本の溝の存在が確認されるが、平面的に区別はできなかった。土層は全体的に錯綜しており、流れが絶えず移動していたことをうかがわせる。また溝内からの出土遺物は珠洲焼を主体とした中世および近世の陶磁器類が大半を占める。なお遺物は上・中・下層に区別したが、層的な識別は困難であったため上の方から順に取り上げただけの結果となっている。

13～15は竹管により文様が描かれる。縄文時代中期前葉に位置付けられよう。

5　2・4号南溝　6
19.0m

1　黒褐色粘質土層
2　1と同質
3　黄褐色粘質土層
} 2号溝

4　黒褐色粘土層
5　灰黄色粘質土層
6　黄色砂粒層
} 2号溝

7　黄褐色粘質土層
8　灰黄色粘質土層
9　8と同色
} 4号南溝

7　4号北溝　8
18.6m

1　褐色粘質土層
2　暗黄白色砂質土層
3　暗褐色粘質土層
4　暗褐色粘砂質土層
5　黒褐色粘質土層
6　暗黄褐色粘砂質土層
7　暗黄褐色砂層
8　黄褐色砂層
9　8と同質

49　25・26・27号溝　50
19.3m

1　暗黄灰色粘質土層
2　黄灰色粘質土層
} 25号溝

3　灰黄色粘質土層
4　黄灰色粘質土層
} 27号溝

5　灰褐色粘質土層
6　淡黄色砂層
7　黄褐色粘質土層
8　オリーブ灰色粘質土層
} 26号溝

17　6号溝　18
19.0m

1　黒褐色粘質土層
2　暗黄灰色砂質土層
3　褐色粘砂質土層

51　30号溝　52
19.0m

1　暗褐色粘質土層
1b　1より粘性強い
2　淡褐色粘砂質土層
3c
3　明黄白色砂層
3b　黄白色砂層
3c　3cより粒が細かい

33　20号溝　34
18.8m

1　黒褐色砂層
2　暗黄褐色砂層
3　黄褐色砂層
4　淡黄褐色砂層

41　20・33号溝　42
19.187m

1　黒褐色粘質土層（33号溝）
2　濁黄白色砂層
3　黄灰色砂層
4　暗黄灰色砂層
} 20号溝

35　20号溝　36
19.087m

1　淡褐色粘砂層
2　灰黄色砂層
3　黄灰色砂層

0　2.5m

53　大溝　54
19.0m

1　暗褐色粘質土層
2　黄灰褐色粘質土層
3　灰褐色砂質土層
4　灰黄色砂層
5　白灰色砂層
6　灰褐色粘質土層
7　灰褐色砂層
8　暗灰褐色粘質土層
9　オリーブ灰色粘質土層
10　灰白色砂層

55　大溝　56
19.0m

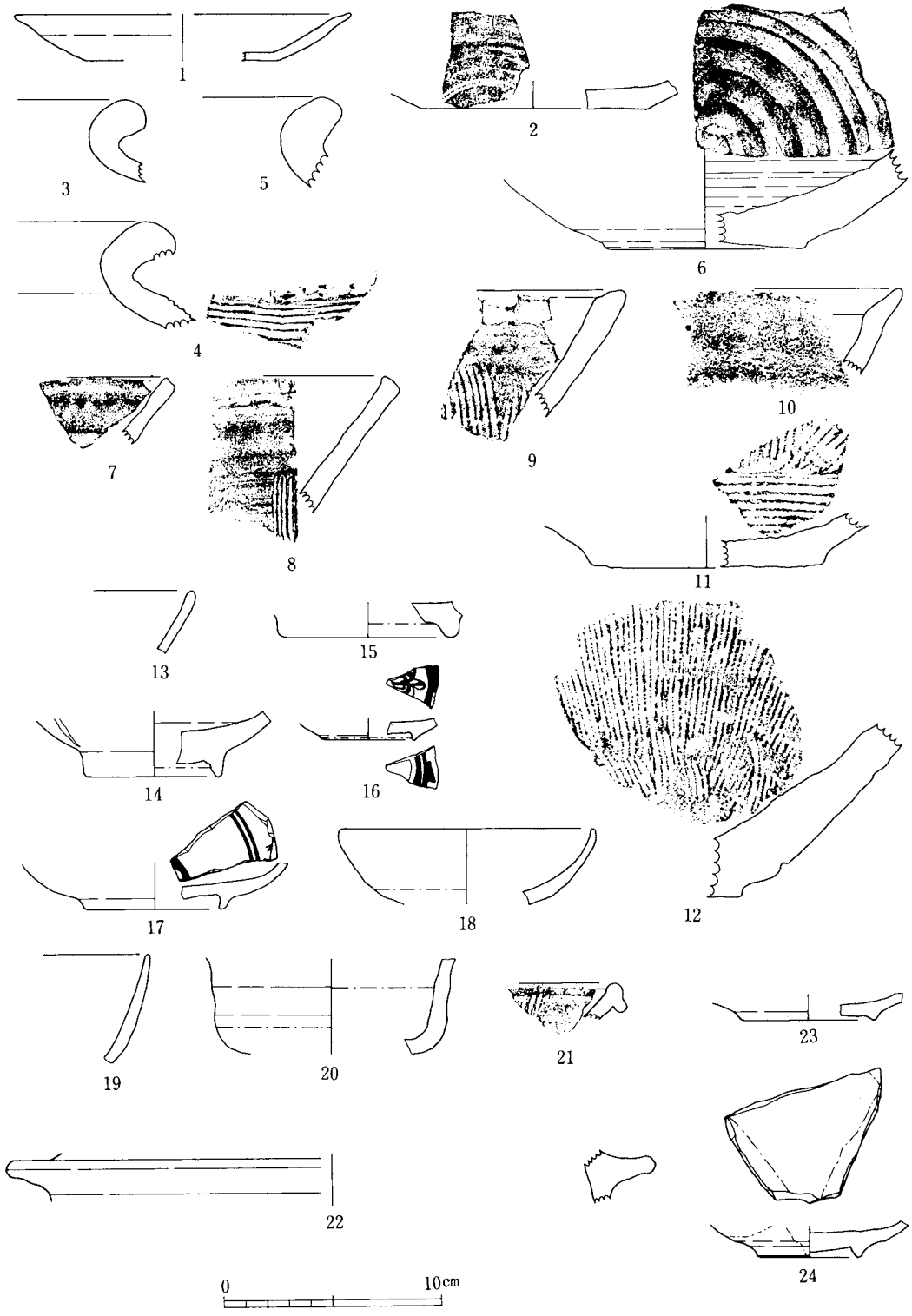
1　黄灰褐色粘質土層
2　灰黄色砂層
3　暗灰褐色粘質土層
4　黄灰色砂層
5　灰褐色粘質土層
6　褐色粘質土層
7　灰白色砂層
8　灰色砂層（暗褐色粘土層との互層）
9　淡灰色砂層
10　灰黄色砂礫層
11　灰褐色粘質土層
12　褐色粘質土層
13　暗黄灰色粗砂層
14　褐色粘土層
15　灰褐色粗砂層

第24図　溝遺構土層断面実測図（1/40）

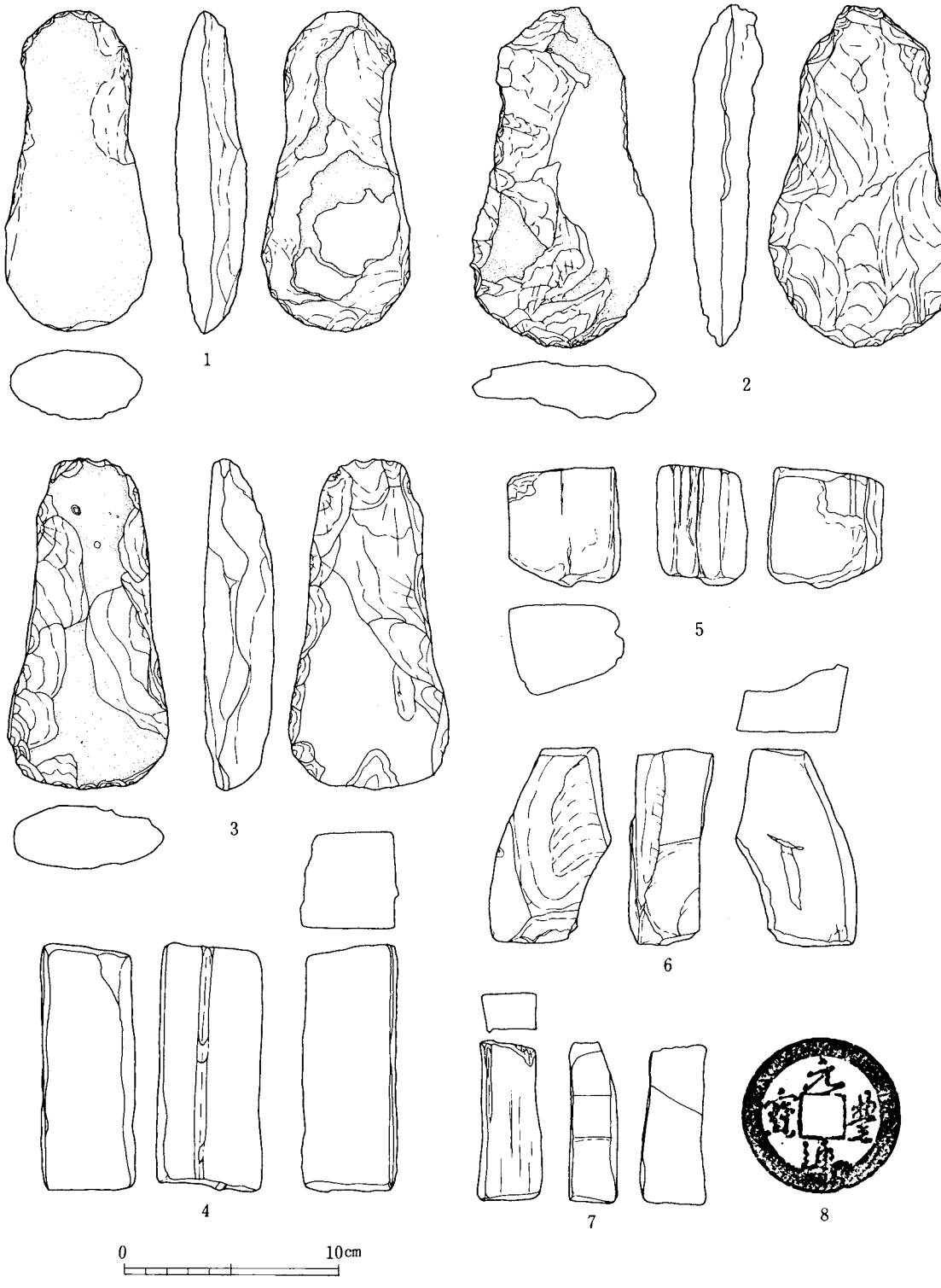
1は土師器皿。口縁部を横ナデにより外反させ端部をつまみあげ気味にする。海綿骨片が多量に観察される。いわゆる京都系の土師器皿で16世紀以降の製品と思われる。2は瀬戸・美濃陶器の盤か。内面の灰釉は剝げている。3～5は珠洲焼甕片である。3～4は口縁部を大きく外反させ口唇部を比較的丸くおさめる。13世紀後半代のものか。5はそれらより年代の下がる製品である。6は内面に顕著に轆轤目を残す。外底面は静止糸切。7～12は珠洲焼鉢。7～8は口唇部を明瞭に面取りする。13世紀代の製品か。9の口縁部は内傾するが波状文は見られない。10は胎土が軟質で内外面共に磨滅が著しい。9は15世紀前後、10は15世紀後半頃のものと思われる。13～14は中国製の青磁碗。14の高台内は無釉で、外面にはヘラ描文が入る。15世紀前後の製品か。16は中国製青花皿。見込に十字花文を描く端反りタイプの製品と思われる。16世紀代に多く見られる。17は肥前磁器の皿。やや高台径が大きいが、初期伊万里に含まれる17世紀前半代のものであろう。18は肥前陶器の皿。口縁部は内湾気味に立ち上がる。灰緑色の釉調を持ち外面下半は無釉。胎土目期の製品で製作年代の下限は1610年代頃である。19～21は越中瀬戸。19～20は胎土が硬質で褐色の鉄釉が掛かる。それに較べ21は粗い胎土を持つ。内外面に暗褐色の錆釉が掛かり、卸し目は口縁部まで達する。

3は擬灰岩質安山岩の打製石斧。4～7は砥石である。4は長短二面に石塊からの切痕が筋状に残る。5は桂化木、6は安山岩、7は砂岩質の材質が用いられている。

写真9　大溝完掘状況（南より）



第25図　大溝(1～21)、4号北溝(22)、包含層(23～24)出土遺物実測図（1/3）



第26図　24号溝（1～2）、大溝（3～7）、包含層（8）出土遺物実測図（1/3・8のみ1/1）

(3) ピット

ピット6（第9図・第23図4～7）

A－2区に位置する。7号土坑と重なるが、ピットの方が新しい。径40×50cmの楕円形で、深さは14cmである。4は口縁部下端から頸部にかけてが厚く、その中心あたりには一条の接合痕が認められる。5の口縁は大きく外反し、内傾する端部は面取り肥厚する。6は脚端部に粘土帯を付加する。砂粒の含みは少なく、外面には赤彩痕が残る。また透かし穴は4個と推測される。

ピット13（第4図・第15図8）

B－6区に位置する。径40×20cmで東南側が16cmとやや深い。8は東隣に伸びる24号溝出土の土器片に似る。同時期の縄文時代前期に属するものであろう。

(4) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は5棟確認されたが、時期を特定できる明確な遺物は供伴していない。形態からは中世の建物跡と推定されるが、中世の遺物量は遺跡全体を通しても少ない。調査区西側の大溝からは13～16世紀代の製品が一定量出土するが、それも標高の高い南側から流れてきたものと思われる。中世集落の中心は当調査区よりも南に伸びていると考えるのが妥当であろう。

1号掘立柱建物跡（第11・28図）

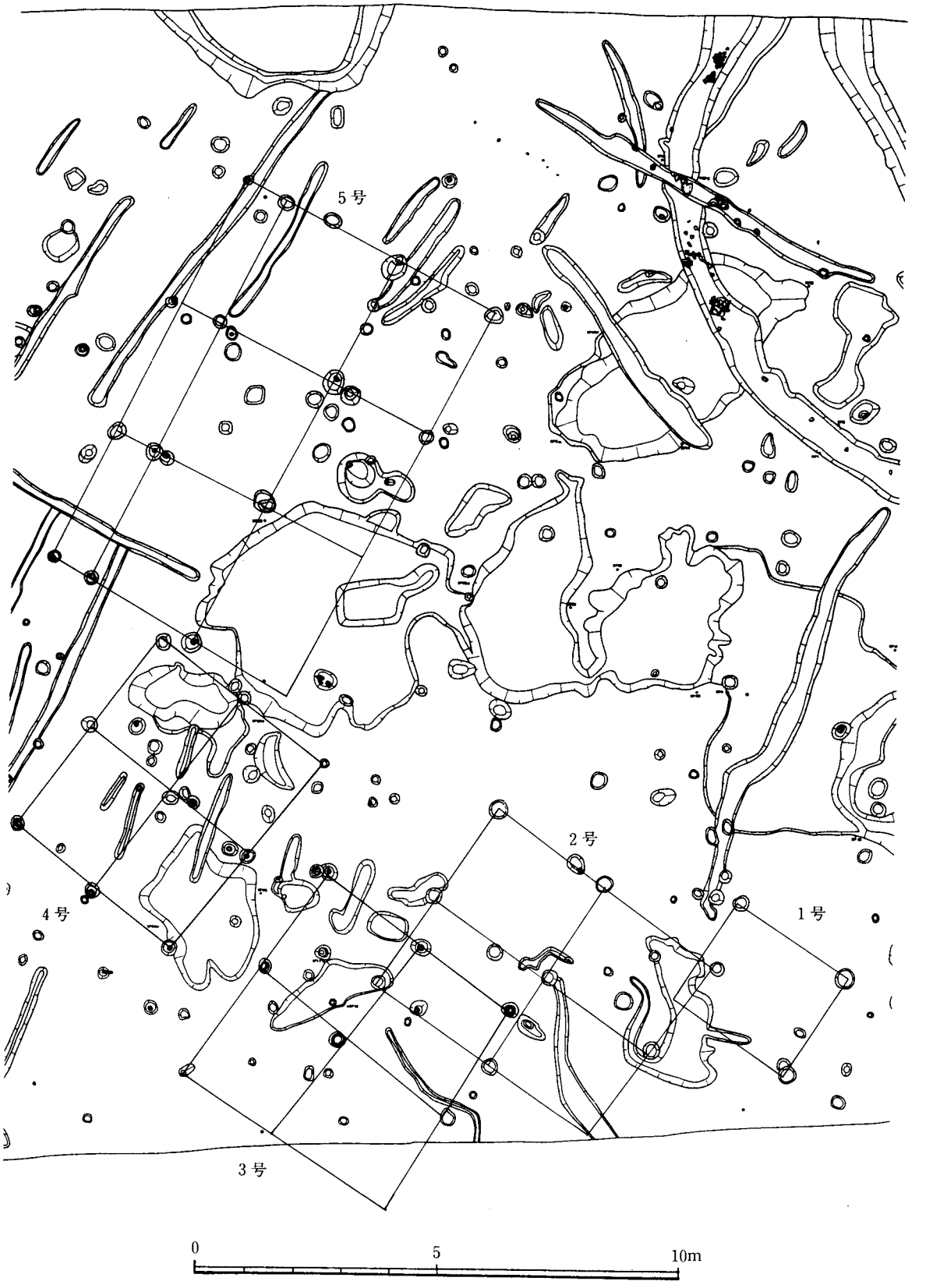
A－1・2区に位置する。1間×1間の規模を持つ建物跡で、主軸はN81°Eの東西棟。南西隅の柱穴は不定形の落ち込みと重なり不明。桁行2.65m、梁行2.30mで平面積は約6.1m²である。また掘方径は円形に近く32～42cm、深さは27～29cmとほぼ一定している。

2号掘立柱建物跡（第11・29図）

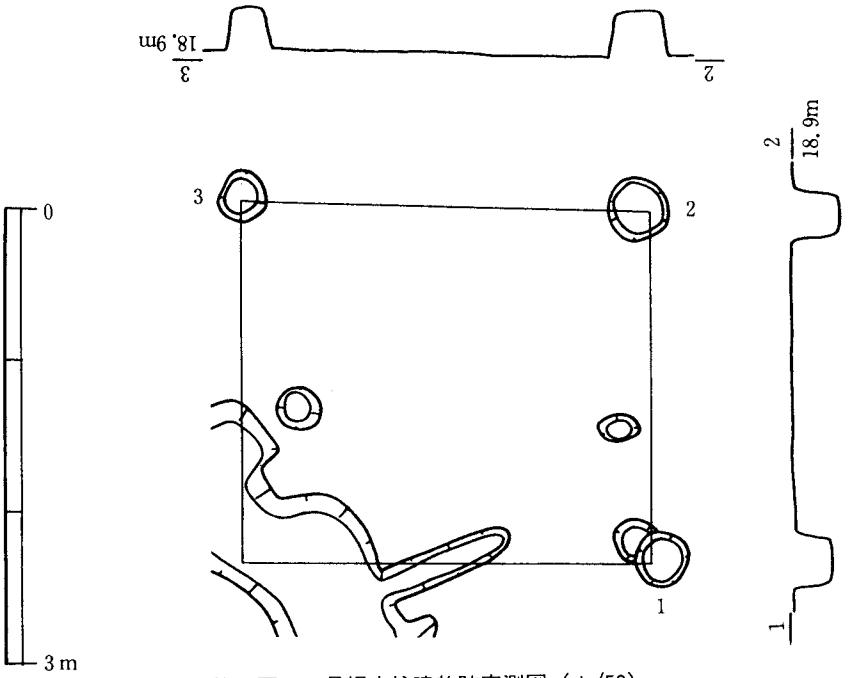
A－2区に位置する。2間×2間の総柱建物跡で1・3号掘立柱建物跡と東西方向で重なる。主軸はN81°Eで1号掘立柱建物と等しい。南東隅の柱穴は調査区際で溝状遺構と重なり不明。桁行5.54m、梁行4.40mで、柱間距離は桁行2.7～2.9m、梁行2.14～2.3m、平面積は約24.4m²となる。掘方径は30～40cm、深さは24～35cmである。南西隅の柱穴（ピット3）からは弥生土器の破片が1点出土している。

3号掘立柱建物跡（第9・30図）

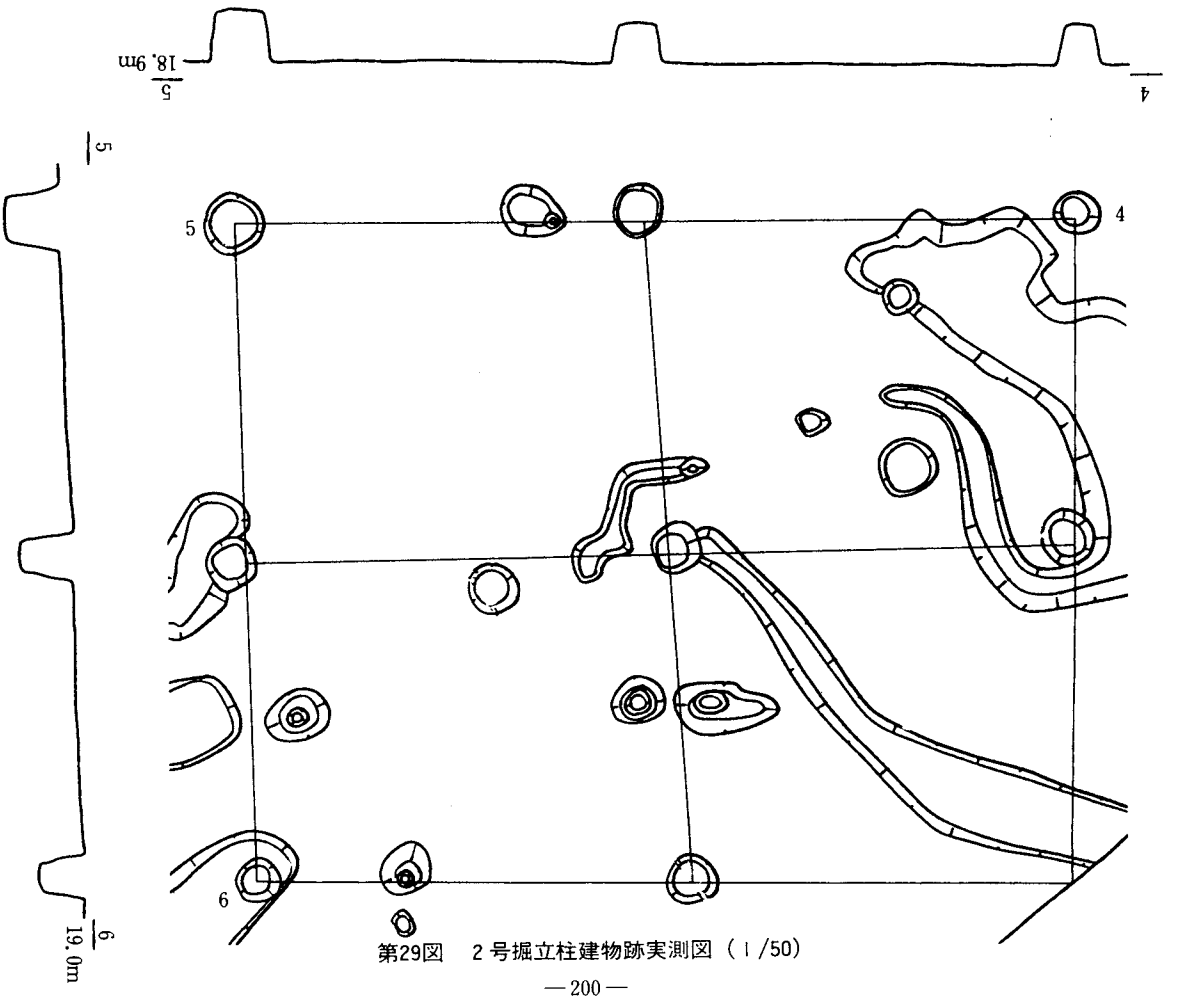
A－2・3区に位置する。主軸をN10°Wに持つ南北棟2間×2間の総柱建物跡と想定したが、南側の柱列が明確ではないため、主軸N82°Eの東西棟2間×1間の建物となる可能性も十分にある。2号掘立柱建物跡とは北側で一部重なる。桁行5.1m、梁行4.76mで、柱間距離は桁行2.4～2.7m、梁行2.24～2.74m、平面積は約24.3m²である（2間×1間の場合は約12.3m²）。掘方径は30～42cm、深さは南西隅の穴だけ16cmとやや浅く、他は22～37cmとなる。柱穴のほとんどは二段掘りとなり、柱の痕跡を残している。なお建物跡中央の柱穴（ピット2）からは弥生土器の破片が1点出土している。



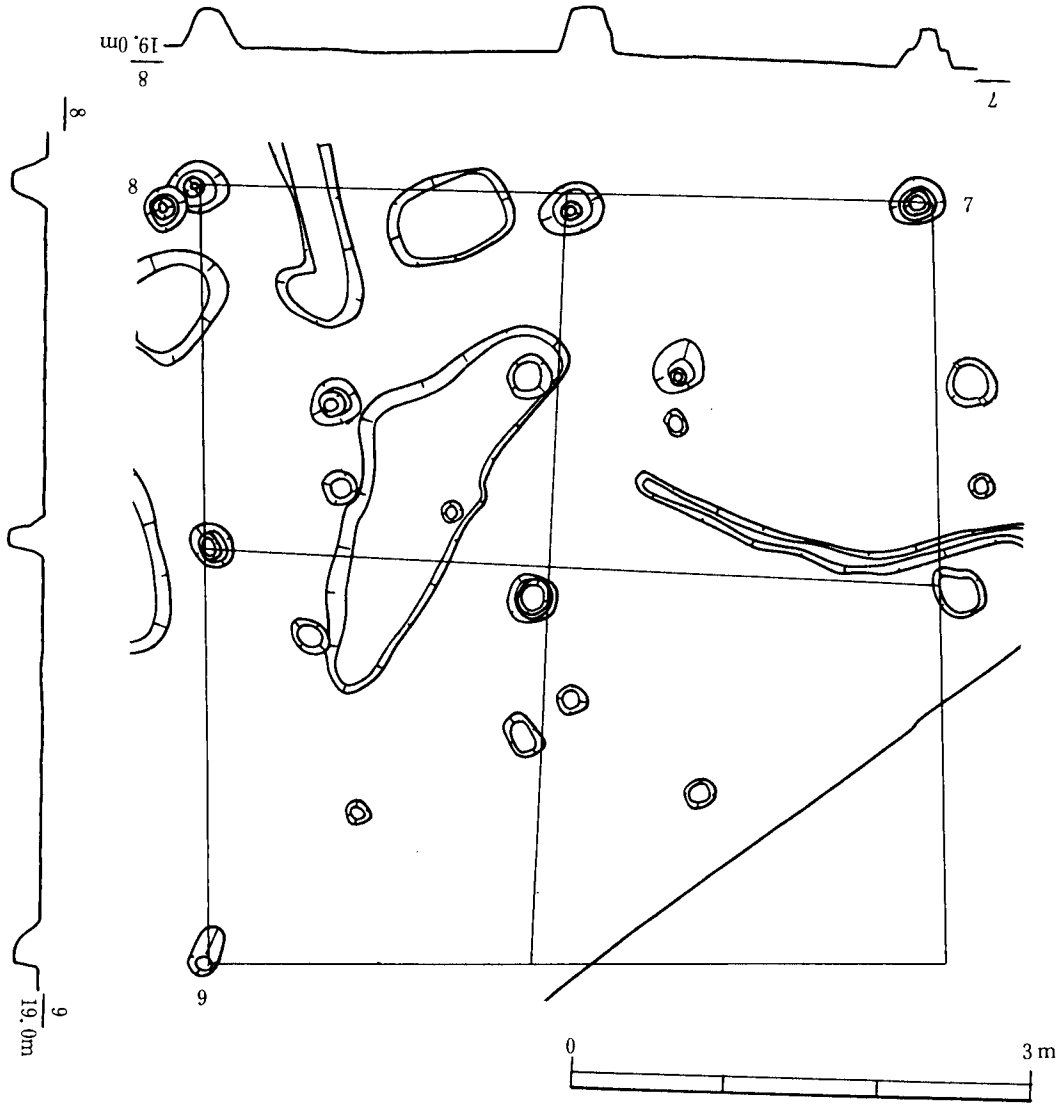
第27図　掘立柱建物跡想定図



第28図　1号掘立柱建物跡実測図（1/50）



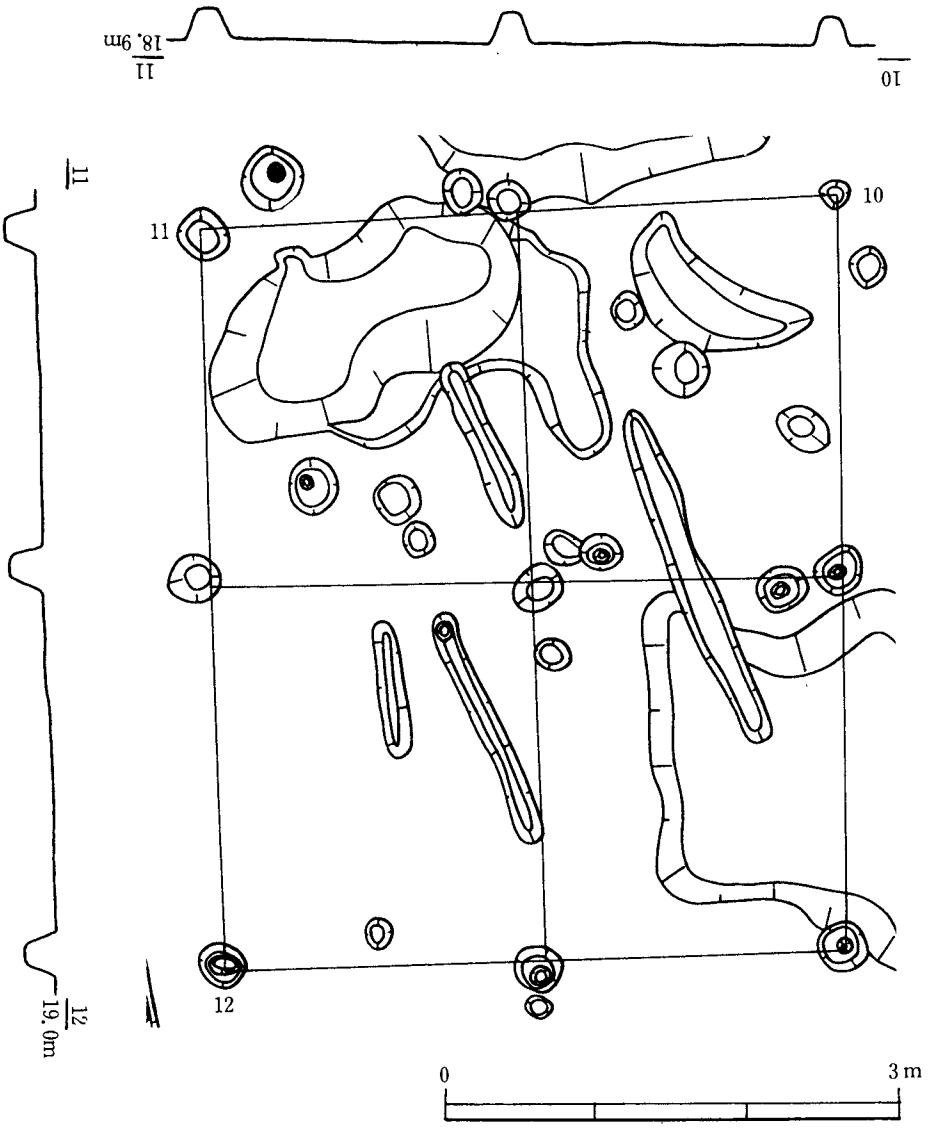
第29図　2号掘立柱建物跡実測図（1/50）



第30図　3号掘立柱建物跡実測図（1/50）

4号掘立柱建物跡（第9・31図）

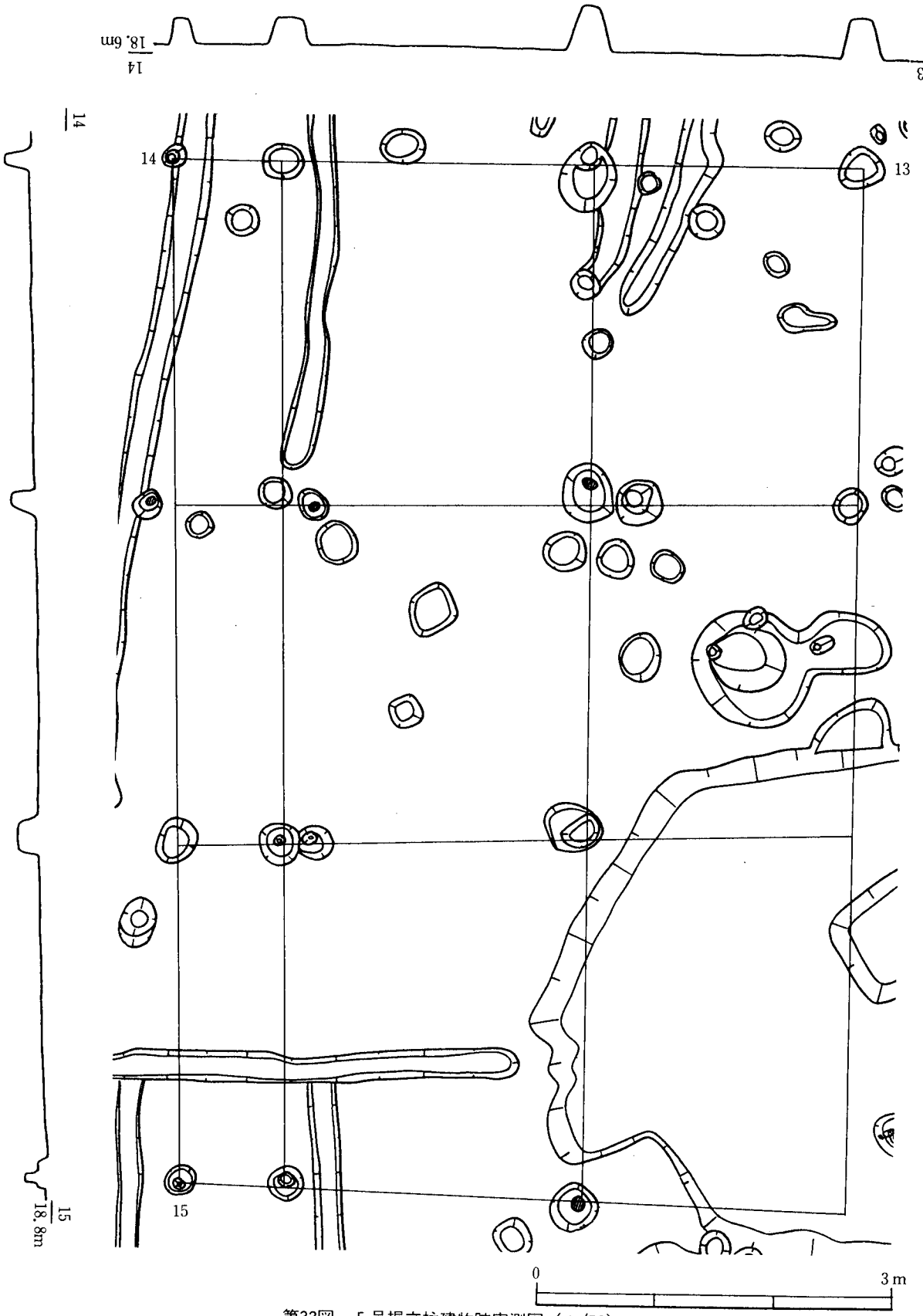
A・B－2・3区の1～3号掘立柱建物跡西側に位置する。2間×2間の総柱建物跡で、主軸をN6°Wに持つ南北棟となる。建物内で二つの土坑と重なるが、直接の関係は無いと思われる。桁行4.8m、梁行4.2mで、柱間距離は桁行2.44～2.6m、梁行2.0～2.3m、平面積は約20.2m²となる。掘方径は20～34cm、深さは13～29cmと全体にやや浅く、建物跡の南側に柱痕跡を残す柱穴が認められる。なお当遺跡で確認された掘立柱建物跡で、すべての柱穴が残っているのはこの4号掘立柱建物跡だけである。



第31図　4号掘立柱建物跡実測図（1/50）

5号掘立柱建物跡（第8・32図）

A・B－2・3区の4号掘立柱建物北側に位置する。西側に1間の庇を持つ3間×2間の総柱建物跡と想定したが、北側にもう1間伸びる可能性がある。主軸をN18°Wに持つ南北棟で、他の4棟とは軸を若干異にする。南東側の柱穴2個は7号土坑と重なり不明。桁行8.8m、梁行4.9mで庇を入れると5.9m、柱間距離は桁行2.8～3.2m、梁行2.2～2.7m（庇間は0.9～1.0m）、平面積は約43.1m²、庇を含めると約51.9m²となる。掘形径は30～60cm（庇部分は20～38cm）、深さは13～38cm（庇部分は17～22cm）である。なお建物を構成する柱穴3個に柱の一部が確認されている。



第32図　5号掘立柱建物跡実測図（1/50）

写真10　5号掘立建物跡検出状況（南より）

(5)　包含層

（第15図16～18、第23図８～11、第25図23～24、第26図８）

16～18は20号溝あるいは大溝出土の土器片と同様の手法で文様を描出する。縄文時代中期前葉に位置付けられよう。

８は口縁下端に粘土紐を付加し、内傾有段状に仕上げる。９は口縁全体が歪む。胎土は黄白色で粘り気がある。10のくの字口縁の肥厚した端部には、鋭角でやや深い３本の擬凹線が巡る。11の穴は外側から開けられたためか、内側の径はやや小さめである。

23は瀬戸・美濃陶器の灰釉皿。前面に施釉され、断面三角形の付け高台を持つ。大窯期の製品と思われる。24は越中瀬戸の皿。皿の口縁部４箇所に鉄釉と錆釉を掛け分け、見込と高台周辺は無釉とする。17世紀代の製品と思われる。

８は「元豊通寶」。北宗銭で初鋳年は元豊元年（1078）である。

遺物観察表（1）

図版番号	出土地点 グリッド	出土地点 遺構他	器種等	法量(cm)	海綿	雲母	備考
19/1	B－2	3号溝	甕	口径14.6		○	外面煤付着
2	C－2	3号溝	甕	口径17.2	極少		
3	C－2	3号溝	甕	口径19.3	極少		
4	C－2	3号溝	甕	口径16.8、器高19.6、底径3.8		○	外面煤付着
5	B－1	3号溝	甕	口径19.8			
6	B－2	3号溝	甕	口径20.7	極少	○	外面煤付着
7	C－2	3号溝	甕	口径(22.0)			
8	B－2	3号溝	甕	口径23.4			
9	C－2	3号溝	甕	口径17.0		○	外面煤付着
10	C－2	3号溝	甕	口径(17.4)	極少	○	外面煤付着
11	C－2	3号溝	甕	口径21.2		○	外面煤付着
20/12	B－2	3号溝包含層	壺	底径4.2	極少	○	外面煤付着
13	B－1	3号溝	鉢	口径11.6、器高5.9、底径4.0	極少	○	外面煤付着
14	B－2	3号溝	底部	底径5.1			外面煤付着
15	B－2	3号溝	底部	底径6.0			外底面煤付着
21/1	A－1	4号東溝	甕	口径17.8			
2	A－1	4号東溝	甕	口径19.4		○	外面煤付着
3	A－1	4号東溝	甕	口径21.9	極少	○	外面・内面口縁煤付着
4	A－1	4号東溝	甕	口径(14.0)	少	○	外面煤付着
5	A－1	4号東溝包含層	甕	口径22.6	中	○	
6	A－1	4号東溝	高杯	口径21.2		○	
7	A－1	4号東溝			極少	○	スタンプ
8	A－1	4号東溝					
9	A－1	4号東溝			極少		
10	A－1	4号東溝					
11	A－1	4号東溝	脚部	脚径(25.8)		○	内面煤付着
12	A－1	4号東溝	脚部		極少		
23/1	A－3	8号溝	高杯	口径(29.4)	極少	○	
2	A－4	12号溝	甕	口径20.3		○	
3	A－4	18号溝	甕	口径16.6		○	外面煤付着
4	A－2	P－6	甕	口径(21.8)			外面煤付着
5	A－2	P－6	甕	口径17.9		○	
6	A－2	P－6	脚部	脚径18.8		○	外面赤彩
7	A－2	P－6	底部	底径3.6			
8	A－2	包含層	甕	口径15.3		○	外面煤付着
9	C－1	包含層	甕	口径(23.8)		○	
10	A－2	包含層	甕	口径17.0		○	外面煤付着
11	A－1	包含層	底部	底径2.2			有穴
25/1	A－7	大溝	皿(土師器)	口径(15.3)、器高(2.3)	多	○	1区中層
2	B－8	大溝	盤(瀬戸・美濃)	底径10.4			3区中層
3	A－7	大溝	甕(珠洲)		中		1区上層

遺物観察表（2）

図版番号	出土地点 グリッド	出土地点 遺構他	器種等	法量(cm)	海綿	雲母	備考
4	B－8	大溝	甕(珠洲)		極少		3区上層
5	A－7	大溝	甕(珠洲)		極少		1区下層
6	A－8	大溝	底部(珠洲)		極少	○	2区上層
7	B－8	大溝	鉢(珠洲)		小	○	3区上層
8	B－8	大溝	鉢(珠洲)		中		3区下層
9	A－7	大溝	鉢(珠洲)		極少		1区中層
10	A－7	大溝	鉢(珠洲)				1区中層
11	B－8	大溝	鉢(珠洲)	底径10.5	極少	○	2区中・下層
12	A－7	大溝	鉢(珠洲)				1区下層
13	A－7	大溝	碗(青磁)				1区下層
14	B－8	大溝	碗(青磁)	高台径6.0			3区上層
15	B－8	大溝	碗(青磁)	高台径7.6			3区下層
16	B－8	大溝	皿(青磁)	高台径4.2			2区中・下層
17	B－8	大溝	皿(肥前磁器)	高台径6.2			3区上層
18	B－8	大溝	皿(肥前陶器)	口径11.6			3区上層
19	B－8	大溝	碗(越中瀬戸)				3区上層
20	A－7	大溝	香炉(越中瀬戸)				1区下層
21	B－8	大溝	鉢(越中瀬戸)				3区上層
22	B－1	4号北溝	羽釜(土師器)		少	○	
23	表採	包含層	皿(瀬戸美濃)	高台径6.0			
24	表採	包含層	皿(越中瀬戸)	高台径4.8			

写真11　高畠カンジダ遺跡垂直写真(1)

写真12　高畠カンジダ遺跡垂直写真(2)

写真13　高畠カンジダ遺跡垂直写真(3)

写真14　高畠カンジダ遺跡垂直写真(4)

写真15　表土除去作業（北より）

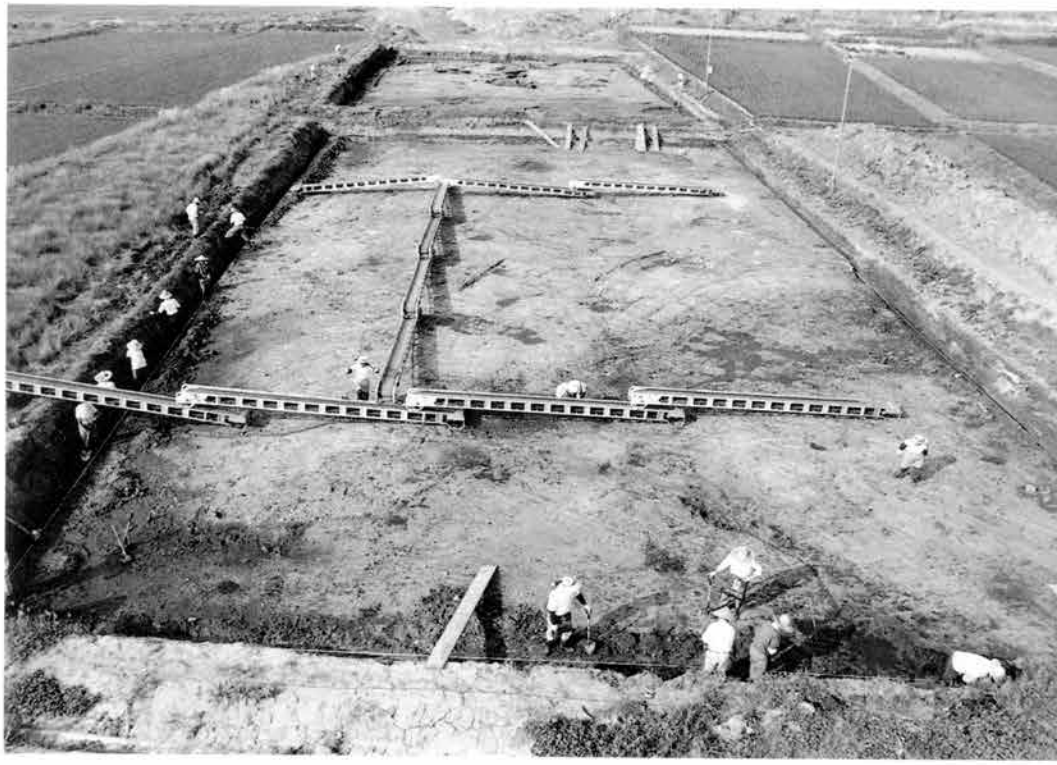


写真16　調査区周辺整備作業（西より）

写真17　西側調査区包含層掘り下げ作業（南より）

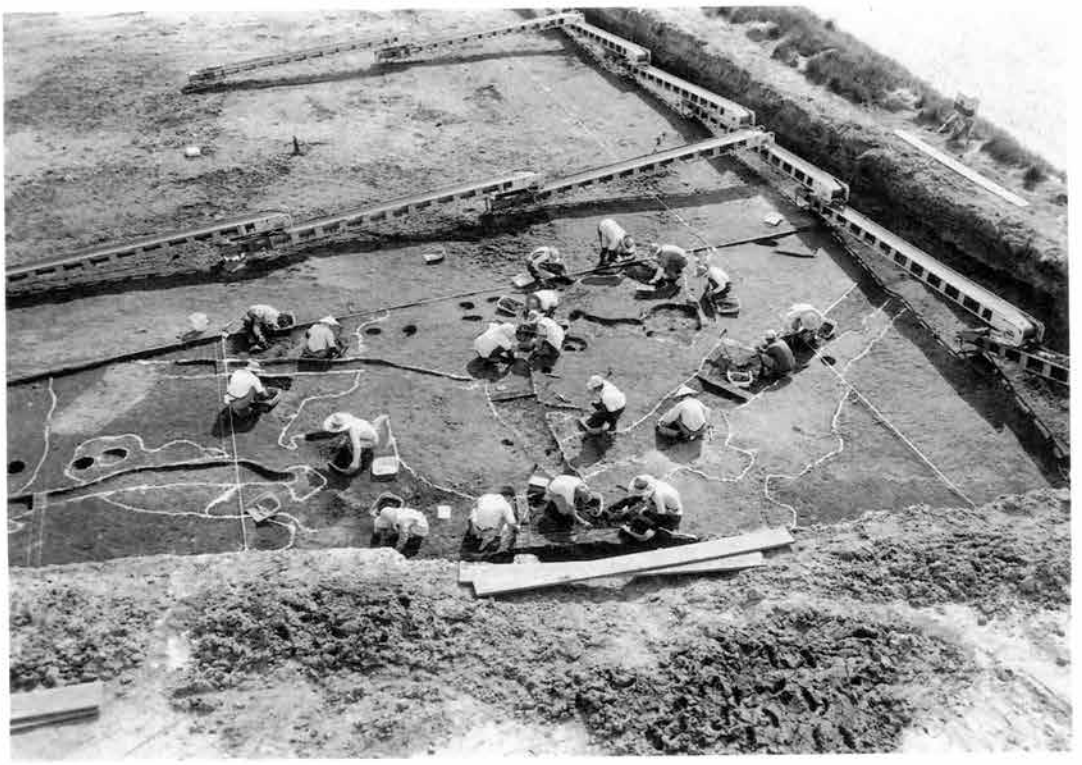


写真18　東側調査区遺構掘り下げ作業（北より）

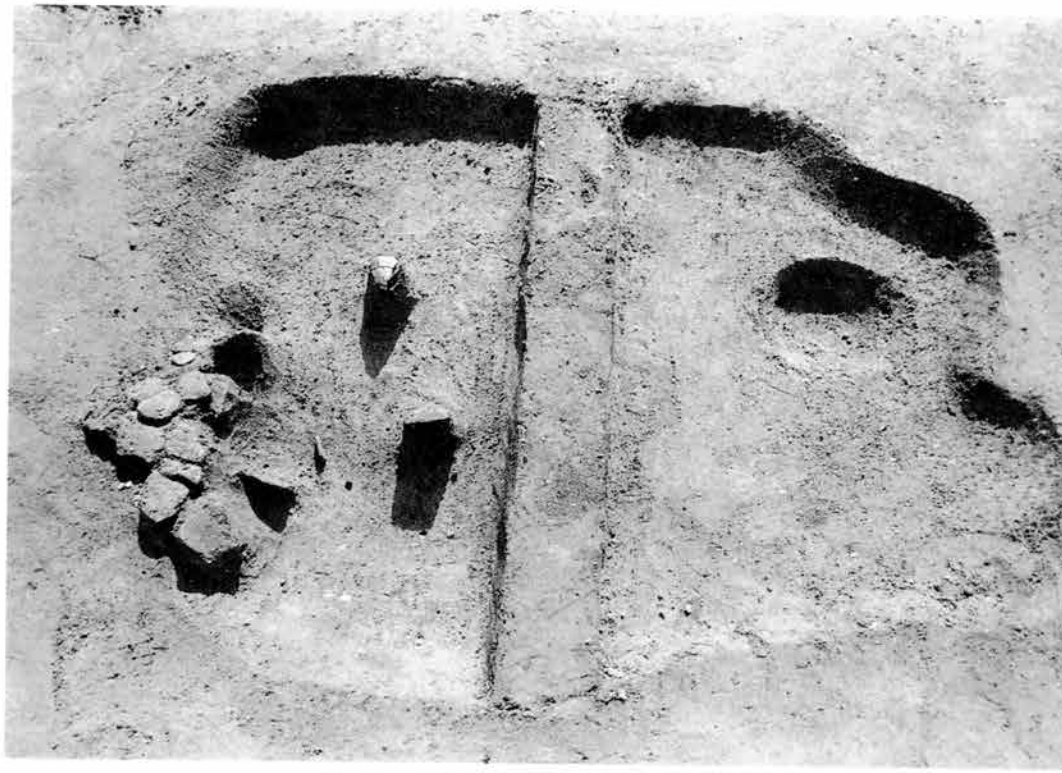


写真19　3号土坑遺物出土状況（東より）

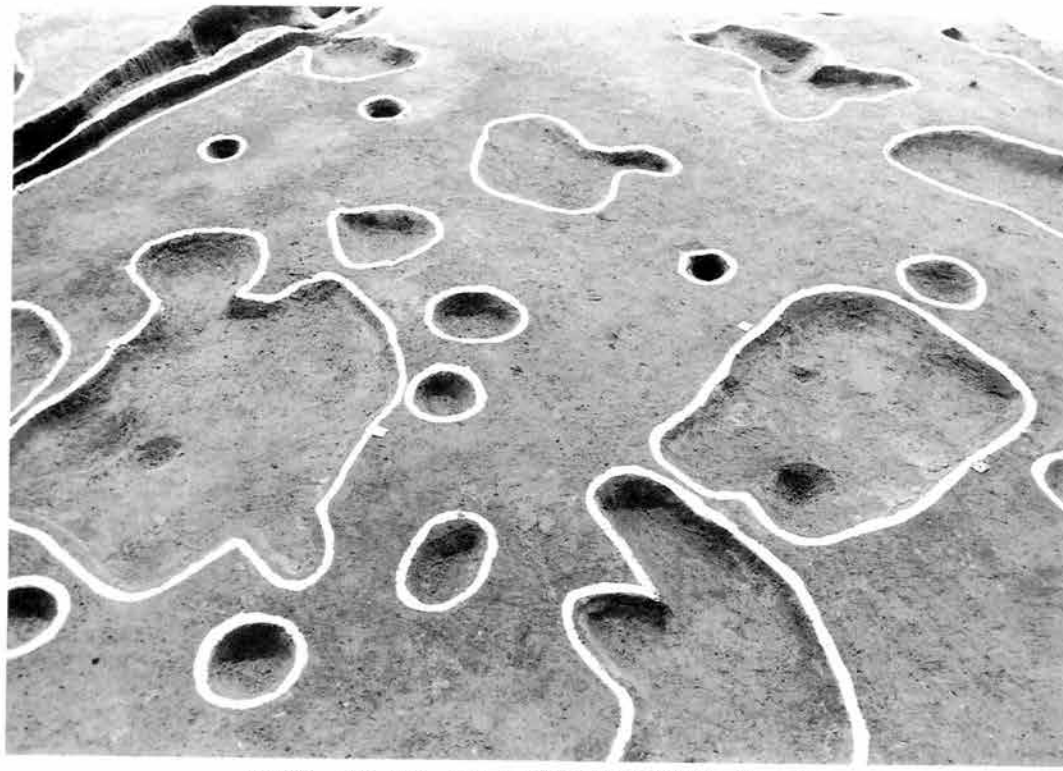


写真20　2号土坑、3号土坑周辺遺構完掘状況（北より）

写真21　東側調査区遺構掘り下げ状況（東より）

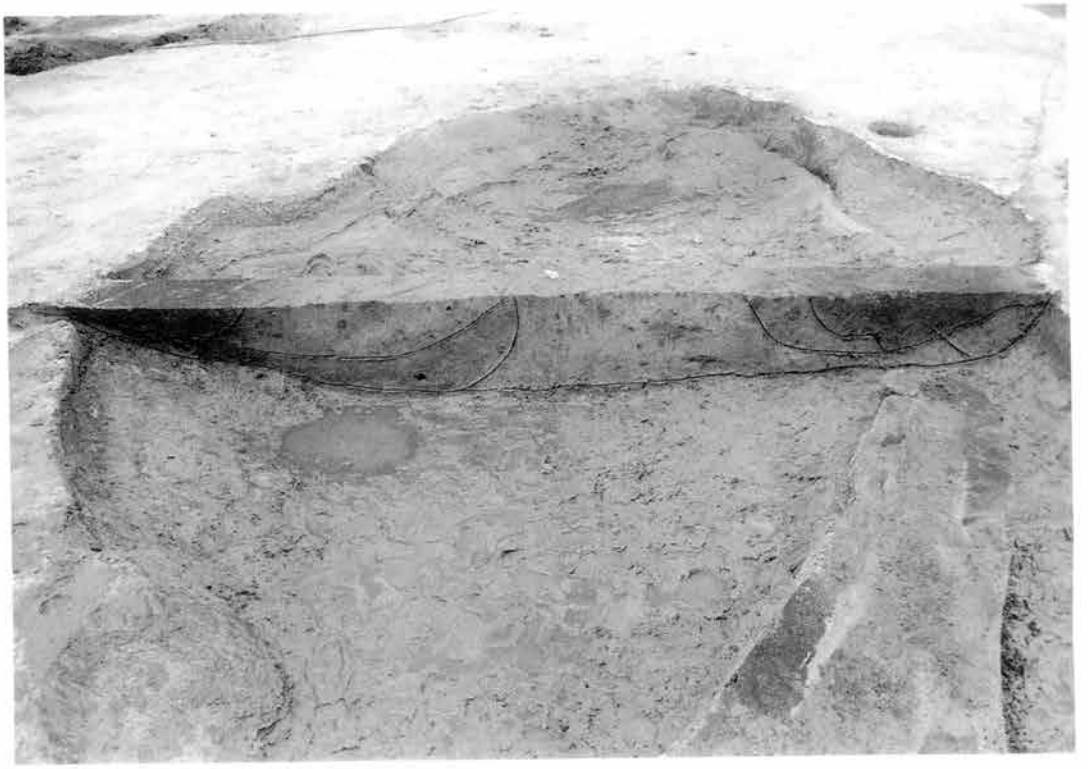


写真22　11号土坑土層断面検出状況（ＳＰ29～30）

写真23　3号溝掘り下げ作業（東より）

写真24　3号溝周辺遺構完掘状況（北より）

写真25　20号溝完掘状況（南より）

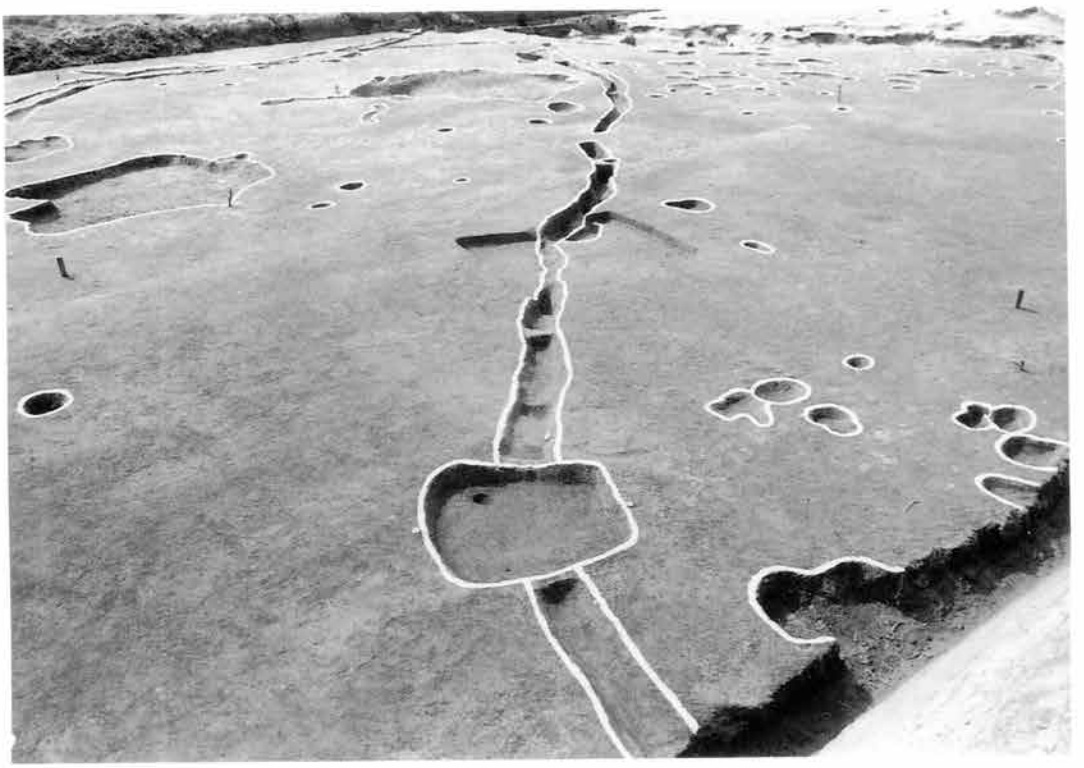


写真26　Ⅰ号土坑、24号溝完掘状況（北より）

写真27　大溝完掘状況（西より）

写真28　大溝土層断面検出状況（ＳＰ53～54）

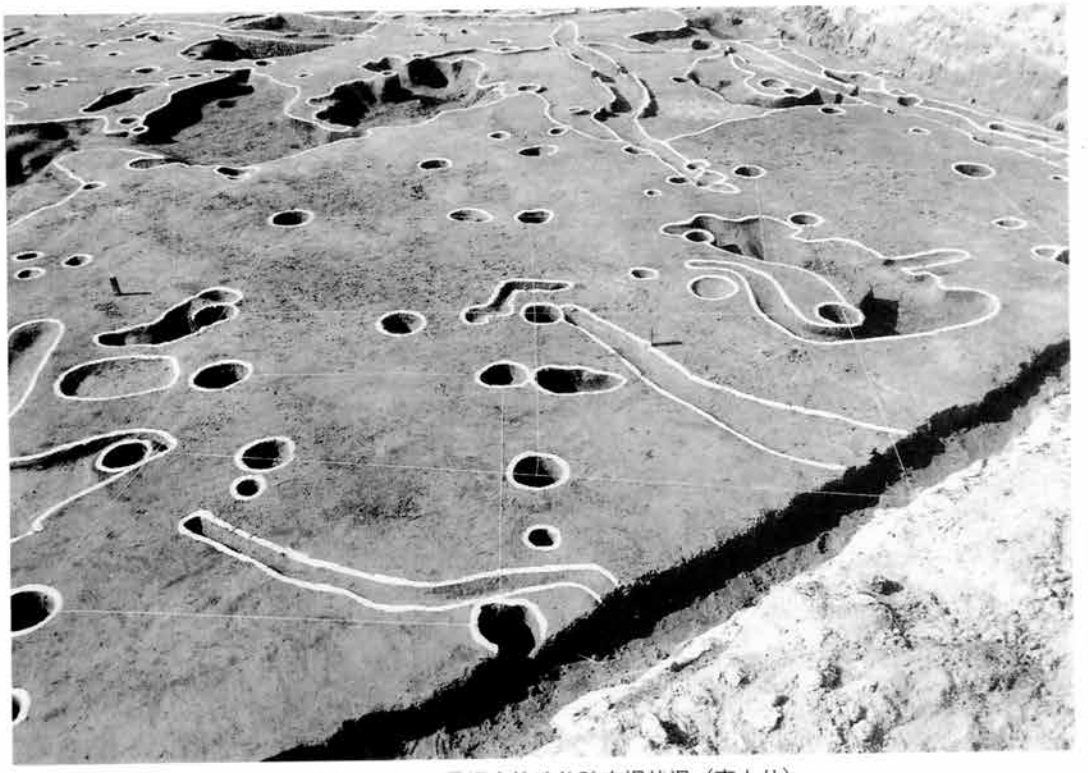


写真29　1～3号掘立柱建物跡完掘状況（南より）

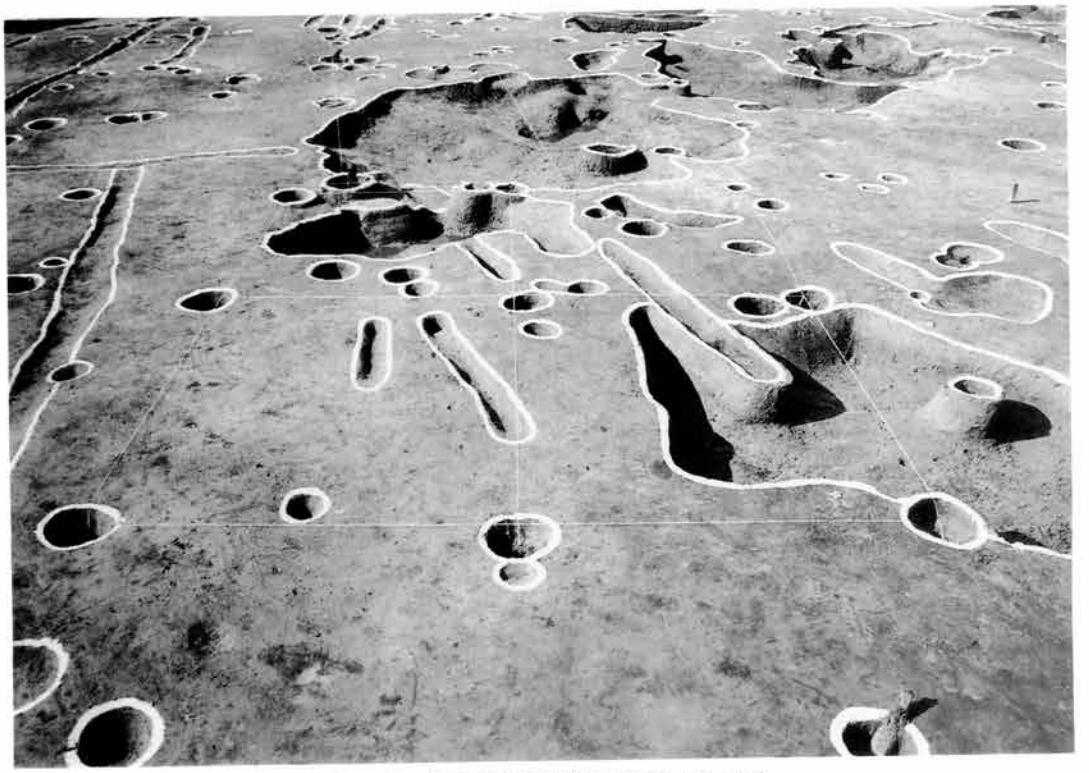


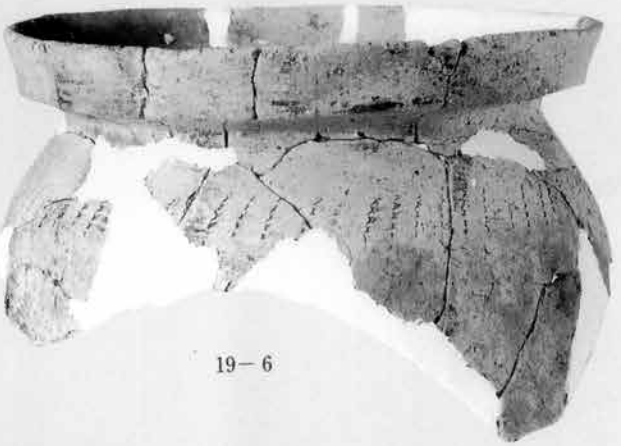
写真30　4号掘立柱建物跡完掘状況（南より）

写真31　調査区完掘状況（南より）

写真32　高畠カンジダ遺跡遠景（北より）

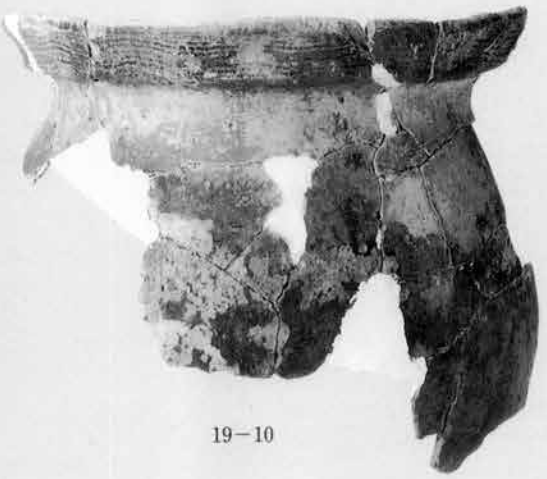
19－1

19－4



19－6

19－9



19－10

19－11

写真33

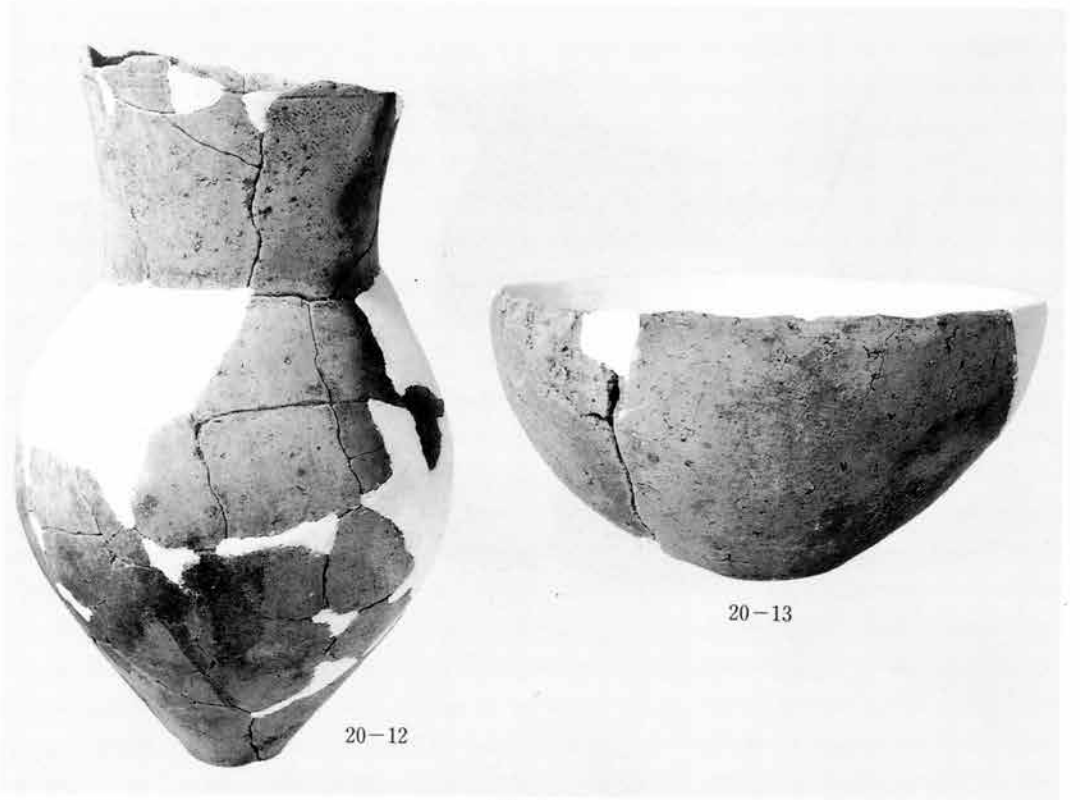


写真34

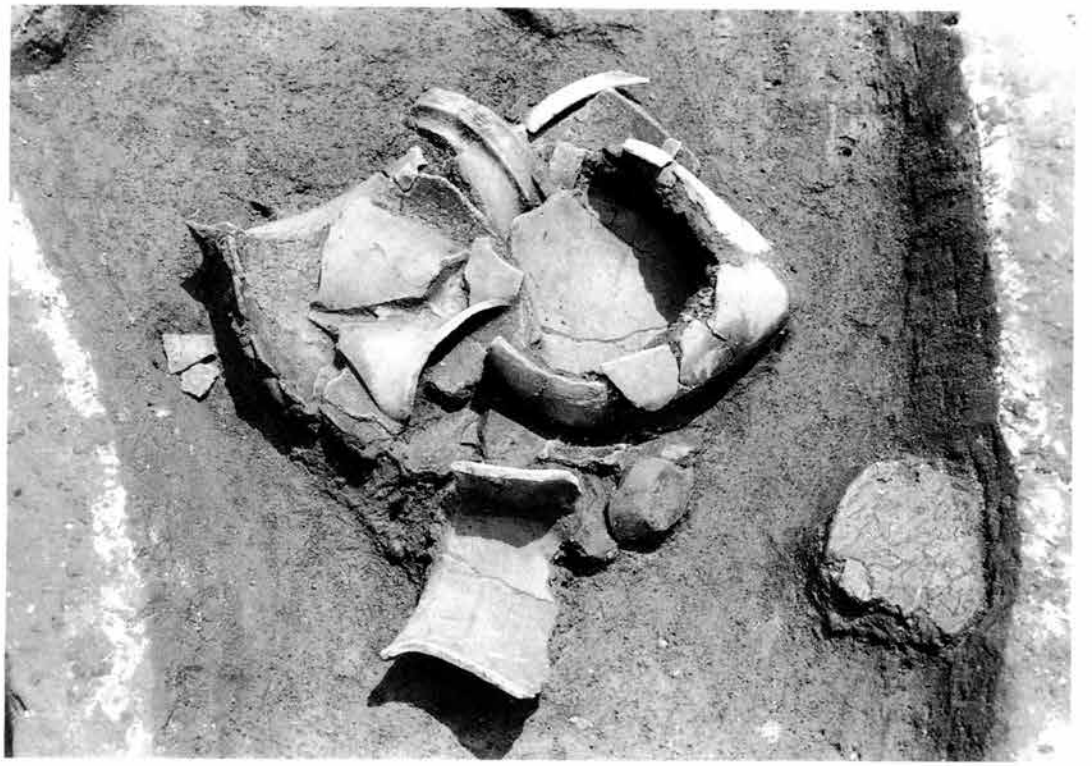


写真35　3号溝遺物出土状況

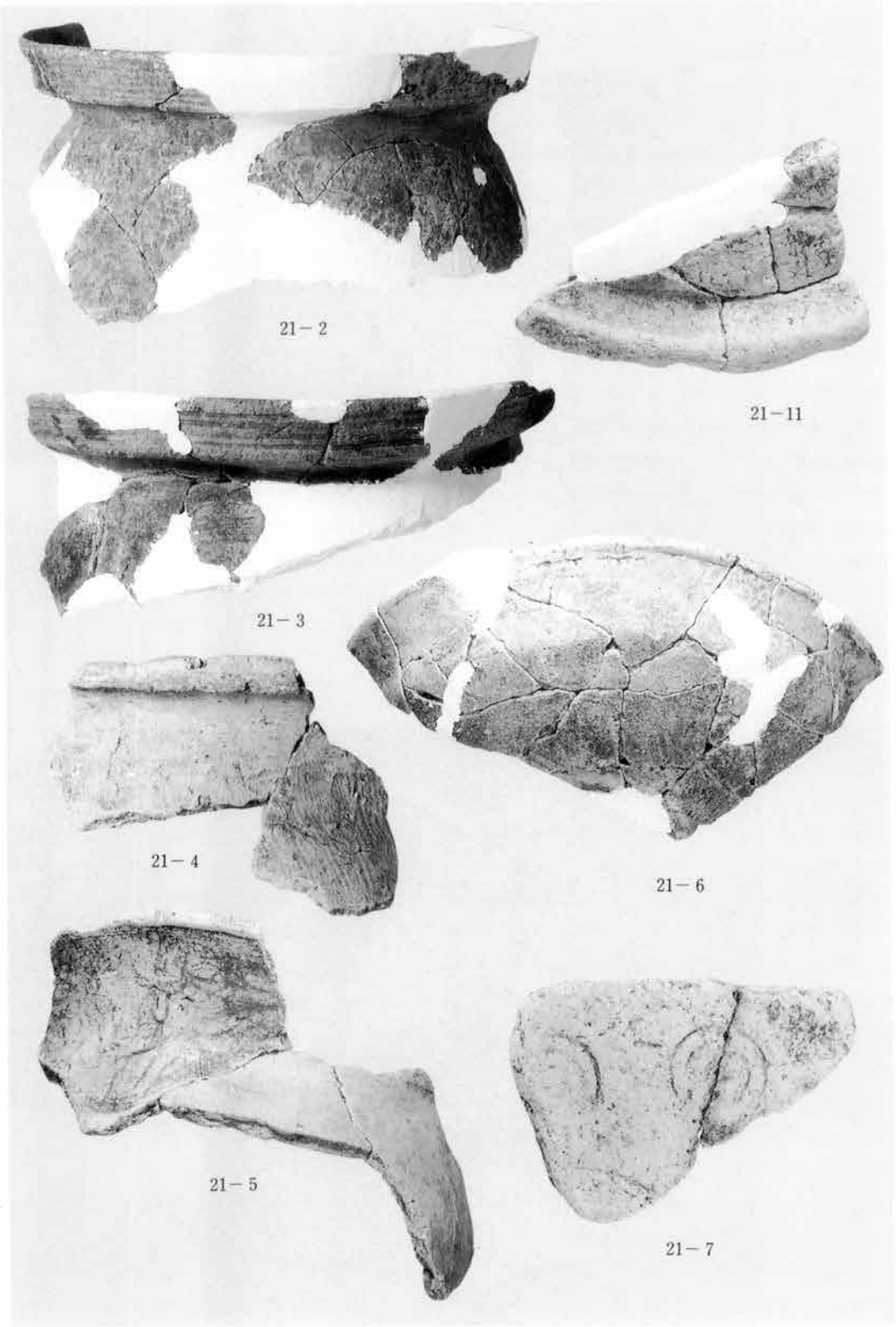
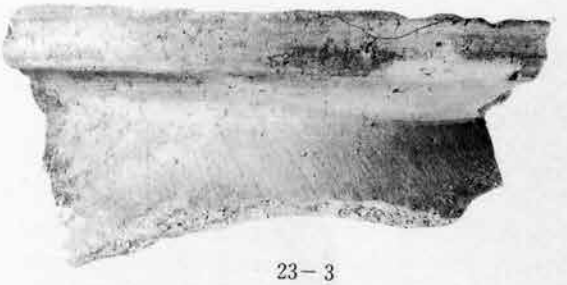


写真36



23－3

23－1

23－2

23－6

23－5

23－9

23－10

23－8

写真37

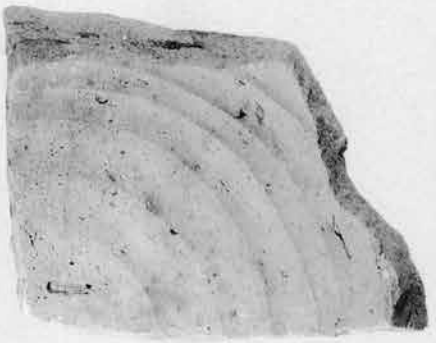
25－8

25－9

25－11

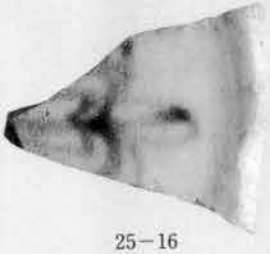
25－10

25－12

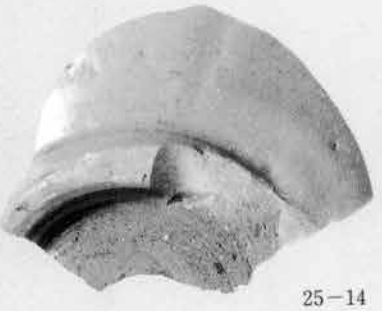


25－6

25－17



25－16



25－14

写真38

25－23

25－24

25－22

26－ 8

26－ 1

26－ 2

26－ 3

写真39

Ⅵ　まとめ

2．周溝建物跡出土土器について

住居内の居住域周囲に溝を巡らせた周溝建物跡は、藤井サンジョガリ遺跡と高畠カンジダ遺跡の二遺跡で確認されている。またそれぞれの建物の周溝からはまとまった遺物が出土している。ここでは出土地点の明らかな土器を中心に、その位置づけを概観してみたい。

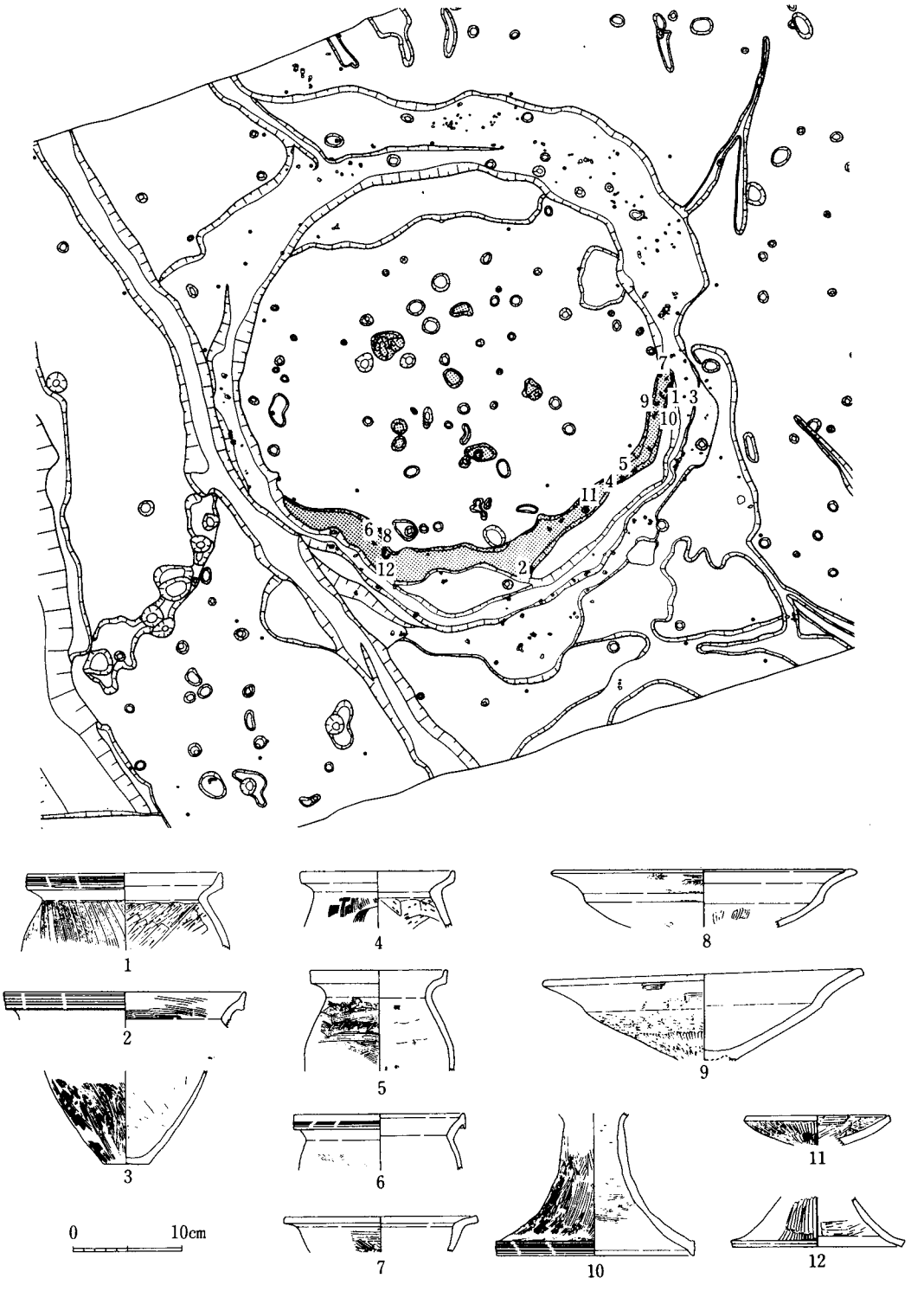
1　藤井サンジョガリ遺跡

二棟の周溝建物跡を検出している。そのうち全形が分かるのは1号周溝建物跡である。1号周溝建物跡は周溝の切り合いにより、大きく三段階に分かれる。19号溝を周溝にもつ段階が最も古く、続いて21号溝、そして18・22・23号溝段階と徐々に居住域を拡張していったものと思われる。また各遺構図下に示した1～49が出土地点を確認できた土器である（第1～3図）。全体的には弥生時代後期後半の範疇に含まれる土器群と思われる。

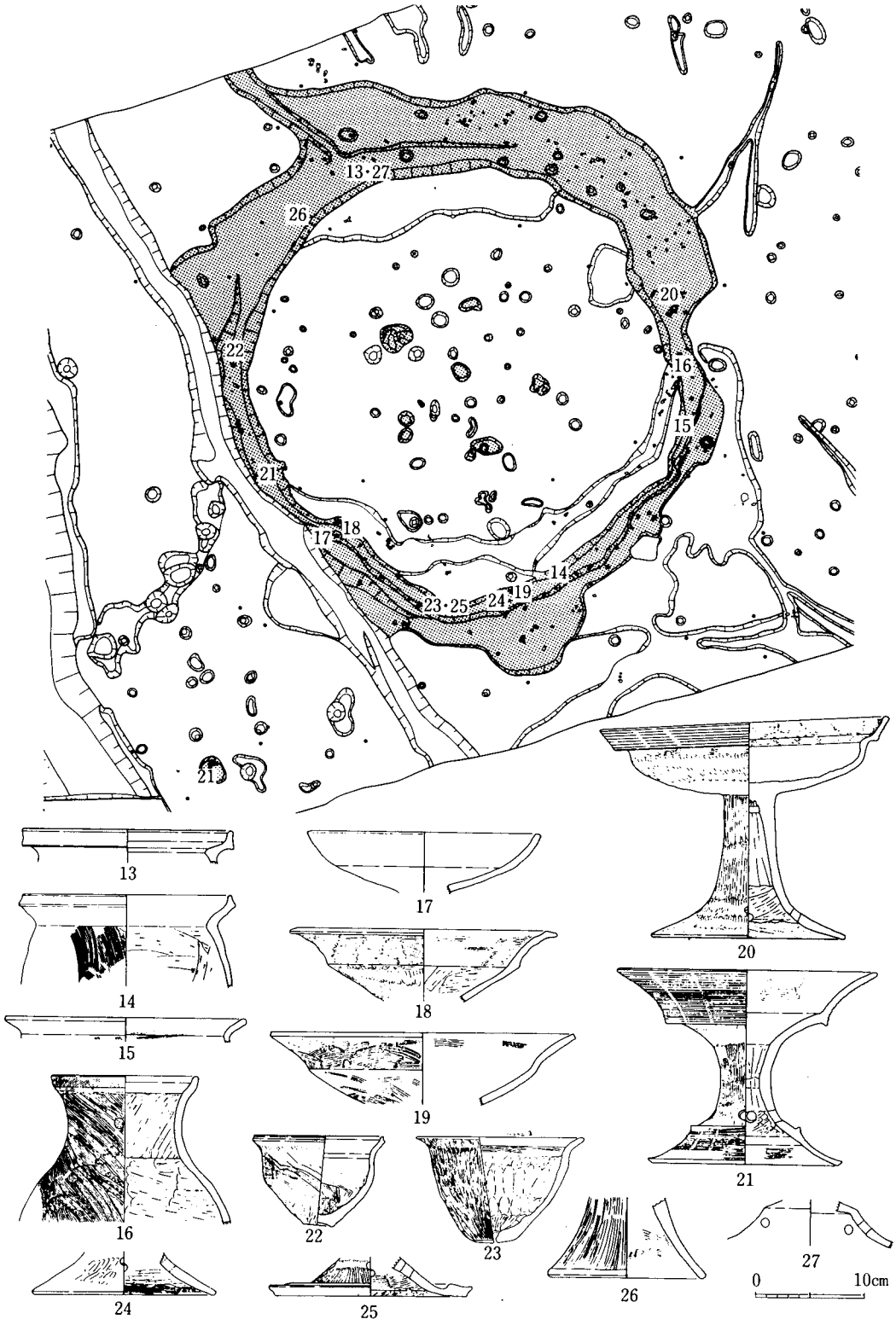
甕には口縁擬凹線文をもつ製品が数点みられるが、典型的な有段例は少ない。1、2、6も明瞭な有段形はとらず、口縁は断面三角形状となる。ただし当土器群の前段階に主体となるような口縁形態ではなく、有段形と断面三角形の中間的な様相をもつ。擬凹線文甕の口縁形態は後期後半以降、断面三角形から有段形に主流が移るとされるが、こうした中間形態の位置づけはその中での過渡的な状況を示すものであろうか。桜田・示野中遺跡（金沢市教委1991）SK68、徳前C遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1986）第1群土器などに類例がみられ、後期後半の中でも古相を示すものとされる。無文有段口縁の甕は定量みられる。いずれも縁帯幅が狭く、口縁端部は丸くおさめる。甕類の中では量的に最も多い器種である。くの字口縁甕はその多くが端部に面をもち、端面を上方に伸ばすもの（14、34）と横ナデにより上限に肥厚させるもの（35）がある。壷の個体数は少ない。

それに対し高杯、器台類は比較的多く確認されている。8、9、18、19、39は杯部口縁が外傾・外反する高杯である。口縁端部にはいくつかのバリエーションがあり肥厚（8、18）、面取り（9、19）、丸縁（39）がみられる。いずれも杯部の立ち上がり角と口縁部の外傾度が大きいため、全体が逆ハの字状になる傾向がある。後期後半の古段階に位置づけられる徳前C遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1993）大溝、太田遺跡（羽咋市教委1991・安1992）4号溝出土高杯などに似るが、それらよりも杯口縁部の広がりと伸長がやや大きくなる。また25の脚端部の処理方法も桜田・示野中遺跡Pit 2、太田遺跡4号溝に類例がみられ、桜田・示野中遺跡の中では新相の手法として捉えられている。一方20、40は擬凹線文、無文の有段鉢形の杯部をもつ。脚部は大きく開き、端部は丸くおさめる。共に口縁帯部の幅は狭く、大きな外反もない。西念・南新保遺跡（金沢市教委1983）B－1区T－1に同形の製品が認められる。当器種の出現時期は定かでないが、後期後半の古段階で口縁部の短いタイプがみられ（楠1989）、新段階以降には口縁部の伸びるタイプが主流となるようである。

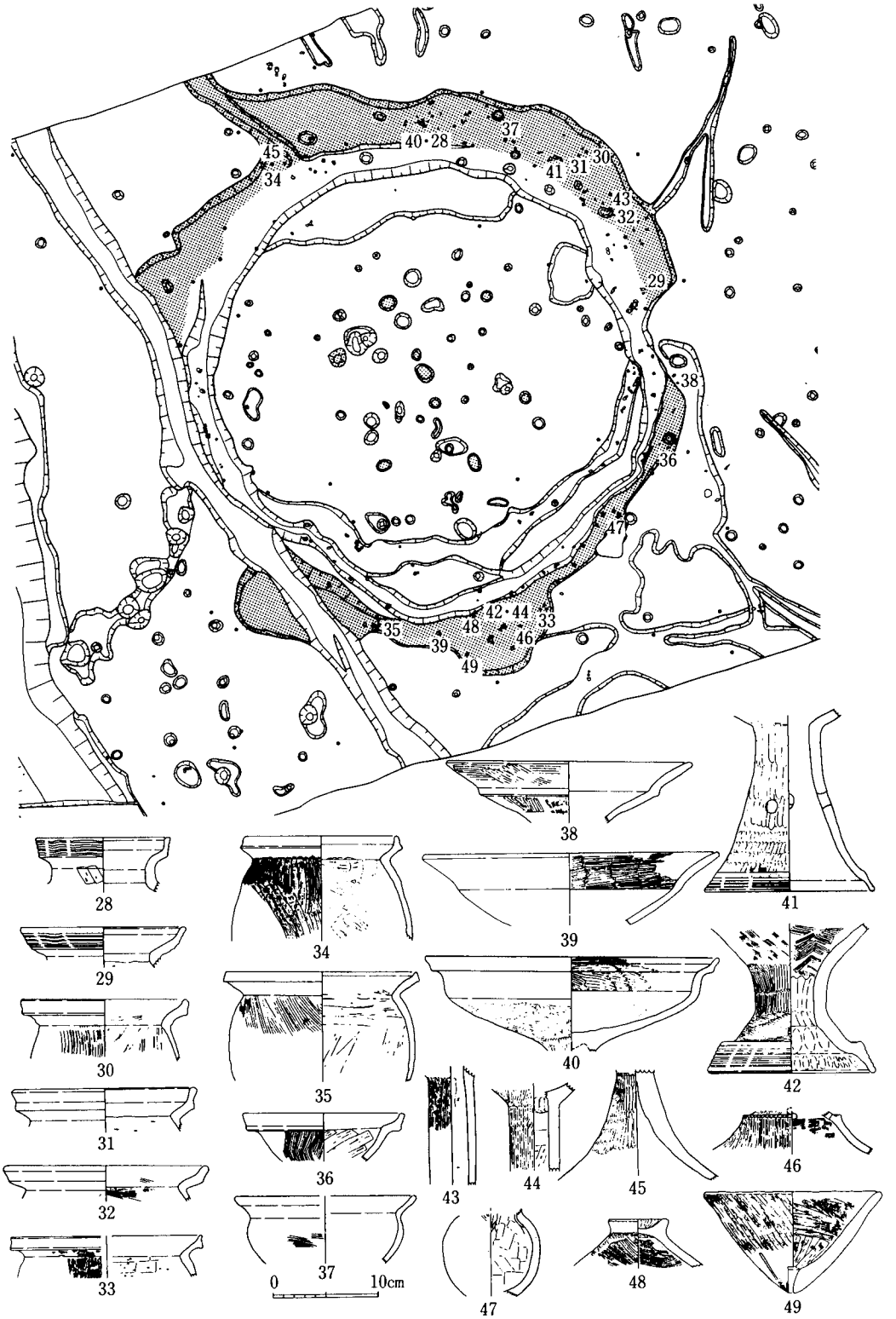
器台は擬凹線文をもつ中で、面取り（11）、有段（21、42）、有段状（41）がある。11の三角形状の断面、42の有段部の直線的で肉厚な作りは古相を示すものであろうか。



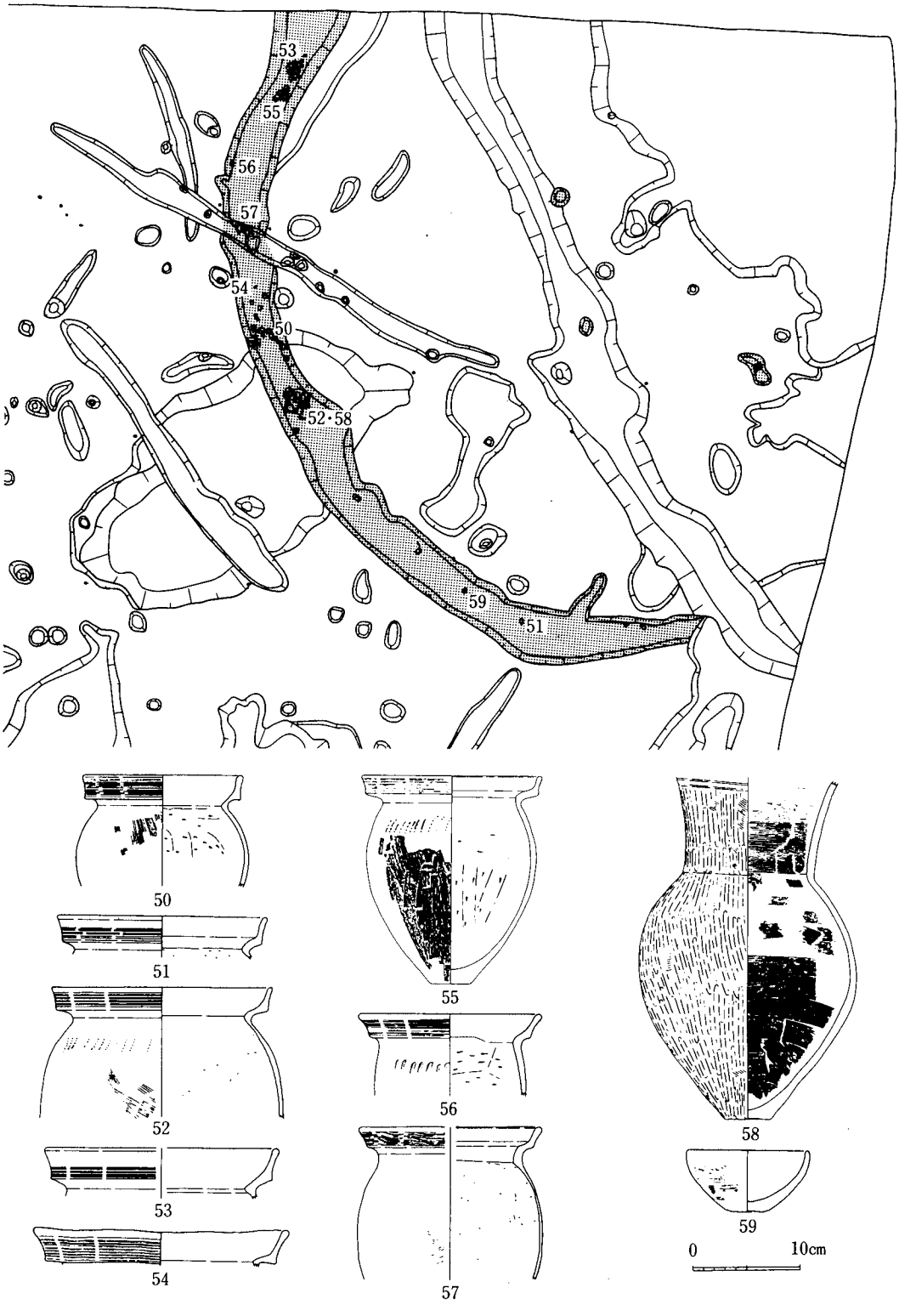
第1図　藤井サンジョガリ遺跡19号溝出土遺物位置図（遺構1/200・遺物1/6）



第２図　藤井サンジョガリ遺跡21号溝出土遺物位置図（遺構１/200・遺物１/６）



第３図　藤井サンジョガリ遺跡18号溝、22号溝、23号溝出土遺物位置図（遺構１/200・遺物１/６）



第４図　高畠カンジダ遺跡３号溝出土遺物位置図（遺構１/100・遺物１/６）

さて、1号周溝建物跡に伴う溝出土土器を順にみてきたが、現時点では周溝の新旧に沿った明確な段階差を設定することは難しいといえる。そのため溝資料全体の中での位置づけとなるが、大きくは桜田・示野中遺跡、太田遺跡にみられるような弥生時代後期後半の古段階に含まれる土器群と理解しておきたい。ただし高杯などの一部の特徴からは、古段階の中でもやや新しい様相をもつ一群として捉えることも可能であろう。なお遺物量は少ないが、2号周溝建物跡、1号土坑、1～3号溝、溝状落ち込み遺構なども同時期の遺構と考えられる。

2　高畠カンジダ遺跡

全形をうかがえる遺構はないが、周溝建物跡の可能性のある遺構は二か所確認されている。そのうちの一つが3号溝である。全体の1/3程度が調査区内に位置し、溝からは数個体分の遺物が出土した。藤井サンジョガリ遺跡と異なり、建物の重複はみられない。50～59が出土地点を確認できた土器である（第4図）。

甕はすべて擬凹線文有段口縁で占められる。口縁部はいずれも肉厚で直線気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。55の底部も厚くしっかりと作られており、弥生時代後期後半にみられる特徴をもつ一群と思われる。能登では良好な資料に乏しいが、先に挙げた太田遺跡1号溝、徳前C遺跡大溝、また寺家遺跡（羽咋市教委1992）SBT－01などに類例が認められる。58、59の長頸壷、鉢も同期の組成に含まれるものであろう。構成器種および資料数が限られているため時期的な細分は難しいが、弥生時代後期後半の新段階に位置づけられる宿東山遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1987）SK－75出土の擬凹線文有段口縁甕に比べると、57のような器壁の薄いものもあるが、作りは全体的に重厚で古相的な印象を受ける。

なおここで注目すべきは、擬凹線文有段口縁甕の占有率の高さである。一般的に能登地域の当期の様相は、無文有段口縁甕・くの字口縁甕を主体とした擬凹線文有段口縁甕の少なさにあるといってよく、それがここでは完全に逆転している。さらにこの傾向は3号溝だけではなく、もう一か所の周溝状遺構である4号東溝など当遺跡出土資料全体に認められる。想像をたくましくするならば、高畠カンジダ遺跡は東方に近接する藤井サンジョガリ遺跡とほぼ同時期に機能しながらも、何らかの理由で加賀的な土器様相を有する、一種特異な集落として営まれていた可能性もあるわけである。

《参考文献》

金沢市教育委員会　1983　『金沢市西念・南新保遺跡』　金沢市教育委員会

石川県立埋蔵文化財センター　1986　「鹿島町徳前C遺跡調査報告（II・III）」　石川県立埋蔵文化財センター

石川県立埋蔵文化財センター　1987　『宿東山遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

楠　正勝　1989　「第4章　まとめ」『金沢市西念・南新保遺跡II』　金沢市教育委員会

金沢市教育委員会　1991　『桜田・示野中遺跡』　金沢市教育委員会

羽咋市教育委員会　1991　『太田遺跡』　羽咋市教育委員会

安　英樹　1992　「第9章　総括」　『竹松遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター

石川県立埋蔵文化財センター　1993　『徳前C遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

羽咋市教育委員会　1993　『寺家遺跡第10次調査報告書』　羽咋市教育委員会

3．高畠テラダ遺跡の須恵器・土師器について

高畠テラダ遺跡からは遺物箱にして12箱の古代の須恵器・土師器が出土している。以下、器種毎にその内容を記していく。なお、文中には図化土器点数もあわせて示した。

須恵器

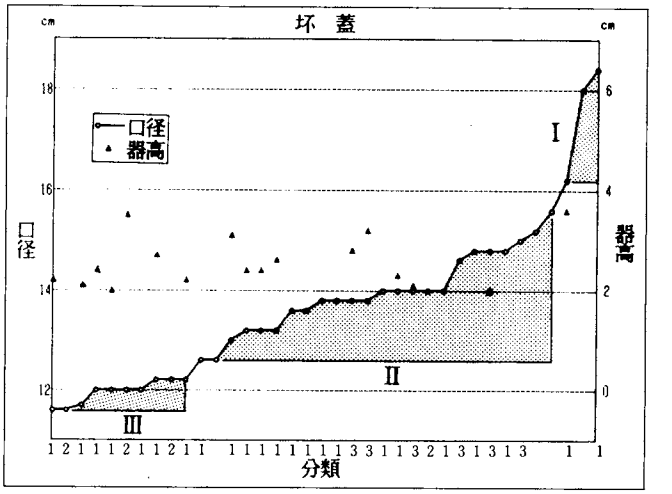
坏蓋

坏蓋は法量によりⅠ（16.2～18.4cm）、Ⅱ（12.6～15.2cm）、Ⅲ（11.6～12.2cm）に分けることが出来、法量Ⅰは3個体、法量Ⅱは28個体、法量Ⅲは10個体を数える。このうち法量Ⅰ・Ⅲは弁別出来るが、量的に多い法量Ⅱでは、3ヵ所（12.6～13.2cm、13.6～14cm、14.6～16.2cm）に偏在を認める。14.6～16.2cmを測る大振りの蓋には坏Bのうち、口径13.6cm前後の型式（1b類。口縁部が残存せず、グラフには表れていないが10点以上存在）に対応すると考える。坏蓋の器形は大きく以下の3類に分類出来る。

1類　低平な器形を呈し、口縁部外面にナデによるロクロひだを強く加える。

2類　低平な器形を呈し、天井部と体部は稜線により画され、口縁端部には浅いロクロひだを加える。

3類　1・2類に比べ器高は高く、天井部から口縁端部まで滑らかに続く。



坏蓋法量

以下に各法量毎の特徴を記す。

＜法量Ⅰ＞

3点あるが器形を復元出来るのは第23図－15のみであり、その器形は1類に属する。口径18.4cm、器内・外をロクロナデにより仕上げる。第27図－5では径3.4cmのボタン状紐を付す。

＜法量Ⅱ＞

1類（18点）・2類（1点）・3類（5点）が存在し、実測点数では1類が主体。径3cm前後の偏平なボタン状紐が多く、鈕中央部が膨らむもの、窪むもの、宝珠状のものもある。第15図－14、同22－3、同23－13、同27－4では、天井肩部周縁にロクロケズリが残る。法量的には1類がより小振りの、2・3類がより大振りの位置を占める。

＜法量Ⅲ＞

1類（7点）・2類（3点）が存在し、実測点数では1類が主体。径2cm前後で端整なボタン状紐の他、紐付け根部でのしぼり込みのない柱状鈕（第15図－8、同23－3）がある。

多くは、内・外面ともロクロナデにより仕上げるが、第15図－８・９、同23－５は紐貼付前に天井部から体部中位にロクロケズリを加えている。

坏B

有台坏であり、高台は全て貼付による。法量により、Ⅰ（15.4～16.2cm）、Ⅱ（11.5～12.8cm）、Ⅲ（10.6～11.2cm）に分けることが出来る。主体は法量Ⅱ（49個体）であり、法量Ⅰは14個体、法量Ⅲは７個体を数える。

以下、各法量毎に口縁部や高台等、細部形態の違いによる分類を示す。

＜法量Ⅰ＞

（14点）第24図－９に代表される。幅狭で端整な高台を持ち、体部は外傾する。第24図－10、同27－16は高台内端を内側につまみ出す。

＜法量Ⅱ＞

１類　（22点）法量Ⅱの主体。坏底部から内・外面とも弱く曲がり、外傾する体部となる。高台形態にはａ）幅狭で高い端整なもの（６点）と、ｂ）幅広で低平なもの（16点）の２種がある。

２類　（７点）坏底部から折れ体部となる。体部は外傾、高台は幅狭で高いものが多い。中には高台外側でつま先立つ形態（第27図－12）もある。

３類　（10点）坏底部からなだらかに体部に移行し、内湾気味の体部は口縁部で外反する。高台形態には低平で雑な造りのもの（第18図－４等）、細身で高いもの（第23図－22等）がある。

４類　（４点）第27図－10に代表され、内・外面とも屈曲が弱い。高台は幅狭で高い。

５類　（４点）第17図－４・６に代表される。浅身であり、坏底径に比べ小径の高台は幅広・低平。

６類　（２点）第27図－13に代表される。浅身であり、幅狭で端正な高台をもつ。２点確認しているが、淡灰色を呈する胎土は極めて精良で他の土器と異なる印象を受ける。

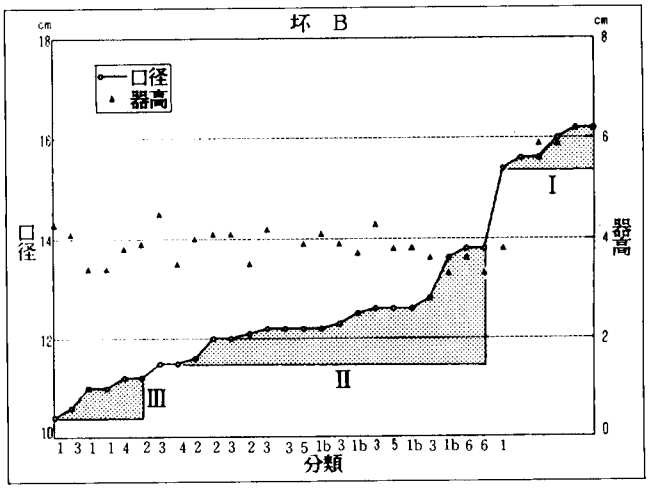
法量Ⅱの中では、２類はより小振りの、１ｂ・６類はより大振りの位置を占める。

＜法量Ⅲ＞

１類　（４点）Ⅱ１類と同様の器形を呈する。

２類　（１点）Ⅱ２類と同様の器形を呈する。

３類　（１点）深身であり、体部



坏Ｂ法量

は内湾気味に立ち上がる。

4類　（1点）深身である。底部より折れ上がった体部は口縁部で外湾する。

坏A

無台付である。法量により、Ⅰ（14.4cm）、Ⅱ（11.6～13.5cm）、Ⅲ（10.5cm前後）に分けることが出来る。法量Ⅰ・Ⅲはそれぞれ2個体を数えるのみ。法量Ⅱは52個体を数え、うち1類形態が38個体を占める。以下に各法量毎の特徴を記す。

＜法量Ⅰ＞

底部から折れ、外傾する体部となる。2点存在。造りは酷似し、共に酸化硬質、部分的に還元という焼成状態を示す（第15図－27・28）。

＜法量Ⅱ＞

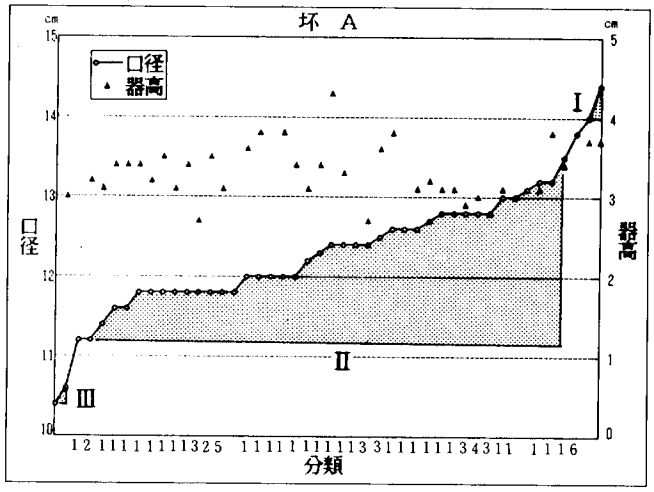
1類　（38点）体下端部がしぼり込まれ緩やかに底部となる。坏Aの大部分を占める。焼成良好なものの他、黄白色を呈し酸化硬質の焼成状態を示す一群がある。底部外面の観察からは、ヘラ切り痕が渦状に残るものと残らないものがあり、細分の可能性をもつ。第27図－26は器形・ヘラ切り痕より本類に含めたが、全体に肉厚で口径も大きい。

2類　（3点）法量Ⅰの土器と同様、体部と底部の区別の明瞭なもの。

3類　（5点）浅身である。法量Ⅱ1類と同様の器形を呈する。

4類　（1点）浅身である。器内面は底部より滑らかに体部に移行し、外面は底部より折れ上がる。器体は肉厚（第24図－27）。

5類　（2点）体部外傾度の大きいもの（第24図－30・31）。



坏A法量

6類　（1点）口縁部が外湾するもの（第24図－32）。

＜法量Ⅲ＞

（2点）法量Ⅱ1類と同様の形態を呈する。

壺（第18図－18）

（1点）底部破片。内面をナデ、外面をケズリにより仕上げ、つま先立ちする高台を付す。

壺（第21図－5）

（1点）短頸壺の蓋と推定される。天井部中央には鈕は無い。環状鈕部分が弱く、内面見込み部分が良好に磨耗しており坏として使用された可能性がある。

甕

全体をうかがえる資料はない。口縁部形態により分類する。

1類　（1点）口頸部高が高く、大きく外反する口縁部形態を持つ。

2類　（5点）外傾する口頸部高は低い。外側に引き出した口縁端部に水平あるいは外傾する面を設ける。いずれも細片であり、壺となるものもあろう。

3類　（1点）肥厚させた口縁端部内・外に面を設けるもの。

その他

42号溝やP－48、P－120、および下層包含層からは6世紀末～7世紀前葉に比定される須恵器が出土している。42号溝出土の第18図－6・7・8は底部外面にロクロケズリを加える。第18図－7は小径であることから壺蓋となろう。同じ42号溝出土の土師器坏（第18図－9）は丸底と推察され赤彩等は施さない。また、土師器甕（第18図－10～12）は頸部内面が鋭角的にくびれる、外面にミガキ・縦位ハケ目を加えるなど他の甕と趣を違えており、これらも伴出須恵器に近い年代が与えられよう。第22図－12・13は高坏蓋であり天井部外面に12はロクロケズリを、13はカキ目を加える。

土師器

埦

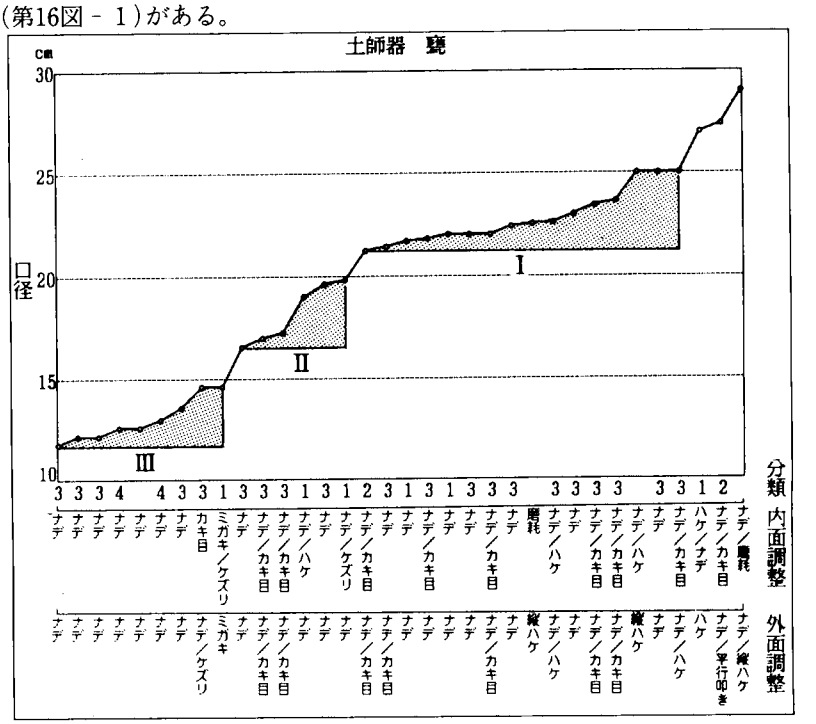
（9点）口径13～15cm。出土量は少なく全形を窺えるのは第25図－1のみであるが、多くは狭い平底部に丸い体部を持つ器形が推定されよう。内面に黒色処理を施し、外面を赤彩するものの他、内・外面赤彩するもの（第16図－1）がある。

壺

（1点）口径13cm、短く立ち上がる口縁部を持つもので（第25図－3）、内・外面にハケ目を加える。

甕

A類（非ロクロ成形、4点）と、B類（ロクロ成形、33点）がある。口径では、Ⅰ（21.2～25cm）、Ⅱ（16.6～19.6cm）、Ⅲ（11.8～14.6cm）に分けられる。法量Ⅰ（28点）・Ⅲ（11点）



甕法量

は点数も多く組成の主体といえる。法量II（5点）は2ヵ所に偏在が認められるが、法量I・IIIの中間を占めるものして一括した。また、口径27cmを越す土器があるが、ここには、非ロクロのもの、内・外面ハケ目調整のもの、体部に叩きを残すものがみられる。

体部形態は長胴器形と推定されるが、全形を復元出来るものは少なく、「く」の字状に外反する口縁端部の形態により大きく4類に分類出来る。

1類）丸く納める。

2類）角張らせる。

3類）上方につまみ上げる。

4類）内湾させる。

以下、各法量毎に形態・調整等の特徴を記す。

＜法量I＞

端部形態では3類（12点）が主体。1類（4点）・2類（2点）が少量存在。体部調整では、ロクロナデや、カキ目調整を施すものが多い。外面に縦位ハケ目を加える第25図－10は非ロクロ製品。

＜法量II＞

端部形態には1類（1点）・3類（5点）があり、体部調整は法量Iと同様。

＜法量III＞

端部形態には1類（1点）・3類（5点）・4類（2点）がある。調整は内・外面ともロクロナデによる。

堝

（9点）口径31.6～39.5cmを測る。口縁端部形態は甕形態分類第3類であり、内・外面とも体部上半をロクロナデ、下半をカキ目調整で仕上げる。底部まで完存する個体はないが、丸底の底部は叩きを残す、あるいはケズリを加えるものとなろう。

竈は内・外面を縦位ハケ目により仕上げる。

羽口は外径5.8cm、内径4cmを測る。

小結

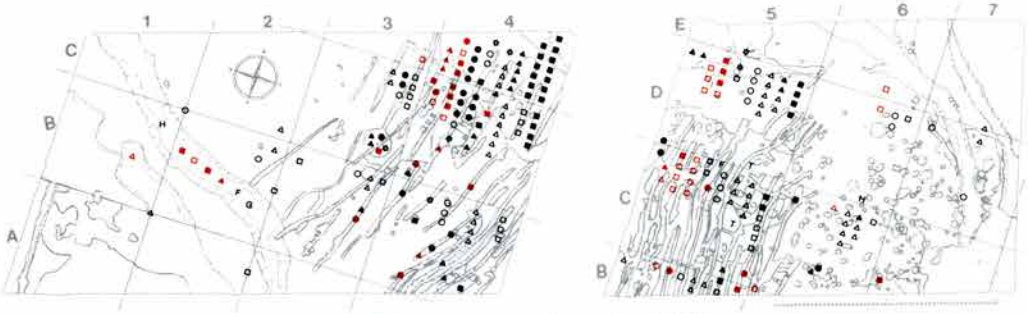
・**器種構成**について若干のデータを提示しておきたい（第1図）。

機能別では食膳具71.3%（口縁部残存率の集計では76.2%）、貯蔵具4.5%（同2.1%）、煮炊具23.1%（同21.7%）と食膳具が全体の1／4を占める。食膳具の内訳では須恵器坏A31.8%（同27.9%）、同坏B39.8%（同26.4%）、同坏蓋23.3%（同42.8%）、土師器坏5.1%（同3.0%）と須恵器製が圧倒している。また、坏蓋は口縁部残存率による集計で大幅に比率を増しており、坏蓋は各個体の残存度が高いことが分かる。さらに須恵器食膳具を細かく見るなら、坏A・坏B・坏蓋ともI・II・IIIの3法量が確認出来る。しかし、坏Aでは法量I・IIIは計6%（12%）にすぎず主体を占める器種とはいえない。坏B・坏蓋では法量IIが7割前後を占める。これらの結果を比較対象として示した羽咋市四柳白山下遺跡での成果（注1）と比べるなら、機能別での極めて近似

機　能	種　別	器種	法量	実測個体数 (%)	口縁部残存 ○/12(%)	羽咋市四柳 白山下遺跡
食膳具	須恵器	坏A	I	2	6	
			II	52 (31.8)	81 (27.9)	23.81 (21.8)
			III	2	5	
	〃	坏B	I	14	16	
			II	50 (39.8)	62 (29.4)	29.82 (27.3)
			III	6	9	
	〃	坏蓋	I	3	2	
			II	28 (23.3)	92 (42.7)	47.36 (43.3)
			III	10	47	
	土師器			9 (5.1)	10 (3.0)	6.94 (6.4)
小　計				176 (71.3)	330 (76.2)	109.1 (74.6)
貯蔵具	須恵器	壺		1 (9.1)	0 (0)	2.28 (35.4)
	〃	甕		9 (81.8)	8 (88.9)	2.37 (36.8)
	土師器	壺		1 (9.1)	1 (11.1)	0.5 (7.8)
小　計				11(4.5)	9 (2.1)	6.44 (4.4)
煮炊具	土師器	甕	A	4 (7.0)	6 (6.4)	
			BI	28	21	29.96 (97.6)
			BII	5 (77.2)	7 (38.3)	
			BIII	11	8	
	〃	鍋		9 (15.8)	52 (55.3)	0.29 (0.9)
小　計				57 (23.1)	94 (21.7)	30.7 (21.0)
その他	土師器	竈		2	0	
		羽口		1	0	
小　計				3 (1.2)	0	
総　計				247 (100.0)	433(100.0)	146.23 (100)

第Ⅰ図　図化土器器種構成

する土器組成、器種別での食膳具口縁部残存率による比率の近似、また高畠テラダ遺跡での貯蔵具における壺の少なさ、煮炊具における堝の多さが特に指摘できよう。本遺跡で示した土器は大半が調査面積2,000m²の二分の一を占める畝状遺構周辺出土であり（下図）、掘立柱建物等の直接的居住区域からの出土ではないことを考慮するなら、以上の結果から該期における当地の様相を言及することになお問題は残る。資料の増加が待たれる。



図化土器分布状況

・**重ね焼方法**では坏B・坏蓋には法量の大小を問わずⅠ類、Ⅱa・b類（注2）が、坏AではⅢ類が認められる。

・**須恵器胎土**についてはA類）粒径２・３㎜の白色砂粒を多量に含み粗雑な胎土である。B類）粒径２・３㎜の白色砂粒を少量含み器表には黒色の吹出しが見られる。C類）砂粒の含みは僅かであり、緻密な胎土である。の３類に大別出来る。A類は鳥屋窯跡群産として典型的な胎土である。B・C類については鳥屋窯跡群に存在する（注３）が、個別資料では高松・押水窯跡群産との識別は困難である。ただ、距離的にみて本遺跡の須恵器の多くは鳥屋窯跡群より供給されたと考えたい。

・**土器の年代**は口径・器種構成、僅かに存在する非ロクロ土師器等からみて奈良時代後半、田嶋編年Ⅳ期（注４）の範疇に納まるものといえる。各器種に認められる法量値の偏在がⅣ期内での時期差を示すとも考えられるが、生産地の様相が不明瞭な現段階では将来の細分の可能性を指摘するにとどめておきたい。

〔注〕

（注１）今井淳一編『四柳白山下遺跡II』石川県羽咋市教育委員会1991

奈良時代前半を主体とする四柳白山下遺跡１・２次調査では、600㎡の調査区の内に建替えを含め７棟以上の掘立柱建物が検出されている。その出土土器は遺物箱にして52箱，円面硯他豊富な器種組成をもつ。墨書土器も多数出土し官衙的な性格が与えられている遺跡である。高畠テラダ遺跡とは性格が異なる上に、計数対象土器も図化土器のみである本遺跡での結果との単純な対比は問題が残ろうが、近接し（本遺跡の南西約1.7㎞)、調査成果が公表されている遺跡として敢えて記した。

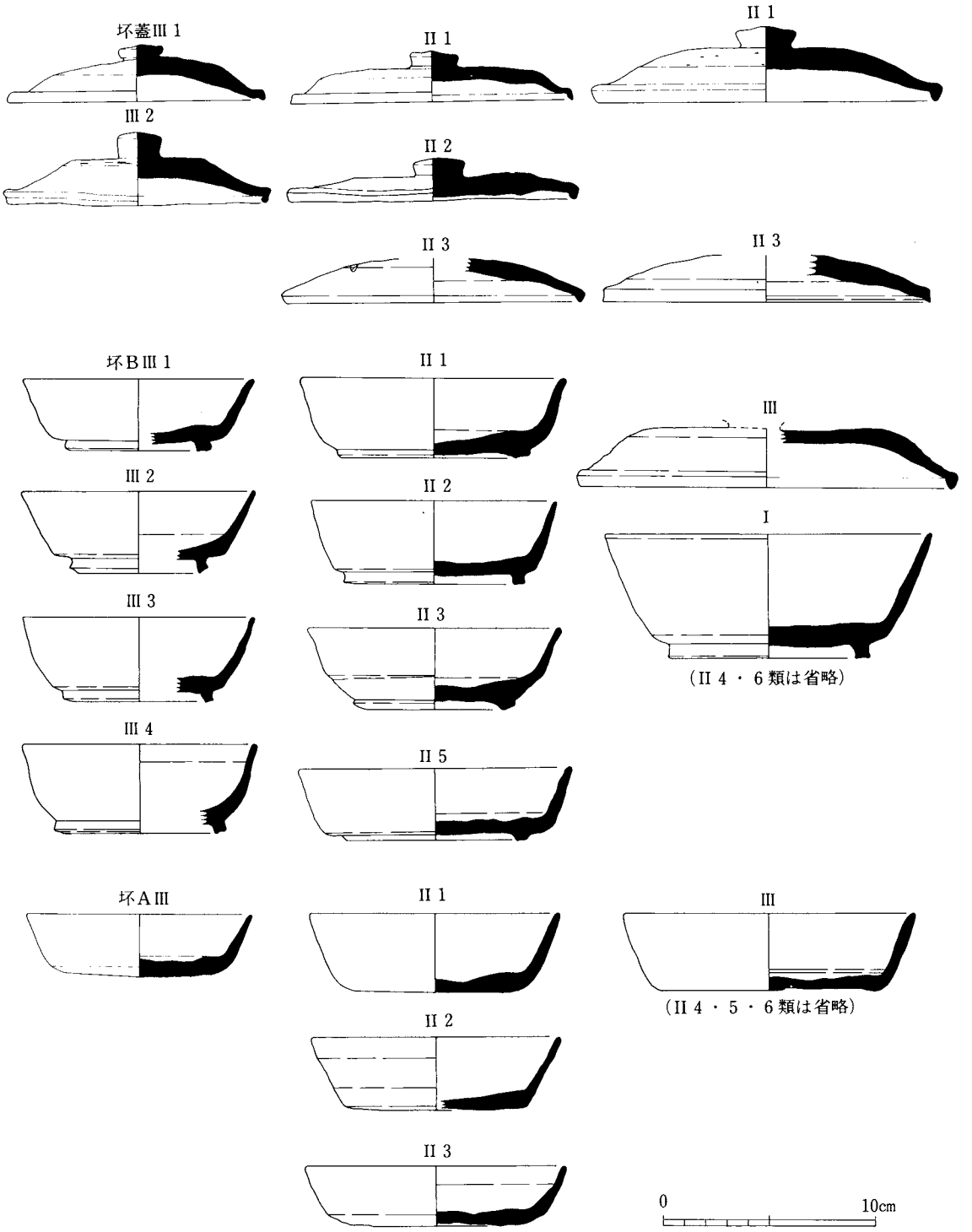
（注２）重ね焼方法については北野博司編『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター1988において、Ⅰ類）坏蓋・身を正位の使用状態に合せこれを数段重ねる。IIａ類）正位の坏身に逆位に蓋を合せ１単位とし、これをそのまま重ねる。IIｂ類）先の１単位を正位と逆位に組合わせたものをさらに単位とし、これを積み上げる。III類）蓋は蓋のみを、身は身のみを重ねる。と重ね焼方法を分類する。本遺跡での記述もこれに沿う。

（注３）鳥屋町教育委員会、干場氏の御好意により鳥屋町末坂ハセタン１号窯（10世紀)、２号窯（８世紀後半）の遺物を実見させて頂いた。

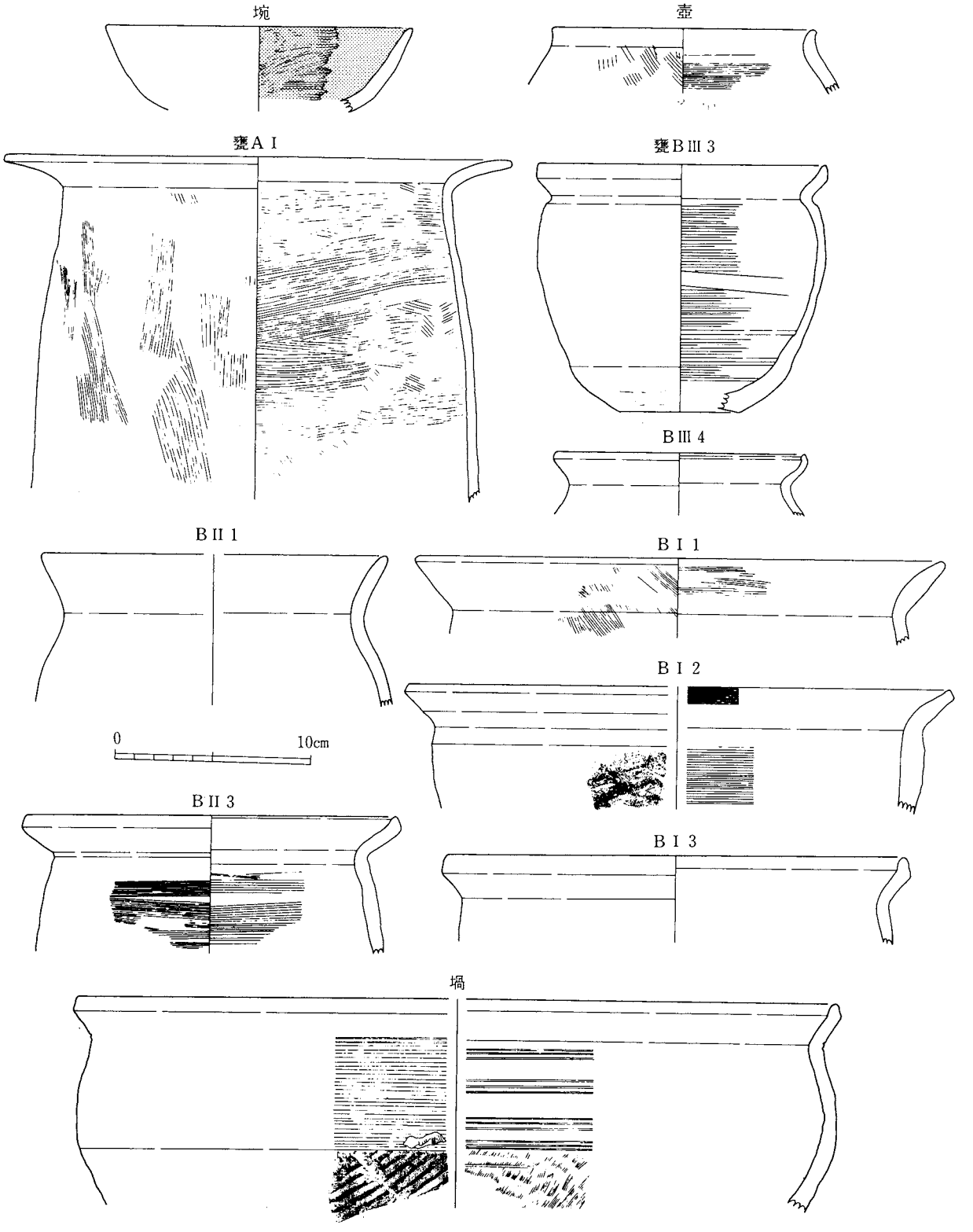
（注４）『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会1988

〔参考文献〕

田嶋明人・北野博司・木立雅朗『篠原遺跡』石川県埋蔵文化財センター1987
今井淳一編『四柳白山下遺跡Ⅰ』石川県羽咋市教育委員会1990
三浦純夫・越坂一也編『竹生野遺跡』石川県埋蔵文化財センター1988
西野秀和編『押水町冬野遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター1991
北野博司編『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター1987


坏蓋Ⅲ 1
Ⅱ 1
Ⅱ 1
Ⅲ 2
Ⅱ 2
Ⅱ 3
Ⅱ 3
坏BⅢ 1
Ⅱ 1
Ⅲ
Ⅲ 2
Ⅱ 2
Ⅰ
Ⅲ 3
Ⅱ 3
(Ⅱ 4 ・ 6 類は省略)
Ⅲ 4
Ⅱ 5
坏AⅢ
Ⅱ 1
Ⅲ
(Ⅱ 4 ・ 5 ・ 6 類は省略)
Ⅱ 2
Ⅱ 3
0
10cm

第 2 図　須恵器坏・蓋分類



第3図　土師器分類

藤井サンジョガリ遺跡
高畠テラダ遺跡
高畠カンジダ遺跡

編集・発行　㈳石川県埋蔵文化財保存協会
石川県小松市島田町イ－85－1
〒923　TEL　0761－21－5150

発行日　平成6年3月31日
印刷　橋本確文堂